慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中華民国国立故宮博物院蔵北平圖書館宋金元版解題：中国訪書志二
Sub Title	
Author	阿部, 隆一(Abe, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1974
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.11 (1974.) ,p.1- 182
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000011-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中華民国国立故宮博物院蔵北平圖書館宋金元版解題

――中国訪書志二――

阿部隆一

はしがき

本論集第九輯に報告せる第一次第二次の中国訪書出張につゞく、第三回の出張は、昨昭和四十七年一月二十八日出発、同日台北到着、二月七日には同僚の尾崎康・大沼晴暉両君が台北に来り合した。所が不幸にして尾崎君は盲腸炎に仆れ、二月廿日急遽手術の為め帰国の止むなきに至った。大沼君と調査を続け、四月二十二日帰国した。故宮博物院・中央図書館・北平図書館原蔵の宋金元版の調査が豫定の主要目的であった。所が中央図書館に於ては、貴重書の原簿との照合検査や貴重書書庫改造工事とかちあったので、殆ど閲覧することができなかった。しかし故宮博物院の宋金元版の全部と北平図書館原蔵宋元版の経部及び子部儒家とについては調査を終了し、大沼君にはその欠筆・刻工名の調査について援助協力を得た。

第四次調査は、今年二月七日出発。今回は筆者単独で、故宮博物院に於ては、主として楊氏観海堂蔵本の医家部の宋元版、昨年に引き続き同院保管の北平図書館原蔵宋元版の史・子・集部の調査を完了し、ついで中央図書館にあっては、その宋金元版の経・史部の調査を終え、国立台湾大学・台湾省立図書館等の関係図書を閲覧し、四月廿五日帰国した。此を以て台湾現存漢籍善本調査は第二目標たる宋金元版調査に関しても、中央図書館蔵の子・集両部と国立中央研究院歴史語言研究所蔵本を残すのみで、次回の出張を以て、本調査を完了し得る運びとなった。本稿は昨年・今年の第三・四次出張調査の報告の一部で、次輯を以て完稿の豫定である。

本稿に於ては、故宮博物院蔵（仏典を除く）及び北平図書館

原蔵の宋金元版の全部と第九輯掲載の楊氏観海堂善本解題の続を解題した。但し北平図書館本の経部については、既に去る昭和四十八年五月三省堂発行「長沢先生古稀記念図書学論集」に「北平図書館原蔵宋金元版経部解題」と題して寄稿発表したので、本稿には経部を除き、史部以下を載せ、同解題に接属せしめることにし、また正史については、尾崎康君が発表する筈であるから除外した。観海堂本については、前回医家類は旧刊本についてのみ記した。今回はその補遺であるが、此も医家の、筆者に当面関係ある宋元版と金沢文庫関係にとゞめざるを得なかった。勿論楊守敬旧蔵の医書の善本が此で尽きるというわけでない。

故宮博物院蔵善本の概要とそれが今台北に移されている経緯については、「国立故宮博物院善本書目」（民国五十七年国立故宮博物院編刊）巻頭の院長蔣復璁先生の序中の記事が要を尽しているので、左に引用する。

本院蔵書、其源有二、一曰遜清秘府所貯、一曰宜都楊氏観海堂旧蔵。清内府蔵書原分別庋置昭仁・養心諸殿、景福・乾清諸宮、及文淵閣・擒藻堂・史館等処。昭仁殿所貯者、善本也、為清歴朝所集。乾隆九年、高宗命内直諸臣、検閲秘府蔵書、択其精善、於昭仁殿列架庋置、賜名天禄琳瑯、勅于敏中等排比、編為目録十巻、凡著録宋金元明珍槧四百部。嘉慶二年十月乾清宮災、延及昭仁・鄉嬛秘冊、尽付一炬。尋宮殿重建成、仁宗勅検別弆御花園養性斎続獲善本、命彭元瑞等択尤編次、成書目二十巻、著録歴代旧刻影抄六六四種、即天禄琳瑯書目後編是也。以後継収之善本、咸集於茲。養心殿所貯者、阮文達進呈四庫未収之書一七二種、仁宗錫名宛委別蔵、率影宋元旧鈔秘笈。文淵閣則貯四庫全書一部、初写進呈、精美為七閣之冠、凡収書三四五九種、三万六千餘冊。擒藻堂則貯四庫薈要一部、乃輯四庫全書之重要典籍四七三種、鈔成一万一千餘冊、以供御覧者。景福・乾清諸宮所貯、多為明清両朝内府殿刻、史館所蔵、皆属方志。民国十三年冬、遜帝溥儀遷出皇城、政府組織清室善後委員会、接収清点各宮殿所貯文物図書。翌年本院正式成立、下設図書館以典掌図書。除文淵閣、擒藻堂蔵書仍保持原状外、将散処各宮殿之書、咸集寿安宮、置庫貯存、総其各殿蔵書、逾四十万冊。整理核対、日不暇給。文淵四庫及宛委別蔵、僅微有佚欠、善本部分、以校天禄琳瑯後編、雖頗有短少、然共続増、猶存宋版四十六部、金元版六十部、率多孤本。

観海堂蔵書為宜都楊惺吾氏購自東瀛者。（観海堂本については前に紹介せるを以て以下省略）「九一八」事変後、華北動盪、政府為策安全、下令本院選択精品南遷、預為之計。図書館選提善本、文淵四庫、薈要、殿本、方志、以及観海堂蔵書等、分装一四一五箱、於二十二年与古物、文献両館所選文物、分批南運、初貯上海、後移南京、於朝天宮建庫蔵置。抗戦爆発、播遷四川。勝利還都、幸安然無恙。旋赤焔南侵、又桴海東渡、此存京之図書、除数十箱蔵経不及装載外、運達台湾者、凡一三三四箱。総其冊数達十五万七千餘、四庫全書而

外、内有宋版六十二部、金版三部、元版一一二部。方茲匪共仮文化革命之名、図消滅我固有文化、此十餘万冊文化遺産、以壁蔵海外、得免秦火之厄、寧非幸歟？

こゝに解題せる故宮博物院蔵宋金元版はその殆どが清内府旧蔵本で、欽定天禄琳琅書目後篇著録本及びその後の収蔵本から成る。僅かながら旧清内閣大庫旧蔵本と中央博物院原蔵本が加っている。内閣大庫本は元来次に述べる北平図書館に殆ど全部が移管され、故宮博物院蔵本はその言わば落穂の零残本であって、その目録として嘗て「重整内閣大庫残本書影」（民国二十二年故宮博物院文献処館刊）が編されている。その外に楊氏観海堂本がある。楊氏本の宋元版は医家類を除き、全て前回の「楊氏観海堂善本解題」中に解説したから、之を省き、医家類のそれは、他の故宮博物院本とは別に「楊氏観海堂善本解題（続）」の題を設けて編入し、前輯に接せしめることにした。

こゝに言う北平図書館原蔵本とは、中華民国国立北平図書館蔵本中現在台北に移されている蔵書を指すものである。此は勿論同館の全蔵書ではなく、前次大戦中の民国三十・三十一年（一九四二）、難を米国に避けて、米国国会図書館に寄託され、戦後民国五十四年（一九六五）台湾に還された同館蔵善本の約二万餘冊である。現在国立中央図書館が中華民国教育部より保管の委託を受け、図書は国立故宮博物院書庫に保管されている。従ってその殆どが民国二十二年刊「北平図書館善本書目」に著録され、新しくは民国五十六年刊「国立中央図書館善本書目増訂本」に台湾現存本の全てが収録されている。また米国国会図書館に寄託中、同館ではその全部をマイクロ・フィルムに撮影したので、そのマイクロ目録を併せ録したのが、民国五十八年刊「国立中央図書館典蔵国立北平図書館善本書目附書名著者索引」である。このマイクロ・フィルムの一部は既に東洋文庫に将来されている。かくの如く旧北平図書館の善本は現在台北と北京図書館とに分蔵されている。この間の経緯と「北平図書館善本書目」著録の本の中で台北・北京両目録に見えない行方不明本とについては、昌彼得氏の「関於北平図書館寄存美国的善本書」（「書目季刊」第四巻第二期）に述べられている。この北平図書館原蔵宋元版の大部分は清内閣大庫旧蔵本である。

以上の調査書のうち、特に我が国に架蔵されない秘笈を中心とする主要典籍の全巻のマイクロ・フィルムは所蔵館の好意により、着々斯道文庫に到着しつゝある。短期間に調査を終了しようとする筆者の貪欲は所蔵各館にとっては大なる迷惑であったに拘らず、前回同様最大限の寛容と便宜を提供され、煩雑にして頻繁なる出納の労を惜まれなかった係員各位の御好意は深く銘記して忘れ得ない所である。昨秋日中両国には外交関係断絶という不幸が生じたにも拘らず、終始一貫変らざる御芳志をよせられたるは、故宮博物院の院長蔣復璁閣下を始め、同院の文献処長昌彼得先生、蘇篤仁・呉哲夫両先生、中央図書館の前館長李志鍾先生、新館長諸家駿先生、同館の前特蔵組長喬衍琯先生、現特蔵組長曾霽虹先生、同組員劉兆祐先生、同館の劉顕

寂・鄭樑生両先生、中央研究院歴史語言研究所長屈万里教授、台湾大学研究図書館主任曹永和先生、北平図書館原蔵本出納係の侯俊徳先生、各図書館の係員各位、台湾慶應会の会長彰化商業銀行薫事長張聘三氏、同会幹事蔡瑞銘氏、友人の鄭栄進氏御一家等の各位である。第三第四次の訪書出張もハーバード大学燕京研究所の研究補助金の後援によった。以上関係各位に対し謹んで感謝の意を捧げる次第である。昭和四十八年盛夏識。

凡　例

一、宋金元版の解題であるが、従来の諸家目、特に現所蔵館目録に宋元版と著録されているが、今次の調査で明版と審定したもの、原刊本の所在が失われている影鈔本の類は、便宜上附記した。

一、分類排列は概ね故宮博物院蔵本は「国立故宮博物院善本書目」（民国五十七年刊）、北平図書館原蔵本は「国立中央図書館善本書目増訂本」（民国五十六年刊）に準拠した。

一、標題の書名に冠した＊印は、当該書は全巻マイクロ・フィルムに複写豫定書たることを示し、その一部は既に斯道文庫に到着している。北平図書館原蔵本については、既に東洋文庫に将来されているフィルムをも含めた。

一、各本の蔵書印はなるべく全てを記した。但し、天禄琅琅書には、全て「五福／五代／堂宝」「八徵／寿念／之宝」「太上／皇帝／之宝」「天禄／継鑑」（刻陰）「天禄／琳琅」「乾隆／御覧／之宝」の六璽印が鈐されているので、煩を避け之を天禄各璽印と略記した。

一、著録・引用・参照の多い書目類の書名は左の如き略称を用いて使用した。

天目（天禄琳琅書目）　天目続（天禄琳琅書目後編）　四庫（四庫全書総目提要）　阮外集（揅経室外集）　張志（愛日精廬蔵書志）　莫録（宋元旧本書経眼録）　楊志（日本訪書志）　楊譜（留真譜）　黄書録（百宋一廛書録）　黄識（蕘圃蔵書題識）　瞿目（鉄琴銅剣楼書目）　瞿影（鉄琴銅剣楼宋元本書影）　丁志（善本書室蔵書志）　盛影（盛山書影）　陸志（皕宋楼蔵書志）　陸跋（儀顧堂題跋）　楊録（楹書偶録）　繆記（藝風堂蔵書記）　鄧目（群碧楼善本書録）　鄧存目（寒瘦山房鬻存善本書目）　潘記（滂喜斎蔵書記）　葉録（拾経楼紬書録）　葉志（郘園読書志）　傅目（雙鑑楼書目）　傅記（蔵園群書題記）　傅続記（雙鑑楼蔵書続記）　劉影（嘉業堂善本書影）　潘録（宝礼堂宋本書録）　適志（適園蔵書志）　王記（文禄堂訪書記）　莫編（五十萬巻楼蔵書目録初編）　莫跋（五十万巻楼羣書跋文）　羅録（善本書所見録）　潘跋（著硯楼書跋）　涵録（涵芬楼燼餘書録）　故宮書影（故宮善本書影）　内閣残影（重整内閣大庫残本書影）　故宮選萃（故宮図書文献選萃）　中版録（中国版刻図録、当該書影番号をアラビア数字で示した）　森志（経籍訪

古志）　旧京（旧京書影、嘗て橋川時雄・倉石武四郎両氏が少数の同好者に頒った七一六葉のキャビネ焼付写真、北平図書館蔵宋元版が殆どで、その解説「旧京書影提要」は雑誌「文字同盟」第二四・二五号合刊の特輯号として刊行、本稿所掲本の該当書影番号を、「旧京35」の如く記した）　昌識（台湾現存善本に関する昌彼得氏の題跋は多く、最近民国六十一年刊「蟫菴羣書題識」にその殆どが収められた）　呉志（呉哲夫氏は「故宮図書季刊」に創刊号〈民国五十九年七月〉から、故宮博物院善本の解題「故宮善本書志」を連載中、書影を附す、それ等を総称）

一、宮内庁書陵部の「図書寮典籍解題　漢籍篇」、国立中央図書館の「国立中央図書館宋本図録」「国立中央図書館金元本図録」等の如く、その所蔵宋金元版を殆ど網羅せる解題が刊行普及している場合は、一々その明記を省略した。

一、楊氏観海堂蔵本については、前の「中華民国国立故宮博物院蔵楊氏観海堂善本解題」の凡例と同じ。

一、奥書・識語その他の引用文の字は支障のない限り、通行活字を以てし、原文の改行は／印を以て表記した。

国立故宮博物院蔵宋金元版解題

経　部

周易程朱先生伝義附録　零本（存首図一巻）　宋董楷撰

元至正九年刊（廬陵・竹坪書堂）　一冊

昭仁殿原蔵。後補淡黄色綾絹表紙（二四×一四・八糎）。書題簽に「周易図説」と。全廿巻のうち首の図説一巻のみを存する零本。首に咸淳二年董楷自序並に題識、次に「周易程朱説凡例」があり、その後に「至正己丑廬陵／竹坪書堂新刊」なる双辺木記が刻さる。次に「朱子易図説　後学天台董楷纂集」と題して、図説があり、次に程子易綱領及び朱子易綱領を附し、巻末に「易図終」（陰刻）と題する。四周双辺（一九・一×一二・四糎）有界十二行、行廿二字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「易図　（丁付）」。「晋府／書画／之印」「沅叔／審定」の印あり。

同版の現存本は尊経閣文庫・内閣文庫（存上下経十五巻首図一巻）・北京図書館（涵録著録本か）に蔵さる。中央図書館本（存十七巻）は同館目録に元至正二年桃溪居敬書堂刊本と録されているが、居敬書堂刊に非ずして、この本と同版で、竹坪書堂刊である。本書には、本版に先行する、元延祐二年円沙書院刊本（北京図書館蔵、涵録著録）及び元至正二年桃溪居敬書堂刊本（北京図書館蔵、二部、一は涵録著録）がある。共に十二

行廿二字で、本版と行格を同うし、ほゞ覆刻の関係にある。

*周易経伝集程朱解附録纂註（周易会通）　一四巻首一巻
元董真卿撰　〔明洪武二一年〕刊　一六冊

昭仁殿原蔵。後補縹色絹表紙（二五・五×一六・四糎）。金鑲玉に改装、原料紙縦二二・五糎。首に「朱子易学啓蒙序」（附纂註）、「朱子易図附録纂註」（附纂註）、「雙湖先生易図」あり。本文巻首「周易経伝集程朱解附録纂註巻第一」、次行低六格「後学鄱陽　董真卿　編集」と題す。双辺（二〇×一二・五糎）有界十一行、行十九字、注小字双行、行廿二字。版心細黒口双黒魚尾、「易（或は易会通、易会等）幾　（丁付）」。巻五以下に左上欄外に卦名を記せる耳格を有する葉あり。僅かながら版心に達・伍七・范双・余寿□・寿□等の刻工名がある。天禄各璽印あり、天目続八・故宮選萃著録。

本書は「周易会通」とも云われ、首目・図の初に天暦元年自序・元統二年の男僎の自識・周易会通総目・凡例その他がある筈であるが、この本は首目の前半を欠いていると思われる。本版は東洋文庫・国立国会図書館蔵元後至元二年翠巌精舎刊本と覆刻の関係にあり、北平図書館原蔵明洪武二十一年建安務本堂刊本と同版である。また瞿彰著録の書影と比較する限りでは、瞿本とも同版のようである。北平本はこの本には欠く周易会通総目の末（至元二年翠巌精舎の刊記も同じ箇所にあり）に「洪武戊辰年建／安務本堂重刊」なる双行木記を有し、印面美しく比較的早印の方に属する。この本はやや漫漶の所が少し混り、北平本よりは刷りが降る。瞿本は元刊本と録し、瞿目の記述では、刊記がないらしく、刊記があると思われる周易会通総目等の葉の有無が判然せず、ただ「筆画清勁雅近顔柳元刊中致佳本也」と録されている。王記著録本は十一行行十九字で、本版等と行款を同じうするが、本版か翠巌精舎刊本のいずれかと同版か、或はその両版とも異なるか、未見の為め確め得ないが、解説によれば総目次は有するが、刊記はないようである。天目続はこの本について元統二年男董僎が跋中に閩に於て刻すると云う記事によって、本版を元統二年の初刻となし、自序・僎跋等が無いことについては「蓋初刻未備或歳久闕佚」とする。よって従来の故宮書目はこの本を元統二年董僎閩中刊本としている。しかし後至元二年翠巌精舎刊本と本版はかなり精刻な覆刻の関係をなしているが、前者の方が精刻で、本版は中に往々明初風の字様が混っているから、後出と看做すべきであろう。瞿本と王記著録本とが仮に同版として、共に刊記がないとすれば、瞿本等は洪武戊辰云々の刊記が後で剜去されたか、或は逆に北平図書館原蔵本の刊記の方が元刊の板木に後で追刻されたかのどちらかとなる。本版が元末明初間の版で、元刊たること疑いない如く見えるのは字様が覆刻であるからである。従って本版は刊記のない場合、元末刊か明初刊かの判定は極めて困難である。たゞ北平本は刊記追刻の可能性がないとはせぬが、印面が美しいから追刻ではなく元来あったと見る方が穏当であろう。北京図書館善本書目には本書の元刻本が二部著録されてい

るが、上記の二版中のいずれに属するか、或は別版かが明かでない。また涵録・莫編には元元統刊本廿四冊が録されている。此は無刊記であるが、元統甲戌男僕の跋によった推定で、刊記のある周易会通総目を欠くらしく、本版と行格を同うするから、或は本版と同版かもしれぬ。

以上の所から考えるに、至元二年は元統二年から僅か三年目であるから、天暦元年に成立した本書を男の僕が閩に刻したというのは、「至元二年丙子翠巖精舎新刊」の刊記を有する本であろう。翠巖精舎は閩即ち福建建陽の有名な書肆である。刊記の新刊の字の示す通り、此が本書の第一次刻本で、それを覆刻したのが洪武戊辰の建安務本堂重刊の本版で、刊記のないのは、その葉を欠失せるか、或は剜去後印か、そのいずれかと思われる。しかしその断定は現存版本の全てを見ていないので、後考を俟ちたい。

*附釈文尚書註疏　二〇巻　旧題漢孔安国伝　唐孔穎達疏
唐陸徳明音義　〔南宋寧宗時〕刊（魏県尉宅）　後四巻配元刊明修十行本　一六冊

摛藻堂原蔵。後補濃藍色金切箔散し絹表紙（二五×一六・六糎）。金鑲玉に改装。原料紙縦二四・四糎。首に孔穎達の尚書正義序を冠するが、補写。本文巻初首行「附釈文尚書註疏巻第一」、第二及び第三行低一格「国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達　奉　勅撰」、「唐国子博士兼太子中允贈斉州刺史呉県開国男陸德明釈文附」と題す。大題の「釈文」を「釈音」に作る巻もある。左右双辺（一九・八×一三糎）有界九行、行十六字内外、注疏文小字双行、行廿二字。釈文（小字）・疏（大字）の標識の字及び伝文末の音義の字を圏を以て囲む。版心線黒口双黒魚尾、「書疏幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数のある所がある。左欄外上端に耳格あり、小題を記す。巻一尾題後一行をおいて、「魏県尉宅校正無誤大字善本」の刊記がある。闕画は厳謹ではないが、殷恒徴慎惇敦に見られ、光宗に止って、寧宗以下に及ばないから、寧宗頃の建安刊本であろう。故宮書影・故宮選粋著録。

巻十七以下の四巻は元刊明修十行本を以て配し、不幸各巻に欠葉或は補写がかなり多いが、料紙潔白墨色漆黒にして、建刊本中の上品というべく、本版は他に所在を見ない。註疏内容の形式は通行の元刊明修十行本とは釈文の取捨に出入があるが、ほゞ等しい。

*書〔集伝輯録纂註〕　六巻　元董鼎撰　元延祐六年刊（建安・余氏勤有堂）　八冊

昭仁殿原蔵。後補黄絹表紙（二五×一六糎）。襯装。首目に嘉定己巳の蔡沈の「書集伝序」、董鼎輯録の「朱子説書綱領」、次に朱子訂定蔡氏集伝董鼎輯録纂註の「書序」を置き、綱領の末葉の版心に「延祐己未正月印」の刻、その裏葉に「建安余氏／勤有堂刊」の篆書双辺双行木記がある。但しこの本は、蔡氏原序の次にあるべき至大戊申十二月己未董氏自序、凡例、輯録引用諸書輯録所載朱子門人姓氏纂註引用諸書纂註引用諸家姓

氏（その後の葉に「延祐戊午」の鐘形墨図記及び「勤有堂」の鼎形墨図記がある）を欠く。また書序末の裏丁（こゝに「書序終」の末題、二行をおいて「男真卿編校／姪濟卿登卿同校／建安余志安刊行」の三行が刻さる）を欠いて、烏糸欄の別紙を以て補配されている。本文巻初第一・二・三行に「書巻第一／（格低二）朱子訂定蔡氏集伝／（格低八）後学鄱陽董鼎輯録纂註」と題す。双辺（二〇×一二・五糎）有界十行、行二十字、注二十四字。輯録・纂註等の標識は墨囲陰刻。版心小黒口双黒魚尾、「書伝巻幾（丁付）」。左欄外上端の耳格に小題を記す。巻六の第五十四丁より末五十八丁まで補写。天禄各璽印、「李氏」「紅夏／図書」「岳／樓」「岳／楡」「封」「万巻楼図籍」の印。明の蔵書家項篤寿旧蔵。天目続八著録。

この本初印に近く、同版本に北京図書館（二部、一は瞿氏旧蔵、瞿目・瞿影著録）・上海図書館（存巻二―六）・涵芬楼（莫録・羅録・涵録著録）蔵本がある。本版は本書の初刻で、静嘉堂文庫・中央図書館蔵の元至正十四年翠巖精舎刊本は毎半葉一行を増して十一行になし、字様はほゞ覆刻に近い重刊である。瞿目によれば通行の通志堂本は後人の竄入があり、本版により補訂される所多しと云う。

書義主意　六巻　元王充耘編　〔明末〕毛氏汲古閣影写
元至正八年建安劉氏日新堂刊本　二冊

昭仁殿原蔵。後補金切箔散し淡香色表紙（二六・五×一七・一糎）。襯装。この影鈔本によれば、原本は左右双辺（一八・四×一一・六糎）有界十四行、行二十三字。版心線黒口双黒魚尾、「書意幾（丁付）」。首に至正戊子七月既望建安書林劉錦文叔簡の序、序の後に、衝立型の中に「日新堂」と横書に刻せる木記及び「劉氏／叔簡」の方形木記がある。本文巻初首・次行に「書義主意巻第一（跨行）／（格低五）進士　王充耘与耕編」と題する。「元本」「汲古／閣」「毛晉／之印」「東呉毛／氏図書」「汲古閣」「毛／晉」等の印。

四庫未収。本書には粤雅堂叢書所収の翻刻があるが、原本たる元至正建安劉氏日新堂刊本の現所在を聞かない。充耘の尚書に関する著書は四庫収入の「読書管見」（通志堂本あり）の外に、四庫未収の「書義矜式」六巻が存し、北平図書館原蔵本に元末刊本が伝わる。同本はこの本と行款を同うし、同時頃の出版と思われる。

羣英書義　二巻　元張泰編　劉錦文編選　〔明末〕毛氏汲古閣影鈔（元至正間建安劉氏日新堂）刊本　一冊

昭仁殿原蔵。装訂前者に同じ。この影鈔本によれば、原本は左右双辺（一八×一一・四糎）有界十一行、行二十一字。版心小黒口双黒魚尾、「羣書義　（丁付）」。首に「書義羣英姓氏」をおき、本文巻初首・第二・三行「羣英書義上（跨行）／（格低四）盱江張　泰叔亨　編輯／（格低四）建安劉錦文叔簡　編選」と題する。巻下は第二行「盱江」を「盱江上城」、第三行「建安」を「建安書林」に作る。「子晉／之印」「東呉毛／氏図書」「子晉／書印」の印記あり。

四庫未収。前掲本の劉氏序に「是編輯作義要訣於其前附摹英書義於其後」とあれば、三部揃いとして日新堂から出版されたもので、この元刊本も現所在を聞かない。経義考未著録。

*纂図互註毛詩　二〇巻附挙要図一巻　漢毛亨伝　鄭玄箋　唐陸徳明音義　〔宋寧宗以後・建〕刊　六冊

昭仁殿原蔵。後補茶色表紙（二六×一六・四糎）。金鑲玉装。原料紙縦二四・一糎。首に「毛詩挙要図」並に「毛詩篇目」あり。本文巻首「纂図互註毛詩巻第一」、次行「周南関雎詁訓伝第一」と題し、巻二・四・五・六は単に「互註毛詩」と、毎巻末「纂図互註毛詩（或は「互註毛詩」）巻之幾」（巻二十のみ「毛詩二十巻終」）と題する。左右双辺（一八・六×一一・六糎）有界十二行、行二十一字、注小字双行二十五字。版心線黒口三黒魚尾、「寺幾（或は寺幾巳）（丁付）」。左上欄外耳格に篇名巻次・葉次を記す。釈文音義は箋下に接続して識別しないが、互註・重意・重言は墨囲陰刻を以て標識する。欠画は厳格ではないが、慎敦𢿱までの末筆を欠いて、郭字以下に及ばない。従って字様から見て寧宗後の建安の坊刻である。早印にして、全巻に明代と思われる朱筆の句点声点（墨も交ゆ）及び眉上に諸家の注説を抄録せる書入が附されている。「携李項／薬師蔵」「万巻／堂蔵／書記」「横延閣／書画印」「立／夫」「程／徳潤」「文石読／書台印」「沅叔／審定」等の印。故宮書影著録。

*詩経疑問　七巻（欠附編一巻）　元朱倬撰　元至正七年刊（建安・劉氏日新堂）　一冊

景陽宮原蔵。後補金切箔散し淡香色表紙（二四・二×一四・三糎）。首に至正丁亥蒲節建安書林劉錦文叔簡の序及び「詩経疑問綱目」を冠し、末に「至正丁亥菖節刊」の墨図陰文の刊記がある。本文巻首「詩経疑問巻之一」（跨行）、次行低五格「進士盱黎朱倬孟章編」と題す。双辺（左右双辺も混ゆ、一七・六×一一・二糎）有界十一行、行廿字。版心線黒口双黒魚尾、「詩疑幾　（丁付）」。

劉錦文序に「旧所録先後無緒今特為之詮次梓行使旨同而辞小異者因得以互観焉復以豫章趙氏所編頗采以附於後」と。この附編一巻をこの本は欠いているが、瞿目によれば附編は「豫章後受趙悳編」と題する詩弁説で、瞿氏は千頃堂書目に見える趙氏著「詩弁疑七巻」の摘録かと云う。同版の瞿氏旧蔵本（瞿目・瞿影著録）は今北京図書館蔵か。四庫全書提要はこの本は劉錦文の重編にして倬の旧に非ずと推定している。通行の通志堂経解本は本版に由っているが、訛脱がある。

詩外伝　零巻（存巻三・四）　漢韓嬰撰　〔元至正一五年嘉興路儒学〕刊　一冊

後補紫色絹表紙（二九・五×一八・七糎）。粘葉装、但し糊がはがれている。本文巻首「詩外伝巻第幾」、次行低九格「韓嬰」と題する。左右双辺（二二・七×一四・七糎）有界十行、行廿字。版心線黒口双黒魚尾、「詩外伝巻幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に「青」の刻工名あり。この本は巻三は第十六丁より第十九丁の尾まで、巻四は首七丁を存する零葉である。

朱筆の句点声点、欄外に少しく音義の書入を存する。故宮選萃著録。

北京図書館蔵本（二部あり、共に明修、一は中版録288著録、一は黄丕烈等跋、羅録著録。）・旧京5859著録本と同版の如し。即ち至正十五年嘉興路総管劉廷幹が同路の儒学に於て開板せる版である。

＊周礼疏　五〇巻　漢鄭玄注　唐賈公彦等疏　〔南宋初両浙東路茶塩司〕刊〔宋・元・明〕遞修　三二冊

斎宮原蔵。後補黄絹表紙（三〇×一九・三糎）、襯装。序を欠く。巻首「周礼疏巻第一」、次行低二格「唐朝散大夫行太学博士弘文館学士臣賈公彦等撰」と題し、小字を以て正義序を冠し、本文第一行は「周礼疏巻第一」、第二行「天官冢宰第一」と題する。巻二以下は第二行に巻初第二行と同じ銜名の題署がある。左右双辺（二一・五×一五・六糎）有界八行、行十五―十七字内外不等、注疏文小字双行、行廿二乃至廿三字内外不等。版心白口単黒魚尾、「周礼幾　（丁付）」。下象鼻に刻工名がある。宋・元修補の上象鼻には字数のあるものが多いが、原刻にはなく、明修には大小字数刻工名共にない。この本は修補が多いので、欠画は必しも厳格ではないが、玄弦敬驚警弘殷恒貞徵禎桓等末画を欠き、補刻は溝に欠筆を見る所がある。しかし欠筆は孝宗の慎の字以下には及んでいない。

本版は易・書・詩・礼記と共に両浙東路茶塩司の刊になり、越州即ち今の紹興で出版されたので、世に越刊八行本と称される。刊刻の事情は最も晩出と思われる礼記正義巻末の紹熙三年三山黄唐の跋文によって知られる。この越刊八行本が注疏を合刻せる最初と推定されている。越刊注疏本の中で、この周礼疏はなお単疏本の旧形をとゞめて不統一の所が多いので、最も早く開板されたらしく、原刻の欠筆は欽宗に止っているから、高宗の世の南宋初紹興頃の出版と思われる。この本にはほゞ第一次（宋）第二次（元）第三次（明）の修補が加わり、同一頁内の部分的な補刻も頗る多い。刻工名を原刻と各次の修に分って列挙すれば、（原刻）毛期、王安、黄安、余坦、陳安、徐亮、陳錫、徐茂、梁文、梁、王珍、梁濟、丁璋、毛昌、卓受、洪乗、陳高、洪新、黄琮、孫中、陳俊、朱明、余永、陳保、李憲、洪先、洪栄、徐顔、李寔、李忠、王政、王琮、包端、劉昭、陳浩、朱渙、許明、憲、王、包、琢、顔、（第一次宋修）王宝、呉中、呉祐、徐杞、沈璋、張享、張永、董用、蔡邠、永昌、孫琦、張昇、賈祚、李仲、方中呉、文享、潘佑、劉仁、劉仁仲、范堅、宋通、朱光、王恭、陳用、王全、邵夫、楊明、朱益、宋琚、方至、陸選、方堅、徐栄、陳思義、張謙、秦顕、顧達、王仲、王桂、王玩、金滋、鄭春、高異、李諒、丁之才、李亮、章東、東、王誠、朱子文、朱文、沈祖、董遇、姨、国、仁、鐘、丁、政、鑠、李、杞、翔、元、朱、永、全、夫、宋、圭、張、貴、馬、（第二次元修）施昌、呉祥、（重刊）允、何通、陳万二、万二、陳琇、黄享、王正、金震、金友、陳允升、王六、張銓、立子文、李祥、李庚、陳邦卿、葛辛、孫斌、鄭埜、何厚、

沈謙、太初、文亨、陳之、徐困、范華、陳天錫、天錫、王寿三、何建、沈祖、徐信、李宝、任阿伴、大明(刊)、子仁、王燁、文玉、王百九、兪栄、徐友山、洪福、占讓、李徳英、呉玉、陳彦昭、大用、呉文昌、陳正、張子良、麦茂、孫開一、沈(重刊)、辛文、杭宗、兪声、王介、陳徳寧、王祥、曹栄、毛文、趙遇春、王子文、陳新、存、信、鐘、升、文、義、祥、仲、寿(刊)、虞、(重刊)費、余、朱、何、堅、沈、享、杜、椿、全、時、金、徐、占、椿、劉、建、呉、鎮、林、柳、張、王、麦、鄭、陶、厖、蘇、才、滋、潤、祥、埜、生、黄等。原刻及び第一次補刻の刻工は南宋初・中期の杭州の浙刊本に多く見られる工名で、紹興と杭州は近い。原刻は南宋初浙刊本の典型的な端正渾厚の字様であるが、補修には巧拙の差あり、第一次の宋の修補はなほ方厳の所があるが、繊細にしてやゝ稜角を帯び、第二次の元の補刻は卑弱となり、明初のそれは宋体を離れて明様になっている。しかし、宋の第一次修というのは、概括した表現で、実際は宋代の修は一度ではなく、厳密には遞修というべきである。従って原刻に比較的近い時の宋修には、原刻との区別のつきにくいものがあり、原刻の刻工で補刻にも再び従事している者があるようである。従って上記の刻工名の原刻と第一次修の区別も悉くが截然と区分し難いものがある。故宮書影・故宮選萃・呉志著録。

同版には存廿七巻の北京大学図書館(高邱宋牧仲旧蔵)・北京図書館(宋元遞修、朱氏結一廬旧蔵、中版録70著録)蔵本がある。外に旧京は、清内閣旧蔵の零本たる大連図書館本64 65、京師図書館本66—68を録し、また王記は巻七・四七・四八の零本を記す。この本と北京大学本とを用て影印せる民国廿九年董氏誦芬室刊本がある。

礼経会元　四巻　宋葉時撰　元至正二六年序刊(潘元明)

四冊

昭仁殿原蔵。後補藍色絹表紙(二四・八×一六・六糎)。襯装。首に至正廿六年陳基序、至正廿五年潘元明序、六世孫葉広居が至正廿五年に識せる竹埜先生伝、礼経会元目録がある。本文巻初首行「礼経会元第一巻」、次行低一格小字を以て、「宋龍図閣学士光禄大夫贈開府儀同三司南陽郡開国公食色二千一百戸食実封一百戸謚文康葉時著」と題する。左右双辺(二〇・一×一三・六糎)有界十一行、行廿四字。圏点・墨線附刻。版心小黒口双黒魚尾、「礼経会元第幾巻　(丁付)」。上象鼻には多く大小字数があり、稀に下象鼻に存することもある。天禄各璽印及び「趙氏／子璋」の蔵印あり。天目続八著録。

序によれば葉時の裔孫たる江浙儒学副提挙広居が遺藁を献じたので、江浙行中書右丞の潘元明が、旧版廃されて已に久しいので、命じて重刊せしめたという。同版にはお茶の水図書館(成簣堂文庫旧蔵)・米国国会図書館蔵本や瞿目瞿影・繆記・羅録著録本がある。静嘉堂文庫蔵・故宮博物院別蔵・中央図書館蔵本の如き本版の覆刻に近い明刊本(白口)がよくこの元版と間違われている。莫録・丁志・莫跋著録本は本版か覆刻本か明

かでない。元明序に云う旧版（宋刊か）は現存しない。

又　八冊

昭仁殿原蔵。後補濃鼠色表紙。襯装。天禄各璽印、「真／賞」の印。前者よりやゝ後印。

又　二冊

惇本殿原蔵。潘序陳序の順に綴じらる。後刷。

儀礼図　一七巻（欠巻二、五―七）附旁通図一巻　宋楊復撰　〔明前期〕刊（崇化・余志安勤有堂）　一〇冊

昭仁殿原蔵。後補葱色表紙（二二・六×一四・四糎）、襯装。首に「晦庵朱文公乞三礼奏劄」、紹定戊子（元年）正月既望日の楊復序、この序の末に「崇化余志安／刊于勤有堂」の双辺木記を刻し、次に「儀礼図目録」（末一丁補写）がある。本文巻首「儀礼図第一」と題す。左右双辺（一八・一×一一・七糎）偏平な明字様の所は双辺（一八・一×一一・五糎）、有界十行、行廿字、注小字双行。版心小黒口双黒魚尾、「儀（或は仪）礼幾（丁付）」。旁通図は、巻首「儀礼旁通図」と題し、版心小黒口双黒魚尾、「仪礼旁通考　（丁付）」。天禄各璽印、「維／貞」「東山／清悦」（陰刻）「謝氏／之章」（陰刻）「謝／檜」「二邱／一壑」（陰刻）「錦／峯」の蔵印あり。天目続二に宋版として著録。

本版は元の昭武の謝子祥が刊行せる儀礼・儀礼図・旁通図の覆刻であるが、刊記のある巻一を欠く残本の如きは、往々謝子祥刊本と誤認されている。丁志盦影著録本・北平図書館原蔵残本・中央図書館蔵残本の如きはこの本と同版であるが、元刊謝子祥本と著録されている。元刊本の覆刻といっても、正確にはその明初修本と覆刻の関係にあり、従来宋刊或は元刊とされているが、明前期の雕板にかゝる。

*儀礼要義　五〇巻　宋魏了翁撰　〔宋淳祐一二年〕刊（〔魏克愚・徽州〕）　三六冊

昭仁殿原蔵。阮元進呈書。後補藍色地金切箔散し表紙（二七・八×一八・七糎）。襯装。本文巻首「儀礼要義巻第一　序士冠礼一」と題す。左右双辺（一九・八×一三・八糎）有界九行、行十七八字。版心白口双黒魚尾、「儀（或は仪）礼要義（或は乂）幾（丁付）」、上象鼻に大小字数（なきもあり）、下象鼻に刻工名あり。上眉に標目を刻し、毎行三字。巻五十の末丁即ち第廿一丁の裏補写。玄鉉殷恒貞属桓等の字に欠筆あり。慎敦郭等の字は欠画をしない。刻工名は、女茂、孫有成、有成、金時亨、金時、時亨、游安、余子文、子文、鐘季升、季升、季清、張京、程成、汝能、余才、君小又、余文、魏万、余明、程虔、王桂、汪思中、思中、元興、官寧、元吉、時中、文茂、劉恵老、劉老、呉宣、王杞、程仁寿、仁寿、汪宜、程万、唐発、程礼、劉子章、子章、孫徳顕、徳顕、劉、成、唐、徳、余、宜、宣、鐘、桂、熊、晟、京、方、虔、共、仁、杞、君、明等。巻六の第十一・十二丁（刻工有成）、巻十五の第廿七・廿八丁（刻工余明）の字様がやゝ他と異り、巻五の第九・十丁（刻工宣）に部分的な補刻と見られるものがある。しかしさほど原刻と時を距てたものとは思われない。

了翁が靖州に謫された時、易書詩周礼儀礼礼記春秋論孟の注疏を摘して要義を輯録し、之を「九経要義」と云った。後に了翁の男克愚が南宋淳祐十二年徽州に知たりし時郡斎に刻せしめた。本版はその「九経要義」の一部である。了翁は注疏を単疏本によったので、現在単疏本の全部が伝わらないから、その校勘資料としても重視される。本九経要義も全巻が伝存せず、宋刊本の現存はこの儀礼の外には易・詩・礼記のみである。本版は他に潘氏宝礼堂旧蔵北京図書館現蔵本（目録巻一至五、二五至二八、四一至四三配清抄本、莫録・潘録・中版録120著録）の存在が知られるのみ。

この本「玄黈／私印」「石谿厳／氏芳椒／堂蔵書」（陰刻）「張氏秋月／字香修／一字幼憐」「蕙櫋」「修」「張氏／香修」「沅叔審定」の印あり。即ち清の帰安の厳元照字は久能及びその娘秋月の旧蔵。故宮書影・故宮選萃著録。元照がこの本を入手した事状を述べた「手録儀礼要義宋本後」が「久能悔庵集」中にあり、「蔵書紀事詩」巻六に引かれている。因に、丁志巻二に、元照がこの宋本を甚だ宝惜して観るを求める者に示す為めに、自ら手鈔して校正を加えた十二巻の残本が著録され、「小楷精絶」と記されている。

礼書　存巻一七―二七　宋陳祥道撰　〔宋〕刊元至正七年（福州路儒学）・〔明〕遞修　一冊

清内閣大庫旧蔵残本。後補黒色表紙（三八×二三糎）。裏打補修を加え、粘葉装。本文巻首「礼書巻第幾」と題し、毎巻次行より本文前に目次を列する。たゞ巻廿一は次行に「左宣議郎太常博士陳祥道　上進」と署する。左右双辺（約二〇・五×一五・九糎）有界十三行、行廿一乃至廿二字、注小字双行、行廿七乃至卅字。版心白口双黒魚尾、「礼書幾（或は礼書幾フ、礼幾フ）（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に往々六、志、上、文、祐、天、国、成、伯、后等の刻工名がある。欠筆は厳格でないが、溝の字に至る欠画が見られる。巻十七の首二葉欠。本版は元至正年間趙宗吉が福州路儒学に命じて、南宋の板木の一部を用いて、「楽書」と共に重刻せしめたもので、宋刻の部分は極めて僅少で、ないと云ってもよいほどであるから、実際は至正刊と称してよい。現存本の殆どは明中期の南雍の修補本であるが、此は明前期の補刻が入っているに止る。この本は北平図書館原蔵の旧清内閣大庫残本八冊の僚巻であろう。内閣残影著録。

同版には外に静嘉堂文庫（陸志著録）・東洋文庫（零本）・東大東洋文化研究所・大倉集古館・中央図書館（適志著録）・北京図書館・上海図書館・南京図書館（丁志盦影著録）蔵本、張志・瞿目・楊録・劉影・莫跋著録本等がある。

*春秋経伝集解　三〇巻（欠巻一・二、一九）　晉杜預撰

〔南宋淳熙間〕刊（〔撫州公使庫〕）紹熙四年・嘉泰二年・嘉定六年遞修　巻一七、二五―二八、三〇配補

〔南宋紹興〕刊（江陰郡）乾道淳熙宋末間遞修本　巻二九配補明刊覆相台岳氏本　二五冊

昭仁殿原蔵。後補紺色地金切箔散し表紙（二六×一七・八糎）。襯装。巻首「春秋経伝集解某公第幾」、次行低五格、「杜氏　尽幾年」、尾題「春秋巻第幾」と題し、尾題下に小字双行を以て経注字数を記す。四周双辺（約二〇・五×一四・五糎）有界十行、行十六字、注小字双行、行廿三乃至廿四字。版心白口双黒魚尾、「春秋幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり、また補刻の葉には往々中縫に「癸丑重刊」「癸酉刀（刊）」「壬戌刊」の補刊年が印してある。玄弦敬弘殷匡恒貞徵懲讓姞桓完構慎等を欠画し、また補刻には敦にも欠筆が見られる。刻工名は鄧成、周昂、李一三、鄭才、潘憲、呉羔、王才、王全、全、余仁、余定、阮升、蔡正、呉崇、呉山、徐文、朱涼、余中、李昊、昊、葉中、陳才、粛韶、厳誠、沅干、江昱、聶居、兪先、余美、陳祥、高安国、安国、高安富、劉永、余英、呉仲、呉生、陳文、陳昇、陳英、陳忻、呉明、余実、黄珍、蔡伯升、厳方、平、顕、宋（以上原刻）、李大亨、呉申、高安、虞大全、呉卯、劉果、劉彦明、張友、余元、呉茂、茂、高安国、高安富、呉仲、江坦、范従、陳浩、翁允、高寧、余才、高定、黎友直（以上癸丑刊）、劉明、余章、翁定、思敬、劉元、元、周賢、虞大全、友直、占煥、余祐、高安道、高安国、安、国、呉仲、祝士正、士正、冨、忠、寧、祝、明（以上壬戌刊）、志海、高栄、余茂、余煥、永之、伯亨、永宗、安全、黎友直、友直、李三、思文、占奐、思明、范従、黎明、高定、伯言、明、亘、敬、卓、才、寧、黄（以上癸酉刊）、周賢、周辛、高安昌、高天頭、劉永、大全、官元、余俊、呉生、余安、余然、南昌、冨、昂、恵、居、呉、酉（以上補刊年は記されていないが補刻の疑いあるもの）。原刻と補刻の両方に従事している刻工がいるから、その間長年月が距てているわけではない。

この本の巻十七、巻廿五至廿八、巻卅の六巻は別系の宋版、巻廿九は明刊覆元相台岳氏本を以て配補されている。その宋版は題署体式は被配補本と等しく、但し行格は左右双辺（二〇・五×一三・八糎）有界十行、行十八乃至十九字、注小字双行、行廿六字内外。版心白口単魚尾、「春秋幾　（丁付）」、下象鼻に刻工名あり、版心の所々に「直学王錫校正重換」「直学葛熙靖監修」「張寅重刊」と印され、元に至る数次の修補が加っているのが見られる。玄弦敬弘殷匡竟恒貞徵懲豎讓桓完媾慎に欠筆あり、光宗以下の宋諱には欠画がない。刻工名は杜俊、徐浩、金文、恵中、沈汴、恵珉、沈源、裘益、沈澄、裘与、裘、徐友、徐益、卓允、湯栄、恵道、沈忻、陸栄、周旻、沈彬、顔□。往々補写の葉がある。

天禄各璽印、「白拙／居士」、配補の宋版にのみ「楊灝／之印」（陰刻）「継／梁」（陰刻）の印あり。巻末に乾隆丙午彭城仲子の題識（全文天目続収載、但し「閻百詩」の「百」原「伯」に作る）あり。天目続三・故宮書影著録。天目は四函二十八冊と録し、当時配補本を含め卅巻完具であったのが、いつしか巻一・二・十九の三巻が流出し、巻一・二は傅増湘の入手する所となった（蔵園群書題記巻一・雙鑑楼善本書目・王記著録）。北京

図書館架蔵の巻一・二・十九の零本三巻は傅氏本を含むこの本の僚巻であろうか。天目は本版について、

按是本乃真宋監版希世之珍其証有四不附入音義一也自序後連巻二不另篇二也闕筆極謹厳如桓二年埏字諸書従未見避三也明伝刻監本誤字一一無譌四也得此真於読書者有益不特元明諸刻即同時麻沙本度越遠矣

と述べ、傅氏は家蔵本についてさらに考証を進め、

考天禄後目以為此乃真宋監本並挙其証有四（中略）余以此二巻勘之与其説咸合然定為監本則非也以余観之乃撫州本耳撫本伝世諸経有公羊何注今蔵涵芬楼礼記鄭注蔵海源閣余皆獲見原書其版式行格無一不同余別蔵礼記釈文残巻不独行款同其版心標某年重刊亦同刀法尤酷肖刊工中相同者有呉中厳思敬高安国伯言四人則審為撫州開版固毫無疑義矣

と、本版を撫州刊本と鑑定した。さらに李盛鐸はこの傅本に跋して曰く、

此本避諱至慎字止自是乾道淳熙間所刊其重刊之葉標明癸丑者当為紹熙四年壬戌為嘉泰二年癸酉為嘉定六年玩其字体結構刊雕刀法頗為相合而半葉十行毎行大字十六小字二十四与淳熙四年撫州公使庫礼記正同沅叔得此審為撫州良不誣也

と。撫州公使庫刊経書は、黄氏日抄の咸淳九年修撫州六経跋によれば、当時六経三伝が既に開板され、咸淳に至って論・孟・孝経を添刻して十二経となしたことが知られる。多く佚して現在伝わるのは、周易注（北京図書館蔵）、礼記注（楊氏海源閣旧蔵北京図書館現蔵、中版録137著録。張氏旧蔵中央図書館現蔵残本。巻末に淳熙四年撫州公使庫刻書人銜名七行あり）、礼記釈文（礼記に附刻。傅氏旧蔵東京大学東洋文化研究所現蔵。瞿氏旧蔵北京図書館現蔵、瞿目・瞿影・王記著録）、春秋公羊経伝解詁（北京図書館蔵、涵録・中版録138 139著録）である。本版は此等と版式字様を同うし、刻工も共通しているから、撫州公使庫刊たること疑いなく、礼記と同様淳熙頃の刻版になり、原刻の刻工が補刻にも従事しているから、重修の干支の年は李氏の推定に従うべきであろう。

配補の別種宋版は陽明文庫蔵本（巻一・二日本旧刊本を以て配補）と同版である。この本には欠けているが、陽明文庫本の巻卅末に、淳熙丙午〔十三年〕重陽郡守趙不違書の刊語があり、紹興初江陰嘗て旨を被り、秘閣の正本の大小字様によってこの書を校刊したが、歳久しく点画漫欠し、やゝ葺治を加えたが復磨滅したので、校讎重鋟したという。版心に「乾道辛卯（七年）重換」の印記の葉が存し、また淳熙より古いと思われる所が僅かながら存するから、淳熙の重鋟は全部を新雕したわけではなく、跋に云う紹興の雕板の原刻とその後の修補の板木中使用に耐えるものは一部使って大部分を新刻したものと思われる。字様印面から案じて版心の直学某校正等の標識は恐らく淳熙の時の校正を意味し、その後の修補であるまい。この本は陽明本と同様淳熙後宋末に至る数次の逓修が加わり、この本は陽明文庫本より後刷で、元印であろう。この版の現存本は他に陽明本以

外聞かない。

附釈音春秋左伝註疏　六〇巻（有欠、存巻三〇至六〇）
晉杜預注　唐孔頴達等疏　唐陸徳明釈文〔南宋〕刊
（〔建安・劉叔剛一経堂〕）〔宋末元初〕修　配元刊明
修十行本　一五冊

後補金切箔散し黄色表紙（二四・二×一五・六糎）。淡桃色書題簽に「旧刊春秋左伝註疏」。本文巻首「附釈音春秋左伝註疏巻第三十襄五年尽九年」、次行低三格「杜氏註（隔六格）　孔頴達疏」と題する。左右双辺（一九・四×一二・六糎）有界十行、行十七字、注疏文小字双行、行廿三字。版心線黒口双黒魚尾、「秋荒幾（丁付）」。稀に上象鼻に大小字数あり、左上欄外に耳格あり、「某幾」と記さる。経伝下に注の字を標さずに注文を挿み、注の末句に音釈を附入し、正義の上には墨囲大字の「疏」を冠する。巻卅五の第十二―十四、十九―二二、二五丁に上象鼻に「先」、巻卅六の首三丁に「目」の字が刻されているのは、或は刻工名か。巻卅八至四七、巻五六・五七の十二巻六冊は元刊明修十行本を以て配補されている。たゞ巻卅七の末一丁のみは元刊明修十行本の葉を以て補われている。宋諱は闕き或は闕かず、厳格ではないが、玄炫珽弘筐恒貞桓慎敦等を闕き、郭等の寧宗以下を闕かないから、寧宗頃の刊行であろう。毎冊首に「謙牧／堂蔵／書記」「皇次／子章」、尾に「養正／書屋／珍蔵」「兼牧／堂書／画記」の印あり。

本版は足利学校遺蹟図書館蔵建安劉叔剛刊本（序後に刊記あり）と同版で、刷印もほゞ同じ程度で、共に刷りは比較的美しいが、間々やゝ漫漶の所があり、誤刻がかなり多い宋末元初間の補刻が入っている。補刻の字様は原刻に比し偏平になり、葉により巧拙の差があるが、粗放になっている。本版は同じ劉氏刊の毛詩註疏（現存本は足利学校遺蹟図書館蔵本のみ）と共に、所謂十行本十三経注疏の祖となったもので、所謂宋刊十行本は実は元大徳頃に本版を覆刻せる版で、現存本は殆ど明修本である。この本に配補されている十行本はこの元刊明正徳修本であるが、現存本の多くが明嘉靖に下る修補が多いのに比し、元刻の葉が多く、明修が少い。たゞ版心の正徳の修年を削った痕跡がある。この建安劉氏刊本の所在は他に潘氏宝礼堂旧蔵北京図書館現蔵の残本首廿九巻（潘録・王記著録）が知られるのみである。潘本は潘録によれば、丁度この本に欠けた首廿九巻に当り、蔵書印を同うしているから、元来僚巻であったのが流出したものと思われる。潘本は「独巻二十五末葉字体不同且版心有刻工仁甫二字」とあるから、この本の巻三十七の末葉と同様欠葉を元刊十行本を以て補ったらしい。

監本附音春秋穀梁註疏　存巻一〇―一八　晉范寧集解
唐楊士勛疏　〔元大徳〕刊〔明〕遞修　五冊

後補黄絹表紙（二四・九×一六糎）、襯装。本文巻首「監本附音（或は監本）春秋穀梁註疏某公巻第幾起幾年尽幾年」、次行低三格、「范甯集解　楊士勛疏」と題す。左右双辺（一八・九×一二・六糎）有界十行、行十七字、注疏小字双行、行廿三字。版心白

口双黒魚尾、「谷充　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名、左上欄外に耳格あり、「某公幾年」と刻す。補刻の葉の版心の上象鼻に往々補刊年が刻されているが、全て墨で抹消してある。明修の葉が比較的少い。本版は従来宋刊とされて来たが、長沢博士の研究で元大徳頃刊の覆宋版たることが明かにされた十行本十三経注疏の一つ。同版に静嘉堂（陸志著録）・京大人文科学研究所・中央図書館・北京図書館（二部、一は瞿目・瞿影著録）・南京図書館（丁志・盎影著録）・涵芬楼蔵本等がある。いずれも明修本。呉志著録。

又　存巻一六零簡（存第六―一一葉）　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒表紙（二八・八×一七・二糎）、金鑲玉装。内閣残影著録。

＊春秋〔集註〕　一一巻附春秋綱領一巻　宋張洽撰　〔南宋端平〕刊（〔臨江郡庠〕）　二冊

昭仁殿原蔵。後補黄絹表紙（三三・五×二一・三糎）金鑲玉装。首に端平元年の臨江軍牒及び省劄、端平元年の張洽請繕写状並に端平二年の洽の追状、小貼子、次に春秋綱領がある。毎巻初三行をあけて題書。首行「春秋巻第一（この下杜氏曰春秋者云々の双注あり）」、次行低約十二格「張洽集註」と題し、巻二以下は「春秋巻第幾（隔五格）　張洽集註」と題する。左右双辺（二四・四×一七・二糎）有界十行、行十八字、注小字双行、行廿七字。版心白口単黒魚尾、「春秋巻幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に繆圭、中、玘、諒、詵の刻工名があるが、刻工名なき葉が多い。巻二の第九・十、巻五の第五・六丁は臨鈔を以て補配。玄匡恒貞徴讓桓完慎惇敦に欠画あり、寧宗の郭は欠筆をせぬが、理宗の馴の字に欠筆か誤刻か識別し難き所が一ケ所（巻九の第廿八丁表七行）ある。往々墨釘あり、また僅かながら字様が異る所（序6、巻一10、巻二56、巻三14 15、巻四7―10 17 18葉、全て刻工名なし）があり、また巻四1巻八16葉に部分的な入木の修補が見られる。但し此等は印面の刷りの上では殆ど他と変りがなく、雕板時の改修か後修かの識別が困難であるが、全般と異る字様から宋末の修と見る方がよいようである。天禄各璽印、「摛藻／堂図／書記」、「摛藻／堂蔵／書印」（陰刻）「平陽／季子／之章」「平陽季／子収蔵／図書」「天光／雲景」の蔵印あり。摛藻堂は清の王文伯（字は季青、桐郷の人）の蔵印。天目続三・故宮書影・呉志著録。天目続には同版の明の朱子儋旧蔵十冊本を著録するが現存せず、王記に巻四のみの零本が著録されているが、現所在未詳。北平図書館蔵存巻七至十一宋刊本（旧京101―103著録）は、台湾に移されておらず、それは旧京の書影によるに、本版とは別版（八行十六字、末に宝祐乙卯莆陽方応発後序常山楊允志子文跋あり）で、本版よりは後出であろう。北京図書館善本書目には宋刻本十冊が録されているが、どの版であろうか。「経義考」巻一八九の本書の解説中に「曾孫庭堅後序曰」として次の跋が引載されている。

曾大父文憲公所著春秋集伝集注地理沿革表三書宋端平甲午宣進於朝付秘閣後集注刊郡庠景定庚申燬焉皇元大徳庚子雪崖黄

先生慨是書之不伝而願見者衆欲鋟梓而未集辛丑歳文台二提挙張思敬滕斌亦求助好事者僅成三巻瑞教虞汲留淇上其事於文台転申憲司時魯斎副使臧公移文本路総府下学刊刻集伝沿革二書集伝雖成而主司任事不得其人遂致章巻倒乱文字差訛不可読屏廃久之而沿革一書亦無復挙行迨皇慶癸丑冬江南諸道行御史台行移各路春秋用張主一伝延祐庚寅詔興科目而遠方士友購求伝注者頗多時李広文万敵主教此邦俾庭堅赴学校正補刊於是集伝始為全書流行四方而庭堅所刊集注拘於授徒竟弗克就延祐庚申冬訓導郡庠与学正涂鼎語及集注沿革之未成遂以其事上申総府適際提挙学校官趙文炳為賢徳君子即出学帑以成集注不三月而訖工庭堅識其事於巻尾

此によれば、この本は端平二年後の理宗の朝に臨江郡庠で出版され、宋景定元年その板木が焼けたという版に該当するものと思われる。また本書の通志堂経解本には南宋末徳佑乙亥（元年、元前至元十二年）菊節後衛宗武の序があり、その末に「此書惟臨江有刊本遭燬之後董克翁以録本示予謂不可不寿其伝故鋟梓於章亭之義塾云」と記されているから、宋末の版もあったらしい。しかし張庭堅校の元延祐七年臨江路学刊本と共にその伝存を聞かない。

＊春秋〔集伝〕　二六巻（欠巻一八―二〇、二三以下欠、存一九巻）　宋張洽撰　〔元大徳〕刊元延祐元年臨江路学李教授修　一〇冊

養心殿原蔵、宛委別蔵本。襯装。後補海老茶色絹表紙（二七・六×一七・九糎）。首に臨江軍牒に応じたる端平二年七月の張洽の繳省投進状（第三葉補写）あり、その末の洽の銜官署名の次に「延祐甲寅李教授捐／俸補刊于臨江路学」の刊記が刻されている。本文巻首「春秋巻第一（隔七格）　張洽集伝」、次行「隱公」と題する。左右双辺（二〇・二×一三・八糎）有界九行、行廿二字、伝文低一格、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「幾己（或は己幾）（丁付）」、上象鼻に大小字数（稀に「己幾」）があり、下象鼻に刻工名を有する葉もある。巻二の尾題後、「延祐甲寅李教授委職校正捐俸補完」、巻九尾題の次に、「李教授捐俸補完」、巻十一尾題の次、「延祐甲寅李教授改正補完」、巻十三尾題の前、「延祐甲寅李教授捐俸補刊」と刻さる。巻一の第十一丁、巻五の第卅四丁、巻廿一の第十一丁欠。刻工名は周昰叔、周昆?、周、陳椿?伯、劉和?、和、吉栄、栄、吉?、東、成?、可、弓、龔、王、消、月。巻五と六の前半とは一部に弓・禾の外殆ど刻工名なく、字様宋風を帯び、巻九・十・十一は印面漫漶の所が多く、修補が加り、巻十の第十一丁の版心に「庚辰刊」とあり、その葉は印面が美しい補刻である。庚辰は後至元六年か。「巖修館」「張氏秋月／宇香修／一宇幼憐」「嘉慶／御覧／之宝」の蔵印あり。四庫未収書目提要巻二著録。「選印宛委別蔵」中に影印さる。

本書の著者張洽は朱子の門人で、漢唐以来の諸儒の議論を考覈研究せざるなく、春秋集伝廿六巻・春秋集注十一巻・春秋綱領一巻・春秋歴代郡県地理沿革表廿七巻又目録二巻を撰した。

洽は師朱子の見を執って深く胡安国の伝を駁した。元・明初、本書は胡伝と共に学官に立てられたが、明永楽年間専ら胡伝を主とする五経大全が科場の程式となったので、洽の書は廃されて行われなくなった。従って四庫全書は集註・綱領を録するにとゞまって、他は久しく佚していたのを、阮元が採進したのがこの本である。

静嘉堂文庫には陸氏旧蔵の本書の清写本が蔵される。欠巻がこの本と同じであるから、この本による転写であろう。たゞ春秋綱領一巻が附してある。従来影元本とされているが、影写ではない。この綱領の巻末尾題の前に張洽の曾孫庭堅の次の跋がある。

路学所刊集伝無綱領　庭堅／延祐甲寅承命校正遂以此請／李広文併例方為全書諸費皆／広文自為規画不申支不題助／故事成而人不知第集註沿革／未刊庭堅継今図之百拜謹識

此と前掲の「経義考」引載の庭堅の後序によれば、この本は大徳年間一旦雕刻されたが、訛謬甚しかったので、皇慶年間臨江路学李広文万敵教授が庭堅をして校正せしめて、延祐元年補刊完書たらしめたものである。本版は他に所在を聞かない。この本は蔵印の示す如く厳元照の旧蔵であるが、この本の購得に関し、「蔵書記事詩」巻六厳元照の項に次の如き「東湖叢記」巻三「厳修能購書」を節略せる引載がある。

東湖叢記帰安厳修能購得宋張洽春秋集伝吾邑銭広伯為之作縁与朱朗斎明経往来書礼皆議価値之多寡朱朗斎復広伯云敝居停汪九先生宋板春秋一書当時置本実係七折銭六十両前需二百金未為過多此書雖欠究属久佚之遺経較尋常宋元板書差為珍重今読厳先生来諭諄諄意殊可感若必執意昻価是属市道非所以待有道也但照七折銭六十両之数断不可少勢不能九先生虧本以曲従耳文藻頓首又復広伯云書籍流伝除免園冊子外皆無益於挙業者必謂有益於挙業而後当出価購求而後当宝愛此語而出自厳先生之口立言為失体矣要而言之此書在汪九先生従二百金之価譲至六十金已属減無可減在厳先生従十六千之価加至卅五千亦属増無可増今為折中之論勧厳先生再出三千五百文足成五十五両之数是否有当伏乞裁定

春秋或問　零本（存巻一・二）　宋呂大圭撰　呂中校

〔元末明初間〕刊　一冊

清内閣大庫残本。仮素表紙（三二×一九糎）、破損している。首に〔宋宝祐二年〕の何夢申の「春秋或門叙」及び目録があるが、大部分破損。本文巻首「春秋或問巻第一」、第二・三行低九格、「進士温陵呂大圭述／進士温陵呂中校正」と題す。左右双辺（二二・五×一四・五糎）有界十行、行廿字。版心線黒口双黒魚尾、「或問巻幾（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名を有する葉がある。刻工名は林遠、林、沈成甫。此等刻工は元末至正頃の刊本によく見られるが、本版はかなり明前期風の字様が入り、元至正明初間の刊か。同版に北平図書館原蔵清内閣大庫本の残本（存巻五至一五）がある。元来この本は北平図書館本と僚巻であったのであろう。共に早印美麗である。中央

図書館には明の後印であるが廿巻の完本が蔵されている。内閣残影著録。

春秋師説　三巻并附録二巻　元趙汸撰　元至正末至明洪武元年刊（海寧・商山義塾）　二冊

昭仁殿原蔵。後補紺色表紙（二三・八×一六・七糎）。襯装、白綿紙本。首に至正八年の趙汸自序の「春秋師説題辞」及び目次あり、巻末附録上下巻に汸編黄沢思古吟十章及び呉氏澂が黄氏の為に作れる六経弁釈補注易学濫觴春秋指要方並に汸編黄楚望先生行状を収む。本文巻首「春秋師説巻上（格隔十）新安趙汸編」と題す。左右双辺（一六・五×一二・七糎）有界十三行、行廿七字。版心線黒口双黒魚尾、「春秋師説巻上（中・下）（丁付）」、下象鼻に大小字数及び刻工名を刻する葉あり。刻工は月、永、肖。少しく破損の葉あり、また所々朱筆の句点書入あり。天禄各爾印、「子／通」「東壁後人／家蔵古書」、「謙牧／堂蔵／書記」、「兼牧／堂書／画記」の蔵印あり。天目続八著録。

同版に斯道文庫・静嘉堂文庫（陸志・陸続跋著録）・中央図書館（適志著録）・中央研究院（鄧目著録）・函芬楼蔵本等があり、この板木は明代まで残り、明修本に北京図書館（二部、一は弘治修）・上海図書館蔵本等がある。瞿目・丁志・劉影・涵録・莫編莫跋等参照。

春秋属辞　一五巻　元趙汸撰　元至正末至明洪武元年刊（海寧・商山義塾）　一〇冊

昭仁殿原蔵。後補紺表紙（二四×一六・一糎）。襯装。白綿紙本。首に汸自序並に目録、目録後に三格を低して自跋あり。本文巻首に「春秋属辞巻之一（格隔九）新安趙汸学」、巻十五尾題後に「金居敬覆校／学生倪尚誼校対／前郷貢進士池州路儒学学正朱升校正」と題す。左右双辺（一六・七×一二・八糎）有界十三行、注低二格単行大字、小注双行、行廿七字。版心線黒口双黒魚尾、「春秋属辞巻幾（丁付）」、下象鼻に大小字数（稀に上象鼻に）及び刻工名あり、刻工名を欠く葉も僅にある。刻工名は永、月、肖、文、左、水、同等。「実穎／之印」「既／庭」（清宋実穎字既庭旧蔵）「謙牧／堂蔵／書記」「兼牧／堂書／画記」、天禄各爾印あり。天目続八著録。天目には自序の前に宋濂序ありと録するが、今失われている。

同版に静嘉堂文庫（陸志陸続跋著録）・大倉集古館・中央図書館（二部）・中央研究院（鄧目著録）・北平図書館原蔵本があり、明修補本に中央図書館（弘治修、適志著録）・国防研究院・北京図書館（二部、一は弘治修）・上海図書館蔵本がある。瞿目・丁志・劉影・羅録・莫跋等参照。

春秋左氏伝補注　一〇巻　元趙汸撰　元末至明洪武元年刊（海寧・商山義塾）〔明〕修　三冊

昭仁殿原蔵。後補紺色表紙（二四×一六・二糎）。襯装。白棉紙本。首に趙汸自序あり。本文巻首「春秋左氏伝補注巻第一（格隔四）新安趙汸学」と題す。但し新安以下四字の題署は各巻皆明代の入木で、巻二以下にこの撰者名なき巻もあり、また巻三は「注」を「註」に作る。左右双辺（一六・六×一二・七糎）有

界十二行、行廿四字、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「春秋左氏伝補注巻幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数（下にあるもあり）、下象鼻に刻工名がある。白口にして大小字数・刻工名なき葉を少しく混じえ、此は明の補刻である。刻工名は永、文、囦、趙、走、水。天禄各璽印、「子／通」「東壁後人／家蔵古書」「謙牧／堂蔵／書記」「兼牧／堂書／画記」印あり。天目続八著録。

同版に静嘉堂文庫（陸志陸続跋著録）・中央図書館（適志著録）北平図書館原蔵（旧京110―112著録）・中央研究院（鄧目著録）・北京図書館（二部）・上海図書館蔵本があり、いずれも明修本である。瞿目・丁志・劉影・繆続記・莫跋等参照。

以上趙汸撰三部は元至正末に商山義塾が命を奉じて刻梓、明洪武元年竣工したもので、静嘉堂文庫等蔵の春秋属辞・春秋師説の巻末には次の共に同文同版の程生の跋一丁が附され、刊刻の顚末が明かにされている。

右春秋属辞一十五巻序目跋尾共該／板三百二十三片左氏伝補註十巻共／該板一百片春秋師説三巻附録二巻／共該板六十九片総計板四百九十二／片初商山義塾奉／　命以是書刻梓自庚子迄癸卯計会廩膳賦輸／之餘謄／本鳩工刻板一百一十片皆直／学黄権視工甲辰春県主簿張君栗復／奉命勾考続工而属辞一書告成是年／秋県丞胡君仲徳復奉命併刻師説補／註二書始属性董其事因得備完属辞／訛闕迄歳乙巳学書既廃刊書亦結局／矣紙墨之費則有星谿程君道江君光／大同邑程君仁及子宗先後所助可漸／模印其集伝一十五巻又謀陸続梓行／以備一家之言云新刻書多舛謬讎校／不時故刊補之工亦不一而足因修補／注誤字謹書此以志歳月洪武元年五月朔日諸生程性謹書

論語　一〇巻　魏何晏集解　〔元〕刊（盱郡）　覆宋廖氏世綵堂本　一冊

位育斎原蔵。後補紺絹表紙（二四・五×一六糎）。首に何晏序を冠し、本文巻首「論語巻第一」、次行「学而第一（格隔六）　何晏集解」と題し、巻二以下「何晏集解」は署さず。四周双辺（二〇×一三糎）有界八行、行十七字、注小字双行。句点・声点附刻。注文末音釈を附し、当該字を圏を以て囲む。版心線黒口双黒魚尾、「語幾　（丁付）」、下象鼻に刻工名があるが、破損の所が多い。上象鼻にも間々刻工名が刻される。左上欄外に篇名を記せる耳格がある。刻工名は蒿甫、蒿父、徳高、余明卒、吉栄、呉栱、栱、張泳、泳、若虚、水村、水、心、月、可、阿、明、弓、永、乂、祥、叔、張、川、娑等。序後、巻一・三至巻九の各巻末に「盱郡重刊／廖氏善本」の双行長方或は楕円形木記の刊記が刻されている。「毛晉／私印」（陰刻）「子／晉」「毛晉／私印」「毛褒／之印」「毛氏／子晉」「華／伯氏」（陰刻）「聴松／風処」の蔵印並に巻末に「沅叔／審定」の印あり。汲古閣毛氏父子の旧儲。故宮書影・故宮選萃・昌識著録。天禄琳琅叢書中に影印、最近故宮博物院より再び影印（蔣復璁序、昌彼得跋）。本版は他に所在がなく、天目続八には本版を毛氏が影写せる本が孟子と共に著録されているが、今存しない。

刊記の盱郡は次掲の孟子の刊記の一部には「盱江」に作り、今の江西省に属する。本版は韓柳文集等の精善なる出版物で著名な廖瑩中世綵堂本の覆刻で、次掲の孟子と併刻された。原本の世綵堂刊宋槧は現存せず、岳氏の九経三伝沿革例によれば、当時既に稀覯となっていたらしく、廖氏が九経を開くや、十餘本を用て対定したと云われるが、不幸一の伝存もない。論語集解の宋槧は今見ることを得ず、たゞ元槧にこの本並に同じく世綵堂本に倣った岳氏刊本（北京図書館蔵）あるのみ。注末の音釈は旧注は陸氏釈文のそれを附するのが例であるが、本版のそれは必しも陸氏によらず、朱注の新注に採る所が多い。

＊論語註疏解経　存巻一一―二〇　魏何晏集解　宋邢昺疏
〔南宋寧宗理宗間両浙東路茶塩司〕刊〔元・明初〕遞修　一冊

中央博物館旧蔵。後補縹色表紙（三三・八×二一・三糎）。裏打補修が加えられ、包背装。巻首「論語註疏解経巻第十二」、次行「顔淵第十二　何晏集解　邢昺疏」と題す。左右双辺（二一・三×一六・三糎）有界八行、行十六字、注疏文小字双行。行廿二字。注文は経文下直に双行に挿み、疏文は注下に「疏」の大字を墨囲陰刻を以て標し、注の起至を記し、一格を空けて、「正義曰」に始まる。版心白口単黒魚尾、「論語註疏幾（丁付）」、上象鼻に間々大小字数、下象鼻には多く刻工名あり。明初の補刻に一部四周双辺版心細黒口を混える。この本は全廿巻中巻十一以下後半の十巻を存するが、巻十一は第二丁裏（右下端欠）より始り、第四至第十丁が誤って巻末に綴じられ、巻廿は首六丁を存するのみで、以下を欠いている。本版には元より明初に至る大略二回の修補が見られ、原刻には刻工名はあるが大小字数がなく、元初修には大小字数・刻工名とも有し、僅かに存する大小字数・刻工名のない葉は明初修であろう。原刻の印面にはかなり漫漶の所があり、また部分的入木の修補が加っていない葉は殆どないといってよい。宋諱は玄匡恒貞桓完慎の末画を欠き、孝宗に止って、光宗・寧宗の敦郭樗等の字には欠筆が見られない。刻工名中識読し得るのは、毛俊、顧祐、李林明、符彦、沈思忠、除仁、許詠、張亨、李斌、丁之才、李用、王祐、沈仁挙、李彦、宋瑜、金潛、洪坦、呉宥、許文が宋刻工の原刻で、徳潤、徐函、曹徳新、張明、石宝、徐栄、李宝、何厘、王百九、文昌、徐友山、友山、俞栄、任阿伴、沈珍、辛文、王督?、楊明、銭濮、銭、王桂、婁正、陳梓?、斉、陶、費、金、仇、永、建、何、寿等が元の補刻の刻工である。王記・呉志著録。

本版は越刊八行本と云われる紹興頃から両浙東路茶塩司に於て続刊された易・書・周礼・礼記の正義と版式行款を同うし、且つ刻工もその紹熙刊礼記正義や易・書・周礼の等一次宋代及び元の補刻のそれと共通している。従って本版は後掲の孟子註疏解経と共に、両浙東路茶塩司刊注疏本の一つであることは明かである。礼記正義の紹熙四年黄唐跋にはこの論・孟には言及していないから、本版の刊年はその後であろう。本版の刻工名

が見出される越刊八行本以外の諸本を拾挙すれば次の通りである。沈思忠・徐仁・丁之才は南宋寧宋理宗前期間刊増修互註礼部韻略（北平図書館原蔵、元修の刻工の多くも共通）に、沈思仲は南宋刊大広益玉篇（真福寺・書陵部蔵）・広韻（静嘉堂・国会図書館蔵）、李思仲・徐仁・李彦は宋嘉泰四年新安郡斎刊皇朝文鑑、徐仁は淳熙二年厳州刊端平元年・淳祐六年修通鑑紀事本末の修に、徐仁・丁之才は南宋前期杭州刊南斉書、丁之才・張亨は寧宗理宗間浙刊古史、張亨は南宋前期杭州刊陳書、丁之才は寧宗理宗間浙刊晦庵先生文集、王裕は紹定二年刊慈溪黄氏日抄分類・宋前期刊宋元遞修国語、洪坦は南宋中期浙刊周官講義、宋瑜は理宗刊三蘇先生文粋に、その名を出している。以上の本はいずれも寧宗理宗前期間の刊本である。本版の欠筆は孝宗に止っているが、次掲の孟子注疏は寧宗に及び、刻工名が殆ど共通しているから、両本は前後して出版されたらしい。欠筆から察しても、共に寧宗・理宗前期の間の刊刻と推定すべきである。

宋槧論語注疏の現存本は書陵部蔵十巻本とこの廿巻本の外存在せず、本版の同版本は他に聞かない。書陵部本は十巻の旧態を保つが、陸徳明の音釈を附入し、此は音釈を附入しないが、旧来の十巻を廿巻に析った点で、後の注疏本分巻の俑を作っている。しかし通行の十行本以下の注疏に比し佳勝極めて多いことは言うまでもない。

*新刊唐昌黎先生論語筆解　一〇巻　唐韓愈・李翺撰

〔南宋中葉・蜀〕刊　一冊

昭仁殿原蔵。後補紺絹表紙（二六・六×一八・三糎）、襯装。首に「新刊唐昌黎先生論語筆解序」、次行低七格「秘書丞許勃集」と題する許序、次に目録をおく。本文巻首「新刊唐昌黎先生論語筆解巻第一」、第二・三行低七格、「昌黎韓　愈／趙郡李　翺」、第四行「学而第一」と題する。以下之に倣うが、巻七は第二・三行の撰者題署を第二行に聯ね、巻四は撰者名を欠く。左右双辺（約二〇・八×一四・四糎）有界十行、行十七字。集解注は小字双行であるが、韓・李の注文は「韓曰」「李曰」として、一格を低して単行大字。版心白口単黒魚尾、「命卒幾（丁付）」、丁付は圏を以て囲み、下象鼻に、王朝、祖明、高二、高、祖五、五、李保、祖、范、三、于、単、慶、郭の刻工名あり。匡貞桓慎の宋諱に欠筆が見られるが、不定である。巻十の末葉補写。

刻工名の王朝は寧宗頃蜀刊太平御覧、光宗以後蜀眉山刊大字本蘇文定公集の第一次修、寧宗頃刊太平寰宇記、李保は静嘉堂文庫蔵咸平刊高宗修呉書、この本の刻工祖五と恐らく同一人と思われる王祖五が蘇文定公集の第一次修の刻工中にその名があるので、本版は南宋中葉の蜀刊本と推定される。また成都眉山刊宋文讜注「新刊経進詳註昌黎先生文集」（北京図書館蔵）の附刻と想像する一説があり、故宮善本書目は宋蜀刊文党註昌黎集本と録する。「中国版刻図録」所載の同本の書影と比較するに、彼は十行十八字であるが、字様刀法は相似するものがあ

る。「宣統／御覧／之宝」「沅叔／審定」の印あり。故宮書影・呉志著録。

孟子　一四巻　漢趙岐注　〔元〕刊（盱郡）　覆宋廖氏世綵堂本　二冊

位育斎原蔵。後補紺絹表紙（二四・五×一六糎）。前掲の元刊論語と同じ帙に蔵さる。首に趙氏の「孟子題辞」を冠し、本文巻首「孟子第一」、次行「梁恵王章句上（隔四格）趙氏註」と題す。巻二以下は「趙氏註」を重ねて題署しない。双辺（二〇・一×一三糎）有界八行、行十七字、注小字双行。句点・声点附刻。注文末音釈を附す。版心線黒口双黒魚尾、「孟幾（丁付）」。下象鼻に刻工名（稀に上象鼻に）あり、左上欄外に耳格あり篇名上（下）を記す。体式版式悉く論語に同じ。刻工名は子成、戴観、観、余徳高、徳高、高、嵩甫、嵩父、子華、可華、可、吉栄、栄、永泳、呉栱、栱、呉、明甫、明、水村、水、若虚、若、虚、興甫、興、甫、祥、張、弓、叔、宏、杞、升、泳、澄、久等。序後並に毎巻末（巻四・八・十四を除く）に、「盱郡重刊／廖氏善本」（巻七末の木記「盱郡」を「盱江」に作る）なる長方形、或は鐘形（巻二・十三）、或は楕円形（巻五・七・十）の双行木記の刊記を有する。巻九末、巻十首二葉、巻十三第十一葉補写。蔵印は論語に等しく、たゞ「毛氏収蔵／子孫永保」の印が加っている。故宮書影・昌瀾著録。本版も他に所在を見ない。天禄琳琅叢書中に影印、最近故宮博物院より論語と共に新に蔣復璁序・昌彼得跋を附して再び影印された。

刻工の子成は元統至正間西湖書院刊国朝文類や宋嘉定温陵郡斎刊資治通鑑綱目の元修、明甫は元大徳八年刊元豊類藁、吉栄は元大徳刊延祐二年修春秋集伝、子華は興文署刊胡注資治通鑑・泰定元年西湖書院刊文献通考並びに宋福唐刊前・後漢書の元修にその名が見える。従って本版は前掲の論語と共に宋廖氏世綵堂刊本を元前期から中期にかけた間に覆刻重刊したのであろう。注文末の音釈は孫奭疏と朱注とを兼取し、趙注亦必しも旧形のまゝでないことは、昌彼得氏が、

註文雖悉本趙氏、然有異同者亦偶釆他説、如告子下註五霸、除趙氏外、又云……先儒説「五霸不同、有以夏伯昆吾、商伯大彭、豕韋、周伯斉桓、晉文為五霸」。蓋取丁公著之説。又如尽心下孔子去魯章、註遲接浙、趙氏云……「説已見上篇」、而此本易為……「説見万章下首章」。蓋校刻者略有増改。

と指摘せる通りである。しかし趙注孟子は論語集解同様、この本の底本となった世綵堂本を始め宋槧趙氏単注本は現在伝わらず、元槧の岳氏刊本（北京図書館蔵）とこの本が遺るのみである。この本は趙注の篇叙を刊落する等必しもその旧を純粋に保持していないが、校勘矜慎にして、そのテキストが後刻諸本に度越すること数等なるは昌氏既に明かにしている。

＊孟子註疏解経　一四巻　漢趙岐注　旧題宋孫奭疏　〔南宋寧宗理宗間両浙東路茶塩司〕刊〔元・明初〕遞修　五冊

古董房原蔵。後補金砂子散し黄表紙（二九・六×一九・七糎）。

首に「孟子正義序」、第二・三行低二格、「朝散大夫尚書兵部郎中充龍図閣待制知通進銀台司兼／門下封駁事兼判国子監上護軍賜紫金魚袋臣孫奭撰」と題す。序の次に「孟子註疏題辞解」（次行銜名題署序に同じ）をおく。本文巻首「孟子註疏解経巻第一上」、次行「梁恵王章句上凡有七章　孫奭疏」、第三行低二格「趙氏注」と題す。左右双辺（二一×一六・二糎）有界八行、行十六字、注疏文小字双行、行廿二字。版心白口単黒魚尾、「孟子註疏幾（丁付）」。下象鼻に刻工名あり、原刻は大小字数がないが、元の補刻には上象鼻に大小字数あり（中に僅か欠くもあり）、明修には大小字数刻工名共になし。体式前掲論語註疏に同じく、補刻も同様に元明初に及び、原刻にも入木の修補が加わること多いが、この本の方が論語に比し比較的修補が少い。宋諱は玄眩弦（補刻）弘殷匡恒貞徵樹讓桓完構溝（補刻）殼慎敦拡廓の字の寧宗に至る宋諱の末筆を欠いている。刻工名は、許詠、徐仁、丁拱、丁之才、顧益?、許成之、許貴、李斌、李信、毛俊、沈思忠、顧祐、李林明、周泉、金潜、呉宥、李彦、張亨、楊昌、宋瑜、洪坦、許文、李柊?口、王祐、楊暹、宋村（或は林）、劭夫（或は元か）、祐、信、俊、仁、詠、毛、文、佽、宋が宋刻工、徐因、徐生、熊道瓊、黄亨、王桂、茂五、葉禾、占譲、滕慶、孫開一、何建、任阿伴、曹栄、董甲、呉玉、范華、辛文、呉洪、丁金、王栄、朱、金、鄭等が補刻の元刻工名である。故宮書影・呉志著録。

本版は版式刻工名から見て、越刊八行本の一つで、宋槧孟子注疏の現に伝存するはたゞ本版のみである。同版本には王記に巻三・四・十三・十四各上下の零本が著録されているが、その所在の明かなのは潘氏旧蔵北京図書館現蔵（潘録著録）の存巻三・四上下の零本二冊の外知られていない。前掲の論語注疏と前後して、寧宗理宗前期間の宋中葉の刊刻になると思われる。そのテキストの精審十行本以下の後刻本の比ではない。

大学・中庸各一巻論語一〇巻孟子一四巻　宋朱熹撰

〔元〕刊（〔燕山嘉氏〕）〔至正二六年修〕（嘉興・泳沢書院）覆宋　九冊

古董房原蔵。後補藍絹表紙（二九・三×一九・八糎）。大学は淳熙己酉朱熹の「大学章句序」（首三頁欠）を冠し、本文首「大学（隔六格）　朱熹章句」と題す。中庸は朱熹の「中庸章句序」を冠し、本文首「中庸（隔六格）　朱熹章句」と題す。論語は「読論語孟子法」を冠し、本文首「論語巻第一（隔三格）　朱熹集注」、次行「学而第一」と題す。孟子は「孟子（隔六格）　朱熹集注序説」を冠し、本文首「孟子巻第一（隔六格）　朱熹集注」、第二・三行「梁恵王章句上／（低一格）　凡七章」と題す。左右双辺（二四・九×一六・五糎）有界八行、行十五字、注単行大字低一格。版心白口単黒魚尾、「大学（中庸、論語幾、孟子幾）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、仁中、斉昂、李大興、大興、大、熊叔賢、能天（熊?）、是英、英、唐寿叟、周繼、周、繼、李兀益、劉刀忠、王寿卿、王、寿、比干、陳君玉、君玉、口仲、呉、何、吉、亮、曾、王、文、新、二巳令一巳、志、杉?、拱、扶?、先、辺、均、

邸の刻工名がある。論語巻五の第五・六葉の版心は大小字数刻工名なく、「五(陰刻)論語　(丁付)(陰刻)」。孟子の巻八第廿六丁は補写、巻三の末葉は別版を以て配補。一部貞の字の末画を欠く。大学の朱序の末に次の刊記を有する。

四書家蔵人誦而板行者類多細字／不無訛舛今得燕山嘉氏所刻宣城／旧本于　京師経註字等実便観読／於是補其残闕置諸泳沢書院嘉興／学者共之淳祐丙午秋八月識

この刊記は入木を以てなされ、且つ末行の「学者共之淳祐丙午」の八字（午の字の左下半辛うじて存す）は塡写で、特に淳祐の二字は宋槧に見せかける為の妄補で、後述の如くもと「至正」であろう。「呉士都」「沅叔／審定」の印あり。故宮書影著録。

本版は清内府仿刊宋淳祐本の底本で、淳祐はこの妄補を承けている。泳沢書院は上虞にあり、至正十八年方国珍の設立になる。底本となった燕山嘉氏所刻宣城旧本は詳かでない。しかし本版は瞿氏旧蔵北京図書館現蔵宋嘉定十年当塗郡斎刊嘉熙四年淳祐八年十二年遞修本（瞿目著録）の瞿影所載の書影と比較するに、覆刻の関係にあり、瞿目も国初繙宋淳祐本四書巻第行式此と悉く合すと云う。従って燕山嘉氏所刻宣城本は当塗郡斎刊本の覆刻で、この本は燕山嘉氏本の板木の至正廿六年丙午の後修と思われる。中央図書館には刻工名版式行款が一致する「中庸或問上」一冊（王記著録）を蔵する。此から察するに、この四書集注は元来大学或問・中庸或問も附刻されていたらしく、且つ同本は元泰定間江浙行省各路戸口銭糧冊等の公牘紙に印刷されている。刻工名を検するに、陳君玉は、宋慶元刊元至正七年福州路儒学修礼書・楽書、元後至元六年湖南僉憲赫国宝刊唐丞相陸宣公奏議纂註、君玉は元至大福州路三山郡庠刊通志、皇慶元年序刊佩韋斎文集、淳祐十年福州路刊国朝諸臣奏議の元修、福唐本前漢書の大徳修に従事している。王記に元至元泳沢書院覆宋本存巻五至十の論語を著録する。行格は同じであるが、刻工名を「兪寅李」と記すが、本版に見えず、同版か否か。（追記1）

*四書箋義　一二巻（大学章句箋義・大学或問箋義・大学註疏纂要・中庸章句箋義・中庸或問箋義・中庸註疏纂要各一巻・論語集註箋義附論語註疏纂要三巻・孟子集註箋義附註疏纂要三巻）附大学論語孟子箋義紀遺一巻

宋趙悳撰　〔明末〕毛氏汲古閣影鈔元致和元年序刊本

六冊

厚手白色表紙（三一・四×二二・七糎）。襯装。首に泰定元年承務郎江西等処儒学提挙眉山劉有慶序、泰定元年将仕郎撫州路崇仁県丞番陽李槃序、泰定二年承事郎吉安路同知太和州事曾翰序、致和戊辰（元年）夏の趙悳自序、凡例、四書箋義引用書目あり。本文巻首箋義は「大学章句箋義巻一」、次行低四格「朱子章句(隔三格)　豫章後学趙　悳　箋」の如く、註疏纂要は「大学註疏纂要巻三／(低四格)　鄭氏註／(低三格)　国子祭酒上護軍曲阜県開国子孔穎達疏／(低三格)　国子博士兼太子中允贈斉州刺史呉県開国男陸徳明釈文／(低十二格)　豫章後学趙　悳　箋」の如く題

す。末巻の「四書箋義紀遺終」の尾題の次に「致和改元倉龍戊辰四月朔癸巳／鉄峰趙氏徳鄰父東湖読書堂誌」の二行あり。左右双辺（二〇・三×一四・四糎）有界十一行、行廿二字、注小字双行、行卅三字。版心線黒口双黒魚尾、「巻幾（丁付）」、上象鼻に所々大小字数あり。「元本」「甲」「汲古／主人」「毛氏／子晉」「毛晉／私印」、巻末「沅叔／審定」の印あり。故宮書影著録。

汲古閣の精善なる影鈔本である。「増訂四書簡明目録標注」に「許氏陔華堂有致和元年刊本」と出ているが、この原元刊本は今その所在が明かでない。

同　〔清〕影鈔元致和元年序刊本　四冊

宛委別蔵、養心殿原蔵。阮元採進本。海老茶色絹表紙。前掲本と同じ元刊本の影写であるが、汲古閣本に比し、影写甚だ劣り、また原本を必しも精密に影写していないようである。四庫未収書目提要著録。

＊四書集義精要　三六巻　元劉因撰　元至順元年刊（江浙行省）　一〇冊

永和宮原蔵。後補茶色表紙。首に至順元年四月の行江浙等処儒学提挙司刊板印行牒文を冠し、その末に供給繕写対読及び江浙行省各官銜名十行あり。本文巻首「四書集義精要巻一」、次行低二格「大学一」、第三行低三格「序」と題す。双辺（二七・七×二〇・一糎）有界九行、行十七字。版心線黒口単黒魚尾、「四書集義精要（この下大学或は中庸等）巻幾（或は巻第幾）（丁付）」。下象鼻に、謝文炳、文炳、陳礼、胡進之、凌茂、丁弓、鄭宅、弓丁、王清谷、王正卿、貴和、張文老、文老、必清、大成、応子仁、涑義、中用、李、貴、義、葉、瑞、董、応、谷、沈、重、汝、可、寸、滕、仁、升、善、下、言、王、涑、何、胡、弓、友、所、凌、丁、中、古、貝、麦、龔、身、サ等の刻工名あり。巻卅五尾題は「四書集義精要巻第三十五終／教導葉雍謹書」と題し、巻卅六は引用諸氏姓名を列して、その出典の文集語録の巻数を注記する。字様彷趙雪体の大字にして、極めて精印である。「周氏／蔵書／之印」「昆陵周氏九松／迂叟蔵書記」「周印／良金」等の蔵印あり、明の周良金（嘉靖三十年歳貢、光禄寺署丞）旧蔵。故宮選萃著録。

四庫全書は本書の残本廿八巻を録し、「張萱内閣書目、作三十五巻、一斎書目、則作三十巻、考蘇天爵作因墓誌、亦称是書三十巻、則萱所記、誤矣、此本僅存二十八巻、至孟子滕文公上篇而止、其後並已闕佚、亦非完帙、然朱彝尊経義考、註云未見、則流伝頗罕、亦元人遺笈之僅存者、不以残闕病也」と述べている。しかしこの完本により、張萱の著録が正しく、もと卅五巻引用諸氏姓名一巻計卅六巻であることが判明する。流伝頗る罕れと云われる如く、他に清内閣大庫旧蔵北平図書館原蔵残欠本六冊（旧京127—129著録）が知られるのみである。楊譜二編参照。

＊四書辨疑　一五巻　不著撰人〔元陳天祥撰ヵ〕〔元〕刊　一四冊

昭仁殿原蔵。後補藍色絹表紙（二九×一九・三糎）、襯装。首に目録あり、巻一大学、巻二―八論語、巻九―一三孟子、巻一四・一五中庸に分つ。目録第十三丁及び巻一末丁は補写、目録・巻八・巻一五の各末丁裏は烏糸欄の別紙を以て補配。本文巻首、「四書辨疑巻第一」、次行低六格「大学」と題す。左右双辺（二三・八×一五・一糎）有界十行、行廿字。経文下「○註」と標して朱注を単行大字に記し、辨疑は改行低二格大字単行。版心線黒口単黒魚尾、「四書辨疑巻幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり、但し巻三以下は共に殆どなし。刻工名は徐栄、蔡閏、小六、陳俊、翁子和、徐、声、胡、姜、放?、占、元、祥、中、石、山、柳、永、王、何、翁、董、一、二、沈、于、李、朱等。天禄各璽印、「自娛／而已」「周笈／私印」「周氏／蔵書／之印」あり、周良金旧蔵。天目続八・故宮書影著録。

本書は撰者名を著録しないが、経義考・四庫全書等は陳天祥撰と推定。この本は精刻の早印にして、刻工の翁子和は延祐中饒州路儒学刊文献通考や天暦元年序刊通鑑前編のそれにも見え、徐栄の名は越刊八行本の周礼疏・礼記正義・論語註疏解経の元補刻の刻工名中に存する。以て刊行年をほゞ推察できる。本版は他に所在を聞かない。

＊新編四書待問　二二巻　元蕭鎰撰　〔清〕影鈔元刊本　四冊

宛委別蔵、養心殿原蔵。海老茶色絹表紙（二九・四×一九糎）、襯装。首に泰定甲子（元年）南至臨江蕭鎰季南金甫書の自序、延祐四年季存の「薈蕞述序」、至治元年季存の「薈蕞緝抄序」、「四書待問所輯書目」、「新編四書待問目録」あり。本文巻首「新編四書待問巻之一」（跨行）、次行低七格、「後学臨江蕭鎰編」、第三行低二格、「四書互義」（跨行）と題す。左右双辺（一八・四×一二・六糎）有界十四行、行廿三字。版心白口（魚尾なく、横線を以て区画）、「待問幾　（丁付）」。四庫未収書目著録。阮元は影鈔と称するが、字様等は精密な影鈔とは思われない。東湖叢記に本書の十四行廿三字の元版を著録するが、この本の底本となった元刊本の現所在は知られていない。

爾雅　三巻　晉郭璞注　〔南宋淳熙紹熙間〕刊　三冊

位育斎原蔵。襯紙を入れて改装、後補香色表紙（二八・三×二〇糎）。題簽に「爾雅　大字本　上（中・下）」と墨署。首に爾雅序を冠し、本文巻首「爾雅巻上（隔四格）　郭璞注」と題す。毎巻次行より低二格を以て篇目を列ね、次に「某第幾」と題して本文に接する。左右双辺（二四×一六糎）有界八行、行十六字、注小字双行、行廿一字。版心白口単魚尾、間々魚尾なく或は横線に作るもあり、「爾雅巻上（中・下）　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名があるが、下端は破損する所が多い。下巻末二葉は汲古閣が仿宋字体を以て鈔配しているが、同版本によって補鈔したのではない。玄絃弦朗殷匡胤頲恒楨徵禎樹勗桓瑗貆購遘敳慎蜃の孝宗以下の宋諱に欠画を見るが、惇郭廓等の光宗以下の宋諱に欠筆がない。刻工名中判読できるのは、李

何、魏奇、厳智、趙□、劉□、沈思□、張□、方□、金□、曹□、宋□、春□である。刻工の魏奇は宋紹熙三年刊越刊八行本礼記正義・南宋浙刊大広益会玉篇等に、厳智は南宋前期贛州刊文選にその名が見える。「宋本」「甲」「毛晉／私印」「子／晉」「汲古／主人」「毛晉／之印」「毛氏／子晉」「汲古／閣」「斧／季」「毛扆／之印」の印あり、毛氏汲古閣旧蔵、外に「□篔／生」の陰刻朱印があり、汲古閣の印色より旧く見えるが、何人なるか未詳。錦装の帙の題簽に「宋版爾雅経訓堂蔵」の大書墨署がある。書中に蔵印を鈐しないが、経訓堂即ち畢沅の旧蔵で、沅は乾隆庚辰第一人及第、官は湖広総督に至り、続資治通鑑等著書が多く、経訓堂叢書等を刻し、嘉慶二年卒。昌彼得氏は「卒後之二年、因在湖広総督任内、辦理教匪、濫支軍需疑事発、子孫革職奪廕、田産資蓄没入官、此帙当在其時進入内廷者、原貯位育斎、而未鈐宝璽」と推定している。故宮書影・故宮選萃・昌識著録。本版他に所在を知らず、天禄琳琅叢書収影印本、民国六十年故宮博物院刊影印本（蔣復璁序、昌彼得跋）がある。

森志・楊志に著録されているので、明治初まではあったと思われるが、その後その遺品が見あたらないので、烏有の書と思われていた旧刊本爾雅が、最近長沢規矩也博士によって神宮文庫蔵本中より発見され、この南北朝刊本は本版の精巧なる覆刻にかゝる首尾完好本たることが判明した。この旧刊本爾雅は古逸叢書に影刻されたが、その影刻は原本と比較するに字様瘦弱となり、原本の真面目を失っている。興味深いことは、巻中第十七葉表末行末一字が旧刊本では墨釘になっている箇所が、この本では版心から裏葉首行末字（徧の彳のみが残り、旧刊本は得に作る）にかけ破損していることである。此はあまりにも偶然すぎる一致であるから、長沢博士はこの汲古閣旧蔵の故宮本そのものが我が旧刊本の底本そのものであって、それが後に逆輸入されて、汲古閣の獲得する所となったのではないかとさえ想像しておられる。神宮文庫本は最近影印刊行さる。

本版は文字豊肥楷法端勁にして北宋版の遺風を存している。又この本には欠けた巻末には、旧刊本によれば、巻末大題の次に空一行、「経凡一萬八百九言／注凡一萬七千六百二十八言」の二行を記し、同葉後空一行「将仕郎守国子四門博士臣李鶚書」の一行が刻されている。この所から森志は、

按、五代会要云、後唐長興三年中書門下奏請、依石経文字刻九経印板、召能書人端楷写出、旋附匠人雕刻每日五紙、宋王明清揮麈録云、後唐平蜀、明宗命大学博士李鍔書五経、倣其製作刊板於国子監、監中印書之始、今則盛行於天下、蜀中為最、明清家有鍔書五経印本存焉、後題長興二年也、拠此則是本巻末題李鶚名銜者、蓋即後唐蜀本面目之僅存者、可知北宋時有覆刻李本者、博播皇国、当時影刻以行世也、然則此本雖為宋本而実亦為唐本也、豈不最可貴重乎、但鍔作鶚、則未詳孰是耳

と、本版を後唐本を覆刻せる北宋刊本となした。楊守敬はこの

説を承けて、本版を欠画から南宋孝宗時所刊の翻蜀大字本となし、「其不題長興二年者蓋翻刻時去之唯鍔作(ママ)鍔為異当以此本為正」(楊志巻三)と考えた。張氏適園蔵書志にはこの旧刊本を「日本翻宋刊本」と録し、本版を以て北宋刊南宋孝宗時修本と鑑定している。此等の従来の説に対し、昌彼得氏は本版の今次の故宮博物院影印本の跋(近刊「蟫菴羣書題識」にも所収)中に、

森立之経籍訪古志跋室町本爾雅、拠宋王明清揮麈録之説、謂出北宋覆刻五代後唐蜀本、而為南宋孝宗時補刊者、楊守敬・張鈞衡二氏従其説。昔王国維撰五代両宋監本考、張允亮撰故宮善本書志、已辨其非、而定此刻為南宋国子監覆刻北宋監本、北宋監本則出五代長興監版、其言誠是。玆再嘗試証之・・按玉海載「紹興九年詔下州郡、索国子監元頒善本校対鏤版」、「二十一年五月、詔令国子監尋訪五経三館旧監本刻版」。又建炎以来朝野雑記云・・「紹興二十一年、上謂秦益公曰・・監中其他閲書、亦令次第鏤版、雖重有費、不惜也」。知南渡之初、嘗尽覆刻北宋旧監本諸書、蓋北宋監版為金人破汴京時擄掠以去、故有重刻之挙。惟其時内府物力維艱、国子監未自刻書、拠魏了翁云、乃令臨安府及其他州郡雕造、取其版置国子監耳。其事雖経始於紹興年間、第就今存世監刻諸経単疏本亦多避諱至孝宗止、時代与此刻正合、此其一。此帙刻工「魏奇」、嘗於紹熙間刻両浙東路茶塩司本礼記正義、見宝礼堂宋本書録及文禄堂訪書記。又日本宮内省図書寮(今名書綾(ママ)部)所蔵南宋浙刻玉篇一書之刻工、亦有其人、見長沢氏編宋元刻工表、知其為南宋初期浙江地区之名匠、則此帙刻地与魏了翁所云亦符、此其二。考魏了翁六経正誤序云・・「本朝胄監経史、多仍周旧、今故家往往有之、而与俗本無大相遠。南渡草剏、則僅取板籍於江南諸所、与京師承平監本大有逕庭、而与潭撫閩蜀諸本互為異同、而監本之誤為甚」。又岳氏九経三伝沿革例亦云・・「監中現行本、不無訛謬脱略之患」。按此本雖佳処不勝縷数、而於釈言「燠、煖也」句下脱・・「塊、堀也」及注・・「土塊也、外伝曰、枕由以堀」一条。又「逡退也」注・・「外伝曰已復於事而逡」、「事」譌作「士」。釈詁「仇讎敵妃知儀匹也」注・・「国語亦云丹朱馮身以儀之」、此本脱「以」字。与魏岳二氏所評契合、此其三也。由是推之、此帙即南宋浙刻版帰監中印本、誠無疑義。

と考証された。以て従うべきである。即ち本版は紹興紹熙の間江南の州郡に於て北宋監本によって翻板せる諸経の一つで、恐らく淳熙紹熙間の刊となすべきであろう。本版は脱誤なしとはせぬが、元明以降の経注注疏本に比し勝れること極めて多きことは楊志・適志の既にあげる所で、別系宋版の南宋初刊附音釈本(瞿氏旧蔵北京図書館現蔵、四部叢刊に影印)に比しても、往々佳処の存することは昌氏の指摘する通りである。ちなみに近時故宮博物院刊影印本で、巻中第十六葉裏の如く、筆でなぞった跡ある如く見えるのはこの原本がそうなっているのではなく、影印の際版下に加筆したので、またこの原本の下端が版心

にかけて破損し、往々巻中の文字の一部及び刻工名に欠失のあるのを新に補筆して影印してあるから注意を要する。（追記2）

爾雅新義　二〇巻　宋陸佃撰　〔清〕写（伝鈔宋本）

四冊

宛委別蔵、養心殿原蔵。阮元採進本。海老茶色絹表紙（二九・五×一九糎）、襯装。首に元符二年五月山陰陸佃農師序の「爾雅新義序」あり。本文巻首「爾雅新義巻第一」、次行低九格「陸氏」と題す。紅格単辺（一九・二×一二・七糎）有界十行、行十九字、注低一格単行大字。版心白口、「新義幾　（丁付）」。「嘉慶／御覧／之宝」の印あり。

四庫未収書目提要に曰く、「陳振孫書録解題云頃在城南伝写凡十八巻其曾孫子遹刻于厳州者為二十巻是編従宋刻依様影鈔凡二十巻殆即子遹之所刻歟」と。この鈔本は恐らく影鈔ではあるまい。宋槧の原本は伝存していないようである。

重刊許氏説文解字五音韻譜　一二巻　漢許慎撰　宋李燾重編　〔南宋淳熙〕刊〔元・明〕遞修　一二冊

後補淡香色表紙金切箔散し表紙（三一・五×二一・七糎）。襯装。首に徐鉉の許氏説文序、徐鉉等進表、雍熙三年新校定説文解字牒を冠す。本文巻首「重刊許氏説文解字五音韻譜巻一」と題す。左右双辺（約二二・七×一六・五糎）有界七行、注小字双行、行廿一字内外、大字は小字のほゞ六字に相当。版心白口単黒魚尾、「説文巻幾（或は幾）　（丁付）」、上或は下象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名を有する葉あり。補刻は大黒口或は粗黒口の版心を混える。元修には字数・刻工名あるものもあり、最も新しい明修には間々原刻の字数・刻工名をそのまゝ覆刻せるものがあるようである。原刻の部分は敬恒慎に避諱が見られ、光宗以下は欠画せず、序に慎の字を「御名」と注す。刻工名は原刻に彭云、云、文、玉、召、工、吉、老、徳、元、元修に邵、公、久等がある。原刻の葉は極めて少く、しかも漫漶甚しく、殆どに部分的補刻が加っている。「眼起田耕／石斎真堂」の印あり。即ち明の瞿式耜の旧儲か。式耜字は起田、万曆の進士、明末明の王室を扶けて節を守り、清と戦って死す。呉志著録。

天目続三に汲古閣旧蔵の本版を著録（今亡失）、その解題に曰く「按文献通考載李巽巖〔巽巖は李寿の号、字は仁甫〕説文五音韻譜序極詳説文部次始一終亥此本始東終甲序云不免移徙叔重部叙其書要自別行両不傷也又云書既成未敢出玆来遂寧遇虞仲房未是正遂重刊刻云是書無寿序其部分実為燾書又燾以淳熙朝知遂寧府書中注孝宗御名実成書時初刻也」と、淳熙の刊としている。この本の原刻の刻工と思われる彭云は、淳熙十二年江西転運司刊慶元元年修本草衍義の補刻にその名が見える。淳熙頃の刊と目して支障ない。同版に中華民国国防部図書館・中央図書館（存巻十二）蔵本、旧京152153著録北平図書館蔵残本（今台湾に蔵せず）がある。皆元明遞修である。中央図書館本・旧京著録本と比較するに、彼の原刻の所が此は補刻になっているから、この本はそれより後印たることが判明する。

＊類篇　一五巻　旧題宋司馬光奉勅編　〔清〕影写宋刊本
七冊

昭仁殿原蔵。藍色絹表紙（三一×二一糎）。首に類篇序を冠し、本文巻首「類篇巻第一上（隔三格）　巻之一」、第二・三行に小字を以て朝散大夫右諫議大夫云々司馬光等奉勅修纂の銜名題署がある。巻第二下末の大題後一行をあけて「校勘鄉貢進士臣杜融」の題署あり、巻十五を目録となし、巻末大題後一行を空けて、低二格を以て光の跋を附する。左右双辺（二三・七×一七・五糎）有界八行線黒口の印刷罫紙（薄手の紙）を使用し、行十六字注小字双行。版心「類篇幾　（丁付）」、下象鼻に刻工名が移写されている。原本には欠画があったと思われるが、この影写本の欠画は清朝の避諱によっている。刻工名は郎遂、郎六十三、樊忠信、韓政、韓正、韓一、郭一、郭明、明、史智、史亨、洪政、楊大、楊一、楊三、楊乂、陳玘、陳忠、陳信、陳謹、陳晋、陳靖、潘岳、潘従、潘舛、姜保、姜明、李琢、李和、李晏、李明、李永、李接遇、李有、発式、発明、発甫、鄭遂、鄭六、鄭彦、鄭喜、鄭、裁簡、裁宗、裁審、華宗、華、胡楽、胡顕、胡政、胡卞、胡頭、胡席、席甫、席、趙正、趙言、趙一、張式、張許、張万、張智、張青、張清、張七七、張小七、任和、賈順、周亮、周元、常存、曹徳、躭道、顔正、郝成、方乂、孫乂、孫雲、雷梁、王乂、王林、王小一、王和、王元、王三、脩伯通、脩恵、宋彦、宋湄、賀栄、巖式、力二、么大、皇甫景、寧徳進、寧乂、寧言、劉温、劉琳、劉起琇、文顕、賀思、喬世忠、董忠、高云、呉甫成、薛小三、薛四、薛慶春、小蘖、小吏、呂十五、汲三、景小一、田見、田彦琮、尚和、馬三十七、馬政、姚恭、秦臻、程公慶、馮九、馮、韋堅、褻琢。この宋版の原本は今発見されていない。「広運之宝」「玉蘭堂項子京諸家収蔵」の印あり。故宮書影著録。

底本となった宋版の刊年刊地について、刻工名から考えるに上記刻工名の見られる主な諸本をあげれば、王林が南宋前期越刊八行本尚書正義、王元が紹興中湖北茶塩司刊漢書・南宋前期黄州刊河南遺書、李珍が淳熙頃刊史記・乾道二年泉南郡庠刊孔氏六帖・南宋光宗頃刊欧公本末・浙刊玉堂類稿、王小一・任和が南宋光宗頃刊蘇文忠公文集の第一次修、胡顕が開禧刊周益文忠公集、張清が紹興中明州刊文選に見える。その他殆どが南宋前期からやゝ中期にかけての浙刊本である。

班馬字類　二巻　宋婁機撰　清影写宋淳熙十一年池陽郡庠刊本　二冊

昭仁殿原蔵。後補濃紺表紙（三〇・三×二一・二糎）、襯装。淳熙甲辰上己日鄱陽洪邁書於金華松斎の「班馬字類序」、四明楼鑰書の序あり。巻末に淳熙辛丑夏至日禾興婁機書及び又書の自跋二則、次に淳熙甲辰六月旦日鄱陽舒光書の刊書跋、次に校勘提点職事十人の姓名がある。本文巻首「班馬字類上」、次行低一格「平声上」と題す。烏糸欄左右双辺（二一・七×一四糎）有界八行、注小字双行、行廿四字、大字ほゞ小字四字に相当。版心白口双黒魚尾、「班馬字類巻上（下）　（丁付）」。天禄各璽

印、「趙／宋本」（円形）「墨妙／筆精」「席鑑／之印」（刻陰）「席氏／玉照」「天／山」「釀花／草堂」「学然後／知不足」「虞山席／鑑玉照／氏収蔵」の印あり。清の席鑑（字は玉照）旧蔵。天目続八・故宮書影著録

巻末の舒光跋に池陽郡庠が上梓した旨が記さる。淳熙八年成書後三年である。第一次の刻か。この原宋版は伝存していない。この影鈔は頗る精善である。本書には二巻の略本、五巻の広本、李曾伯の増補本がある。天目続に曾伯増補の影宋本並びに五巻本の宋版が著録されているが、散失し、四部叢刊影印の汲古閣影宋鈔本は五巻本、本書の宋槧本は現在遺っていないようである。

＊龍龕手鑑　四巻　遼釈行均撰　〔南宋中期〕刊　六冊

昭仁殿原蔵。後補黄絹表紙（三三・五×二二・九糎）。金鑲玉装。首の統和十五年丁酉七月一日癸亥の燕台憫忠寺沙門智光字法炬撰の新修龍龕手鑑序は影鈔補配。本文巻首、「龍龕手鑑平声巻第一　釈行均字広済集」（巻一のみ署名の上に横線並に墨蓋を冠す）と題し、毎巻大題後に子目を列して本文に接属する。左右双辺（二五・四×一七・七糎）有界十行、注文小字双行、毎行字数約卅有餘字不等、大字小字の約四字に相当。版心線黒口或は白口単黒魚尾（稀に双黒魚尾）、「龍幾　（丁付）」、巻数巻四も三と刻し、丁付は巻三・四は通号。上象鼻に大小字数、下象鼻に僅かながら、実新、実、国宝、徐永、徐、張良、李生、李、林茂、林、林盛、鄭材?、范子栄、鄭、范、何、子、虞、澄の刻工名がある。玄敬殷筐鏡恒樹勗桓完構等に欠筆が見られ、巻中全部は鏡、木部は桓の字を載せない。慎は欠筆していないが、中部には惇字を載せて、恒慎の字を刊落している。序、巻二の巻末裏丁、巻三首葉、巻四末葉は補写。天禄各璽印、「繡谷亭／続蔵書」（刻陰）「内殿／書印」（刻陰）「呉／城」「敦／復」「呉城字／敦復」の蔵印、巻一末に「嘉興府東塔教／寺大蔵法宝記」の墨署がある。天目続八・故宮選萃・呉志著録。

本書には宋版の現存するもの二種あり。一はこの本、汲古閣・士礼居・瞿氏旧蔵にして北京図書館現蔵本（汲古閣珍蔵秘本書目・百宋一廛賦注・瞿目・瞿影著録、巻二補配影宋本、武進董氏刊影印本あり）及び傅氏双鑑楼蔵本（明崇禎戊寅徐興公手跋、傅目・王記著録、続古逸叢書・四部叢刊、四部叢刊に基く日本古典全集別刊に影印）、二は涵芬楼旧蔵北京図書館現蔵存巻二零本（涵録著録、続古逸叢書・四部叢刊は巻二のみはこの本を底本とす）である。「伝是楼宋元本書目」に「六本宋板」と著録されているのは、この両版中のどれに属するかは確め得ない。本書の流伝については、晁志以来諸家が「夢溪筆談」を引いて言う如く、契丹の書禁甚だ厳にて、中国に伝えた者は皆死刑に処せられたが、偶々北宋熙寧年間或る人虜中よりこの書を入手し、傅欽家に入り、蒲伝正が浙西に帥し、取て以て板に鏤し、もと末に重熙二年五月の序のあったのを、蒲公之を削去したという。傅氏蔵本の徐跋は「寔契丹原本非蒲帥重梓于浙西者」と云い、銭曾は本書（本版か涵芬楼蔵本と同版であったか

確認できぬが）を読書敏求記に遼刻と著録した。しかし黄丕烈は、原名の「手鏡」を宋諱を避けて「手鑑」に改め、鏡の字に欠筆が見られる理由を以て、宋刻と断じた。傳増湘は本版を以て北宋刻本と録している。張元済は、本版と涵芬楼本とを比較し、「今詳加検閲。乃覚彼此顕有不同。傳本字体稜峭。而此較渾厚。傳本刀法円転。而此較方整。」（涵録）と述べ、また四部叢刊の本書影印本の巻末跋に於て、

所増巻二上声一冊字蹟勁挺厚重有率更法度的是北宋剞劂板心毎葉記刻工姓名中有徐彦朱礼二人見於紹興十九年明州所刻之徐公文集考宋史蒲宗孟伝熙寧元年宗孟改著作佐郎其徙知杭州当在神宗或哲宗時距徐公文集刻成之歳尚有四五十年是書巻二所載刻工凡二十人至紹興十九年多已物化僅存二人此二人者当刻本書時年事尚幼居於杭州或因南渡時移徙浙東仍操故業至四五十年後尚能刻徐公文集此以事理衡之非不可能其他平去入声二巻則刻工僅有五人然均非巻二所有版口闊狭亦不同筆意既殊鐫法並異就此観之其上声一巻可定為是書由遼入宋最初覆刻餘則為後来再覆之本巻三木部構字避宋諱是則已入南宋矣

と論じ、涵芬楼本を以て北宋蒲伝正の刻する所、双鑑楼本即ち本版を南宋重刊本と断定した。本版は涵芬楼本と比較するに、両版ほゞ覆刻に近い相似関係にあり、本版は明かに後出である。しかし涵芬楼本を北宋蒲伝正刊本とすることは誤りで、張元済の解題の文意には徐彦・朱礼の刻工が紹興刊本に見えることに内心年代上無理とは感じながらあり得ないことではないと強弁している感がある。同本の他の刻工名を検討するに、徐彦・王因・張由が紹興間明州刊文選に、徐彦・王成・呉紹が紹興間両浙東路茶塩司刊外台秘要方に、王成・呉紹が南宋初刊新唐書、また王成は南宋初杭州刊漢書・梁書・南斉書や宋光宗頃刊の蘇文定公文集の第一次修・寧宗理宗間浙刊晦庵先生文集・南宋末刊慈溪黄氏日抄分類に、徐文は越刊八行本尚書正義・淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解や紹興刊王文公文集に、その名が見られる。従って紹興頃の杭州地区の刊刻にかゝることは明白である。同版の翻刊と見るべき本版の刻工名中、他の本には林茂が宝祐五年趙氏湖州刊資治通鑑紀事本末及び北宋刊南宋修呉書の補刻、徐永が南宋初刊資治通鑑目録の修、鄭材が南宋前期刊白氏六帖事類集（天理図書館蔵）に見える。慎を中部に載せざる所等から考えて、光宗以後南宋中期の刊であろう。

本書には朝鮮の崔氏及び金剛山楡岾寺に分蔵される高麗刊本（巻二欠、昭和三・四年京城帝大影印）がある。原名の如く、手鏡と題し、欠筆なく、且つ宋諱を避けて巻中に載せられなかった字も入っているから、直接遼版に基づく旧形の真面目を示す翻刊である。宋版との問には出入が見られ、訛脱を訂することができる。

＊同　〔清〕影写宋本　四冊

昭仁殿原蔵。紺色表紙（三八×二二・八糎）。襯装。首目大題体式前本に同じ。単辺（二六・五×一七・八糎）有界十行、注小字双行、毎行字数不等。版心白口、「龍龕手鑑某声巻第幾（丁

付)」。原本欠損と思われる所は空格にしてある。天禄各璽印あり。天目続八著録。

故宮博物院には、前掲宋版の影鈔本四冊を別に蔵するが、此は前掲本の影鈔ではなく、行格を同うするが、注文は少しく行款を異にし、注末の数字を墨囲陰刻に作る。この本と同じか否かは不明であるが、王記には「清経井斎伝鈔宋本行款同前（双鑑楼本を指す）注行異」（嘉隆三十一年沈大成手跋あり）が著録されている。本書の宋版は上記の二種が知られるのみであるが、もし此等の本が忠実正確に底本を摹写しているとするならば、さらに別版の存在の可能性が出て来る。

説文字原　一巻　元周伯琦撰　〔元〕刊〔明〕修　一冊

惇本殿原蔵。後補金切箔散し縹色絹表紙（三三・一×一八・三糎）。金鑲玉装。原料紙縦三〇・五糎。首に四庫全書提要の写を附綴。首に至正十五年字文公諒序、至正九年周伯琦自序、次に伯琦の篆文楷書両様の叙賛、次に説文字源目録あり。本文巻首、「説文字原　鄱陽周伯琦編注」と題する。左右双辺（約二四・五×一三・八糎）有界五行、注小字双行、行廿字大字約小六字に相当。版心線黒口単黒魚尾、「説文字原（丁付）」。巻末「説文字原終男宗義門人謝以信校正」と題し、男以下の小字或は入木か。明代の部分的或は全葉の補刻が多い。

宇文公諒の序によれば、都水庸田使庸里公溥脩の首唱により、平江郡守高徳基等が次掲の「六書正譌」と共に刊行したという。静嘉堂文庫蔵本（明印）は本版と覆刻の関係にある。共に明印なのでどちらが高徳基原刻本か判定し難い。或はこの本の方が原刻か。次の六書正譌と併刻されたものである。

六書正譌　五巻　元周伯琦撰　〔元〕刊〔明〕修　五冊

惇本殿原蔵。後補金切箔散し縹色絹表紙（三三・一×一八・三糎）。金鑲玉装。首に至正十一年自序あり。本文巻首「六書正譌平声上　鄱陽周伯琦編注」と題す。左右双辺（約二四・二×一四・一糎）有界五行、注小字双行、行廿字。大字約小六字に相当。版心線黒口単黒魚尾（巻一本文首葉のみ、魚尾に非ずして横線のみ）、「六書正譌巻幾（丁付）」。巻五巻末の葉は裏丁は別紙を以て補われ、至正十二年臨川呉当の後序がない、恐らく欠か。この本も部分的或は全葉の明の補刻が多い。

本版は瞿目瞿影著録本と同版で、静嘉堂文庫蔵本・北平図書館原蔵本（旧京158 159著録）とは覆刻の関係にある。いずれも明印本で、後者は巻五末大題の下に、この本にはない「男宗義同門人謝以信校正」の十一字を有する。この十一字は後の埋木で、しかも「以信校正」はさらに後の入木である。どちらが原刻か判定し難いが、この本の補刻の部分も静嘉堂本でも相互に覆刻の関係にある。この本の補刻も原刻の覆刻であろうから、一概に断定し難いが、或はこの本の方が原刻か。中央研究院・上海図書館も本書の元版を蔵するが、どちらの版に属するか不明である。この外に、内閣文庫蔵本は元来静嘉堂文庫本と同版であるが、明代の補刻が大幅に加えられ、巻首（全葉新刻）の大題では周伯琦編注ではなく、「合肥竇子偁重編」と変えられ

ている。

＊増修互註礼部韻略　五巻　宋毛晃増注　毛居正校勘重増
〔元至正一五年〕刊〔明〕印　五冊

昭仁殿原蔵。紺絹表紙（二四・四×一七糎）。襯紙を添えて改装。首に紹興三十二年十二月日衢州免解進士臣毛晃上表の「擬進増修互註礼部韻略表」あり、本文巻首「増修互註礼部韻略巻第一　上平声（盤囲陰刻）」、第二行低二格半「衢州免解進士毛晃　増註」、第三行低四格半「男進士　居正　校勘重増」と題し、次に毎巻子目があって本文に接する。左右双辺（二一・七×一三・七糎）有界十一行、注小字双行、行廿八字、版心粗黒口双黒魚尾、「毛勺幾フ　（丁付）」。天禄各璽印、「呉／濬」（陰刻）「重／□」の蔵印あり。天目続八著録。

巻一末尾題の前に刊記を剜去せる跡の墨釘あり、同処に「至正乙未妃僊／余慶書堂新刊」の刊記を有する静嘉堂文庫蔵本と同版で、その明の後印本である。本版は上海図書館にも蔵される。楊氏観海堂蔵の日本旧刊本に配補せる五冊の巻一・四も此と同版で、筆者は先にそれを明初刊と録したが、元至正十五年刊明印と訂正する。

＊同　〔元〕刊　五冊

昭仁殿原蔵。後補淡青色金銀切箔散し表紙（二八・三×一七・九糎）。襯装。首目（補写あり）・体式・行格前者に同じ。左右双辺（二一・四×一三・八糎）有界十一行、注小字双行、行廿八字。版心細黒口双黒魚尾、「毛韵幾フ　（丁付）」。左上欄外に耳格あり。所々破損し、欠丁或は補写がある。巻一末葉の刊記のあると思われる箇所が破れ、補修が加えてあり、元来刊記があったか否か不明。本版は盛山書影著録本（存巻四）と同版のようである。「嘉慶／御覧／之宝」「天禄／継鑑」「天禄／琳琅」印あり。

＊同　〔元〕刊　五冊

昭仁殿原蔵。後補藍色地金切箔散し表紙（二八・五×一六・八糎）。裏打補修が加えられ、原料紙縦二五・五糎。首目・体式・行格前者に同じ。左右双辺（二一・二×一三・六糎）有界十一行、注小字双行、行廿八字。版心細黒口双黒魚尾、「毛韵幾フ　（丁付）」。左上欄外に耳格あり。巻一末の刊記のあったらしい所が切られて補修が加えられる。巻五は本版とは覆刻の関係にある雕刀劣れる別版で、恐らく配補本であろう。本版は静嘉堂文庫蔵無刊記本（巻一末の刊記のあったと思われる箇所が切りとられてある）や中央図書館蔵本と同版。「嘉慶／御覧／之宝」「天禄／琳琅」「天禄／継鑑」その他の印あり。

以上三部は相互に覆刻の関係にある。

＊泰和五音新改併類聚四声篇　一五巻　金韓孝彦原撰　男道昭重編　金泰和八年序刊〔元〕修　一〇冊

景陽宮原蔵。後補淡黄綾絹表紙（二四・九×一六・三糎）。天地が裁断され、裏打改装。首目を巻一とし、本文は巻二より始る。この本の首目は首の方の葉を欠き、中間にも欠葉があり、且つ錯簡が甚しいので、同版の中央図書館本や本書の元版を参

照して考えるに、首目の篇次題署は下の如し。首の泰和八年韓道昇の序等を欠き、この所を中央図書館本は道昇序、次に「五音改併増添明頭号様」、「十去香号頌曰」、「五音検篇入冊頌曰」があり、次にこの本にある「真定府松水云々」に続いている。この本は「真定府松水昌黎郡韓孝彦次男昭韓道改併重編」の次に「新集背篇列部之字補添印行」（跨行）があり、末に「松水昌黎門人浹川寶慶進補添印行」の一行があるが、此は中央図書館本になく、元版は巻一の末に附されている。この本は次に「兄曰道晧　第（ママ）曰道昉　男曰徳恩　姪曰徳惠同詳定／趙州　荆璞同編　荆現　荆琪　荆珍　荆璪　／　寧昌李昺書」の三行がある。中央本はこの三行は前の「真定府……改併重編」の行に続いている。次に「総目録」をおき、「重編改併五音四声篇総目録巻終」の尾題の次に「重編併部依三十六母再顕之図」あり、その後に「昌黎諸門人」四十五名の名を九行に列して、「已上諸公同詳校正」と。次に「泰和増改併類聚五音篇序目巻第一／昌黎門人浹川扶風郡寶慶進重校正」と題し、この巻一を目次にあてるが、この本は巻一の大題二行の外は、目次（毎巻大題の次に目次あり）と本文及び次の巻二の大題（「泰和五音新改併類聚四声篇巻第二／（低二格）滹陽松水昌黎郡韓孝彦次男韓道昭改併重編」）と目次の葉を佚して、その本文初から存する。巻三以下毎巻「泰和五音新改併類聚四声篇巻第幾」と題し、次に目次を列ねて本文に接する。左右双辺（約二一・二×一四糎、時に単辺を混ゆ）有界十三行、注小字双行、行卅八字内外不等。版心白口双黒魚尾、「五音篇幾（丁付）」、上象鼻の多くに大小字数、下象鼻に少しく刻工名があるが、版心が狭く且つ破損しているので、識読できない。往々元代の補刻が加っている。巻十二末補写。巻十一末に〔至〕正十四年十月の識語があるが、初行の末端から切りとられて文を成さない。所々書入が存する。

本書は序によれば金の明昌・承安間に成った韓孝彦の稿を次男の道昭が改併重編し、それに孝彦の門人寶慶進が索引等を補添して刊行したものである。本書は元になってさらに増訂を加えて前至元二十六年に重刊されている。同版本に中央図書館蔵本（存首三巻）・北平図書館原蔵本（存巻一〇―一二）がある。上記の首目の中で、この本が「兄曰道晧（中略）／趙州　荆璞同編　荆現　荆琪　荆珍　荆璪　／（低約六格）寧昌李昺書」となって空格の所が、中央図書館本は「（前略）荆璪同開板／荆瑞長男荆国器重開板印行　寧昌李昺書」となって、十五字がある。恐らくこの本の方が同開板等の字を剜去せる後刷と思われる。

＊崇慶新彫改併五音集韻　一五巻　金韓孝彦原撰　男道昭重編　金崇慶元年序刊〔元〕修　一〇冊

景陽宮原蔵。後補淡黄色綾絹表紙（二四・八×一六・八糎）。清刊孟子精義の故紙を用いて裏打修補が加えられている。首目の第次題署下の如し。首に崇慶元年歳在壬申姑洗朔日老先生姪男／韓道昇謹誌」の「崇慶新彫改併五音集韻序」あり、その序文の後に「真定府松水昌黎郡韓孝彦次男韓道昭改併重編／　男韓徳恩　姪韓徳惠　婿王徳琚　同詳定／（低四格）浹川　荆珍」と署し、次に

「崇慶新彫五音集韻序」と題し、末に「大朝壬子歳次壬申長至日重刊謹序」と署し、次に「大朝新彫集韻一部」と題して孫愼唐韻序をおき、次に「大朝新彫改併五音集韻総目録」がある。その尾題の次に「入冊検韻術曰」をおき、その後に「韓氏門人同詳校正」と題して十二名四行の列位あり。次に前掲の四声篇の補編刊行者竇慶進の編になる「五音韻中差錯切脚并母錯重添印行」がある。本文巻首「崇慶新彫改併五音集韻上平声巻第一（魚尾様墨蓋を冠す）／（低三格）滹陽　松水　昌黎郡韓　道昭改併重編」と題す。毎巻大題の次に目次を列して本文に接す。首尾の大題の冠称「崇慶」は必しも巻一のそれと同じではなく、或は「大安」或は「大朝」に作る巻がある。巻一尾題の次に「昌黎諸門友人同校正」と題する廿名四行、巻十五末に「昌黎韓道昭門人」と題する十五名五行の列位がある。左右双辺（二〇・三×一四糎）、有界十三行、注小字双行、行卅五字乃至四十字内外不等。版心白口双黒魚尾（少しく小黒口を混ゆ）、「韻幾（丁付）」。往々上象鼻に大小字数があり、下象鼻に刻工名があるらしいが、版心が狭く且つ破損しているので、判読ができない。巻九第十四丁以下欠、巻十三首一丁補写。元代の補刻が加っている。

大題に「大安」の冠称のあるのが混るのは、崇慶の前の年号である大安年間に雕板を始めていたからであろう。本書は四声篇と同様に元の前至元二十六年に増訂重刊されている。同版に北京図書館蔵存十二巻本（「中国版刻図録」262著録）・北平図書館原蔵存首三巻本（旧京170―176著録、今台湾に来ていない）がある。その書影によるに、巻首の道昇序の次の列名の末がこの本は「浹川荆珍」に終るが、北京・北平両本はその下に「開板」の二字がある。旧京著録の書影によると、首目の題署の中で、この本の「大朝壬子歳次壬申長至日……」、「大朝新彫集韻一部」、「大朝新彫改併五音集韻総目録終」の「大朝」の二字が北平本は「崇慶」に作ってある。また巻一の首葉はこの本は北平本と同じではなく、その覆刻である。以上を以て見れば、この本は北京・北平両本と同版ではあるが、その後修後印本であることが判明する。中国版刻図録解説に、「浹川荆珍為之開版。浹川即浹水、出獲鹿西南井陘山、東流至寧晋、入寧晉泊。浹川蓋即寧晉別名。寧晉荆氏、金時以刻五経等書世其家。金末荆祐字伯祥、貞祐間元兵南下、取家刻泰和律義篇、広韻等書版、埋蔵土中、乱定修復完。此書版片、疑亦在荆祐埋蔵修復之列。」と。

史　部

漢書　一二〇巻　漢班固撰　唐顔師古注　〔南宋寧宗理宗間〕刊（〔福唐郡庠〕）〔元大徳・至元・延祐・元統・明初〕遞修　四〇冊

昭仁殿原蔵。後補淡鶯色表紙（二六・九×一八・六糎）。首に師古の「漢書叙例」を冠するが、此は補写にして、末に「西漢十二帝起高祖元年乙未尽王莽地皇四年癸未合二百二十九年／十

二帝紀一十二巻／八表十巻／十志一十八巻／七十列伝七十九巻／従湖北提挙茶塩司宋本影写敍例及総目」とあるから、本版による補写に非ずして、異版の湖北茶塩司刊本に基づく配鈔である。次に「前漢書目録」あり。本文巻首「高紀第一上師古曰紀理也統理衆事而繫之於年月著也　班固　漢書一」、次行低六格、「秘書監上護軍琅邪県開国子顔師古注」と題す。巻末隔行尾題には小題第幾と題して大題を記さず、巻二七・三〇・四〇・五七・六五・八七には尾題後校語二乃至十行が附され、巻二七（五行志巻第七中之下）は末に一行を隔て、「対勘官左通直郎知福州長楽県主管勧農公事劉希亮」の銜名一行がある。また巻六四上下、七三・七四、七八・七九、八一・八三には尾題後数行を隔て、該巻の正注文総字数が記され、最終巻即ち「漢書列伝巻第七十下」の尾題の次行に低十三格「日雕修」の一行、その次行から「班固前漢書凡百篇総一百二十巻／（以下低二格）十二帝紀一十三巻　八表一十巻／十二志一十八巻　七十列伝七十九巻」の題款三行がある。左右双辺（二一・三×一四・六糎）有界十行、行十九字（明修には一部十八乃至廿字）、注文小字双行、行廿五乃至廿八字不等。巻中間々墨釘がある。版心白口（明修に小黒口を混ゆ）双黒魚尾、「前漢紀（或は前漢某紀、某紀、前紀、前漢年表、前漢某某志、前漢伝、前漢、前漢某某列伝、前伝某某等）幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。中縫或は下象鼻に「大徳八年刊」「大徳九年刊」「延祐二年刊」「元統二年」等の補刊年が僅に残っているものもあるが、殆ど全部の補刊年が切りられ、襯補されている。その刻工名を、補刊年の残っている静嘉堂蔵同版本を参照して、原刻補刊年別に示せば、王生、王光、光、王佑、葛文、阮忠、胡恩、黄琮、江華、周礼、礼、周正、薛林、張得、張栄、陳采、陳杞、鄭信、鄭立、鄭全、鄭統、鄭埜、鄧定、潘亮、亮、楊慶、李発、林景、悦、員、詠、俊、槐、竦、端、田（以上宋原刻）一山、益山、益、王文、玉全、玉泉、共信、君輔、君甫、君玉、君祥、祥、洪信、江士堅、士堅、江亨、江世亨、公迪、黄仁夫、仁夫、子通、子華、子高、子清、子青、子敏、子尨、子龍、龍、士興、興、士賢、士安、仁父、仁甫、仁、正父、政卿、全禾甫、仲和、陳恵、恵、天祐、徳忠、徳中、徳潤、巴山、伯玉、玉、范禾、傅甫、文仲、文足、文振、文正、余仁、劉震卿（至大元年にも）、震卿、劉通、呂文震、文震、和甫、禾甫、付、輔、互、定、信、中、泉、東、呂、尤、禾、子、泉、吉、青、潤、伯、士（以上大徳八・九年修）、正卿、辰、宸、小、埜、士、林、節（以上至大元年修）埜、志、宸、林、四、文（以上延祐二年修）君裕、寿甫、秀甫、東山、徳右、余安卿、安卿、梁徳、山、寿、以、目、明、仲、君、文、夫、崔、宝、正、四、天、生、節?、伯、和、子、成、厚、栄、戍、東、広、朱、丁、秀、鄧、徐、周、大、右、善、張、宸、云、祐、浄、宇、林、茂、田、杞、鄒、祥、東、士（以上元統二年修）。元修が多い理由もあって巻中の欠画はさ程厳謹ではないが、玄炫弦絃懸敬驚警弘殷匡筐竟境涯胤恒貞楨偵徵懲讓桓完莞構購溝彀搆慎敦鶉に間々欠筆が見られる。但し宋原刻の欠

筆は慎に止って、敦鶚の字には及ばない。首目の叙例、巻一上第九葉、巻五第四葉等補写、また巻中欠丁がかなりあり、烏糸欄空白別紙が綴じられている。巻二九の第三一葉及び巻八一第一八葉は各々重複、巻八〇第一〇葉と第一二葉とは文字殆ど同じ、修補の際の誤りか。巻三〇の第三一・三二葉、巻三六の第一・二葉、巻五七上の第七・八葉は逆に綴じられ、また巻二七の第三二葉が第二一葉後に、巻八六の首葉が巻八五の第二五葉の前に誤綴されている。天禄各璽印、「宗伯」「茲溪／草堂」「茲谿」（陰刻）「虞山／景氏／家蔵」（古師）の印あり。仁寿本二十四史に影印さる。呉志著録。

同版本に宮内庁書陵部（二部、森志著録）・静嘉堂文庫（陸志著録）・中央研究院（鄧目著録）・北京図書館（楊録著録本か）・南京図書館（丁志著録）蔵本、張志・瞿目著録本あり。皆元修本にして、大徳八・九年、至大元年、延祐二年、元統二年の補刊年を有し、或は降るものは明修が重ねられ、宋原刻の葉は卅に一もない程である。古来本版は次掲の後漢書と共に宋福唐郡庠の刊と伝え、福唐本と称される。丁志によれば、その明修の丁氏蔵本は、首題次行の顔注銜名を「鎮守福建都知監少監栝蒼馮譲宗和重修」と改題し、また巻末に附された天順五年孟冬譲修刊福唐郡庠書版跋に曰く、「予奉命来鎮福建福庠書集版刻年深詢知模糊残欠過半不便観覧心独惻然鳩工市版補刻云云」と。以て福唐郡庠の刊刻になることを証し得る。本版と同時同地に於て開板されたと思われる後漢書巻末には景祐元年余靖の上言が附されてあるから、本版は余靖等が校刊せる所謂景祐本による翻刊であることも明かである。しかし本版は景祐刊本から直接翻刻したのではない。景祐刊本は現在伝わらず、清儒銭大昕・王念孫が北宋景祐監本漢書と言ったのは、実は景祐刊そのものではなく、嘗て黄丕烈が蔵し百宋一廛書録に著録され、後瞿氏鉄琴銅楼に転じ今は北京図書館に架蔵される所謂北宋刊南宋遞修本（北宋刊と断定するにはやゝ疑問がある）である。その版の現存本には他に黄氏別蔵本（本版等を配補）がある、後涵芬楼の有となり（涵録著録）、今北京図書館に転じているようである。瞿氏本を影印せる百衲本と本版を比較するに、共に行格を同じうし、本版の宋原刻の所は同本とほゞ覆刻に近い相似の関係にある。元修の部分は相似の関係は微かに残っているが、その字様に至っては頗る崩れて異る。五行志尾題後の対勘官知福州長楽県主云々の銜名はそのまゝ移刻されているが、巻末の景祐の余靖の上言が本版の現存本にないのは、佚失したのか、元来なかったのかは不明である。以て本版が北宋監本系にして、所謂北宋刊南宋遞修本の覆刻に近い重刊であることは疑いない。ちなみにこの本を影印せる仁寿本はこの本の欠葉等の部分を百衲本よりとって配してあるから注意を要する。

本版の刊年についてはこの本に徴すべき刊記序跋は存していない。しかしその宋原刻と目し得る上記の刻工名を有する他の宋槧本をあげれば次の通りである。

淳祐十年福州路提挙史季温刊国朝諸臣奏議（葛文・陳采・鄭信・鄭全・鄭統・鄭埜・楊慶、次掲後漢書の鄧堅）　中央図書館蔵嘉熙三年禾興郡斎刊押韻釈疑（江華・胡恩・阮忠・張得・鄭立・楊慶・李発）　静嘉堂蔵宋後期刊古霊先生文集（葛文・鄭立・鄭全・鄭統・楊慶）

この三本は相互に刻工名を多く共通し、共に閩刻で年代が相い前後している。且つ元修の君裕等はまたこの三本の元修にもその名が見える。他に葛文が南宋後期刊大字本荘子南華経注疏、黄琮が越刊八行本周礼疏、周正が寧宗頃建刊景文宋公書（書陵部蔵）、張栄が越刊八行本礼記正義の修、陽明文庫蔵紹興年間江陰郡刊乾道・淳熙・宋末間遞修春秋経伝集解、宝祐中湖州趙氏刊通鑑紀事本末、寧宗末理宗間浙刊晦庵先生文集に見える。黄琮・張栄は紹興頃の浙刊本の刻工中にその名が見えるが、張栄は一方南宋後期の刻工中にも見え、或は同名異人であるかも知れぬ。とも角刻工名の多くが一致するのは嘉熙淳祐前後の閩刻本である。欠画は宋の原刻の葉が極めて僅かなので証拠としては不十分ではあるが、とも角宋諱を避けること光宗に止っていることを考え合せれば、本版は次掲の後漢書と共に寧宗理宗前期間の開板と看做すべきであろう。

後漢書　一二〇巻　劉宋范曄撰　晉司馬彪撰志　唐李賢注　梁劉昭注志〔南宋寧宗理宗間〕刊（〔福唐郡庠〕）元大徳・至大・延祐・元統遞修　六四冊

後補藍色表紙（二七・九×一八・九糎）。補修が加えられ、襯装。首に「後漢書目録」あり、一冊をなす。本文巻首、「帝紀第一上　　范曄　　後漢書一」、次行低七格、「唐章懐太子賢注」と題す。志には前に劉昭後漢書注補志序あり、各巻首行大題上にあり、その下三格を隔てて篇名、次行低十格「劉昭注補」と署する。尾題は毎巻末隔行小題巻第幾と題す。最巻末は尾題「後漢書列伝巻第八十」の後一行を空けて「范曄後漢書凡九十篇総一百巻／(格低二)十帝后紀一十二巻／(格低二)八十列伝八十八巻／右奉淳化五年七月二十五日／勅重校定刊正」の五行あり。次に景祐元年九月秘書丞余靖上言を附する。版式は前掲の前漢書と同じ。左右双辺（二〇・七×一四・六糎）有界十行、行十九字、注小字双行、行廿四乃至廿七字不等。巻中墨釘の所が間々存する。版心白口双黒魚尾（補刻に間々小黒口双黒魚尾を混ゆ）、「後漢紀（或は後漢、後紀、後漢某某帝紀、漢紀、後某紀、某紀、后漢某某伝、後漢志、後漢伝、後漢某某伝等）幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に大徳九年・大徳十年・至大元年・延祐二年・元統二年の補刊年紀（間々中縫にもあり）及び刻工名がある。宋代原刻の葉は前漢書よりもさらに極めて僅少で、殆ど全葉近くが元修である。刻工名は、葛文、鄭立、鄭埜、鄧堅、浚（以上宋原刻）、一山、乙禾、魏埜、魏、埜、玉泉、泉、君甫、君祥、君玉、公迪、迪、公直、洪信、江世亨、世亨、江亨、亨、子月、子通、子青、青、子敏、敏、子高、高、子華、子尨、尨、子、士堅、士、堅、宗正、真心、仁父、正父、生禾、仲和、和、陳恵、恵、徳中、中、徳中、徳忠、忠、徳、得中、

東蒙、刀甫、伯玉、伯、玉、巴山、傅甫、傅、文足、文仲、文震、文、尨禾、余仁、余、呂才、劉通、通、劉震卿、震卿、禾甫、吉、張、廈、宸、辰、志、楊、祚、大、王、潤、閏、呂、定、利、清、互、東、寿、小、宝、通、恵、祥、仁、節、鄒、共（以上大徳九・十年修）、辰、林、志、共、節（以上至大元年修）、林、宸、埜、志（以上延祐二年修）、安卿、君祐、秀甫、秀、仲明、文仲、梁徳右、梁、右、天、浄、大、栄、士、寿、文、成、旦、以、匹、夫、茂、張、山、東、鄧、厚、祐、崔、生、丁、君、和、明、朱、鄒、日、除、正、仲、娘、尹、朱、戊、田、伯、子（以上元統二年修）丁宥（修年未詳）。殆ど元修なので欠筆は厳謹ではないが、玄眩泫弦玹朗敬驚儆警弘泓恤殷匡洭筐竟境鏡胤恒貞偵徴桓完構購溝講搆敦の字が間々末画を欠く。巻一下の第二五葉を始め約三十有餘葉に補写がある。「澄江陳氏／楚芳図書」「虎林」(陰刻)「董氏／家蔵／図書」(陰刻)の蔵印あり。呉志著録。

又　〔明〕修　四〇冊

昭仁殿原蔵。後補淡鶯色表紙（二六・五×一八・七糎）。裏打補修が加えらる。前掲の前漢書と一具に蔵さる。別蔵の前掲後漢書と同版であるが、それに比し後刷にかゝり、刷りむらが多く、粗黒口の明修の葉が入っている。版心の大徳以下の補刊年記の箇所が切りとられ、襯補されていること前漢書と同じ。間間別版による補写或は欠葉があり、志第三律暦下第二七葉は別版の葉で補配。「天禄／継鑑」(陰刻)「乾隆／御覧／之宝」「天禄／琳琅」「虞山／景氏／家蔵」(陰刻)「祜谿／」(陰刻)「祜溪／草堂」「宗伯」の蔵印あり。仁寿本二十四史所収影印本の底本。呉志著録。

同版に宮内庁書陵部・静嘉堂文庫（陸志著録）・中央研究院（鄧目著録）・北京図書館（楊録著録本か）・中央図書館（存志卅巻）蔵本・瞿目著録本（丁志著録）等があり、前漢書と同様、所謂北宋刊南宋初修の景祐本の覆刻に近い翻刊である。本書の范書の紀伝九十巻と彪志三十巻とはもと夫々別行の単行であったのを、後に合したものである。本版の列伝巻一の大題巻次数が後漢書巻第十一となって皇后紀第十に直接し、即ち志には後漢書巻第幾という大題の巻次数がなく、紀伝と全く銜接していないのは、志を紀伝の間に挾まない旧形の名残りを残しているからである。

晉書　存巻一四―一七（志四―七）　唐房喬等奉勅撰

〔南宋〕刊　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒色表紙（二六・二×一五・四糎）。所所裏打、包背装。本文巻首「志第幾(隔三格)晉書幾」、次行低五格、「唐太宗文皇帝　御撰」、第三行低三格篇名を題す。左右双辺（一九・五×一二・五糎）有界十行、行十九字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「晉志幾　晉書幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、伯茂、大、徐、楽、旦、寿、狠、美、秀、鄒魏、娘、口、周、鄭、丁、尹、文、江、成等の刻工名あり。左上欄外に耳格あって、篇目を記す。巻十四首三丁を欠き、巻十

七は第廿九丁に止って、以下欠。呉志著録。

本版は欠筆は孝宗の慎に止り、光宗以後の刊と思われ、宋刊十行大字本と称される。静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・中央図書館（二部）蔵本、北平図書館（残本二部）原蔵本、瞿目・丁志各著録本等は同版である。それ等悉くが元明遞修本であるが、此は零本ながら、補刻がない。

資治通鑑　存零葉　宋司馬光撰　〔宋孝宗以後〕刊（鄂州）　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒色表紙（三五×二二・五糎）、裏打改装。粘葉装。巻首「資治通鑑巻第八」、次行低二格「秦紀三（下小注双行あり）」と題する。左右双辺（二五×一八・一糎）有界十一行、行十九字、音注小字双行。行廿五字。版心白口双黒魚尾、「通鑑八　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に沈顕、沈、亮の刻工名がある。内閣残影・呉志著録。早印の美しい刷りであるが、巻八の首より第四丁右までと、巻七巻末の半葉が末に附綴されている計四葉の零簡である。南宋鄂州で蜀広都費氏進修堂刊所謂龍爪本を覆刻せる版で、本版には静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・中央図書館（適志著録）・北平図書館（旧京281—283著録）蔵本、瞿目瞿影・王記著録本等がある。

通鑑釈文辯語　一二巻　元胡三省撰　〔元〕刊（〔興文署〕）　八冊

後補黄絹表紙（二五・七×一七・三糎）。襯装。巻首「通鑑釈文辯誤巻第幾」、次行低八格、「天台　胡三省　身之」と題す。巻末に丁亥二月の三省の跋あり。双辺（二一・二×一四・一糎）有界十行、行廿字。辯誤は低一格単行大字、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「通鑑辯誤幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。刻工名は張季祥、張?亦、張君茂、君茂、張伯興、張和甫、張亨、善案、善楽、李安、李伯太、李光奕、余平次、余敬仲、余安斉、余安育、余子共、克明、付友実、友実、付文徳、付子勝、蔡徳□、蔡興子、興子、仲窓、仲言、仲竿、仲昭、仲良、匹天其、天其、天錫、江仲貴、仲貴、江□讓、江伯海、江君美、君美、江仲寮、江寿卿、寿卿、江実父、江梅溪、梅溪、江君裕、江成甫、江、丁華甫、丁師与、虞漢?臣、劉偽好、劉子仁、劉元善、元善、呉昭甫、呉華甫、呉進甫、呉可久、安民、黄升安、黄子通、黄達夫、達夫、黄乃□、尚子光、子光、子仁、周弟、周子通、季和、子仁、禔甫、翁禔甫、君祥、成甫、文卿、文福、伯起、伯英、王仁恵?、王仁鹿、王仁甫、王仲仁、葉権宗、稽文、胡志卿、陳七、陳光、陳光慶、陳君仲、陳文甫、文甫、陳外秀、外秀、必遇、正夫、篇慶々、篇宗海、永昌、興宗、雲海、清甫、升高、叔夷、淳?智?、徳閏、祖珍、平父、良□、秘□、智□、求強、条□、信、刀。天禄各璽印あり。天禄続目九著録。

元の興文署の刊とされる胡三省注資治通鑑と行格版式を同うし、又刻工名も多く共通し、併刻されたものである。共に板木が明の南監に移されたので、現存本の多くは嘉靖に至る遞修本であるが、此は殆ど補刻がない。同版に静嘉堂文庫・中央研究

院歴史語言研究所・南京図書館（丁志著録）蔵本、瞿目・莫編著録本や後掲の北平図書館原蔵本等がある。

＊資治通鑑綱目　五九巻首目一巻　宋朱熹撰　〔宋淳祐頃〕刊（〔武夷・詹光祖月崖書堂〕）　六〇冊

後補紺色金切箔散し表紙（二七・六×一七・四糎）。襯装。首に資治通鑑御製序、司馬光上表、奬諭詔書、与范夢得論修書帖、資治通鑑目録序、資治通鑑挙要暦序、紹興四年胡安国資治通鑑挙要補遺序、乾道壬辰朱熹資治通鑑綱目序例あり。本文巻首、「資治通鑑綱目第一起戊寅周威烈王二十三年尽乙巳周赧王五十九年」、次行「凡百四十八年」と題す。四周双辺或は左右双辺（一九・四×一二・七糎）有界十行（目は有界廿行）、行十六字、目は小字双行、行廿二字、題及び綱文は跨行。眉上に綱の干支を標記。版心線黒口双黒魚尾、「目（或は岡目）幾（丁付）」、下象鼻に所々刻工名あり、巻一は版心に往々字数を刻す。左上欄外の耳格に某帝と記す。玄朗匡恒貞徴譲署竪勗桓完構遘慎敦等の字に欠筆あり。刻工名は、王子清、王秀、秀、王、劉英甫、英甫、劉、呉、呉生、生、生奇、子政、政、子権、子、周仁、周、仁、元吉、元、吉、上官、仲圭、仲、圭、陳只、陳、只、余老、余、青山、為郎（印カ）、士文、士、介、丁、葉、范、正、茶、仙、先、分、徳、全、翁、禾、文、蔡、工、興、立、車、福、禄、八、仕、合、意、共、爪、宗、復、方、忠、玉、州、丹。序第十葉、巻七首葉、巻十二第六葉裏第七葉表、巻十一・十七・四十二の両巻の大部分は補写。朱・黄・青・墨筆の断句圏点、墨筆の音義・校語、朱筆の評語の書入が加えられ、朱と墨とは異筆。巻末に「至正二十二年歳次壬寅春二月二十日□抹点対畢」の朱筆識語がある。「周氏／蔵書／之印」「昆陵周氏九松／迂叟蔵書記」「周印／良金」「周笈／私印」（陰刻）「周笈」（陰刻）「振宜珍蔵」「御史之章」（陰刻）「揚州阮氏／琅嬛仙／館蔵書印」の印あり、明の周良金、清の季振宜・阮元旧儲本。呉志著録。

本版の刊記のある序例目録後の半葉がこの本は欠けて別紙で補われている。その刊記は瞿目によれば、「目録後有武夷詹光祖重刊於月崖書堂一行巻一与巻五十九後俱有建安宋慈恵父校勘一行張月霄氏謂恵父即編提刑洗冤集録者為淳祐間人遂定為淳祐刊本」と云う。巻一大題後一行をあけて「建安宋慈恵父校勘」の一行はこの本にもあるが、巻五十九の巻末の裏丁は別紙で補われている。同版は瞿氏蔵本（張続志著録本）の外に、北京図書館蔵本があり、また潘氏宝礼堂旧蔵北京図書館現蔵の宋嘉定刊本（潘録・王記著録）に補配された巻四十七至五十一はその行格・刻工名から見て本版のようである。この本の上記の刻工中、呉生・子政・上官は淳祐十年福州刊国朝諸臣奏議、元吉は淳祐十二年徽州刊儀礼要義・宝祐二年江南宛陵郡斎刊致堂読史管見に、また呉生は越刊八行本尚書正義及び淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解の修、上官は南宋前期贛州刊文選にも同名が見える。上官は南宋前期と南宋後期と時代と地区を異にする両方に見出されるが、或は同名異人かもしれない。瞿目がこの本を張月霄の説によって淳祐刊としたのは、刻工・版式等からも妥

当と思われる。

＊資治通鑑綱目書法　五九巻　元劉友益撰　元後至元二年刊（積善堂）　五冊

景陽宮原蔵。後補暗緑色金切箔散し表紙（二二×一三・九糎）。首に至治三年龍仁夫序、天暦二年揭傒斯序、元故劉先生墓志銘（揭傒斯撰）、延祐四年馮魯撰通鑑綱目書法後序、天暦二年劉友益の抄白、通鑑綱目凡例、至元二年丙子十月朔男渠述の刊語あり、その後に「至元丙子冬／積善堂刊行」の双辺木記がある。巻末に至順三年門人賀善の通鑑綱目書法後序、天暦二年欧陽玄の廬陵劉氏通鑑綱目書法後序を附する。本文巻首「資治通鑑綱目書法第一起戊寅周威烈王二十三年尽乙巳周赧王五十九年」、次行低十一格「廬陵後学劉友益修撰」、第三行低三格「翰林直学士中大夫知制誥同修国史国子祭酒欧陽玄校正刊」と題する。巻二以下第二行は或は「廬陵劉友益譔」と題し、第三行は或は空行となし、巻三十八は「嘉遇校刊」と署す。左右双辺（約一七・五×一〇・六糎内外）有界十三行、行廿四字、注小字単行或は双行。間々書眉（幅七糎）を設け、眉上に干支を首書。版心細黒口双黒魚尾、「巻幾（或は幾巻）（丁付）」、下象鼻に往々字数あり。巻四十九の第三・八丁及び巻五十八の第八―十丁補写、他に部分的に破損せる箇所が補写されている。巻五十九の末葉は下半の破損部分が補写され、その中に刊記の双辺の辺欄のみが写してある。旧京著録の書影によれば、その刊記は漫滅甚しく「吉安〔以下漫滅〕／至〔以下漫滅〕」と見える。同版は他に後掲の北平図書館原蔵残本二部（存巻三―六、一九―三四、五三―五九。存巻四九―五九）あるのみ。

＊資治通鑑綱目集覧　五九巻　元王幼学撰　〔明洪武二一年〕刊（〔梅溪書院〕）　覆元刊本　四冊

後補黄色金切箔散し表紙（二四・五×一五・七糎）。首に丁卯進士羅允登の集覧序、延祐四年馬端臨序、延祐六年貢奎序、至治元年王寔序、至正二年鮑邇序、末に泰定元年正月燈夕前一日古舒望江慈湖王幼学行卿端拜謹書と署せる「資治通鑑綱目集覧敍例」がある。本文巻首「資治通鑑綱目集覧巻第一」、次行低七格「古舒慈湖王幼学行卿編」と題す。双辺或は左右双辺（二一×一三・四糎）有界十行、行十六乃至十七字、注小字双行、行廿四字。版心細黒口双黒魚尾、「集覧幾（丁付）」。左上欄外に耳格あり、帝名を記す。巻五第十一丁補写。「自適斎」等の印あり。

この本は中央図書館蔵本（適志著録）・北平図書館原蔵存巻一―五、四一―五九残本の明洪武廿一年梅溪書院刊本と同版である。この本は首の至治元年王寔の序末の裏葉が切り取られ、別紙で補われているが、こゝに前記二本は「洪武戊辰孟夏／梅溪書院重刊」の双辺木記が印されている。本版は後掲の北平図書館原蔵元刊本の忠実な覆刻であるから、刊記をとれば一見元槧本の如く見えるので、従来元刊と著録されて来た。

＊通鑑続編　二四巻　元陳桱撰　元至正二二年序刊（松江・顧逖思）　二四冊

昭仁殿原蔵。後補藍色絹表紙（二四・五×一六・七糎）。包背装。首に至正廿一年周伯琦の通鑑続編序（首葉表欠）、至正十八年陳基の序、至正廿二年張紳の序、至正十季歳在庚寅夏六月甲子四明陳桱題の自序、友生姜漸の通鑑続編序、次に通鑑続編目録及び書例がある。本文巻首、「通鑑続編巻第一（隔四格）陳桱」と題す。左右双辺（二一・五×一四・一糎）有界九行、行廿二字、小字双行。甲子紀年を欄上に注刻。版心線黒口単黒魚尾、「通鑑続編巻幾（丁付）」。間々上象鼻に大小字数（時に下にあるもあり）、下象鼻に、王叔敬、王、永之、永、徳夫、周祥、周、潘、番、趙、伯、茅、彳、亨、徐、東、元の刻工名あり。巻十六の巻末に切り取られた跡があり、巻廿四の巻末数葉は破損が多い。天禄各璽印あり。天目続九著録。

伯琦序に刊行の経緯を述べて曰く、「子経是編既成兵難大作幾不能生事定而其稾幸存若神明祐之者積歳苦貧不能脱稾今行中書省賓佐海陵馬君玉麟国瑞甫好古君子也令長洲時訪子経得其稾以禄米致筆札飲食之資聚諸生之能書者編録之始成全書焉松江貳守昭陽顧君逖思邈甫将鋟梓以広其伝」と。同版に後掲の北平図書館原蔵本二部の外に、静嘉堂文庫（巻四―六鈔補、陸志陸続跋著録）・内閣文庫（明修、森志著録）・中央図書館（二部）・北京図書館（明修二部、一は瞿目、一は涵録著録）・南京図書館（丁志・盎影著録）蔵本や傳記・劉影・莫編・羅録著録本等がある。

通鑑紀事本末　四二巻（欠巻七、二五、五二）　宋袁枢撰　南宋宝祐五年刊（湖州・趙与籌）〔元・明〕逓修

九七冊

昭仁殿原蔵。後補藍絹表紙（三一・七×二三糎）。襯装。首に淳熙元年楊萬里の「通鑑紀事本末叙」、宝祐丁巳（五年）秋七月朔趙与籌序、「通鑑紀事本末総目」あり。本文巻首「通鑑紀事本末巻第一」、次行低二格「三家分晉」と題す。左右双辺（二五・七×一九・二糎）有界十一行、行十九字、版心白口単黒魚尾、「通鑑紀事本末巻幾（丁数）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。明補刻には小黒口を混える。上象鼻の明の補刊年があったと思われる所が削除補襯されている。玄鉉朗敬弘泓殷匡炅恒恒貞偵徴樹譲頊勗煦桓垣完瑗構搆媾慎敦廓等の字が欠画され、避諱は寧宗に止る。また桓を或は亘に作り或は「欽宗御諱」、構字を「太上御名」と注す所もある。刻工名は呉炎、呉、徐嵩、銭璵、銭琣、銭于、銭玕、章泳、林茂、濮仲質、濮仲、卜仲、徐楠、楠、鍾季升、鍾、范仲実、仲実、范仲、林嘉茂、林嘉、林茂、黄佑、虞源、沈宗、王大用、何祖、張栄、蔡成、徐拱、徐珙、余珙、馬良、王爗、王興宗、興宗、王興、王興忠、王亨祖、王亨、王春、劉霽、沈祖、張成、劉孚、劉祜、劉共、鍪徐、徐、余和甫、余和、余甫、和甫、梁貢甫、梁行甫、梁甫、熊呆、金栄、賈端、翁期、何豫、徐珙、史祖、陳必達、徐侁、顧祺、顧其、周松、周嵩、徐侃、沈杞、沈栄、沈昌祖、劉隠、何文政、梁炎、方得時、茹鎮、徐嵩、黄佑、金永、王介、中明、中、葉椿年、翁期、翁其、一占、占、徐松、曹戩、曹、得春、范、山等。この本は明修の葉が多く、補刊年は剜去されている

が、刻工等は残り、丁璧、仁端、朱銘、梁仁甫、監生史京、監生銭岱、監生楊采、劉牧洪、晏崇、楊東浙、何偉、徐禛、汪環、監生陳謨、劉瀾、陳位、羅嗣、伍秀、中成、采、占刁、陳添□、彭崇得、董継恩、監生張鳳揚、潘仕卿、監生陳位等。巻中欠葉が多く、概ね烏糸欄白紙を補綴してある。天禄各璽印あり。天目続四（十六函一百冊とあり、当時は完本であった）・呉志著録。

本書は初め淳熙年間厳州に於て出版されたが、与懃が之を字小にして訛多しと湖州に於て再刊したのが本書である。この本には欠けている延祐六年陳良弼の序によれば、元の延祐六年嘉興学宮が孫の明安よりその板木を購得して修補印行したと云う。明に入って板木が南監に移され、成化・嘉靖に遞修が加えられた。南雍志に「通鑑紀事本末四十二巻板完計四千四百面 建安袁枢撰」と出ている。現存本の殆どが元明遞修本である。同版は他に静嘉堂文庫（明修、陸志陸続跋著録）大倉集古館（明修）、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫（存巻卅一）・中央図書館（三部、一は元修、一は元明修、適志著録）・北平図書館原蔵（残本三部、一は明修）・中央研究院（明修）・北京図書館（三部、一は涵録著録、一は元修、一は元明修、適志著録）・南京図書館（丁志・盆影著録）蔵本、張志・瞿目瞿影・楊録・潘記・葉志・王記・莫編莫跋著録本等がある。四部叢刊に涵芬楼蔵宋印本を以て影印さる。

又　存巻三四　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒色表紙（三五×二四糎）。裏打補修が加えらる。破損しているが、補刻がない。

又　存巻四二　〔明〕修　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒色表紙（三三・五×二二・三糎）。裏打補修が加えらる。首尾に欠丁あり。

汲冢周書　一〇巻　晉孔晁注　元至正一四年刊（嘉興路儒学）　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補淡青色表紙（二九・四×一八糎）。包背装。印刷の原題簽あり、「汲冢周書全」と。やゝ薄手の用紙を使用。首に至正甲午冬十一月四明学黄玠謹志の「汲冢周書叙」あり。巻末に昭徳晁公武志、李燾識語、嘉定十五年丁黼跋を附す。本文巻首「汲冢周書」、次行「周書巻第一（隔八格）晉孔晁注」と題し、毎巻大題の次に目録をおいて本文に接続する。左右双辺（二二・七×一四・七糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「周書幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に間々沈成甫、沈成、周継宗、陳、平、陁、中、匋の刻工名がある。巻七の第八丁及び巻九の第九丁欠。内閣残影著録。

本版は宋嘉定十五年丁黼校刻本（現存せず）を嘉興路儒学で重刊せるもので、黄玠の序に、「郡太守劉公廷幹好古尤至出先世所蔵命刻板学宮」と。同版に静嘉堂文庫（陸志・陸続跋著録）・中央図書館・北京図書館（中版録287著録）蔵本、瞿目瞿影（張志著録）・莫編莫跋著録本がある。

*古史　六〇巻　宋蘇轍撰　〔南宋中期浙〕刊〔元・明〕

遞修　二四冊

昭仁殿原蔵。後補淡空色金切箔散し表紙（二八・二×一九・八糎）。襯装。首に自序並に目録あり。巻末の紹聖二年の自跋を欠く。本文巻首「三皇本紀第一（隔四格）　古史一」、尾題「（小題）第幾」と題す。左右双辺（二四・一×一五・八糎）有界十一行、行廿二乃至廿四字内外不等、注小字双行、行廿二乃至廿五字内外不等。版心白口双黒魚尾（単黒魚尾や三黒魚尾も混ゆ）、「古史小題幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。版心の巻次は本紀七巻世家一至九巻列伝一至十四巻十五至廿五巻は千字文号を以て標記。補刻の葉は字数・千字文号なく、元修を徐いて刻工名もない。玄弦眩敬警驚弘殷匡恒貞徵讓瑣桓完構媾購慎の孝宗の宋諱までに欠筆を見るが、所により欠かざるもあって厳謹ではない。刻工名は丁松年、丁之才、王定、王寿、王汝霖、王進、王渙、王明、王恭、方至、方信、方中、呂信、呂志、石昌、金祖、金嵩、金栄、毛端、毛祖、余政、宋琨、宋通、宋祖、朱玩、朱祖、呉中、呉春、呉志、呉祐、沈茂、沈珍、沈定、沈忠、求祐、徐義、徐拱、李仲、果張昇、陳仲、陳良、陳彬、陳寿、陳伸、陳浩、陳潤、陳晃、陳遇、孫春、孫日春、蔡邠、顧澄、顧達、雇永、蔣容、蔣栄、張亨、張昇、張升、凌宗、項仁、童遇、董澄、何澄、何沢、何進、馬祖、馬松、楊栄、楊潤、章忠、曹鼎、劉昭、銭宗、詹世栄、鄭春、龐知柔、龐汝升、龐知泰、三政（以上原刻）、劉升、劉昇、袁官、許宗厚、許宗□（后カ）（以上元補刻）。巻中間々欠葉或は補写あり。元から明にかけての補刻が加わり、巻八至十二は比較的補刻が多く、他は原刻が多い。天禄各璽印あり。故宮書影・呉志著録。天目続四に十六冊（明葉盛家旧蔵）・廿四冊（毛晋・朱彝尊旧蔵）の二部が著録されているが、両本の蔵書印ともこの本には見えない。

欠画は孝宗に止って、寧宗以降に及ばないから寧宗以後の刊であるが、刻工を按ずるに、越刊八行本注疏類の南宋中期から後期にかけての補刻の刻工と共通するものが最も多く、また北平図書館原蔵礼部韻略、宝祐中湖州刊通鑑紀事本末、明州刊文選の宋修、南宗浙刊大広益会玉篇（書陵部）、嘉定中浙刊歴代故事（静嘉堂）等の寧宗・理宗間の浙刊本と刻工が多く共通している。従って本版が寧宗理宗間の浙刊本たるは疑いない。故宮博物院目録や王記等が衢州刻本としたのは、呉哲夫氏が言う如く、次掲の明初刊本の尾題後の銜官からの聯想であろう。本版の板木は明代に南監に移され、「明南雍経籍考」には「子由古史五十巻」として「脱者四十七面存者五百六十五面云々」と録されている。同版に北京図書館（三部。存七巻、元明修〈潘録著録〉、元明修）・涵芬楼（涵録著録）蔵本・北平図書館原蔵本（残本、旧京333 334著録）、瞿目瞿影・適志・王記（残本）・莫編莫跋著録本がある。

同　〔明洪武年間・福州〕刊　翻宋衢州刊本　八冊

昭仁殿原蔵。後補黄絹表紙（二八・五×一七・五糎）。襯装。首に自序並に目録、巻末に紹聖二年自跋あり。本文巻首「三皇本紀第一　古史一」、尾題「小題第幾」と題す。四周双辺或は

左右双辺（二〇・二×一三・八糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「古史（本紀等の小題）幾　（丁付）」。下象鼻に刻工名あり。桓匡等に欠画あり。刻工名は劉本、劉宣、劉宣観、劉復、劉伏、劉伏三、劉貫、劉侍者、劉伯安、劉八、劉保、呉原礼、熊汝敬、陳士達、陳魯、陳厚、陳和、肖寄、張名遠、貴孟老、貴全、江同、江子名、江六、江后、景中、景舟、周寿、周同、王以善、王登、北林、六彦、六晏、六付、陸付、蔣仏、士通、志道、黄保、黄是、黄子名、黄子高、葉松、葉寿、虞亮、虞子記、虞子徳、虞孟□、虞厚、虞孟淳、孟淳、詹現、詹見、姚浦?、范通、范彦从、付資、付彦成、付名仲、林安、魏海、章毫、友永茂、徐子仲、兎全、彦正、彦和、宗文、薛和尚、余長寿、堯朱、連彦惇、姫伯美、原良、潘晋、妮右。巻七尾題後に「左迪功郎衢州司戸参軍沈大廉同校勘」、また巻十六尾題後に「右修職郎衢州録事参軍蔡宙校勘兼監鏤板」の各々一行がある。天禄各璽印、「筆研／精良／人生／一楽」「聴秋／斎」「汪琬／印」「苕文／氏」（陰刻）「玉遮」「汪」「琬」の印。毛氏汲古閣及び清の汪琬旧蔵本。天目続四に宋版小字本として著録。呉志著録。

本版の刻工の多くは元末明初間の人で、遼史・金史・慈渓黄氏日抄分類・古今紀要・西山先生真文忠公文章正宗等の刻工にその名が見え、此等諸本は全て元末明初の閩刻本である。また尾題後の校勘監鏤者の銜名から、宋衢州刊本の翻刻であることが判明する。天目によれば巻七末の銜官氏名の沈一廉は字は元簡、建炎間の進士という。本書が南宋初衢州で刊行されたことが此から推測されるが、現在この宋衢州刊本は伝存していない。莫跋は前掲の本書の宋版解題中本版に言及し、「楊氏所刻留真譜有元刊古史半葉十四行二十四字楊氏又有明初刊本曾於題記潘書時及之伯驥攷明陸氏中和堂随筆称洪武二十三年福建布政使司進南唐書金史蘇轍古史初上命礼部遣使購天下遺書令書坊刊行至是三書先成進之楊氏之本当即此時所刻」と指摘している。本版は往々宋版或は元版とされているが、雕法・刻工名から考えても莫氏の説の如く、洪武年間福州刊と審定すべきである。静嘉堂文庫（陸志に元刊、陸続跋に宋刊と著録）・中央研究院（鄧目に宋刊と著録）蔵本、葉録（宋刊小字本と著録）・王記著録本は同版。

通志　二〇〇巻首目一巻　宋鄭樵撰　〔元至大〕刊（福州路三山郡庠）元至治二年・明成化・万暦遞修　一四〇冊

後補藍色絹表紙（三二・五×二三・三糎）。襯装。首に「至治二年呉繹序、至治元年五月福州路総管可堂呉繹通志疏、疏の後に「至治二年九月印造」及び福州路総管府所委提調官録事司判官七人の銜名を記し、次に鄭樵の通志総序並に通志総目録がある。本文巻首「三皇紀第一（隔八格）　通志一」と題す。左右双辺（約二九・八×一九・五糎）有界九行、行廿一字。版心白口双黒魚尾、「通志某紀第幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名がある。明修には稀に黒口もあり、上象鼻に成化十・十

一年、万暦十七年・二十三年・二十四年刊の補刊年或は吏部重刊等が印されているが、この本はその年号を殆ど挖削してある。上象鼻には往々監生藩学祖等の監生名、或は大小字数、刻工名がある。補刻の葉に必しも補刊年が記されているとは限らない。刻工名については後掲北平図書館原蔵本の項参照。天禄各璽印あり。天目続九著録。

本版は諸書目の殆どが至治二年刊とするが、呉序既に「是集繡梓於三山郡庠亦既獻之天府蔵之秘閣然北方学者猶未之見予叨承守福唐洪惟文輒会同斯文豈宜専美一方迺募僚属仍捐己俸稟之省府摹褙五十部散之江北諸郡」と述べ、又呉疏にも「天啓文運皇元肇興爰命臣工勒諸三山郡学雖呈進而北方学者槩不多見予叨承宣命来守是邦謹己俸暨諸同寅徴工印造此書関発中原諸郡庠」と記してある。従って至治二年の印造年記は、福州路総管の呉繹が三山郡庠が前に開板せる板木によって五十部を刷って江北諸郡に寄贈した時の年記である。事実版心には「至大二年士安」、「至大己酉王英玉刊」等の刊刻年が残っている。また丁志・適志が既に引用して指摘する如く、元劉壎撰「隠居通議」に「近大徳歳間東宮有令下福州刊通志凡万餘版」とある。大徳年間福州に命が下り至大の頃竣工したのであろう。明代南監に板木が伝わり、この本に見る如く、成化万暦と度々遞修の上印行が続けられた。「明南雍経籍考」には「通志略二百巻計板一万三千七百二十四面」と記されている。現存本の殆どは明修本である。同版に内閣文庫（明修、森志著録）・静嘉堂文庫（明修、陸志陸続跋著録）・尊経閣文庫（明修）・書陵部（明修）・大倉集古館（明修）・中央図書館二部（成化修、適志著録。一部存一八三巻成化修）・北平図書館（存一九一巻、旧京著録。存巻五）・中央研究院（鄧目著録）・台湾大学図書館（存巻六下・巻七、明修）・北京図書館（瞿目著録、明修）・上海図書館（存十六巻）・南京図書館（丁志盗影著録）・ハーバード大学燕京研究所（二部、一部零本）蔵本、劉影・傅目・莫編著録本がある。

戦国策　一〇巻（欠巻九・一〇）　宋鮑彪注　元呉師道校注　元至正二五年刊（平江路儒学）　巻六配補明覆刻本　七冊

後補紺色表紙（二六・七×一八・三糎）。襯装。首に劉向序、曾鞏序、紹興十七年鮑彪序、戦国策目録、校正凡例がある。但し至正十五年平江路牒文、泰定二年呉師道序、至正十五年陳祖仁序を闕く。本文巻首「戦国策西周巻第一」、第二・三行低八格「縉雲鮑彪校注／東陽呉師道重校」と題す。左右双辺（二〇・六×一四・八糎）有界十一行、行廿字、注小字双行。所々墨線が附刻。版心線黒口単黒魚尾、「国策巻幾（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に三叔敬、伯夫、子成、何原、何、朱祥、朱、周、王、趙、潘、魏、袁、付、茅、夫、肖の刻工名がある。刻工名・字数のない葉もかなり多い。左上欄外の耳格に国名を記す。巻四至七の巻末尾題後一行をあけて、「至正乙巳前藍山書院山長劉鏞重校勘」（巻三末にもある筈であるが、この本はその葉を欠き別紙を以て補配）、また巻八末に「平江路儒

学正徐昭文校勘」（この本に欠く巻九・十末にも同文あり）の一行がある。首の凡例末に「万暦戊子七月望日手装于願賢堂定之筆（印）」（印文「定／之」）、また巻五末に「戊子八月一日閲於心遠閣（印）（印）」（「定／之」「文印／従鼎」）の識語が存する。天禄各墨印、「定／之」「文従／鼎」「字／定／之」（刻陰）「文定／之氏」「文印／従鼎」（刻陰）「関内／侯印」「謙牧／堂蔵／書記」「兼牧／堂書／画記」の印あり。明万暦の挙人文従鼎（字は定子）及び清の揆叙旧蔵。天目続九著録。同目によれば当時は十巻の完本八冊であり、また謙牧堂旧儲廿四冊も別蔵されていた。

静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・大倉集古館・北京図書館（二部、明修、一は潘録著録）蔵本、瞿目瞿影・張志・潘跋著録本は同版。四部叢刊に本版として影印された南京図書館蔵本（丁志著録）は実は本版を明初に覆刻せる版である。この本に配補された巻六が即ちそれで、静嘉堂文庫にも蔵されている。

*〔蘇文忠公奏議〕　存巻七・八残葉　宋蘇軾撰　〔南宋前期〕刊（〔蜀眉山〕）〔宋〕遞修　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒色表紙（二九・七×二二・二糎）。裏打補修が加えられ、粘葉装。左右双辺（二一・八×一七・三糎）有界九行、行十五字、注小字双行。版心白口単黒魚尾にして寛、「文忠奏議（或は文奏議、或は蘇文忠公奏議、或は忠公奏議）幾（丁付）」、下象鼻に単道、張初一、初一（以上原刻）、王閏、蘇四、王戍、王正、馮杞、□保、□直、曾□、喜、張、七、閏、戍、鼎、兼（以上補刻）の刻工名あり。高宗の構の字に欠画が見られ、敦・郭の光宗寧宗の諱は避諱しない。巻七は首葉を欠き第廿九丁まで、巻八は第六丁より中間を欠き、廿八丁を存する。本版は宋代の二次の修補が見られ、原刻は印面漫漶、印面美しく字様は覆刻であるが、原刻に比し些少くねくせる風を帯びたのが第一次修で、原刻に加えられた部分的な修補が第二次の補刻と思われる。内閣残影・呉志著録。

本版は字大にて渾厚端厳、中央図書館蔵宋眉山刊大字本と言われる蘇文忠公文集や後掲の北平図書館原蔵蘇文定公文集（存巻十七）とその字様行格を同じくしている。特に文定公集とは単道・張初一・王閏・王戍・王正・馮杞の刻工を同じうしているから、三書は恐らく同時同処の刊であろう。補刻の刻工王閏や文定公集の刻工の多くは蜀刊太平御覧にその名が見える。王正はまた南宋初刊光宗頃修爾雅疏・光宗頃刊尚書正義・蜀大字本後漢書・嘉定年間温陵郡斎刊資治通鑑綱目の宋修の刻工中にその名が見えるが、同名異人があるか。蘇文定公集の欠画は孝宗の慎字に及んでいるが、この零本に見る限りでは避諱は高宗までで、慎字は見出せないから、孝宗については避諱の有無は不明である。とも角本版の刊年は淳熙紹熙の頃と推測すべきであろう。本版は他に所在なく、吉光片羽の零残ながら、貴重である。所収奏議の文と通行四部備要本との校勘記が呉氏の解題中に掲載されている。

国朝諸臣奏議　一五〇巻首目三巻（欠巻六一―六五、乙

目）　宋趙汝愚編　宋淳祐一〇年刊（福州路提挙史季温）元大徳・至大・元統・〔明初〕逓修　五七冊

昭仁殿原蔵。後補藍色絹表紙（二八×一八・五糎）。襯装。首に淳祐十年史季温跋、淳祐十年趙希瀞序、淳熙十三年趙汝愚の乞進皇朝名臣奏議劄子、汝愚の進皇朝名臣奏議序、国朝諸臣奏議目録（乙集目録即ち巻三六―七七の目を欠く）あり。本文巻首「国朝諸臣奏議巻第一」、第二・三行低二格、「龍図閣直学士朝散大夫成都潼川府夔州利州路安撫制置使兼知成都軍府事兼／管内勧農使充成都府路兵馬都鈐轄祥符県開国伯食邑九百戸臣趙汝愚」と題す。巻二以下はこの第二・三行の銜官題署がない。左右双辺（二三×一五・一糎）有界十一行、行廿三字。版心白口双黒魚尾、「幾巻（或は巻幾）（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。僅かながら明修に細黒口が混る。版心の所々に大徳四年六月補刊（巻七五の第一・二丁）、大徳四年九月補刊（巻一の第三・四丁）、至大元年刊補（巻三四の第一三・一四丁）、元統二年刊（巻八九の第八丁、巻一一九の第四丁、巻一二三の第一〇、巻一三二の第一四・一六、巻一三三の第九・一三丁）の補刊年が記され、また巻八二及び巻一四七の尾題下並にその後に「大徳四年九月補刊」「福州路儒学教授劉直内命工刊補」とある。敦廓等の宋諱に欠筆が見られ、巻一三六の第十九葉は明天順元年嘉興府の公印紙に刷られている。この本には明初の補刻が加っている。元の補刻の中にはかなりよい覆刻があるので、刻工名中元か宋か識別し難いものがある。刻工名は、王辰、辰、王、王宸、王生、王徳、王昭、何埜、何益、何□、葛文、葛、魏文、魏茂、虞仲、仲、倪仁、倪仁□、倪端、元茂、胡仁、呉棰、呉生、生、呉王、呉才、江才、江亮、江、亮、黄道、黄、蔡清、蔡青、子政、周和、周禾、秀茂、秀父、純祖、除目、章淳、上官、上官安、官安、安、仁中、仁、仁仲、仁作、人亮、人、仲生、張賜、張得、張四、張泗、泗、陳元、元、陳文、文、陳采、陳洪、洪、陳元茂、元茂、子正、丁正、丁、定夫、鄭礼、礼、鄭世、鄭埜、鄭栄、鄭堅、鄭統?、鄭愷、鄭信、鄭全、鄧挙、鄧志、鄧堅、鄧安、鄧圭、范賢、兪富、兪、兪正、有才、有、葉才、葉安、葉賓、楊慶、楊亨、姚仲宝、仲宝、姚、李定、定、呂洪、林文茂、文茂、茂、林富、盧老、和叔、和、馮、呉、才、呂、熊、道、官、劉、明、亨、富、義、魏、蕭、徐、中（以上原刻か）、君玉、君裕、蔡文茂、仁仲、陳用得、用得（或は明か）、熊明、熊、劉公亮、公亮、劉純父、純父、成、林、裕、以、巳（以上元修か）。所々欠葉あり。天禄各璽印、その外に「趙氏／子印」「相府珍／蔵墨宝」「倪氏雲／林家旧籍」「尚宝寺卿／袁忠徹家／蔵書画印」「水村／陸氏／珍蔵」「東呉王／氏収蔵」「文石朱／氏家蔵／図籍印」「徐氏／学重／蔵書」「解学／士之印」「江左世家／蔵旧籍／古画図書」「古呉／書画之印」の明の名家の印が鈐されているが、多く偽印と云われる。天目続四（当時は六函六十冊の完本）、故宮書影著録。

季温の跋に「先正丞相忠定福王趙公曩嘗編類国朝名臣奏議開

端于閩郡奏書錦城亦已上徹乙覽淳熙至今踰六十年矣蜀旧鋟木已燬于兵公之孫尚書閣学必愿繩武出塡嘗命工刊刻而未就適季温以臬事摂郡捐金命郡文学掾朱君貔孫継成之」と刊行の由来が述べられている。跋に云う如く本書は最初蜀で出版されたと云うが、その版本は今伝らず、淳祐年間史季温が捐金して福建路で開板したのが本版である。その板木は福州路儒学に伝えられ、元の大徳・至大元統に補刻が加えられ、明代さらに南監（明南雍経籍考著録）に板が移されて逓修印行された。

又　存巻四二・四三残葉　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒色表紙（三五・五×二一・五糎）。裏打補修が加えられ、粘葉装。錯簡落丁が多く、巻末に巻一三〇の第七葉が附綴されている。補刻は部分的な修補に止り、前掲本より刷印が早い。内閣残影著録。

本版はこの外に、静嘉堂文庫（陸志著録）・成簣堂旧蔵・京都大学人文科学研究所（存二六巻）・中央図書館（存三三巻）・北京図書館（配清鈔〈張志著録本か〉、存二五巻、存二四巻）・涵芬楼（涵録著録、存二二巻）・上海図書館・米国国会図書館蔵本・後掲の北平図書館原蔵本（存一三八巻、存一二五巻、存四四巻、旧京354―356著録）や瞿目瞿影・傳目・王記著録本がある。全て元修乃至明修本である。

＊四朝名臣言行録　存巻九―一一、続集存巻一―八、一三―一六、別集一六巻　不著撰人　〔南宋建〕刊　二四冊

昭仁殿原蔵。後補艶出代赭色表紙（二三・二×一四・七糎）。襯装。続集・別集各首に総目あり。欠巻の続集を完本と見せかける為に、正集の残巻巻九至十一の首尾大題の下に「続集」（墨囲陰刻）の印を捺し、巻十一を「十二」と加筆し、巻十一の第十二丁首の空欄に「四朝名臣言行録巻十二」と墨書、且つ版心の巻次にも加筆する等の妄作を弄している。続集目の第二丁を欠くが、故意に削除したのであろう。各本文巻首「四朝名臣言行録巻之幾」「四朝名臣言行録続集（或は別集）巻之幾」（別集は巻三以下「聖宗四朝名臣言行録別集巻第幾」）、次行低四格、伝人官銜及び姓名を「太常張公横渠先生」の如く題する。第三行小伝の起は低二格、輯録の言行は毎条首行頂格、次行の起は各条低一格。双辺（一九・五×一二・七糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「四朝（続四朝、或は別）幾（丁付）」、上象鼻に伝人名（別集はなし）、下象鼻に刻工名（正・別集はなし）、或は稀に大小字数あり。欠画は厳謹ではないが、貞慎惇敦の字末筆を欠く。即ち光宗に止って、寧宗以下に及ばない。刻工は、官正、正、官七、七、張全、全、張太、太、長、何文立、文立、葉太、葉廷、廷、葉卯、卯、葉、徳（或は陳か）、元、劉三、劉、李仁、虞元用、虞万全、游僧、僧、子尚、呉浩、呂琦、琦、呂珪、呂、江瑞、江八三、江三、高九十年。「蔡氏／家蔵」「沅叔／審定」印あり。本版は他に所蔵を聞かないが、北京図書館蔵四朝名臣言行録存四巻は同版か否か。故宮書影・昌識著録。

通行の「名臣言行録」は五朝・三朝の北宋の部分は朱熹撰、南渡後の四朝は宋末李幼武続輯で、現通行本は両書を合刻して前後続別外集合七十五巻に分つ。従来この本も李幼武撰と録されて来たが、昌彼得氏は最近この本は李幼武輯とは別の本たることを考証した（「跋宋建本四朝名臣言行録」、図書季刊「一巻二期、後「蟫菴蠹書題識」所収）。「郡斎読書志」附志には「十二朝名臣言行録七十二巻　右八朝朱文公所編也四朝乃後人所続者」と記されている。八朝廿四巻であるから、続は四十八巻となり、この本の三集各十六巻合四十八巻の巻数と合致し、この本亦編者を題署しない。従って昌氏は趙氏著録本は現行の李幼武本ではなく、この本に該当すると推定し、両書を比較した結果、

李幼武本顕然即拠此本重編、而異同尤多也。此本乃続朱子八朝而作、故体例多仿之。四朝者、指南渡後高孝光寧四朝。此書雖名四朝、而不尽南渡後之名臣、如続集中所載之張載、張商英、趙挺之、任伯雨、別集中所載之銭即等皆未入南宋、李幼武重編本亦然。此本所輯言行資料、多採自行述、行状、奏議、及雑説筆記等、率拠原文、並於其下註明出処。李幼武本則頗有删削裁併、故不載明出処。自著作之体而論、此本輯録稍濫、不如宋幼武本之略具翦裁、而自史料之価値言之、李本則不及此本之高也。復次、二本所収之人亦頗有異同。李本続集録廿九人、別集上下共録六十五人、外集録卅八人又附六人、共一百卅八人。此本就此残帙数之、共収七十六人、而幾有半数為李本所未録。

と述べて、論の末に両書各巻の所収伝人の出入異同表を附記した。

本書が理宗淳祐間に成った郡斎読書志附志に著録され、昌氏が指摘する如く本書は寧宗を今上と称しているから、本書は寧宗の世に編纂されたと思われる。本版の刊年はその欠画が厳謹でないので、それから推定することはできぬが、本書の成立欠筆から察しても寧宗後たるは明かである。刻工を考えれば、張全は慶元刊太平御覧（書陵部蔵）や太平寰宇記（書陵部蔵）、張太は寧宗頃刊東坡集（書陵部蔵）、文立は南宋前期刊白氏六帖事類集（天理蔵）・紹興刊王文公文集（書陵部蔵）・増広司馬温公全集（内閣文庫蔵）、李仁は南宋初刊元修愧郯録（静嘉堂蔵）、紹熙刊越刊八行本礼記正義（足利学校蔵）、劉三は銭唐韋先生文集（静嘉堂蔵）、呉浩は光宗刊尚書正義（書陵部蔵）・明州刊文選の宋修、陳元は明州刊文選の宋修・淳祐十年福州路刊国朝諸臣奏議・南宋中期浙刊晦庵先生文集にそれぐ〳〵同名の刻工が見られる。以上で見る限りでは大体南宋前期杭州地区の刻工が多いことになる。しかし同じ刻工名でも年代地域に相当出入があるから、同名異人ということも考えられる。従って刻工名からの刊年・刊地の推測は困難である。この本の版式字様から察する限りでは、昌氏の云う寧宗・理宗間の閩の坊刻本と見るべきであろう。

〔東萊先生十七史詳節〕存十種二六七巻　題宋呂祖謙編

〔元・建〕刊　九七冊

懋勤殿原蔵。後補藍色絹表紙（二二・二×一四・三糎）。金鑲玉装。原料紙縦一八・八糎。この叢書は史記から五代史に至る正史十種の節録本を一揃いにして宋末から元明にかけ建安麻沙の書店から販売され、俗に「東萊先生十七史詳節」と称される。現存本で多いのは明の建陽劉氏慎独斎刊本である。実質十種であるのに十七史と称するのは不可解であるが、宮内庁書陵部蔵の本版と同版のセット内の史記の巻首には「劉氏静得堂／重刊／十史書」と題する封面が附してある。此が元来の書名で、十七史というのは明代に入ってからの書肆の誇称であろう。東萊先生呂祖謙の輯録と題するのも、書估の託名増重たることは、瞿目が、「世伝為呂成公輯録本而公弟監倉子約所撰年譜不載又楼宣獻祠堂記詳言公所著亦不及此書其説実誤於明建陽慎独斎劉宏毅刻本概題東萊先生某史詳節此本於史記則曰東萊先生増入正義音註史記詳節於漢書則曰参附漢書三劉互注西漢詳節又曰諸儒校正西漢詳節於後漢書則曰諸儒校正東漢詳節餘皆曰東萊校正某書詳節其為書賈仮名以増重可知且漢書中雑附致堂胡氏之論即読史管見中語考致堂猶子大壮跋管見謂書成刻於嘉定十一年成公安得預見其書而採之耶又書中有互注及毎種前有世系紀年地里之図乃宋末時書肆所行纂図互注之本其非公所作明矣」と論ずる通りである。元以前刊の本叢書の揃いはこの本の外に、宮内庁書陵部・北京図書館（二部、一は瞿目著録、一は涵録著録本か）蔵本がある。本帙の所収各書は次の通りである。

東萊先生増入正義音註史記詳節　二〇巻　〔元〕刊　巻九以下配明刊本　八冊

首に三皇五帝譜系等の史図九種、次に「東萊先生増入正義音註史記詳節目録」あり。本文巻首、「東萊先生増入正義音註史記詳節巻之一上」、次行より第七行に低六格「集解　裴　駰／正義　張　守節／索隠　司馬　貞／補史　司馬　貞／古史　蘇轍／外紀　劉　恕」と題す。左右双辺（一五・七×九・五糎）有界十三行、行廿四字、注小字双行。上欄に綱目を標記、行二字。版心狭く細黒口双黒魚尾「史幾　（丁付）」。左上欄外の耳格に篇名巻次を記す。引用の人名書名は陰刻。巻一―八には元末明初の補刻が往々加わり、巻九以下は明前期刊の覆刻本を以て配補。匡恒貞桓構溝遘慎に欠筆あり、敦以下に欠筆を見ない。巻九の第九葉補写。本版は書陵部別蔵本（十七史合刻本に非ず）と覆刻の関係にあり、本版の方が後出であるから、書陵部蔵合刻本の本書の封面に「重刊」と標された所以であろう。

参附纂書三劉互註西漢詳節　三〇巻　〔元〕刊　一六冊

首に世系伝授之図・国都地理之図・諸家註釈名氏・諸儒校正西漢書節目録・西漢綱領（首二丁補写）あり。本文巻首「参附纂書三劉互註西漢詳節巻之一」（巻二以下「諸儒校正西漢詳節巻之幾」）と題す。左右双辺（一四・八×九・九糎）有界十四行、行廿一字、注小字双行。上欄綱目標記、行三字。巻中年代・年号・引書・章節簡目等は陰刻。版心線黒口双黒魚尾、「西幾（丁付）」。稀に上象鼻に大小字数あり、左上欄外に小題巻次を記す。匡恒禎貞勗購溝慎惇敦等に欠画があるが、郭等には及ば

ない。巻七以下は字様漸次元末明初の風を帯びる所が多く、巻七は特に粗。全体に早印にして美しい。劉影著録本は同版。

諸儒校正東漢詳節　三〇巻（欠巻二五以下）〔元末明初〕刊　九冊

首に東漢伝世之図及び目録（補写あり）あり。巻首「諸儒校正東漢詳節巻之一」、次行低五格「范曄」（下に第三行に亘り小字双注を附す）、第四行低五格「章懐太子賢」（下に第五行に亘り小字双注を附す）と題す。双辺（一五・七×一〇・四糎、左右双辺を混ゆ）有界十四行、行廿四字、注小字双行、上欄に綱目を標記、行三字。巻中年代・年号・引書・賛曰・互註・論曰等陰刻。版心線黒口双黒魚尾、「東節幾　（丁付）」。左上欄外の耳格に小題を記す。玄弦匡醐恒貞徴桓溝慎敦等欠筆、郭以下に及ばず。明初様の字様が極めて多い。巻九第十一・十三葉補写。巻により印面の美醜の差が甚しいので、取り合せ本のようである。「天台下丕／余氏恒斎／書籍印」「孟／挙」「周氏／子孫／保之」の蔵印あり。「孟挙」は清康熙の貢生で詩人の孟之振（字は孟挙）の蔵印。この本の刊年は他の僚本より降り、且つ蔵印も異るから、或は後の配補本か。劉影著録本は同版か。

東萊先生標註三国志詳節　二〇巻〔元〕刊　八冊

首に三国疆理之図・三国世系之図・三国紀年之図・上三国志註表、東萊先生標註三国志詳節目録あり。本文巻首「東萊先生標註三国志詳節巻之一」と題す。左右双辺（一五・七×一〇・三糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。上欄に綱目を標記、行二字。巻中年号・評曰等陰刻。版心線黒口双黒魚尾、「三国幾　（丁付）」。左上欄外の耳格に小題巻次葉次を記す。玄朗匡貞楨徴桓慎惇等欠筆。欠筆の外に宋諱を文に随って、殷を商に、弘を崇或は洪、匡を正或は止、胤を裔、恒を常、貞を正或は真、徴を召或は招或は詔、譲を遜或は責、署を事、樹を建或は植或は立或は木、完を全、桓文を斉晉、遘を結、慎を謹に改め、徴譲、克譲の二字、樹慎の宋諱の字を省去して避諱する所がある。巻一・二の上欄外は別紙を以て補襯、巻十七以下は後刷。内閣文庫・故宮博物院観海堂・中央図書館蔵本は同版。

東萊校正晉書詳節　三〇巻〔元〕刊　八冊

首に両晉世系之図・両晉地理之図及び東萊校正晉書詳節目録あり。本文巻首「東萊校正晉書詳節巻之一」と題す。双辺或は左右双辺（一五・七×一〇・五糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。上欄標記、行二字。巻中帝名・史臣曰・賛曰・制曰・年号・年代等陰刻。版心線黒口双黒魚尾、「晉節幾　（丁付）」。左上欄外耳格に小題を記す。玄匡恒禎徴譲桓構慎敦等欠筆。巻廿七以下後印。僅かながら字様粗なる所が混っている。

東萊先生校正南史詳節　二五巻〔元〕刊　一〇冊

首に南北国都地理之図・宋世系図・梁世系図及び東萊先生校正南史詳節目録あり。本文巻首「東萊先生校正南史詳節巻之一」（巻二は「校正」を「点校」に作る）、次行低一格「宋本紀（隔六格）唐　李　延寿」と題す。左右双辺（一六×一〇・四糎）有界十四行、行廿四字。上欄標記行二字。巻中年代・年号・賛曰・

引書名等陰刻。版心線黒口双黒魚尾「南史（或は南）幾　（丁付）」。左上欄外耳格に小題を記す。玄匡恒貞徴桓構購惇敦廖等欠筆。印面比較的美しいが、後に行くにつれて字様が粗となり、明風を帯びる。盠影著録本は同版の如し。

東萊先生校正北史詳節　二八巻〔元〕刊　一〇冊

首に後魏世系図・北斉世系図及び東萊先生校正北史詳節目録あり。本文巻首「東萊先生校正北史詳節巻之一」（巻十四は「校正」を「点校」に作る）と題す。左右双辺（一五×一〇・四糎）有界十四行、行廿四字。巻中帝号・年代等を陰刻。上欄標記行二字。版心線黒口双黒魚尾「北幾　（丁付）」。左上欄外耳格小題を記す。玄朗恒禎貞徴桓構購慎惇等欠筆。後半字様次第に粗になる。巻廿二の第七丁より巻廿四の第四丁まで版心より上端にかけての部分的の補写、巻廿八後半に抄配がある。

東萊先生校正隋書詳節　二〇巻〔元〕刊　四冊

首に隋世系之図・隋地理之図及び東萊先生校正隋書詳節目録あり。本文巻首「東萊先生校正隋書詳節巻之一」、次行「帝紀（隔十格）唐特進魏　徵　撰」（但し巻二の第二行の署題は「唐趙□公長孫無忌撰」）と題す。左右双辺（一六×一〇・四糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。巻中年号・年代・引書名等は陰刻。上欄標記行二字。版心線黒口双黒魚尾「隋幾　（丁付）」。左上欄外耳格に小題を記す。玄朗匡恒貞徴勗慎敦等欠筆。他に比し字様雕刀粗にして、やゝ後印。「天台下丕／余氏恒斎／書籍印」の印あり。劉影著録十七史詳節本と同版。劉影著録の宋刊「名公増修標註隋書詳節」（十行）とは字様相似。

諸儒校正唐書詳節　六〇巻〔元〕刊　二〇冊

首に嘉祐五年曾公亮の進新唐書表、進新唐書釈音序、高祖開基図等の諸図六種、諸儒校正唐書詳節目録あり。本文巻首「諸儒校正唐書詳節巻之一」、次行低二格「帝紀（隔七格）欧陽　脩　奉勅撰」と題す。但し第二行の撰者題は巻七を除く他巻は「宋祁奉勅撰」と題し、巻四の尾題は「諸儒校正増注唐書詳節巻之四」と。左右双辺（一五・八×一〇・三糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。巻中年号・年代・賛曰・互註は別行陰刻とし、音訓・引語は墨囲標出。上欄標記行三字。版心細黒口双黒魚尾、「唐幾　（丁付）」。左上欄外耳格に小題・巻次・丁次を記す。玄朗匡恒貞慎敦燉等欠画。印面に漫漶の所と比較的美しい所とむらがあり、字様雕刀概ね粗である。「周氏／子孫／保之」の印あり。

東萊校正五代史詳節　一〇巻〔元〕刊〔明〕修　四冊

首に陳師錫の五代史記序、五代分拠地理之図等の諸図、東萊校正五代史詳節目録あり。本文巻首「東萊校正五代史詳節巻之一」、次行低十二格「欧陽　脩　撰」、第三行低十三格「徐　無党　註」と題す。左右双辺（一五・六×一〇・五糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。巻中帝号・年号・年代等陰刻。上欄標記行二字。版心線黒口双黒魚尾、「五代幾　（丁付）」。左上欄外耳格に小題を記す。匡貞勗桓敦燉等欠筆。書陵部別蔵本・内閣文庫蔵本は同版。

以上十種、全体として字様はほゞ宋麻沙本風で、厳謹ではないが宋諱に欠筆が見られ、巻を下るにしたがって、字様が明初風となり粗雑に流れる。諸家目或は宋刊とし或は元刊となす。涵録は「諸家蔵目。或云宋刊。或称元刻。惟宋諱玄匡恒貞徴桓慎惇敦等字。多作闕筆。且字体鐫工。実有宋時風格。全書多至二百餘巻。雕板需時。殆経始於天水末年。而告成於易代後也。」と云う。しかし、書陵部蔵史記詳節、劉影著録隋書詳節の如き明かに宋建刊本と目し得る先行の版と比較するに、概ね覆宋版と見るべきであろう。毎本天禄各璽印あり、天目続四・呉志著録。

諸儒校正唐書詳節　六〇巻　〔元〕刊　二四冊

昭仁殿原蔵。後補藍色表紙（二〇・七×一二・八糎）。裏打補修が加えらる。首の諸図が目録の次にある外、前掲本に等しい同版本。同様に刷りの比較的良い所と悪い所とが混在しているが、この方が平均してやゝよい。天禄各璽印あり。呉志著録。

新編方輿勝覧　七〇巻目一巻（欠巻一五―三〇）　宋祝穆撰　〔宋末元初間・建〕刊〔後修〕　二〇冊

昭仁殿原蔵。後補黄色表紙（二一・五×一四・三糎）、襯装。首に嘉熙己亥良月望日新安呂午の方輿勝覧序、嘉熙己亥仲冬既望建安祝穆和父書の自序（両序配影鈔）次に新編方輿勝覧目録（配鈔多く、原葉は存十三丁）あり。本文首「新編方輿勝覧巻之一」、次行低九格「建安祝穆和父編」と題する。左右双辺間双辺（一七・二×一一・三糎）有界十四行、小字行廿三字。事要標出は大書両行に跨り、行十四字内外。版心線黒口双黒魚尾「方幾（丁付）」。左欄外上に耳格あり、府州軍名を題す。朗匡筐涯頲貞禎楨偵頼桓完構慎惇敦筠に間々欠筆があるが、避諱は厳謹ではなく不定。序目の外に巻卅七第三―一〇、一三・一四葉抄配。「王鳴／盛印」「西荘／居士」の印、清王鳴盛旧儲。呉志著録。

本書の撰編は登臨題詩者の便に供するのが主意で、作詩文用の地誌で、実質は類書である。我が国では室町時代盛に愛用されたので、我が国には比較的伝本が多い。書陵部蔵「新編四六必用方輿勝覧」が祝穆原撰の嘉熙刊本と思われ、本版には後人の改修の加っていることは、楊守敬が「此本標題於浙西之厳州改称建徳府浙東路之温州改称瑞安府広西路之宜州改称慶遠府夔州路之忠州改称咸淳府按和父自序書成于嘉熙己亥而改厳温宜忠等州為府在咸淳元年相去三十六年其為後人改編可知書中亦多所増添非祝氏之旧然其所増亦皆拠方志旧記編入猶有知識者所為不似坊賈之驫乱妄作故亦可貴」（楊志）と指摘する通りである。書陵部（三部）・静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・尊経閣文庫・陽明文庫（二部）・蓬左文庫・故宮博物院楊氏観海堂（森志・楊志著録）・国立中央図書館蔵本はいずれもこの本と同版である。北京図書館蔵本（三部、一は瞿目・瞿影著録本か）・丁志盦影・鄧後目・繆記・莫跋著録本も同版か。故宮博物院・中央図書館の両目録・呉哲夫氏は本版を宋咸淳三年建安祝氏刊と著録する

が本版には咸淳跋乃至刊記がなく、天目その他著録の咸淳刊本と行格を同じくする所から、同版と速断したらしく、本版はそれによる後出の重刊であろう。咸淳刊本は「北京図書館善本書目」に「宋咸淳三年呉堅劉震孫刻本」と著録され、涵録・楊録・王記著刻本もこの咸淳三年刊本のようである。その咸淳三年の祝穆の子洙の跋に、天目の引用によれば、「先君子方輿勝覧行於世者三十餘年版老字漫遺工新之重整凡例分為七十巻又云元本拾遺各入本州之下新増五百餘条並標出」と云う。嘉熙原刊本を七十巻に改め、巻中の記事にも改補を加えたのは子の祝洙である。本版の字様が宋末麻沙本のそれで、宋朝に関する語の上一格を空け、闕筆があるので、従来宋建刊本とされている。しかし咸淳三年は南宋の滅亡に溯ること僅か十二年前で、本版は咸淳刊本を覆刻せる元刊と考えたい。未だ咸淳刊本と比較するを得ないので後考を俟つ。また王記には「元刻本巻首有日新堂新刊五字木記」なる本を著録する。この本と同版なりや否や。本版は明前期頃まで板木が伝わり、印行が行われたと見え、伝存本中には印面の漫漶甚しきものがあり、また記事中に間々本により小異が見られ、後修の痕を残している。この本は故宮博物院楊氏観海堂本等に比し後印に属し、後修が加っている。

聖朝混一方輿勝覧（新編事文類聚翰墨全書后乙集）　三巻　元劉応李編〔明正統元年〕刊　九冊

景陽宮原蔵。後補白地金切箔散し表紙。裏打補修あり。首に目録を冠する。目録の巻首大題はもと「新編事文類聚」（跨行）とあったのを、「新編」の二字を残し、「事文類聚」の四字以下を切りとって、別紙を裏より貼って、「方輿勝覧」と墨書する。本文巻首「聖朝混一方輿勝覧巻上」（跨行）と題す。此は元来この題下に「后乙集」の墨囲陰刻の三字が印してあったのを切って別紙を裏より貼り、「李滄葦／蔵書之印」の偽印をおしてある。即ちこの本は元来「新編事文類聚翰墨全書」の后乙集であるのを、右の如き奸策を弄して、単行本の如く偽装したのである。双辺（一五・一×一〇糎）有界十二行、行廿字。版心線黒口双黒魚尾、「方上（中・下）（丁付）」。故宮書影著録。

この本従来元建陽書坊刊とされているが、故宮博物院楊氏観海堂蔵元刊新編事文類聚翰墨全書に配補された明前期刊本や米沢市立図書館・大東急記念文庫・中央図書館（明初葉建刊巾箱本と著録）蔵本と同版である。米沢市立図書館本には序の後に「正統元年丙辰／善敬書堂新刊」の双辺木記がある。この版は後掲の故宮博物院蔵〔明正統十一年〕刊新編事文類聚翰墨全書と忠実な覆刻の関係にあり、この本の方が先行か。共に元建刊本の覆刻である。

宣和奉使高麗図経　四〇巻　宋徐兢撰　宋乾道三年跋刊（徐蔵・江陰澂江郡斎）〔宋末〕修　三冊

昭仁殿原蔵。後補藍色絹表紙（二四・八×一五・六糎）。裏打補修が加えらる。首に、宣和六年八月日自序の「宣和奉使高麗図経序」（「宣和奉使」の四字埋木による補刻、第二・三行低二格、「奉議郎充奉使高麗国信所提轄人船／礼物賜緋魚袋臣徐　兢

撰」と題署）及び「宣和奉使高麗図経目録」あり。本文巻首「宣和奉使高麗図経巻第一」と題す。巻末に、「乾道三年四月初十日左迪功郎寧国／府宣城県主簿主管学事張孝伯　状」と署する「宋故尚郎刑部員外郎徐公行状」（〔宋〕の一字埋木による補刻）、末に「乾道三季夏至日左朝奉郎権発遣江陰軍主管学事徐𢧵書」と署する刻書跋がある。左右双辺（一八・六×一二糎）有界九行、行十七字。版心白口単黒魚尾、「経幾　（丁付）」、下象鼻に、黄康、沈忻、毛福音?、陸栄、六栄、徐益、裘挙、徐亮、王等の刻工名がある。巻中の宋諱の欠筆は驚蟄に間々見られる外ないが、文中構字を「太上御名」、慎・眷の字を「今上御名」と注する。少しく全葉の補刻とかなりの部分的な補刻とが混り、その修は宋末か。巻二の第四葉、巻八の第五・六葉、巻廿六の第三葉、巻卅九の第三・四葉は補写。天禄各璽印、「虞山銭曾／遵王蔵書」印あり。述古堂書目・読書敏求記・天目続四・故宮書影著録。天禄琳瑯叢書に影印さる。

巻末の著者の甥徐蔵の跋に刊刻の由来を述べて曰く、「仲父既以書上御府其副蔵家靖康丁未春里人徐周賓乞観未帰而寇至失書所在後十季家君漕江西弭節于洪仲父来省或謂郡有北医上官生実獲此書亟訪之其無恙者特海道二巻耳仲父嘗為蔵言世伝余書往往図亡而経存余追画之無難也然不果就嘻蓋棺事乃已矣姑刻是留徴江郡斎来者尚有考焉」と。本版による重鈔本は伝存するが、この宋槧本は天壌間の孤本である。

＊増入諸儒議論杜氏通典詳節　四二巻（欠序目・巻三―五、七―一三、二八―三〇、三五・三六、四二）　不著編人〔元末明初間・建〕刊〔明〕印　一二冊

昭仁殿原蔵。後補金切箔散し紺色表紙（二二・九×一六・三糎）。襯装。序目を欠く。本文巻首「増入諸儒議論杜氏通典詳節巻一」と題す。巻六以下は「増入」を「新入」に作り、尾題亦巻十九・廿を徐き「新入」に作る。左右双辺（一八・二×一二・三糎）有界十四行、行廿三字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「典幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数あり（稀に下象鼻に）。かなり後刷。巻十四第四葉、巻卅一第十・十一葉欠。天禄各璽印、「尚宝少／卿袁氏／忠徹印」「事守／堂印」「苕東／沈氏」の印あり。天目続四に二函二十冊宋版として著録。もと完本であったらしい。

四庫未収。杜佑通典の文を摘録し、宋諸家の論を各巻末に附する。編者名を録さぬが、附記の諸儒の論は欧陽修以下葉適に至る廿一家で、巻中「大宋」と見えるから、南宋人の編にかゝり、科挙応用の書である。後掲の北平図書館原蔵本と同版。詳細はその条の解説参照。

文献通考　三四八巻　元馬端臨撰　元泰定元年刊（西湖書院）〔元後至元五年〕（〔余謙〕）〔明〕遞修　六〇冊

昭仁殿原蔵。後補紺色地花卉文様表紙（二三・五×二二・一糎）。首に至大戊申七月既望鄱陽公門下士李謹思の序、「文献通考」と題し、次行低八格「鄱陽　馬　端臨　貴与　著」と署する自序、次に「文献通考目録」あり。巻末に延祐六年四月王寿

衍の「進文献通考表」を附す（この上表他の諸本多く自序の次にあり）を附す。この本は首目中の、至治二年六月抄白（饒州路総管府准江浙行中省劄付下楽平州刊印通攷指揮）及び目録後の至元又五年三月朔江浙等処儒学提挙余謙叙記の修補書版跋を欠いている。本文巻首「文献通考巻之一」、次行低十二格、「鄱陽　馬　端臨　貴与　著」、第三行低四格、「田賦考」と題す。左右双辺（二六×一八・一糎）有界十三行、行廿六字、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「文献通考巻幾　（丁付）」、間々上象鼻に大小字数（稀に下象鼻に）、下象鼻に刻工名あり。全葉の補刻の外に部分的の修補が多く、明修は匡郭及び版心の線が太くなり、粗黒口もある。版心の弘治等の補刻年が剜去され、特に巻一二―一六の如きは上象鼻を切りとった痕が甚だ多い。また魚尾に刻工名が陰刻されたところもあり、巻十三の巻末葉には「監生桂経録」とある。刻工名は、一周、一清、以方、于平、袁子、袁子寧、王続卿、王六、王子仁、王正、王寿、王森、王元亨、元亨、王富二、王祥観、祥観、王徳明、王古、王士亨、翁子和、応華、何建、建、何宗、何庚、何慶、可原、可川、金華甫、華甫、介庚、宜甫、丘安、許成、虞寿、虞保山、虞保、元玉、元吉、元仁、阮寧、阮仁、倪平山、平山、顕之、胡君仲、胡秀卿、秀卿、君仲、雇恭、古賢、古之、高顕、高顕祖、黄四崇、黄成、江子名、杭宗、亢乂、亢宗文、宗文、蔡彦挙、山番、四本、子堅、子華、子仁、子明、施遠、朱長二、朱仁、朱明、朱元、周受、周福二、周明、周東山、周秀、周鼎、周顕、徐阿狗、徐明、徐徳、徐徳一、徐徳フ、徐良、蔣茂之?、章才、章張、章宇、小唐三、汝敬、汝震、汝虎、汝応□、仁甫、正之、青之、清陳、世通、薛志良?、詹仲亨、仲亨、曹新、智祥、張広祖、張顕、張四、張成、張明、張君用、張用、張名遠、趙徳明、趙秀、趙海、沈子英、陳文、陳文貴、陳士通、陳徳全、陳栄、陳子成、陳子、陳子仁、陳敬、陳大用、大用、用、陳義、鄭埜、鄭子和、鄭国、唐三、湯景、湯、屠明通、陶亨、匂中、匂瑞、任実、范寿、范双評、潘茂、茂、繆太亨、繆謙、繆士元、文甫、文炳、文方?、傅茂、付茂、付善可、茅公甫、茅甫、茂之、余彦文、葉□栄、葉就、楊景仁、楊三、用之、羅恕、李寿、李徳裕、李庚、李璋、劉子□、劉子明、梁元、梁士元、林伯福、林茂実、林茂叔、禾尸、和卿、ア之、メ本、何、徐、寿、亨、周、本、翁、宜、義、ネ、亢、琇、方、ア、和、升、華、仲、中、阮、汪、福、耑、合、朱、潘、山、秀、才、埜、栄、兆、斉、今、之、瑞、者、汪、麦、元、回、舟、呉、倪、月、彬、章、范、可、通、大、張、顕、成、万、茅、蔣、子、甫、匂、陶、文、智、弓、唐、庚、刀、施、茂、堯、祥、鄭、屠、于、陳、互、庄、王、建、保、壬、公、応、孫、東、陳、沈、肖、禹、芦、徳、季、林、授、梁、宗、圭、仁、云、進、七、褚、友、恢、辛、彳、呈、台、寸、阿、良、馬、崔、呆、春等。巻七の第二二葉、巻十九の第一九―二一葉補写。天禄各璽印あり。天目続九著録。

本版は、至治二年饒州路総管の命により、江浙省が泰定元年

刊刻をなして板を西湖書院に置いた。その後逸版或は譌脱があるので、江浙等処儒学提挙余謙が主となって、端臨の壻楊玄に命じ、端臨の嗣志仁からその原稾を得て、西湖山長方員等と校訂をなし、至元五年補刊の業を畢えた。明に入ってその板木は南監に移され、成化十年・弘治元年等に遞修印行され、現存本の殆どは明修本である。明南雍経籍考に「文献通考三百四十八巻（旧板多損壞模糊共雙面板七百四十一塊）」と記されている。本版は他に後掲の北平図書館原蔵（残本二部）、書陵部（以下全て明修）・静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・中央図書館（適志著録、外に残本傳目著録）・北京図書館（瞿目・中版録著録）・上海図書館・南京図書館（丁志盎影著録）に架蔵され、また劉影・葉志・潘記・莫編著録本等がある。

又　存巻六八・六九　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒色表紙（四三・八×三七・七糎）。粘葉装。巻六八は第十五葉以下、巻六九は首廿一葉を存する零巻。明修が入らず、印面が美しい。

大元聖国朝典章　六〇巻附大元聖政典章新集至治条例不分巻　元闕名者編〔元延祐七年・至治二年〕刊（〔建陽書坊〕）　四〇冊

斉宮原蔵。後補茶色金切箔散し表紙（二三・三×一五糎）、襯装。首に、「大元聖国朝典章綱目」（跨行、綱目題の次に大徳七年中書省劄節文七行の木記を掲ぐ）、次に「大元聖政国朝典章目録」あり。本文巻首「詔令巻之一（隔大字五格）典章一」（跨行）、次行「世祖聖徳神功文武皇帝」と題す。かくの如く以下毎巻上に小題、下に大題あり、次行低大字二格門目を題し、皆跨行。尾題なし。新集至治条例は、首に、「大元聖政典章新集至治条例綱目」（跨行）及び「大元聖政典章新集至治条例大全目録」あり。綱目首題の次に「大元聖政典章自中統建元至延祐四／年所降条画析行四方已有年矣欽惟／皇朝（この二字頂二格）政令誕新朝綱大振省台院部恪遵成／典今謹自至治新元以迄今日頒降／条画及前所未刊新例類聚梓行使官／有成規民無犯法其於政治豈小補云」の六行の木記をおき、目録の末、目録尾題の前に、「至治二年以後新例候有／頒降随類編入梓行不以／刻板已成而靳於附益也／　至治二年六月日謹咨」の四行の刊語が刻さる。本文巻首、「大元聖政典章新集至治条例」（跨行）、次行低大字七格「至治二年新集」（墨囲陰刻）、第三行「国典」（魚尾様墨蓋を冠す）、第四行「詔令」と題す。尾題なし。左右双辺（一九・六×一二・九糎、首目は四周双辺）有界十八行、行廿八字、注小字。毎門所載条格標目は墨地白文。版心細黒口双黒魚尾、「典章詔（即ち綱目名）（丁付）」、間々中縫或は象鼻に大小字数あり。新集条例は左右双辺（一九・一×一二・六糎）有界十九行、行卅字。版心細黒口双黒魚尾、中縫殆ど墨釘にして、下魚尾下に丁付間々綱目名がある。巻中所々に条例に関する補充追記の書入がなされ、巻末に「都省通例」を書写せる九丁の附綴があり、また最巻末末葉の前の丁の餘白に「至治癸亥仲春」の墨筆識語がある。巻中の書入とこの附綴筆蹟はほゞ同筆と見ら

れ、また至治の識語も恐らくは同一人の書と思われる。巻二八第三葉、巻三八第四葉、新集条例田宅門第三・四葉、刑制第二葉欠丁。「汲古／主人」「毛氏／子晋」「毛晋／私印」「子」「晋」「宇」「沅叔／審定」の印あり。毛氏汲古閣の旧物。故宮書影・故宮選萃・昌識著録。昨民国六十一年故宮博物院より影印本（蔣復璁序・昌彼得跋）刊行さる。

本書については、影印本に附された昌彼得氏跋の解題（同文「故宮図書季刊」三巻三期にも収）に詳かである。氏は本典章の所載は延祐六年以前に止り、延祐七年の各条は補刻となっているから、その編輯は延祐年間、吏胥の鈔記になり、官修に非ずして、本版の形に実際に編したのは坊賈の手になるものとなし、本版刊雕の時地について、

張允亮氏所編故宮善本書目、考訂此本題為元至治二年建陽坊刻、民国五十六年本院出版之存台善本書目即従之。今観此刻版式字体、其為建陽坊刻無疑、而刊年則尚有可議者。按此本前集典章与新集条例版式雖同、而行款則異、字体亦微有不同、以前集稍精、顕非同時刊版。拠新集条例綱目前木記、謂元典章類集自中統至延祐四年所頒降条画、且云板行四方已有年、当是延祐五年以後付雕。検此本所載已下逮於延祐七年十一月、惟察所載延祐七年之条格、外係増補刊入。其顕見者、如巻二聖政一、其第十四葉重出、蓋於撫軍士一目下増刊延祐七年三月及十一月両条所致。又如巻三十六兵部三第二十・二十一両葉間多出一葉、蓋増刊延祐七年十一月遠方病故官属回遠脚力一条所致。尤顕然者、巻一詔令類仁宗皇帝之標題一行闕文。其所以致此致此者、殆原題今上皇帝、及刻成時英宗已即位、遂増英宗今上皇帝一門、而将原題仁宗為今上皇帝標題一行剗去、未及補刻謚号故成空白也。由是証之、元典章之刊版、当始事於延祐五年、而成書於延祐七年底英宗登基以後也。至若新集条例則為二年六月始刊版、但依門目為次第而無総葉次者、蓋便於以後随時増補、不致如前集之葉次重出。覘此本尚非初印、而其中尚未増入至治二年六月以後格例者、当係逾年大元通制修成頒行、而此書遂廃矣。至若沈跋所謂書中有至治三年事例、係指刑部騙奪門持杖白書搶奪同強盗条、此元刻作二年、及其所蔵鈔本誤二為三之謬、未足以為拠也。

と。以て従うべきである。本版は他に所在なく、たゞ清鈔本が張氏・瞿氏・陸氏・丁氏・繆氏・東莞莫氏等に伝わるが、昌氏によれば、悉く祖をこの本に発すと云う。たゞ転々伝鈔の間訛脱が頗る多い。光緒卅四年董氏が丁氏蔵本によって刊し、沈家本がその校をなした。しかし沈本は脱誤が多く、民国廿年陳垣が、この元刻本及び他の鈔本を用いて沈本を校勘し、「沈刻元典章校補」を刊したので、漸く読むことが可能となった。本書所収の法文は唐律に見る如き洗練された法規ではないので、却って元代法制の実生活面を示す原資料として尊重されるばかりでなく、文中に多くの方言俗語が包含されているので、元代言語資料としても注目されている。従って本版の今回の影印は学界多年の渇望を満するものである。

昭徳先生郡斎読書志　五巻（巻五附志上下）後志二巻
宋晁公武撰　趙希弁続附編　宋淳祐刊（黎安朝・袁州）
〔宋末元初間〕修　五冊

昭仁殿原蔵。後補紺表紙（三四・二×二二糎）。所々裏打修補あり。首に「昭徳先生郡斎読書志序」（次行低四格「門人承議郎新奏辟通判茂州軍州事賜緋杜鵬挙序」と題す）、「昭徳先生郡斎読書志巻第一上」、巻五は公武序あり。本文巻首「昭徳先生郡斎読書志巻第五上」、巻五は巻首三行に亘り、「昭徳先生読書志巻第五上／（低一格）附志／（低三格）江西漕貢進士秘書省校勘書籍趙希弁」と題す。巻五尾題の次に版下書刻工名に関する「書表司劉瑜等楷書／刊字匠黄応等刊板」の二行が刻され、巻末に淳祐己酉日南至宜春郡仮守番陽黎安朝謹書の跋を附する。後志は巻首に、淳祐庚戌日南至江西漕貢進士秘書省校勘書籍趙希弁謹序の「昭徳先生読書後志序」、紹興二十一年元日昭徳晁公武序の「衢本昭徳先生郡斎読書志自序」（「衢本」の二字入木後補）、「衢本昭徳先生郡斎読書志目録」（次行低九格「門人姚応績編」と署す）があり、本文巻首「昭徳先生読書後志第一巻」と題する。巻末に「二本四巻考異」、淳祐庚戌小至二日番陽黎安朝謹識、並に淳祐己酉夏五郡守南充游鈞書の両跋が附されている。左右双辺（二二×一六・九糎）有界十行、行廿字。版心白口双黒魚尾、「志幾上（「附志五上」「読書後志一」）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、大慶、章大慶、章、文友、文、友、文質、質、文賢、賢、陸逸、陸、逸、黄大寿、大寿、寿、黄応、応、黄、黄明道、明道、明、羅応、羅、張大雅、張、余、禹、辛、何、夏、干、仁孫の刻工名がある。避諱は必しも厳謹ではないが、玄炫鉉郎弘殷匡禎貞徵譲勗桓瑗烜慎惇敦廓に欠筆が見られ、廓は間々欠くが、郭は欠画をしない。欠筆のある字を往々墨筆で末画を補ってあるが、四部叢刊の影印にはその補筆を剜去してある。太祖等の宋朝に関する語の多くは上一格を空ける。往々部分的修補の加った葉を混え、附志上の第一葉（刻工名「礼」）・十一葉（刻工名なし）、同下第六葉（刻工名「礼」）第十葉（刻工名なし）の如きは字様他と大に異る全葉の修補で、宋末元初間の後修であろう。「東宮／書府」「蒼／巌／子」（円形）「観其／大略」（陰刻）、後志にのみ「蕉林／蔵書」の蔵印、巻末に「沅叔／審定」の印記あり。故宮書影・故宮選粋・呉志著録。

本書には蜀中の原刊本があったというが、夙に伝わらず、今本に衢本・袁本の二種がある。淳祐九年衢州信安郡の郡守游鈞が、蜀に行われた晁の門人姚応績の編になる廿巻本を刊行したのを衢本と云う。淳祐の刊本は失われ、清初鈔本のみ伝えられた。本版は袁本と称され、上記の序跋によれば、淳祐九年、袁州宜春郡（江西省）の仮守黎安朝が、郡内在住の趙希弁に属して校正せしめ、希弁はその校正に用いた家蔵本について附志を作ったので、晁氏の四巻に益して五巻と為して、之を郡斎に刊した。ついで衢本廿巻を得たので、比較してその増入の四百三十五部を摘取して、末に二本四巻考異を附し読書後志二巻として続刊した。袁本の宋刊も久しく沈埋していたが、康熙中海

寧の陳師曾が旧鈔本を得て上梓した。爾来袁衢両本優劣の論争が続いたが、民国に入り、故宮博物院よりこの宋刊本が発見され、四部叢刊・続古逸叢書・万有文庫に影印されて広く流布した。この本出でて陳氏刊本は子部に錯簡のあることが判明し、袁本を以て不完本となす冤はそそがれた。この本が後来の転写本に勝ること迥隔たるは言うまでもなく、張菊生をして、「袁本出而衢本可廃矣」（四部叢刊本の跋）と言わしめるに至った。しかし両本互に出入あり、袁本の記事は衢本に比しやゝ簡略、一概に衢本を偏廃すべきではない。

致堂読史管見　三〇巻　宋胡寅撰　宋宝祐二年刊（江南宛陵郡斎）〔元・明〕遞修　三〇冊

養心殿原蔵、宛委別蔵阮元採進本。後補藍色絹表紙（二四・二×一七・二糎）。襯装。首に嘉定著擁揆提格日南至猶子大壮謹序の「読史管見序」あり。巻末に宝祐二年閏六月壬辰の劉震孫の跋を附す。本文巻首「致堂読史管見巻第一」、次行低五格「威烈王（隔五格）周紀」と題す。左右双辺（一九・八×一四糎）有界十二行、行廿三字。版心白口双黒魚尾、「管見巻第幾（或は巻幾）（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。明修には粗黒口の葉が混る。欠画は厳謹ではなく、玄朗匡筐恒貞楨徵樹譲勗煦桓構慎敦に間々欠筆を見るが、郭廓等の寧宗の諱は避けていない。巻中少しく補写を混え、また元修や字様より察して明の成化弘治頃の修補の葉が存し、版心の補刊年があったと思われる所が剜去されている。原刻及び元修と思われる箇所にも往々明の部分的修補が加っている。中央図書館本よりは前の刷りのようで、彼の補刻の葉が此は部分的修の加った原刻の所がある。刻工名は、張詮、詮、張、長、蔡文生、文生、文、范文、范、金通、金、金水、水、劉森、森、劉元吉、元吉、元、劉君叟、君、劉拱、拱、共、劉、宋平、潘永季、永季、永、潘康季、康季、康、潘、尤必成、必成、必、尤逵、逵、垔、尤迁、迁、尤涇、涇、尤、曹文仲、文仲、仲、曹乂、仅、陳秀、秀、陳、東、汪思中、思中、中、汪宜、王宜中、宜中、王宜忠、宜、王杞、杞、王桂、桂、王鼎、鼎、王、楊思成、思、楊、危文、程成、成、呉宣甫、呉、趙清茂、趙、鍾季升、季升、鐘、改、山、慶、才、京、誘、新、甫、木。駱、包は元修か。黄还郎（巻十二の第廿一丁）は明の補刻であろう。「子／周」の蔵印あり。

紹興廿五年本書の稿成ってより、宋刊本に三種あり。一は孫の胡大正が淳熙九年温陵に刊せる八十巻本、金沢文庫旧蔵小汀家・静嘉堂文庫（陸志陸跋著録）蔵本あり。次で嘉定十一年衡陽郡守孫徳興が八十巻を併せて三十巻となして、衡陽郡斎に刊し、猶子大壮の序を附した。北京図書館蔵本あり。第三は本版で、震孫の跋に「震孫服膺是書有年矣毎惜江浙間独欠此本仮守宛陵公餘加讎校迺刻寘郡斎」と述べる如く、宝祐二年劉震孫が嘉定刊本を宛陵郡斎に於て重刊したものである。本版の刻工が宝祐五年湖州刊資治通鑑紀事本末や淳祐十二年徽州刊儀礼要義等と共通しているものがあることは、本版が宝祐年間の刊にな

ることを裏書している。同版本に後掲の北平図書館原蔵本やお茶の水図書館（欠巻二七・二八明成化修、成賓堂文庫旧蔵）・中央図書館（明修）・涵芬楼（配補嘉定刊本、他に存巻二六―三〇、涵録著録）蔵本・王記著録本がある。後掲の如く、本版には元の覆刻本があり、往々本版と誤認される。上海図書館蔵本（残本）や鄧目（存七巻）・傅目（存巻二〇・二四）著録本はどの版か未詳。陸跋によれば、「姚牧庵集有此書序謂宋時江南宣郡有刊板版入元版帰興文署学官劉安重刊之」と。宣郡は宛陵の別称で、劉安の重刊は本版の修補印行を指すのか、元の覆刻本に当るか明かでないが、この本の如く現存本の殆どが元明修本であり、板が入ったのに新に全部を覆刻するわけがないから、本版の修補を指すものであろう。明に入って、板木は南監に移ったらしく、明南雍経籍考に「読史管見三十巻脱者一百餘面存者九百零九面」と記されている。第一次刻の八十巻本とこの三十巻本とは、単に分巻の差のみならず、内容及び次序に大なる差異がある。

子　部

纂図互註荀子　二〇巻　唐楊倞注　〔宋末元初間・建〕刊〔元・明〕遞修　八冊

景陽宮原蔵。後補藍色絹表紙（二二・八×一四・二糎）。首に楊倞序、荀子篇目、荀子欹器之図・天子大路図・龍旗九旂図あり。本文巻首「纂図互註荀子巻第一」、次行低八格「唐大理評事楊　倞　註」（巻二以下この題署なし）と題す。左右双辺（一八×一一・六糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行、行廿五字。重意等の標識陰刻。版心線黒口双黒魚尾、「荀幾　（丁付）」。一ケ所上象鼻に大小字数あり。所々左上欄外に耳格あり、篇名、間々巻次丁次を記す。欠画は厳謹ではないが、恒徴桓慎敦等の字に見られる。印面頗る漫漶の原刻と明初に及ぶ補刻の葉とが混合している。「兼牧／堂書／画記」「謙牧／堂蔵／書記」「蘭斎」「蘭白／斎」等の印あり。天目続五著録。

麻沙本纂図互註六子全書の一で、内閣文庫蔵・北平図書館原蔵（旧京著録、台湾に移管されず）元刊本は本版の覆刻で、この覆刻は明にも引き続き、その明版が往々宋或は元槧と誤認されている。北京図書館蔵本（潘録著録）或は本版と同版か。

纂図互註揚子法言　一〇巻　漢揚雄撰　晉李軌・唐柳宗元注　宋宋咸・呉秘・司馬光重添注　〔明前期〕刊（〔建安書坊〕）覆元刊本　一冊

体順堂原蔵。後補桃色金切箔散し表紙。首に景祐三年宋咸の重広註揚子法言序、次に後記の刊語木記、次に景祐四年宋咸の進重広註揚子法言表、次に元豊四年司馬光の司馬温公註揚子序、次に篇目及び揚図（渾儀図・五声十二律図）あり。本文巻首「纂図互註揚子法言巻第一」、第二・三行低二格「晉李軌唐柳宗元註／聖宋宋咸　呉秘　司馬光重添註」と題し、尾題は「揚子法言巻第幾」と。左右双辺（一八×一一・六糎）有界十一行、行廿一字内外、注文小字双行廿五字。版心粗黒口双黒魚尾、「揚幾（王幾）（丁付）」。左上欄外に耳格あり、篇名を題記、欠く

所もある。宋咸の序後（裏の葉）にある双辺木記の刊語に曰く、

本宅今将　監本　四／子纂図互註附入重言重／意精加校正茲無訛繆謄／作大字刊行務令学者得／以参考互相発明誠為益／之大也建安　謹咨

と。本版は宮内庁書陵部蔵元刊本の覆刻で、その元版も南宋建安書坊刊本（北京図書館に宋刊元修本あり）の覆刻らしく、南宋から元・明と覆刻を重ねて流行した麻沙本纂図互註六子全書の一つ。故宮博物院別蔵観海堂本・瞿影著録本（元版と著録）は同版。この本は早印に属する。

又　四冊

惇本殿原蔵。後補藍色絹表紙。襯装、破損の箇所は裏打補修さる。「曝書亭／珍蔵」「朱彝／尊印」、天禄各璽印あり。清の朱彝尊旧蔵。天目続五に宋版として著録。

*朱子成書　一〇種各一巻　宋朱熹撰　元黄瑞節編　元至正元年刊（日新書堂）　三冊

昭仁殿原蔵。後補黄色金切箔散し表紙（二五・八×一五・八糎）。首に大徳九年劉将孫序及び朱子成書凡目あり。太極図・通書・西銘・正蒙・易学啓蒙・家礼・律呂新書・皇極経世指要・周易参同契・陰符経の朱熹撰注書十種を彙集合刻し、毎書巻末に瑞節自録の附録を附す。本文巻首「朱子成書」、次行低七格「廬陵後学黄　瑞節　附録」、第三行低二格「太極図」等の小題。双辺（一八・七×一一・九糎）有界十一行、行廿字、注小字双行。版心粗黒口双黒魚尾「小題（「太極図」等）（丁付）」。首の凡目後の裏葉に「至正元年辛巳／日新書堂刊行」の双辺木記あり。この本初印にして無印清朗。故宮書影著録。

同版には次掲別蔵本の外に北平図書館原蔵残本・北京図書館蔵本や瞿目・王記著録本がある。

又　存易学啓蒙一巻〔明〕印　二冊

景陽宮原蔵。後補淡緑色金切箔散し表紙（二七・四×一六・三糎）。白綿紙本。「振藻／堂印」（陰）「陳印／進瑾」（陰刻）「佩／潔」等の印あり。

又　存六種六巻〔明〕印　配明覆元日新書堂刊本　二冊

昭仁殿原蔵。後補青粉色表紙（二三・七×一四・五糎）。所収の正蒙・西銘は前掲の至正元年日新書堂刊であるが、皇極経世指要（以上上冊）・律呂新書・周易参同契・陰符経（以上下冊）は日新堂刊本の覆刻で、次掲と同版の明刊本。

同　存律呂新書一巻〔明景泰元年〕刊（〔善敬書堂〕）覆元至正元年日新書堂刊本　一冊

後補藍色絹表紙（二七・一×一五・四糎）。金鑲玉装。巻首の「朱子成書」の「成」の字を切りとって、「楽」の字に改竄。従来元至正元年日新書堂刊と著録されているが、前掲の配補本と共にその明代の覆刻にかゝり、体式・行格・版式は日新堂刊本に同じ。此と同版と思われる北平図書館原蔵存五種の残本（後掲）には凡目の後に「景泰元年庚午／善敬書堂新刊」の刊

記がある。

大学衍義　存首二〇巻　宋真徳秀撰　〔明初〕刊〔明〕後修　覆元刊本　一六冊

延暉閣原蔵。後補淡青色綾絹表紙（二一×一四・三糎）。襯装。首に西山先生進大学衍義目録があるが、三十巻までに止り、その裏葉三行及び目録尾題は補写。此は本書四十三巻なるを故意に三十巻を以て完本の如く擬装せるか。自序・進書表その他は欠葉と思われる。本文巻首「大学衍義巻第一」と題す。左右双辺（一六・九×一〇・六糎、所々四周双辺を混ゆ）有界十一行、行廿一字、注小字双行、「臣按」の徳秀の按語は低二格単行大字。版心細黒口双黒魚尾、「久幾（或は幾フ）（丁付）」。やゝ後修が入り、巻廿五・廿八は四周双辺にして、字様他とやや異なり、雕刀頗る粗雑である。匡恒桓貞惇等の字に欠筆を見る。所々に欠丁あり、漫漶甚しく殆ど全巻墨で字をなぞってある。「倪炳／伯文」（陰刻）「乾隆／御覧／之宝」「天禄／琳瑯」の印あり。

又　存巻一二―二二、三六―四三　一二冊

寿康宮原蔵。後補濃藍色金切箔散し絹表紙（二五×一五・六糎）。金鑲玉装。前掲本と同版と見るべきであろうが、此は前者と覆刻の関係にある補刻の葉が頗る多い。巻十六の巻末（補刻）に「校正　柳邦傑」（この一行前掲本になし）、巻四十の尾題の下に「校正孫寧」の一行がある。

本版は旧京435―437著録本と同版で、旧京は宋版となし、従来或は元版とされている。しかし本版は後掲の北平図書館原蔵元刊本（存巻一八―三六、旧京433434宋版と著録）の覆刻で、字様雕法から見て寧ろ明初刊と看做すべきであろう。間々欠画の見られるのは、元来は宋版に基づく粗雑なる覆刻の故である。宋端平刻小字本と記す王記著録本（存巻一―二二）は、十一行廿一字黒口というから、或はこの本と同版であろうか。

＊心経一巻・真文忠公政経一巻　宋真徳秀撰　宋淳祐二年序刊（大阪県斎趙時棣）〔元初〕修　一冊

昭仁殿原蔵。後補紺色絹表紙（二八・五×二〇・八糎）。心経・政経の両書は元来別冊であったのを後に合綴したもので、附紙に「心経政経原一套二本五十五年十月十八日湯山発下去襯紙改挿一本」と記されている。五十五年は乾隆か。心経は序目なく、巻末に端平改元十月既望後学顔若愚敬書の跋（後半即ち第二四葉裏は補写）を附し、本文巻首「心経」と題す。政経は、首に淳祐二年月正人日門人王邁序の序を冠し、巻末に当時近事の六条をのせて末尾に「右政経附録」と題し、次に徳秀の帥長沙咨呈等の文九篇を附し、尾に「右文忠公政迹」と題す。本文巻首「真文忠公政経」と題する。行格版式両書等しく、左右双辺（二三・三×一七・九糎）有界十行、行十八字。版心白口単黒魚尾「心経（或は政経）（丁付）」、下象鼻に王錫、何彬、金成、賈端仁、徐佑、馬良の刻工名あり。慎の字に欠筆を見る。間々印面漫漶の所があり、僅かながら部分的修補が入り、それは元初に降るようである。心経の巻末第二三・二四葉裏補写、

政経の第五一葉裏第五四葉裏（巻末）は欠丁、烏糸欄の白紙を補綴してある。故宮書影・呉志著録。

心経の若愚の跋に「手抄此経昼誦而夜思之庶幾其万一復鋟板于郡学与同志勉云」と述べているから、初め端平年間に刊されたことが明かであるが、この本が端平刊に非ざることは刻工名からも立証できる。この端平刊本は今伝わらない。政経の邁の序に「今所謂政経者乃先生再守温陵日所著邁時分教睢邸郷友趙時棣宗華為法曹朝夕相与親炙琴瑟書冊之側遂得此経寔在四方門人之先而四方門人亦未必尽見之宗華令大庾鋟梓県斎以一帙見畀且俾序于帙端」と言う如く、趙時棣が淳祐二年大庾県斎（江西）に於て鋟板せしめたもので、その序中に「心経一書行於世」と述べ、また心経についても賛辞を費しているから、心経は端平刊本によって重刊して両書を一帙にしたものと思われる。刻工の馬良・何彬・賈端仁は理宗頃刊詩集伝（静嘉堂文庫・北平図書館蔵）、馬良はまた宝祐五年湖州刊資治通鑑記事本末の刻工中に見出される。本版の伝本は稀れで、中央図書館に心経（劉影著録）が架蔵さる。同版と思われる陸跋・陸志著録の明の孫馮翼旧蔵宋刊宋印本政経心経は今静嘉堂文庫に入っていない。光緒二十二年武英殿刊本は本版の覆刻である。

歴代名医蒙求　二巻　宋周守忠撰並注　宋嘉定一三年序刊（臨安府太廟前尹家書籍舗）　二冊

景陽宮原蔵。後補艶出暗緑色表紙（二四・五×一六・三糎）。襯装。原料紙縦二二糎。首に嘉定庚辰四月既望銭塘蘇霖序の「歴代名医蒙求序」及び「歴代名医蒙求総目」（次行低七格「窠菴周　守忠撰集」と題署）あり。本文巻首「歴代名医蒙求巻之上」、次行低六格、「窠菴周　守忠撰集」と題す。巻末に「歴代名医蒙求釈音上下」並に嘉定上章執徐旦月上浣日窠菴周守忠謹書と署する自跋があり、その後に「臨安府大廟前尹家書籍舗刊行」の刊記一行が存する。左右双辺（一八・七×一二・七糎）有界九行、行十八字、注低一格半単行大字、行十六字。版心白口単黒魚尾、「名医上（下）　（丁付）」。下象鼻間々、余敏、余、任清、任、清の刻工名あり。避諱はさ程厳謹ではないが、胤恒貞購敦に欠筆を見、寧宗の郭の字等は欠画をしていない。「季印／振宜」「澹／葦」「定斎」「読書／精舎」「顧氏／定斎／蔵書」等の蔵印あり。延令宋板書目・故宮選萃著録。

四庫未収。著者守忠の履歴は明かでないが、四庫所収の著書に「養生雑纂」「姫侍類偶」「古今諺」がある。本書は李瀚の蒙求に倣って、四言隔句用韻、以て歴代名医の故事を聯ね、自注を附する。本版は他に所在を聞かず、刻工の余敏・任清は南宋中期の浙江地区の刻匠である。天禄琳琅叢書所収の影印本あり。

経史証類大観本草　存巻八―一四　宋唐慎微撰　〔元大徳六年〕刊（〔崇文書院〕）　七冊

景陽宮原蔵。後補淡茶色表紙（二四・八×一六・八糎）。襯装。巻首「経史証類大全本草巻之幾」と題す。双辺（二〇・四×一四糎）有界十二行、行廿字、注小字双行、行廿四乃至廿五字内

外。版心細黒口三黒魚尾、「本草幾　（丁付）」。

又　存巻二四―三一　二冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒色表紙（二六・八×一六・六糎）。裏打補修が加えらる。巻廿五は末三丁を存するのみ。内閣残影著録。

「大徳壬寅孟春／崇文書院刊行」の木記を有する三十一巻本の残本で、本版は巻一は「大観本草」と題するが、巻二以下は「大全本草」と題される。同版に静嘉堂文庫（陸志著録）・中央図書館（一は楊守敬旧蔵、適志著録。一は存巻七・八）・北京図書館（二部）蔵本や王記著録本あり。

本草集方　存巻一―三、五―九　不著撰人　〔金〕刊

八冊

景陽宮原蔵。後補艶出黄色表紙（二七×一九糎）。襯装。序目を欠くと思われる。本文巻首「本草集方巻之一」と題し、毎巻次行「婦上門上」の如く、小題を墨囲白文を以て題する。左右双辺（二〇・三×一四・二糎）有界十行、行十六字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「巻幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名がある。但し下象鼻は往々破損が多く、特に巻七は第卅一葉以下は毎葉下半が欠損している。識読し得る刻工名は、方栄、方俊英、俊英、英、方祐、祐、方明、明、方俊卿、俊卿、方、羅有声、羅、田焯?、田□、田、楊森、劉喜、臧珍、臧勝、毛順、順、毛靖、靖、蘇勝、蘇□、蘇、婁?興、万宥、万、李明?（或は旺?）、李、陳青、陳、饒景山、饒、姚森、王愈、旺?。「北山／墨荘」の蔵印あり。故宮選萃著録。

四庫未収、諸家目に著録を見ず、本版は他に所在を聞かない。序目等を欠いているので、金刊とする積極的な証拠は見出せないが、版式等から見て、暫く旧説に従い、後考を俟ちたい。

宣和画譜　二〇巻　宋不著撰人　〔元大徳〕刊（〔呉文貴・杭州〕）　五冊

惇本殿原蔵。後補艶出代赭色表紙（二五・二×一六糎）。裏打修補が加えらる。首に、宣和庚子歳夏至日と尾に署して撰人を題せざる「宣和画譜叙」、次に「宣和画譜目録」があって、叙目及び廿巻の目次を記す。本文巻首「宣和画譜巻第幾」と題す。全書十門に分ち、毎門前に叙論がある。左右双辺（二〇・四×一二糎）有界十行、行十九字。版心線黒口単黒魚尾、「画幾巻（或は第幾）　（丁付）」、下象鼻に間々、王、許、午、宋等の刻工名がある。巻六の首葉表及び巻十一の首十二葉は補写、巻六と十一の補写は各々筆蹟紙質を異にするので、同時同一人の配抄に非ず、昌彼得氏によれば、前者は明楊慎刊本、後者は津逮本による伝録と云う。巻六周昉の「北斎高歓幸晉陽宮図」の下に「戊午十月三日視此巻於松城居俟斎」の小楷墨書の書入がある。此は昌氏によれば明崇禎十五年の挙人にして清に入って出仕しなかった徐枋（字は昭法、俟斎はその号）に非ざるかと推定されている。「趙」「趙氏／彦和」（陰刻）「彦／和」（陰刻）、「褒／山」（明の陸治か）「雪／居」（明の孫克弘）「煙／客」（明末

清初の王時敏）「伊／人」（清初の顧湄）等の蔵印多し。最近民国六十年故宮博物院より影印に付さる。故宮書影・故宮選萃・昌識著録。

本書は「宣和書譜」二〇巻と対をなし、撰者については、古来種々の推測が行われているが、定論がない。書譜二〇巻は南宋初紹興頃の宋槧本が葉氏拾経楼に架蔵されているが、本書の宋槧本は古来聞く所がない。本版の刊年刊者に関しては、本版中に記載はないが、丁氏善本書室旧蔵南京図書館現蔵の明鈔本は、その巻末に大徳六年呉文貴跋及び大徳七年正月銭塘王芝の後序が附され、本版の刊年刊者を推せしめる記事がある。丁志から引用すれば、「宣和書画譜乃当時秘録未嘗行世近好古雅徳之士始取以資攷訂往往更相伝写譌舛滋甚余竊病之暇日博求善本与雅士参校十得八九遂鋟諸梓大徳壬寅新日長至延陵呉文貴識」、また芝の後序に曰く、「宣和書画譜自宋南渡後不伝於江左士大夫罕見称道及聖朝混一区宇其書盛行好事之家転相謄写中間品目甚夥洊更遷徙往往散逸人間大徳中年芝被徴至京師俾彙次秘府図書遂獲尽窺金匱所蔵古今妙迹山積雲湊誠前代之所未有而譜内旧物亦或在焉芝翻理之餘心駭目眩竊自慶幸明年竣事南帰適呉君和之刻二譜於梓余嘉其有志於古也因為書於篇末」と。此により張允亮氏はこの本を以て大徳六年呉文貴の刻する所となした。傅増湘氏は葉氏拾経楼を過って宋槧書譜を鑑賞し、帰京後葉氏に宛てた書信中、この本に言及して、「故宮書目養心殿所儲有画譜可称合璧其書有張庾楼題為大徳六年呉文貴刻本乃拠丁志所言而本書固無大徳之序未為定論云云」と述べたことが葉録に記されている。此に対し昌氏は、「今観此本字仿鷗波、写雕俱精、不下至於明。元代未聞有他刻、当即大徳呉氏本、可無疑義。案長沙葉氏嘗購得宋建炎紹興間刻書譜一帙、版式行款与此本略同、惟字作欧体、版心上左方記毎版字数、避宋諱至高宗止異耳、知大徳本亦従宋刻繙雕」と鑑定している。昌氏の言従うべきであろう。米国国会図書館蔵存十六巻の元刊本は恐らく同版と思われ、他に宋・元槧本の所蔵を聞かない。米国会図書館本も巻末に大徳の呉文貴・王芝の両後序がない。王重民氏は「美国国会図書館蔵中国善本書目」の解題中に、この両後序は、恐らく本版と併刻されたと思われる「宣和書譜」の巻末に附してあったのではないかと推定している。

至大重修宣和博古図録　三〇巻　宋王黼等撰　〔元〕刊〔明〕印　三四冊

昭仁殿原蔵。後補淡青色絹表紙（三六・四×二六・七糎）。襯装。首目欠。巻首「至大重修宣和博古図録巻第幾」と題し、毎巻大題後に目録をおいて本文に接する。左右双辺（約二九・二×二二・六糎）。毎器全形及び銘文を掲げ、後に訓釈を附する。訓釈は有界八行、行十七字。版心白口双黒魚尾、「博古図録幾（丁付）」。上象鼻に稀に大小字数、下象鼻に、陳晟、晟、陳寧、徐宗、徐、文玉、沈貴、貴、沈、荷桂孫、桂孫、孫、太初、太、李伯英、伯英、李、斎徳閏、閏、斉、侯囦、侯、永嘉邵宗彦、信、系、春、滕、鄭、占、金、朱、柳、何、林、洪、蔡、梅、

寿、永、元、張、汪、明、兪、夫、圭、彦、吉、泳、銭、楊等の刻工名がある。版面にはかなり漫漶の所が多く、往々欠葉がある。同版に静嘉堂文庫（陸志陸続跋著録）・中央図書館（三部）歴史語言研究所・北京図書館（二部）蔵本・瞿目著録本（欠巻七）や後掲の北平図書館原蔵零本がある。（追記3）

*孔氏六帖　三〇巻（欠巻一一）　宋孔傳撰　宋乾道二年序刊（泉南郡庠）〔宋〕修　一九冊

昭仁殿原蔵。後補藍色表紙（二六×一七糎）。裏打修補が加えらる。首に乾道丙戌（二年）端午日東魯韓仲通序の「孔氏六帖序」、「孔氏六帖目録」あり。本文巻首「孔氏六帖巻第一」と題し、毎巻題後目録をおいて本文に接する。左右双辺（二一・五×一四・七糎）有界十二行、行十四乃至十六字、注小字双行、行廿八字内外。版心白口双黒魚尾、「第幾巻（丁付）」、上象鼻に大小字数（間々下象鼻に）、下象鼻に刻工名がある。所々少しく破損があり、特に巻卅が多く、同巻の末葉は欠く。玄弦絃畜袨圈朗敬驚儆殷澱匡筐炅恒禎貞偵徵懲譲桓構等の字欠画をなし、蜃敦等の孝宗以下の宋諱は欠筆をしない。版心の多くが破損しているが、識読し得た刻工名は、余明、余蘭、蘭、余才、余簡、簡、呉仁、呉佐、呉太、呉友、呉正、呉忠、葉聳、葉彦、劉柯、柯、劉全、劉中、李原、原、李平、平、李木、木、李珍、珍、李秀、周泗、泗、四、周文、丁保、保、丁、張光、張先、先、陳文、陳才、陳山、山、陳寔、寔、陳順、八百羊、梁鉞、鉞、鄭俊、鉄、陶、立、才、文、彦、正、青。僅かながら、埋木による部分的な修補が入っている。「文淵／閣」「臣／筠」「三晋／提刑」及び天禄各璽印あり。明内府文淵閣、清の宋筠旧蔵。天目続五・呉志著録。

韓仲通序にこの刊刻の由来を述べて曰く、「余守泉南而周芹雍希稷余宗黄茂林仁寿皆儒士之英偶集此邦相与校讎刊於郡庠」と。「白氏六帖事類集」卅巻と本書卅巻とは元来別行であったが、南宋両書を合編せる「白孔六帖」一百巻の合刻本が出版されてから、後世之を伝承し、両単行書は極めて稀覯の存在となり、本版も他に北京図書館蔵巻十一の零本の外知られていない。この本は天目続には三十巻二十冊の完帙と録されているから、北京図書館本は本帙から流出せる僚巻であろうか。

玉海　二〇〇巻詞学指南四巻別附十三種六一巻　宋王応麟撰　元後至元六年刊（慶元路儒学）元至正一一年修　二〇〇冊

昭仁殿原蔵。後補桃色金切箔散し表紙、金鑲玉装。別附十三種は、詩考一巻、詩地理考六巻、漢藝文志考証一〇巻、通鑑地理通釈一四巻、周書王会篇補註一巻、践阼篇集解一巻、漢制考四巻、急就篇補注四巻、姓氏急就篇二巻、小学紺珠一〇巻、六経天文編二巻、周易鄭康成注一巻、通鑑答問五巻。首に李桓序、至元四年胡助序、至正十一年六月初吉嘉議大夫慶元路総管阿殷図埜堂序、至正辛卯（十一年）七月既望儒学正王介序、至元六年四月朔日鄞郡文学正東嘉薛元徳の後序、至元六年庚辰四月一日孫厚孫謹識の王厚孫の跋、末に資徳大夫浙東道宣慰使司

都元帥也乞里不花等の銜名のある至元三年浙東道宣慰使司都元帥府牒、次に目録あり、目録の後に慶元路儒学刊造玉海書籍提調官等銜名七行及び同重校正監督等銜名二行がある。本文巻首「玉海巻第一」、次行低十格「浚儀王応麟伯厚甫」と題す。左右双辺（二二×一二・七糎）有界十行、行廿字、注小字双行。句点墨線附刻。版心白口双黒魚尾、「玉海巻幾（或は幾）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。右上欄外に耳格あり、標目を題する。刻工名は、一貞、以方、云郷、王徳明、徳明、王士義、王子義、子義、王義、王子文、王浩卿、王中、翁寵、翁、魏海、景旻、景先、彦明、沅叔、阮升、阮徳中、玄甫、胡仲珪、仲珪、仲圭、胡珪、珪、圭、胡仲、胡仲玉、仲玉、胡玉、胡克明、克明、胡五、胡子、胡泰之、泰之、行可、子安、子祥、子堅、仕良、士良、寿卿、叔章、徐仲裕、仲裕、徐、青楊、仲実、張周士、周士、張士、張居正、居正、居、徳忠、徳中、徳章、任子敏、任子、范双評、文甫、茅雪舟、舟、茅修、余伯清、楊青、梁順、安、王、袁、温、可、華、希、晞、義、吉、居、玉、共、敬、傑、桀、元、沅、堅、胡、行、弘、克、谷、之、子、士、実、修、周、朱、主、秀、寿、叔、祥、章、璋、昌、蔣、壬、任、仁、瑞、崇、斎、青、正、成、先、善、宋、太、泰、忠、中、仲、董、徳、旻、卞、木、明、用、楊、良、老等。「王記」「五峯／蔵書／屋印」の印記あり。

本版の諸序跋によれば、至順・元統の間浙東帥府都事牟応復が、未刻の本書を繕写校勘し、浙東の郡県学庠で鋟梓することを首唱建議したが、未だ就かずして職を去り、ついで至元三年宣慰都元帥也乞里不花が、応麟の孫厚孫をして校勘者、王秉・王陞・楊徳載三人をして書写者となし、浙東の郡県学書院の歳入中より出費して刻せしめ、至元六年刻が成った。しかし誤漏が多かったので、至正九年阿殷図埜堂が慶元路総管に就任して来り、再び応麟の孫厚孫に命じて重ねて校讎を加えて修補を施し、至正十一年その功を竟えて完書となした。明に入りその板木は南監に移され、度々補刻を加えて印行が続けられた。明南雍経籍考には「玉海二百四巻脱者四十五面存者九千五百九十六面」と録されている。正徳・嘉靖・万暦と逓修が加えられたので、旧刻その半ばにも及ばない板木は、さらに清に入って、康熙・乾隆に大補刻が施され、殆ど原刻なき状態であったが、嘉慶中二十一史の板木と共に焼けた。嘉靖以後の補刻は誤脱頗る多しと云われる。従って本版の現存本の多くは明修或は清修本であるが、この本は印面美しく、明修が入っていない。同版本に、後掲の故宮別蔵本、北平図書館原蔵本、他に静嘉堂文庫（莫録・陸志・陸跋著録）・内閣文庫（明修）・慶応義塾図書館（明修）・両足院・京大人文科学研究所（明清修）・中央図書館（三部）・北京図書館（明修、瞿目著録）・南京図書館（丁志斎影著録）等の蔵本がある。中央図書館本による民国五十三年刊の影印本がある。

又　明正徳・嘉靖逓修　一八〇冊

昭仁殿原蔵。後補紺絹表紙。版心に正徳元年・正徳二年・嘉

靖庚戌（二九年）の補刻年が刻されている。

又　明正徳・嘉靖・万暦遞修　四六冊

懋勤殿原蔵。後補濃桃色表紙。版心に正徳元年正徳二年、嘉靖庚戌、嘉靖壬子（卅一年）監生胡元学刊、万暦癸未（十一年）、万暦丁亥（十五年）監察院補刊の補刊年が記されている。

姓氏急就篇　二巻　宋王応麟撰　元後至元六年刊（慶元路儒学）元至正一一年・明遞修　玉海附刻本　四冊

昭仁殿原蔵。後補藍色絹表紙。本文巻首「姓氏急就篇上」、次行低十格、「浚僕王応麟伯厚甫」と題す。乾隆各璽印、「呉郡／趙宦光／家諸子」「趙凡／夫読／残書」「兼牧／堂書／画記」「謙牧／堂蔵／書記」印。明の趙宦光（呉県の人、字は凡夫）等旧蔵。天目続一七著録。

新編事文類聚翰墨全書　甲集一二巻（欠巻七・八）乙集九巻丙集存巻四・五丁集五巻戊集五巻己集七巻（欠巻二）庚集二四巻辛集一〇巻壬集一二巻癸集一一巻后甲集八巻乙集三巻丙集六巻丁集八巻戊集九巻　元劉応李編　〔明正統一一年〕刊　六九冊

昭仁殿原蔵。後補金切箔散し紺色表紙（一八・六×一一・九糎）。襯装巾箱本。首に「事文類聚翰墨全書総目」及び「事文類聚翰墨全書甲集目録」（乙集以下各集毎に首に目録あり）があるが、大徳十一年能禾序及び混一諸道之図を欠く。本文巻首「新編事文類聚翰墨全書甲集巻之一」（跨行）、次行低五格（小字では低七格）、「前郷貢進士省軒劉応李希泌編」と題す。巻二以下次行の署名なく、大題下に墨囲陰刻を以て「某集」と題さる。尾題は「事文類聚翰墨全書巻之幾　某集（墨囲陰刻）」（跨行）、后乙集のみは首を「聖朝混一方輿勝覧」と題する。双辺（一五・一×一〇糎）有界十二行、行廿四字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「啓（門標目）甲幾（丁付）」。所々補写がある。「主静斎」「愛人／読古／今書」の印あり。

本版は従来元大徳刊とされているが、原序年を誤って刊年としたにすぎない。静嘉堂文庫・宮内庁書陵部・内閣文庫蔵本と同版で、内閣文庫本には明正統十一年翠巌精舎刊の刊記がある。本版は米沢市立図書館（「正統元年丙辰善敬書堂新刊」の刊記あり）・大東急記念文庫蔵本と覆刻の関係にあり、いずれも元建刊本の覆刻に近い明前期の重刊で、字様に元風の所もあるが、雕刀は明かに明風である。

*新編纂図増類羣書類要事林広記　前集・后集各一三巻続集別集各存首八巻　元陳元靚撰　〔元末明初間〕刊（椿荘書院）　一二冊

摛藻堂原蔵。後補艶出淡水色金切箔散し表紙（二五・二×一三・八糎）。金鑲玉装。首に四庫全書提要の解題を写して附綴。首に「新編纂図増類羣書類要事林広記目録（跨行）　前集（墨囲陰刻）／（低八格）西頴　陳　元靚　編」と題する目録がある。この毎集の目録は毎集首にある筈であるが、この本は前集の外は欠いている。本文巻首、「新編纂図増類羣書類要事林広記巻之一　前集（墨囲陰刻）」と題す。たゞ后集巻二・三は「新編

纂図羣書一覧事林全璧」と題し、尾題は一定せず、首題の外に「増類新編事林広記」「類編羣書事林広記」「増類新全事林広記」「増類事林広記」或は単に「某（「前」等）幾巻終」と題する。左右双辺（一七・二×一〇・五糎）有界十四行、行廿四字。版心細黒口双黒魚尾、「林前幾　（丁付）」。前集目録後に双辺木記あり、「事林一書資於博物洽聞之／士尚矣道散天下事無不該／物无貫其紀載容有能尽／之者乎是編増新補旧視它／本特加詳焉収書　君子／幸鑒　椿荘書院　謹咨」と。所々欠丁あり。後集巻七は字様他と異り明風を帯びる。或は配補か。「五忠劉氏所／蔵図書」の印記あり。本書は陳元靚撰と題しながら、夫々異る冠称を附せる書名を以て、元から明にかけ、分巻を異にし内容に出入のある幾種かの版が続出し、我が国に於ても室町時代江戸初にかけて愛用された。元版には本版と覆刻の関係にある内閣文庫蔵西園精舎刊本（本版後出か）、「纂図増新羣書類要事林広記」と題する書陵部・北京大学（中版録320 321著録）蔵の元後至元六年鄭氏積誠堂刊本がある。（追記4）

＊聯新事備詩学大成　存巻一六―三〇　元林楨撰　〔元末明初間〕刊　八冊

懋勤殿原蔵。後補淡香色表紙（二三・五×一五・一糎）。裏打補修が加えらる。序目を欠く。巻首「聯新事備詩学大成巻之幾」と題す。双辺（一九・三×一二・五糎）有界十三行、注小字双行、行廿五字。版心細黒口双黒魚尾、「詩学幾　（丁付）」。巻卅は巻末の方が破損し、末葉欠丁。「趙印／孟頫」の印あれど、偽印か。本書は宋毛直方撰詩学大成（現存の元刊本には直方原撰に増広の加えられた「増広事聯詩学大成」至順三年建安安勤書堂刊・至正二年日新書堂刊・至正十四年鼇江書堂刊）の増刪と云われる。この本は大東急記念文庫蔵元至正十年翠巌精舎刊本（我が国の南北朝頃の旧刊本はその精巧な覆刻）の覆刻の系統に属し、盆影著録本（丁志著録、南京図書館現蔵）の書影と比較するに同版の如く思われる。丁志によれば、丁本には至正己丑朱文霆の序があり、その序中に「書市劉君衡甫鋟諸梓」とあると引用しているから、本版が至正九年書市劉衡甫刊本の如く思わしめる疑懼がある。しかしこの文霆序は至正十五年翠巌精舎（劉氏）刊記本にある序である。この本は序もそのまゝとった元末、寧ろ明初に降った覆刻で、本版は翠巌精舎版に比し、字様雕法ともに粗ややゝ明風を帯びている。内閣文庫蔵明初刊本は本版の覆刻。上海図書館蔵元至正建寧路書市劉氏刊本（十三行廿五字）というのは文霆序から推定した著録と思われ、本版或は内閣文庫本のどちらかと同版であろうか。

同　三〇巻　〔明前期〕刊（新安・雙桂書堂）　一二冊

景陽宮原蔵。後補藍色絹表紙（二三・三×一四・四糎）。襯装。首に「詩学大成綱目」及び「聯新事備詩学大成目録」（次行低六格、「後学三山林楨編集」の題署）あり。本文巻首、「聯新事備詩学大成巻之一」、次行低六格「後学三山林楨編集」（巻二以下この題署なし）と題する。双辺（一九・四×一二・三糎）有界十三行、注小字双行、行廿五字。注文の引用書名は墨囲陰刻。

版心粗黒口双黒魚尾、「詩学幾フ　（丁付）」。目録の末に左の双辺木記あり。

旧刊詩学如大成繁而且冗叢珠珍／珠囊等編簡而又略蓋両病焉本堂／是編則去諸家之疵而集諸家之粋／於叙事故事總名之以事類撫唐宋／名賢佳句而削去重復采当代摹英／警聯而増広新奇視前刊実為明備／敬用鋟梓以広其伝収書君子幸鑒／皇宋咸淳辛亥新安雙桂書堂新刊（圏点筆者）

この刊語の文は末の年号刊者名を除き至正翠巌精舎刊本のそれの粗雑な覆刻であるが、筆者が圏点を附した二箇所はその箇所を切りとって別紙を以て裏打ちして筆写改竄し、宋版に見せかけようとした後人の妄補である。翠巌精舎版では「当代」は「皇元」に、「皇宋云々」は「至正乙未孟春」となっている。また第卅巻末尾題の葉の裏葉は別紙を以て補い、「洪武二季秋八月太原王爚重装珍玩(印)」（印文「王爚／之印」）の識語があるが、此も後人の妄補と思われる。本版は洪武二年には溯り得ない。本版は前掲本の覆刻であるが、字様が翠巌精舎版の元風からかなり離れて崩れ、内閣文庫本より後出である。

同　三〇巻　〔明前期〕刊　八冊

景陽宮原蔵。後補浅葱色絹表紙（二五・二×一六糎）。襯装。首に皇慶第一中秋建安毛直方引の序及び目録あり。目録末の裏葉は或はそこに刊記があったかもしれぬが、烏糸欄を引く別紙を以て補わる。題署体式版式前掲本に同じ。双辺（一九・五×一二・四糎）有界十三行、注小字双行、行廿五字。版心細黒口双黒魚尾、「詩学幾フ　（丁付）」。「嘉慶／御覧／之宝」「天禄／継鑑」（陰刻）の璽印あり。前掲本と覆刻の関係にあり、この本の方が後出か。

以上三部は各々覆刻の関係にある別版であるのに、従来全て同版となし、且つ毛直方の原序を序刊と誤認して、元皇慶間建安双慶書堂刊本となせるは失考である。

＊歴代蒙求　元王芮撰　鄭鎮孫纂注　清影鈔至順四年衢州路刊本　一冊

養心殿原蔵、宛委別蔵阮元採進本。紺色絹表紙（二九・三×一九糎）、襯装。首に、括蒼後学鄭鎮孫安国父序の歴代蒙求序、至順改元七月通議大夫衢州路総管兼内勧農事馬速の刊書の序、至順癸酉孟夏通議大夫衢州路総管府達魯花赤兼管内勧農事河内薛超吾書の重刊序、次に歴代総図あり。巻末に低一格を以て徽州路儒学教授王萱書于極高明の刊書の跋、次に二行を隔て「徽州路儒学学録上饒游詹　校正」の一行あり。本文巻首「歴代蒙求」、第二・三行低八格「汝南王芮撰／括蒼鄭鎮孫纂註」と題す。紅格左右双辺（一七・三×一一・九糎）有界八行十八字、注小字双行。版心白口「歴代蒙求　（丁付）」。阮外集著録。

阮元は「此巻刻于元至順中馬速忽守新安以其書有資啓発令郡教授王萱鋟梓以広其伝此従銭曾所蔵本影写尚是元時旧刻也」と記しているので、本鈔本の底本が元至順元年徽州路儒学刊本の如く誤解せしめる。至順四年衢州路総管薛超吾の序に、「侍御史忠斎馬公守新安日嘗鋟梓郡庠惜其不広伝也故重刊于衢俾邇蒙

士成得記誦焉」とあるから、此は超吾が徽州路刊本を四年後に衢州路に於て重刊せしめた本である。徽州・衢州両刊本とも今伝わらず、北京図書館蔵影元鈔本はこの本と同種で、毛氏汲古閣・黄丕烈・涵芬楼旧蔵本（涵録著録）である。

*新編排韻増広事類氏族大全　十集　不著撰人　〔元末明初間・建〕刊　六冊

昭仁殿原蔵。後補紺色表紙（二三×一五・二糎）。襯装。首に「新編排韻増広事類氏族大全綱目」あり。巻首「新編排韻増広事類氏族大全（隔五格）　甲集（墨囲陰刻）」と題す。四周双辺（一八×一二・九糎）有界十七行、行廿八字、注小字、綱目は十一行。標目は墨囲陰刻。版心細黒口双黒魚尾、「氏族甲（或は甲）（丁付）」。丁集第十四丁、辛集第九・廿八丁は補写。後に行くにつれ字様明風を帯びる。「謙牧／堂蔵／書記」「兼牧／堂書／画記」及び天禄各璽印あり。天目続十著録。

本書の元刊には数次を以て分巻せる玉融堂刊本（書陵部・故宮博物院楊氏観海堂蔵）があるが、此は甲乙の干支を以て分つ。但し内容は殆ど同じ。静嘉堂文庫蔵本（陸志・陸続跋著録）・劉影著録本と同版である。後掲の北平図書館原蔵の元刊本及び明刊本、中央図書館蔵明初刊本は十六行であるが、字様はこの本と覆刻に近い関係にある。上海図書館蔵本或は同版か。

羣書類編故事　二四巻　元王罃編　清影鈔元刊本　六冊

養心殿原蔵、宛委別蔵阮元採進本。紺色絹表紙（二九・三×一九糎）、襯装。首に「羣書類編故事目録」あり。本文巻首「羣書類編故事巻之一」、第二行・第三行「四明王罃編集／泰和梁軿校正」と題す。紅格双辺（二〇・五×一二・七糎）有界十三行、行廿四字。版心白口「羣書類編故事幾　（丁付）」。阮外集著録。選印宛委別蔵中に影印さる。阮元は「此本従明莫雲卿家蔵元刻影写」と記している。この元刊の原本は今知られていない。

群書通要　十集七三巻　元闕名者編　清影写元至正刊本　一七冊

養心殿原蔵。宛委別蔵阮元採進本。紺絹表紙（二九・五×一九糎）。襯装。首に、大徳己亥花朝玉澗王淵済道可敬書于龍湖書堂の序あり、その後に「至正重刊」の双辺楕円形木記が記さる。次に「羣書通要総目」（尾題「綱目畢」）、次に「羣書通要甲集目録」あり。甲集天文より庚集譬諭に至る三十七門、毎十巻を一集とし、辛壬癸三集は「大元混一方輿勝覧」にあて、毎集首に綱目の目録をおく。辛集「羣書通要方輿勝覧目録」の末に「至元戊寅菖節／梅軒蔡氏刊行」の双辺木記の本刊記がある。本文巻首「群（或は「羣」に作る）書通要巻之幾　某集」（跨行）と題す。紅格左右双辺（一六・二×一〇糎）有界十三行、行廿四字。版心白口、「甲（乙……）幾　（丁付）」。「嘉慶／御覧／之宝」の印あり。阮外集著録。選印宛委別蔵に影印あり。

この本は後掲の北平図書館原蔵建刊本「事文類聚羣書通要」存己集一〇巻と内容を同うし、また款行を等しくする。同本の条参照。

＊選編省監新奇万宝詩山　三八巻　題元方回編〔明前期・建〕刊〔明〕修　四〇冊

緗庫原蔵。後補紺色地金切箔散し表紙（二八×一一・五糎）。襯装巾箱本。首に「選編省監新奇万宝詩山総目」あり。本文巻首、「選編省監新奇万宝詩山巻之一」（跨行）、次行低五格、「紫陽虚谷居士方　回　万里選編」と題す。巻二以下撰者名を署さない。但しこの巻一首葉は原刻ではなく補刻である。左右双辺（一一・八×七・八糎）有界十五行、行廿三字。版心小黒口双黒魚尾、「寺幾　（丁付）」。原刻の印面には一部漫漶の所があり、明中期頃に降ると思われる修補がかなり多く加えられ、また巻中補写の葉がある。

四庫未収。文淵閣書目に「万宝詩山一部十三冊闕　万宝詩山一部一冊闕」、千頃堂書目及び補遼金元藝文志の総集類に「万宝詩山三十八巻」と著録。天文より鳥虫に至る十五門に分ち、毎門さらに類に分ち、その類の一詩題下に五言六韻詩が分類編録され、場屋応試用の類書である。本書の流布は多からず、筆者の眼目を経たるものに米沢市立図書館・静嘉堂文庫（二部、一は中村敬宇旧蔵、一は陸志・陸続跋著録）蔵本がある。両本はこの本と行格を同うするが、米沢本は首に宣徳四年著雍作噩歳重九日蒲陽余性初叙の「万宝詩山叙」を冠し、巻首大題の次に「書林葉氏広勤堂新栞」と題し、また性初の叙中に「書林三峰葉景達氏掇拾類聚繡梓以伝于世」と記されている。性初は何時の人かその履歴は明かでない。静嘉堂文庫の二部は全く同版で米沢本とは元来同版であるが、間々相互に別版の葉があるのは修補が加ったからである。特に叙は両本版を異にし、静嘉堂本は序末年題署の「宣徳四年著」の五字がなく、空格となり、剜去か否か、一見不自然なるものを感ぜしめる。宣徳四年は己酉であるから、屠維（或は祝犁）作噩たるべきに、米沢本が著雍（戊）作噩に作り、静嘉堂本が「著」の字を脱しているのも不可思議である。第一戊酉の干支はあり得ない。単なる誤刻か、それとも両本共にその序は原刻でなく修補なのか。米沢本の叙の字様は本文のそれと異っている。米沢本を筆者が見たのは、かなり前で、今再査の餘裕がないので、断言できぬが、原刻の葉が米沢本の方がやゝ後刷の如く記憶するので、静嘉堂本に比し米沢本が後出のように思う。陸氏は陸続跋に「太歳在戊曰著雍在酉曰作噩戊与酉不相値非戊戌既己酉之譌蓋理宗淳祐末年刊本也」として、之を宋麻沙本となした。本書の諸家目に録されたものを拾えば、「絳雲楼書目」に「宋板万宝詩山二十二冊」、「伝是楼宋元板書目」に「万宝詩集三十八巻　二十本小元板」、「孝慈堂書目」に「宋板万宝詩山　三十八巻十六冊袖珍」と見える。さらに、莫録は宋巾箱本と著録し、潘記は存巻三一・三二（怡府旧蔵）を宋刻残本と録し、羅録は存首二六巻を録して元刊袖珍本と記している。此等著録本はその解説から推せば静嘉堂本と同版のようである。潘景鄭はその自家滂喜斎蔵零本を「著硯楼書跋」に著録し、莫友芝がその本を天水の精槧となしたのを未だ敢て信ぜずとして、その理由四条を挙げ、友芝の

審定を「智者千慮不免一失」と評して、「嘗見明悦生堂本五経、与此体意絶似、疑為明人覆宋」と結論している。しかし潘景鄭より遙か先だって島田翰は夙にその「皕宋楼蔵書源流攷」に於て、陸志陸跋中の失考の例に本書をあげて曰く、「万宝詩山是明宣徳四年書林葉景逵刻本、莆陽余性初作之序、絳雲、延令並為宋本、宜稼亦注云宋版、莫子偲箸経眼録以為宋巾箱本、心源於儀顧堂続跋云、戊与酉不相値、非戊戌既己酉之譌、蓋理宗淳祐末年麻沙本、不知余性初是何代人、其所空欠、既宣徳四年四字、不免為書賈所愚、而著雍作噩既当是屠維作噩、偶然筆誤」と。ついで葉徳輝はその著「書林清話」巻四に、「元建安葉氏刻書」の項を設け、宋代建安を風靡せる余氏の書業元末明初に至って衰え、之を継いだ葉日増、景逵父子の広勤堂の元より明成化頃に亘る盛業を叙し、ついで「広勤堂刻万宝詩山」の項を設けて、翰の説を採って、葉景逵広勤堂の明前期の刊本が諸収蔵家によっていかに宋に非ずんば、誤って元と為されているかを紹介している。静嘉堂本万宝詩山も巻初はその字様やゝ円潤を帯びて元の遺風をとゞめているが、巻を追うに従って硬直に転じ、明刻たるは疑いない。

従来元建陽書坊刊とされているこの本と静嘉堂・米沢両本とを比べるに、同版であるが、この本は補刻の葉多くして、原刻の印面はかなり漫漶の所があって、その修は明前期より中期に降るものである。最も大きな差は、巻一首葉（全葉改刻）の大題の次行が「書林葉氏広勤堂新栞」を変じて、「紫陽虚谷居士方回万里選編」と改めていることである。この本に余性初の序を欠くのは、佚失したのではなく、書估之を削除して、「瀛奎律髓」の編を以て名高い方回の名を騙って、増重射利を狙ったものと思われる。従って初刻よりかなり時を距て、その板木が広勤堂より他に転売されていたかもしれない。

続世説　一二巻　宋孔平仲撰　清伝写宋紹興二七年沅州公使庫修本　六冊

養心殿原蔵、宛委別蔵阮元採進本。紺絹表紙（二九・五×一九糎）、襯装。首に紹興廿七年秦果の「続世説序」あり。巻末に「沅州公使庫／重修整雕補到続世説壱部計壱拾弐巻壱／佰五拾捌板用紙参百壱拾陸張／右具如前／紹興二十七年三月　日右廸功郎沅州司／法兼監使庫翁灌冊」と署し、以下「左朝散大夫知沅州軍州事王濯」に至る四名の銜官列位、次に印造紙墨裱褙工食銭数目十行が附してある。本文巻首「続世説巻第一」、次行低五格「魯国孔平仲字毅甫」と題す。紅格左右双辺（二〇・八×一四・三糎）有界十行、行十八字。版心白口「続世説巻幾　（丁付）」。阮外集著録。選印宛委別蔵所収影印。

秦果の序に「平仲書成未刊従義郎李敏得善本于前靖守王長孺相与鏤版王親受于孔知其不繆丁丑之春雒陽王濯来守沅之明年李氏以其書版来售即加是正鑱刻以補其不足」とあり、又巻末の数目に「重備整雕補」と言っているから、本鈔本の底本は紹興年間李敏等刊版による紹興廿七年沅州公使庫修版たることがわかる。この紹興刊本の現存を聞かない。

音註河上公老子道徳経　二巻　旧題漢河上公章句　題宋呂祖謙重校　〔南宋〕刊（麻沙・劉通判宅仰高堂）

一冊

玄穹宝殿原蔵。後補紺色絹表紙（二四・二×一五・一糎）。襯装。首に「老子道徳経序／（低六格）太極左仙公葛　玄造」と題する序及び老子篇目あり。本文巻首、「音註河上公老子道経」、次行低五格「東萊先生呂　祖謙　重校正」、第三行低一格「河上公章句第一」、第四行低三格「体道第一」、下巻首行「音註老子道（マヽ）徳経下」、次行低一格「河上公章句第三」、尾題「音註河上公老子徳経終」と題する。左右双辺（一九・一×一二・四糎）有界十行、行十八字、注小字双行、行廿三字。注末音義の見出字の多くは墨囲陰刻、中に墨囲のみで陽刻のも混る。版心線黒口双黒魚尾、「老子上（下）（丁付）」。右上欄外（下巻第二丁のみ左）に耳格あり、章名を記す。序の後に「麻沙劉通判宅／刻梓于仰高堂」の双行の刊記が存する。玄眩匡恒徴譲慎敦等に欠筆があるが、欠かざる場合もある。上巻第二至第四葉は補写。呉志著録。

撫刻早印にして清雅。南宋後期の麻沙本。呂祖謙重校は書賈増重の託名であろう。音釈は陸氏釈文を節録し少しく他家の音注を採っている。天禄琳琅叢書・広文書局刊の影印本がある。他に同版本がない。音注本老子の宋槧には瞿氏旧蔵北京図書館蔵建安虞氏刊本（四部叢刊に影印）・中央図館蔵宋末建刊巾箱本がある。

纂図互註老子道徳経　二巻　旧題漢河上公章句　〔明前期〕刊　一冊

昭仁殿原蔵。後補紺色絹表紙（二三・七×一四・六糎）。首に景定元年龔士高序（六子書の序であろう）、太極左仙公葛玄の「道徳経序」、老氏聖紀図等の諸図、老子道徳経篇目（徳経の目録を欠く）がある。本文巻首「纂図互註老子道経巻上」、次行低一格「河上公章句註釈」と題す。双辺或は左右双辺（一八・二×一一・五糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行、行廿五字。版心細黒口双黒魚尾、「老子上（下、或は上フ）（丁付）」。左上欄外に耳格あり（但し下巻は殆どなし）、章名巻次葉次を記す。「錫山邵氏／蔵書」「二泉／山人」（陰刻）印あり、明の邵宝旧蔵本。

宋末から明にかけて覆刻を重ねた建刊纂図互註六子本の一つで、旧京551―554著録本（大連図書館蔵、元刊と録す）・劉影著録本（宋刊と著録）と同版にして、瞿影著録本の覆刻のようである。この本は従来元刊とされているが、明前期の麻沙本である。瞿本も元刊とされているが、書影より察するに或は明初刊か。

又　一冊

昭仁殿原蔵。淡桃色表紙。襯装。龔士高序及び篇目欠。「謙牧／堂蔵／書記」「兼牧／堂書／画記」の印あり。

又　一冊

玄穹宝殿原蔵。後補淡桃色金切箔散し表紙（二三×一三・八

糎)。襯装。龔子高序欠。

*雲笈七籤　存巻一一一―一一三下　宋張君房編　〔蒙古乃馬真后三年〕刊　玄都宝道蔵本　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補柴色絹表紙(二六・一×三一・七糎)。裏打補修を加え包背装に改装。巻首「雲笈七籤巻第一百一十一(隔二格)既」、次行低八格、「張君房　集進」(巻一一三上は「朝奉郎尚書度支員外郎充集賢校理知郢州兼管内勧農事上軽直都尉賜緋魚袋供紫臣張君房集録」の銜官氏名題署)、第三行低一格「洞仙伝」と題し、毎巻小題の次に目次があって、本文に接する。元来巻刷であったので、一葉に四周単辺(約二二・四×五六・八糎)無界卅行、行十七字。版心の代りに右欄外に、「既　雲笈七籤幾(千字文編号)　(丁付)　(刻工名)」と一行に刻さる。驚の字に欠筆を見る。刻工名は李恵童、李三、李□、喬志□、張興、進道、志修、元、国、天、仇、劉、牛、善、李(陰刻)、弥、力、主、柳、周、席、田、木、子。巻末「清河郡□」の墨印あり。内閣残影・呉志著録。

北京図書館蔵本(中版録264著録)・王記著録本(存巻廿九)は同版で、従来平水金刊とされていたが、版刻図録は蒙古刊となして曰く、「元初宋徳方遵其師長春真人丘処機遺志、太宗九年倡刻道蔵、開局於平陽玄都観、拠管州所存金蔵付刻、至乃馬真后三年全蔵告成、凡七千八百餘巻、名玄都宝蔵。定宗時平陽永楽鎮純陽万寿宮建成、即庋経版於宮内。元初僧道交悪、至元十八年朝命焚道家経典、全蔵経版遂被焚毀。此与太清風露経同為伝世玄都宝蔵僅存零種。」と。

集部

離騒〔集伝〕　一巻　宋銭杲之撰　清影鈔宋刊本　一冊

養心殿原蔵、宛委別蔵阮元採進本。桃色絹表紙(二九×一九糎)、襯装。序目なし。本文巻首「離騒」、次行低七格、「晉陵銭杲之集伝」、尾は「離騒巻終」と題す。紅格左右双辺(一九・四×一二・四糎)有界九行、行十八字、注小字双行。版心白口、「離騒集伝　(丁付)」。阮外集著録。

阮元は「此冊借宋板影鈔得之」と。この本の底本は瞿目・瞿影著録宋刊本(北京図書館現蔵)と同版らしいが、巻末二葉は瞿影所載の書影と比べるに行格を同うしながら、毎行二字のずれが見られる。

*集千家註分類杜工部詩　二五巻附首目　唐杜甫撰　宋徐居仁編次　黄鶴補注　元皇慶元年刊(建安・余氏勤有堂)　一六冊

位育斎原蔵。後補紺色表紙(二三・五×一五・三糎)。襯装。首に「杜工部伝序碑銘」等(末に「建安余氏／勤有堂刊」の篆書木記あり)、「杜工部詩年譜」(臨川黄鶴撰)、次に「集千家註杜工部詩門類」があり、その後に鐘式及び鑪式の二木記がある。鑪式の方には「勤有堂」の字が刻されているが、鐘式の方の文字の部分を切りとって、別紙を裏から貼ってある。此は元来天目六及び王記によれば、「皇慶壬子」の四字があった筈で

ある。次に「集註杜工部詩姓氏」をおき、以上を以て第一冊。第二冊は目録から成り、首に「集註杜工部詩目録」と題し、第二・三行「東萊徐居仁編次／臨川黄鶴補註」と題署、目録の末、尾題の前に「余志安刊于勤有堂」の刊記一行が存する。本文巻首「集千家註分類杜工部詩巻之一」、第二・三行低八格、「東萊徐　居仁　編次／臨川　黄　鶴　補註」と題する。巻二以下はこの第二・三行の題署がない。末の巻廿五の尾題後四行を空けて、「皇慶壬子余志安刊于勤有書堂」の刊記が印されている。双辺（一九・六×一二・六糎）有界十二行、行廿字、注小字双行、行廿六字。版心線黒口双黒魚尾、「杜詩註巻幾　（丁付）」。「子／晉」「汲古／主人」「御史／之章」「季印／振宜」「滄／葦」「季振宜／蔵書」等の印記。毛氏汲古閣・季振宜旧蔵。「季滄葦蔵書目」著録の「杜工部集廿五巻元板」はこの本を指すのであろう。天目六・王記参照。

又　二四冊

惇本堂原蔵。後補藍色絹表紙（二五・五×一六・四糎）。襯装。前掲本と同版であるが、伝序碑銘末の篆書木記のある六行を切って別紙を継ぎ、詩門類及び姓氏を欠き、目録末の刊記の所は別紙を貼り、「皇慶壬子（この四字元来なし）余志安刊于勤有堂」と補写、また巻廿五の尾題の刊記のある末丁の裏葉は別紙を補ってある。即ち刊記のある箇所を悉く削除したのは、宋版と偽らん為か。首に四庫提要の写一葉を附綴。「毛晉／之印」「汲古得／修綆」の蔵印あり。

同　二五巻附首目・文集二巻　〔元至正八年〕刊〔明〕印（広勤書堂）　覆元皇慶元年建安余氏勤有堂刊本

二四冊

養心殿原蔵。後補淡鶯色地金切箔散し表紙（二三・六×一五糎）。前掲本の覆刻で、首目・首尾題の体式・版式を同じうするが、首目の綴じの順序が異っている。首の杜工部伝序碑銘の末に「広勤書堂新刊」の木記があり、次に集註杜工部詩姓氏及び集千家註杜工部詩門類をおき、門類の末に鐘式及び鑪式の木記があって、鑪式には「広勤堂」の三字、鐘式木記には「三峯書舎」の四字がある筈であるが、その箇所が切りとられて、別紙が裏から貼られている（以上第一冊）。次に目録及び年譜があり、目録尾題の前に刊記を剜去せる痕蹟が残っている。巻廿五巻末に刊記はない。四周双辺（一九・七×一二・七糎）有界十二行、行廿字、注小字双行、行廿六字。線黒口双黒魚尾「杜詩註巻幾　（丁付）」。文集は詩集と字様雕刀を異にし、恐らく明初の刊刻であろう。「劉氏／景清」「子／発」「養正／書屋／珍蔵」「謙牧／堂蔵／書記」「兼牧／堂書／画記」等の蔵印あり。

本版は従来諸家目共に、前掲の皇慶元年建安余氏勤有堂刊の後印となし、元から明に活躍せる三峯葉氏広勤書堂が余氏勤有堂からその板木を譲り受けて刷り、文集のみを新刻せるものとなした。此をやゝ詳しく論じたのは、葉徳輝の「書林清話」巻四の「元建安葉氏刻書」の条で、その論の俑をなしたのは天禄

琳琅巻六の記事である。しかし本版は勤有堂版とは明かに別版で、その覆刻である。しかも広勤書堂が直接覆刻をなしたのではなく、これより前元至正八年に潘屏山積慶堂圭山書院が覆刻発行している（書陵部・静嘉堂文庫・岸部家〈積翠軒旧蔵〉・中央研究院・北京図書館・北平図書館〈旧京580―583著録〉蔵）。広勤書堂はその板木を譲り受けて刷印せるもので、文集は従来の説の如く広勤書堂の新刻と思われる。楊録・王記には巻廿五巻末に「壬寅年孟春広勤堂新刊」の一行の木記が刻されていると誌すが、以下の現存本にはその刊記が見えない。壬寅は至正廿二年であろうが、後にこの刊記を削除したのであろうか。この広勤書堂版は他に、内閣文庫・大倉集古館（存文集）・中央図書館（三部）・台湾大学図書館（楊氏海源閣旧蔵、楊録著録本は文集二巻を附し、巻末に壬寅云々の刊記ありと記すが、この本には文集なく巻末の刊記なし、楊録著録本とは別蔵本であろう）・上海図書館・米国国会図書館蔵本等が知られ、また瞿目瞿影・丁志盍影・劉影著録本がある。

又　存巻一・二並年譜　二冊

後補黄絹表紙（二四・二×一六・三糎）。首目は杜工部年譜を存するのみ。この本印面比較的美しい。天禄琳琅各璽印、「安熙／之印」「敬／仲氏」「離石安／敬仲珍蔵／経籍印」の蔵印あり。天目続六に四函二十四冊と著録、当時は完本であったらしい、たゞ誤って宋版と録されている。

常建詩集　二巻　唐常建撰　〔南宋〕刊（臨安府・陳宅）　一冊

燕喜堂原蔵。後補紺色絹表紙（二六×一五・七糎）、裏打補修が加えられ、金鑲玉装。原料紙縦一八・七糎。本文巻首「常建詩集巻上」と題し、巻上の尾題の次に「臨安府棚北大街睦親坊南陳宅刊印」の刊記一行あり。左右双辺（約二二・五×一二糎）有界十行、行十八字。版心白口単黒魚尾、「常建　（丁付）」。所所破損し、特に版心は殆ど全葉破損に近い。巻中玄絃筐貞樹等に欠筆を見る。天禄各璽印、「東里／艸堂」（陰刻）「廬陵／楊士／奇印」（陰刻）「山荘」「有何／不可」「堯峰／山荘」「謙牧／堂蔵／書記」（陰刻）「兼牧／堂書／画記」「山光／塔景／楼」「平陽季／子珍賞／図書記」「沅叔／審定」の蔵印。明の楊士奇・清の汪琬・揆叙等旧儲。天目続六・故宮書影・呉志著録。天禄琳琅叢書に影印所収。

楊氏海源閣旧蔵本（楊録・王記著録、現所在未詳）・北京図書館蔵本（周氏旧蔵、この本或は海源閣旧蔵か）は或は同版か。

*昌黎先生集　存首一〇巻　唐韓愈撰　李漢編　〔南宋光宗頃〕刊　一冊

後補金切箔散し黄色表紙（一九・八×一二・八糎）。修補が加えらる。首に「昌黎先生集目録」あり。但し目録は十巻に止り、末の尾題一行は襯補である。此は本書は元来四十巻であるのに、詩律のみの首十巻を完本らしく偽装せんとした後人の妄補と思われる。本文巻首「昌黎先生集巻第一」、次行低九格、

「門人李　漢　編」と題し、毎巻題後目録を列して、本文に連属する。左右双辺（一七・三×一〇・三糎）有界十一行、行廿字、校字小字双行。版心白口単黒魚尾、「韓幾　（丁付）」。下象鼻に刻工名あり。文中玄炫懸朗弘泓殷匡筐恇胤耿恒禎貞楨偵徵樹豎讓頊桓完莞構搆購覯遘彀轂慎の字に欠筆を見る。下象鼻に破損があるので、刻工名は悉く明かにし難いが、王存中、王、沈翔、沈、師順、文、陳、洪、趙、通、李、劉、祖?等。巻一の第三葉表末行及び裏初行並に巻十の末葉初二字は補筆、また巻八は補写。「宝／孚」「韋／叔」「浙西鄭端簡公裔孫璥」（以上陰刻）の蔵印あり。呉志著録。

字様端正撫印清潔の上本で、避諱は孝宗に止って、光宗の敦等の字以下に及ばず、刻工の王存中は静嘉堂・東大分蔵の元氏長慶集に、師順は淳熙刊史記に、本版と同版と思われる中央図書館本に見る劉中は、上掲の南宋前期刊周官講義・慶元三年刊漢隷字源・乾道二年泉南郡庠刊孔氏六帖・宋嘉定十二年温陵郡斎刊資治通鑑綱目にその名が見える。従って欠筆刻工名版式から見て恐らく高宗末から光宗間の浙江地区の刊刻と思われる。中央図書館蔵本（存巻卅九・四十、密均楼・張氏等旧蔵）は恐らく同版と思われる。「百宋一廛賦注」に「又残小字本昌黎先生集毎半葉十一行毎行廿字所存巻一至十字画方勁而未有注当是北宋槧又残本同前刻所存第三十九第四十両巻」と著録されたのは本版に該当するらしく、また「滂喜斎蔵書記」巻三の「宋刻昌黎先生集四十巻外集十巻一函六冊」も同版と見られる。たゞ上記の如く本版は北宋の槧に非ざることは明かである。潘記に曰く、

此本行款与堯圃所言一一脗合惟後有影写紹興己未劉昉序一葉序云潮州公旧治大観初先大夫嘗集京浙閩刊本及趙徳旧本参以石刻訂正之郡以公廟香火銭刊行中経兵火遂無孑遺今訪得旧本重刊序後又有木図記云淳熙改元錦谿張監税宅善本以此証之小字本一刊於大観再刊於紹興三刊於淳熙此刻精勁抜俗疑為大観祖本末後一葉従別本影鈔耳不得執此以難堯圃也堯圃所蔵僅前十巻此惟有五巻影写餘皆宋刻可以傲士礼矣

と。劉昉序並に序後木記は果して元来本版にあったものから影写せるか、別版より重鈔せるか、今知る由もない。しかし本版を紹興己未（九年）刊本の淳熙元年重刊と目しても左程支障はなく、錦谿は浙江臨安県（福建にも同地名があるが）に在る。従って呉哲夫氏は潘記を根拠として淳熙間浙本と著録している。しかし潘氏蔵本の劉昉序の影鈔の底本が未だ明かでないから、今光宗中浙刊として後考を俟つ。静嘉堂文庫蔵本（存首十巻、巻三―五鈔補、陸志・陸続跋著録）は本版と行格を同うするが別版の中字本で、南宋淳熙十六年南安軍の跋を有する大倉集古館蔵「韓集挙正」と版式を同うし、同時同所の刻と思われ、陸志が北宋刊とするは失考である。本版は韓文刊本中最早本の一つであるから、依て以て諸本の訛脱を訂し得ることは、中央図書館蔵本の応陞の手識や呉哲夫氏の指摘する通りである。

（追記5）

朱文公校昌黎先生文集　四〇巻遺文一巻集伝一巻　唐韓

愈撰　宋朱熹校異　王伯大音釈　〔元後至元七年〕刊（〔日新書堂〕）〔明〕修　一四冊

景福宮原蔵。後補黄色表紙（二三・五×一四・九糎）。襯装。首に「晦庵先生朱文公韓文考異序」、王伯大序、「昌黎先生集諸家姓氏」、「朱文公校昌黎先生集序」、「汪季路書」、「朱文公校昌黎先生集凡例」、「朱文公校昌黎先生集目録」（李漢編集）あり。本文巻首「朱文公校昌黎先生文集巻之一」、次行低一格「晦庵朱先生考異（隔二格）留畊王先生音釈」と題す。但し巻二以下第二行の題署なく、「文集」を「集」に作り、大題下二格を空けて「（考異音釈附）」と題する。双辺（一九・三×一二・二糎）有界十三行、行廿三字、注小字双行。版心小黒口双黒魚尾、「昌文幾　（丁付）」。巻四十の第七丁以下は明修か。

考異序の末に「至元辛巳日新書堂重刊」の陰刻木記を有する版と同版で、この本はその刊記の所が切り取られ、別紙を以て襯補されている。同版は他に内閣文庫（二部）・斯道文庫（二部）蔵本があり、丁志斎影著録本は書影によれば同版と思われるが、刊記の葉を欠き、外に王記著録本（現所在不明、王伯大序末に刊記ありと記すは誤記か）がある。本版は刊記に重刊と記された如く恐らく宋後期建刊本の覆刻であろう。本書は数多い韓集刊本中、元明の間に最も盛に流布したので、この日新堂版から明代に次掲本を始め幾種かの覆刻が輾転翻刻され、悉く行款版式を同じうしているので、それ等が全て同版の如く誤認され易い。

同　四〇巻外集一〇巻集伝一巻遺文一巻　〔明正統一三年〕刊（〔王宗玉〕）　一六冊

昭仁殿原蔵。後補茶色表紙（二六・四×一六・三糎）。金鑲玉装。原料紙縦二三・五糎。首目は前半を欠き、「朱文公校昌黎先生集序」、「汪季路書」、「朱文公昌黎先生集凡例」、「朱文公昌黎先生集目録」（李漢編集）を存する。首尾題の体式前掲本に同じ。外集は首に「朱文公校昌黎先生外集目録」をおき、本文巻首「朱文公校昌黎先生外集巻之一　（考異音釈附）」と題す。双辺（一九・三×一二・二糎）有界十三行、行廿三字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「昌文幾　（丁付）」。「宣統／御覧／之宝」の印記あり。

この本は四部叢刊収本と同版で、たゞ同本は朱文公校昌黎先生集序の後に、

韓柳二先生文集行世久矣唐季歴代以来儒／人文士莫不宗之以為文章之模範序記之矜／式惜乎旧板漫滅続集遺闕読者憾焉本堂広／求訪到善本巻集全備宗玉喜不自勝命工鼎／新綉梓以広其伝使四方文学君子得覩　／二先生之全文不致湮没豈不偉歟

幸　鑑／歳舎戊辰十月吉旦　書林王　宗玉　謹識

の刊記がある。この本は序末の次の行よりこの刊記の箇所を切りとって別紙を以て襯補されている。四部叢刊を始め諸家目がこの「戊辰」を元天暦元年に繋けて元槧となした。しかし本版は前掲の至元七年日新書堂刊本と覆刻の関係にあるが、字様雕刀共に日新書堂版よりは後出の明初刻と認めざるを得ず、その

刊刻は天暦に溯り得るものではない。戊辰は明洪武二十一年か或は正統十三年に繫ぐべきである。北京図書館目録は洪武二十一年と著録している。しかし次に述べる如く、この韓集と対になる柳集に正統戊辰の刊記があるので、正統十三年としたい。四部叢刊本は巻卅七の末の「復讎状」の後半と「銭重物軽状」の前半とを脱しているが、この本は補刻によって補充されている。同版に静嘉堂文庫（陸志著録）・中央図書館・北京図書館（二部、一は涵録著録）・涵芬楼（存十七巻）蔵本があり、瞿目瞿影・劉影著録本は同版らしく、北京図書館本以外は何れも刊記を欠いているようである。故宮博物院には本版をさらに覆刻せる明前期刊本が蔵される。

*増広註釈音辯唐柳先生集　四三巻外集二巻附録一巻（欠別集二巻）　唐柳宗元撰　宋童宗説注釈　張敦頤音辯潘緯音義　〔南宋末元初間・建〕刊　三〇冊

昭仁殿原蔵。襯装。首に乾道三年十二月呉郡陸之淵書の「柳文音義序」、「増広註釈音辯唐柳先生集諸賢姓氏」、「柳先生年譜」（以上一冊）、次に「増広註釈音辯唐柳先生集目録」あり。潘緯及び劉禹錫の両序を欠く如し。本文巻首、「増広註釈音辯唐柳先生集巻之一」、第二・三・四行低五格「南城先生童宗説註釈／新安先生張敦頤音辯／雲間先生潘緯音義」と題す。双辺（巻二以下は左右双辺を混ゆ、一八・三×一二・一糎）有界十二行、行廿一字、注小字双行。注中「童云」「張云」「潘云」の標識は墨囲陰刻。版心線黒口双黒魚尾、「柳文幾（或は柳幾フ、柳幾、夕幾、卯文幾、木文幾等）（丁付）」。巻十七・十八には上象鼻に大小字数を有する葉がある。巻廿二末葉補写。玄朗弘匡筐恇匡恒貞偵楨徵讓勗桓完構搆購覯遘講慎敦等に欠筆を見るが、此等の宋諱の字は欠筆せざる所も多く不定である。字様に円潤を帯びた元風も少からず、宋末元初間の所謂麻沙本である。首に癸卯仲春の清高宗の自筆題十行一丁を附綴（全文天目続一所収）。天禄各璽印、「沛国郡／図書印」「松菊／間情」「大／巫」「呉越／王孫」「朱／季子」（陰刻）「朱氏／秘玩」「諸西／崖書／画印」「子々孫々／永保／用享」「慈雲／楼」（陰刻）「西崖／諸氏／家蔵」「季／□」（陰刻）「由拳」（廬盧形陰刻）の印記あり。天目続一に「四函三十二冊」と著録、しかし現在別集二巻は散逸している。呉志著録。

筆画精端撫印清朗にして、麻沙本の上乗なるものと言うべきである。北京図書館蔵本（潘氏宝礼堂旧蔵、元刊と著録、潘録に宋刊と著録）や上海図書館蔵本（存巻一〇―一三）は或はこの本と同版か。本書は元明の間柳文中最も流布したので、本版に基づく建刊本が続出し、元以後の本は行格を十三行廿三字に変えている。

同　四三巻別集二巻外集二巻附録一巻　〔明正統一三年〕刊　覆元建刊本　一二冊

昭仁殿原蔵。後補藍色絹表紙（二五・五×一五・一糎）。襯装首に劉禹錫纂「唐柳先生文集序」、「増広註釈音辯唐柳先生集目録」があるが、陸之淵音義序、諸賢姓氏・年譜を欠く。本文巻

首、「増広註釈音辯唐柳先生集巻之一」、第二・三・四行低七格、「南城先生童宗説註釈／新安先生張敦頤音辯／雲間先生潘緯音義」と題す。双辺（一九・九×一二・一糎）有界十三行、行廿三字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「柳文幾　（丁付）」。最後の冊は左右下半に破損が多い。天禄各璽印、「桐樹／□□」印。天目続六著録。比較的早印。

又　一六冊

南庫原蔵。後補藍色絹表紙。襯装。首目の諸賢姓氏・年譜を欠く。

斯道文庫・中央図書館・涵芬楼（涵録著録、四部叢刊所収本）蔵本・劉影著録本等と同版で、従来元刊とされている。しかし斯道文庫本には、首の増広註釈音辯唐柳先生集諸賢姓氏の末に「正統戊辰善敬堂刊」の陰刻木記が印されている。この正統十三年善敬堂刊本は北京図書館にも蔵される。従って本版には同版でありながら、有刊記と無刊記の二種があり、この故宮本は比較的早印であるが、斯道文庫本はそれよりは後印で、この刊記は後からの入木らしくも見える。しかし本版は斯道文庫別蔵（瞿目・瞿影著録本は同版本か）の元末至正頃の刊本の覆刻で、最初の方は両者見分け難い程よい覆刻であるが、後に行くにつれて槧刀が粗になり、字様益々元風を失って、明風を帯びて来るから、正統十三年の刊であるか、その前であるかは別として、その刊刻が元に非ずして、明前期にかゝることは明かである。しかも本版は前掲の書林王宗玉刊「朱文公校昌黎先生文集」と版式字様を同じくする。同本の刊語に「韓柳二先生文集行世久矣」「二先生之全文不致湮没云々」と述べる如く、韓柳二集を組にして出版したもので、本版は王宗玉版たること明かである。韓集の刊記の年記は「蔵舎戊辰」で、此は「正統戊辰」（白文）で、この下の「善敬堂刊」（白文）との間に細い切れ目がある。しかも「善敬堂」は埋木の如く見える。従って雕刀から見ても韓集の「戊辰」も正統戊辰（十三年）と考えた方がよいようである。上海図書館善本目録には十三行廿三字の元延祐刊本が録され、それが元刊十三行本の祖かもしれぬ。ちなみに既に前に紹介せる故宮博物院楊氏観海堂蔵本は本版をさらに覆刻せる明版であって、それには正徳頃の補刻がかなり加っている。

劉賓客文集　三〇巻外集一〇巻　唐劉禹錫撰　宋宋敏求編　董弅校　〔南宋初〕刊〔南宋〕遞修　一二冊

中央博物院原蔵。後補金切箔散し黄色表紙（二三×一五・三糎）。襯装。首に序目なく、或は欠か。巻末宋敏求及び紹興八年董弅の両後序あり。本文巻首「劉賓客文集巻第一」（「劉」の字後修）、次行低一格「正議大夫検校礼部尚書兼太子賓客贈兵部尚書劉禹錫」と題し、毎巻大題後篇目を列して本文に接する。巻二以下は次行の題署なし。左右双辺（一五・三×一一糎）有界十二行（外集は十三行）、行廿二字。版心白口単黒魚尾、「文幾（外集禹幾）（丁付）」。下象鼻に刻工名があるが、破損せる所が多い。玄眩懸弦鉉朗敬擎驚儆弘泓殷慇匡筐境鏡竟胤耿恒緪

貞楨偵徴懲署樹属譲桓完晥筦構購遘轂等に欠筆を見、高宗に止って、慎等の孝宗以下の宋諱は避けない。此等避諱の字も欠画せざる所もあり、必しも一定しない。補刻が多く、修補は大別すれば二種、一は宋前期より中期にかけて字様原刻に近く、二は宋後期のそれで、原刻或は第一次修に更に部分的修補が加った箇所も存する。刻工名は、王文、文、王、楊明、楊思、思、楊、柯思、葉明、厳定、徐宗、徐立、卓宥、方逵、方迁、迁、方通、通、駱昇、駱元、元、劉宝、劉、宝、張明、李棠、棠、羊思、江孫、江泉、泉、江、旻等で、この中には補刻の刻工も含むが、同名の刻工でも、葉により字様・印面に参差があるので、原刻か修補かの識別が困難である。巻十三の第三・六葉欠失。巻末に、「歳在戊午二月江安傅増湘借読四月読畢謹記」の民国七年の傅増湘の手識がある。「玄賞」(葫蘆形)「華夏」(陰刻)「篤」「寿」「遼西郡／図書印」「万巻／堂蔵／書記」「楽天」(陰刻)「白和氏／真賞」の蔵印あり。即ち明の華夏（字は中甫、号は東沙子、無錫の人）及び項篤寿（字は子長、嘉靖壬戌の進士）の旧蔵にして、後清内府に入り、熱河行宮に儲らる。昌識によれば、嘉靖二十八年四明豊坊が撰せる「真賞斎賦」に華氏所蔵の宋元精刻三十餘種を列挙せる中に、「劉賓客集共四十巻内外集十巻」と賦されているという。この本の扉に「嘉靖乙巳四月観于中甫華君之東沙草堂文嘉(印)(印)」の観款一行あり。文嘉は字は休承、徴明の次子。故宮選萃・昌識著録。一九六七年東京・大安刊本は明記していないが、この本の影印である。

巻末後序に、

世有夢得集四十巻中逸其十凡詩三百九十二篇所遺蓋称是然未嘗纂箋今哀之得劉白唱和集一百七聯句八杭越寄和集二彭陽唱和集五十二汝洛集二十七聯句三洛中集三十聯句五名公唱和集八十六呉蜀集十七柳柳集六道塗雑詠一南楚新聞四九江新旧録一登科文選一送毛仙翁集一自寄楊毗陵而下五十五皆沿旧会粋莫詳其出或見自石本者無慮四百七篇又得雑文二十二合為十巻曰劉賓客外集庶永其伝云常山宋敏求題

夢得集中所逸蓋自第二十一至三十巻後人因以第三十一至四十巻相続通為三十巻宋次道纂箋外集雖哀類略尽然未必皆其所逸者今不可攷也世伝韓柳文多善本又比歳諸郡競以刻印独是書旧伝於世者率皆脱略謬誤殆無全篇余家所蔵固匪尽善既為刻印因訪於郡居士大夫家復遠仮於親旧凡得十餘本躬為校讎是正夠可読而外集独余家有之更無它本可校第証其字画之舛譌其脱逸及可疑者存之以遺博洽多聞取正焉紹興八年秋九月壬寅広川董弁題

と。以て本集編纂の経緯が明かで、正に陳振孫書録解題の記す所と符合する。次にこの本が紹興八年董弁校刊本そのものに該当するか否かである。避諱が高宗に止って、孝宗以下に及ばないから、必しも紹興刊として不可とはし難いが、本版の刻工名を検討しよう。刻工の王文は北宋咸平刊南宋修呉書（静嘉堂文庫蔵）・孝宗以後浙刊武経七書（静嘉堂蔵）・紹興中宣州刊宛陵集等、楊明は越刊八行本礼記正義・周礼疏の補刻・紹興刊世説

新語・南宋刊史記（静嘉堂蔵）等、楊思・厳定・方逵・方迂・方通・劉宝・羊思は紹興刊世説新語、葉明は紹興廿八年明州刊文選・紹興刊王文公文集・世説新語・南宋初刊外台秘要方等、徐宗は明州刊文選・世説新語・孝宗以後刊欧公本末等、徐立は南宋刊史記、卓宥は孝宗以後浙刊論衡（書陵部蔵）・南宋初杭州刊漢書等、駱昇は明州刊文選、駱元は南宋刊国語（静嘉堂蔵）、張明は北宋刊南宋初修爾雅（静嘉堂蔵）・南宋前期贛州刊文選・紹興刊世説新語・越刊八行本尚書正義・淳熙中厳州刊通鑑紀事本末・南宋初刊礼部韻略（北平図書館原蔵）、江泉は紹興刊世説新語・南宋刊国語、李棠は越刊八行本周易注疏・南宋初杭州刊後漢書（静嘉堂蔵）等に同名の刻工を見出す。従って本版の刻工の多くが従事したのは、世説新語・越刊八行本注疏類・明州刊文選で紹興淳熙間の浙刊本である。しかし越刊八行本には補刻にその名が見え、紹興八年刊とすれば、その間少くとも約五十年餘の距りがあり、刻工から考えれば紹興八年刊とするにはかなり無理となる。従って昌彼得氏は紹興末年浙に於ける董本よりの翻刻と推定した。しかしながら、上に記せる如くこの本は補刻が多く、その刻工の多くが第一次修のそれで、紹興八年原刻の刻工と限らないことを考えるならば、本版を紹興八年董弁校刊本そのものとしても殆ど支障なく、寧ろそのように考える方がよいと思われる。今上の諱は末筆を欠くか否かは議論の分れる所であるが、避けずとし、且つ本版の刻工が原刻か第一次補刻（紹興年間か、それを遠く降るものではない）かの識別の困難な事情を勘案して、一歩譲って、重刊としても、その雕鏤は孝宗の世にある。

本版は他に所伝を聞かざる孤本であるが、劉賓客文集の宋槧には他に二版存する。一は瞿氏旧蔵（瞿目・瞿影著録）にして北京図書館現蔵の首四巻の零本で、十二行廿一字。「劉夢得文集」と題するが、賦を先にし、篇次はこの本と異ならざるようである。書影より察するに、刊年此より降る。二は「劉夢得文集」と題する十行十八字の南宋初刊本（伝栄西禅師将来本、建仁寺・福井氏崇蘭館旧蔵天理図書館現蔵、民国董氏刊・四部叢刊影印本あり）である。この本と同様三十巻外集十巻に分ち、巻数は一致するが、文集の所収詩文配列の篇次に至っては全く異なり、此は先文後詩、彼は先詩後文で、別系の編輯にかゝるものである。両書の篇次の異同は昌識に詳かである。三版相よってその訛脱を相互に訂し得る。

范文正公集　二〇巻別集四巻尺牘三巻　宋范仲淹撰

〔元天暦元年〕刊（〔范氏褒賢世家塾歳寒堂〕）〔元末明初〕修　（尺牘）〔元後至元三年〕刊　一二冊

昭仁殿原蔵。後補黄綾絹表紙（三〇×一九・八糎）。金鑲玉装、原料紙縦二七糎。首に元祐四年蘇軾の「范文正公集叙」、「范文正公集目録」「范文正公別集目録」あり。但し軾序の裏丁の後半、即ち「天暦戊辰改元／褒賢世家重刻／于家塾歳寒堂」の木記のあった箇所が切りとられて別紙で補われている。別集巻末に乾道丁亥五月既望邵武兪翊謹識の刊書跋、淳熙丙午

十二月日郡從事北海綦煥謹識の補刻跋、次に「嘉定壬申仲夏重修」の一行、次に「朝奉郎通判饒州軍州兼管内勸農営田事宋鈞／朝請大夫知饒州軍州兼管内勸農営田事趙旧襲」の銜名があり、次に富弼等の祭文五葉を附する。本文巻首「范文正公集巻第一」、次行低三格「古詩」と題する。尺牘は首に「文正公尺牘目録」をおき、本文首「文正公尺牘巻上」と題す。巻末に張栻朱熹の二跋及び至元再元丁丑正月甲子日八世孫文英百拜謹識の刊語がある筈であるが、今失われ、この本は尾題後四行をおいて以下五行分は烏糸欄の別紙を以て補われている。左右双辺（二二×一六糎）有界十二行、行廿字。版心白口単黒魚尾、「文正集（文正別集）幾巻　（丁付）」、下象鼻に、祐之、張允、張、周成、周、陳子仁、子仁、章益、益、章、方才卿、方、才、守中、趙、肖、走、陳、東、吉、楊、可、汝の刻工名がある。稀に双黒魚尾線黒口の葉のあるのは元末明初の補刻。尺牘は左右双辺（二三・三×一四・七糎）有界十二行、行廿二字、版心白口双黒魚尾、「巻上（中・下）　（丁付）」、上象鼻に大小字数がある。警驚恒貞桓覯搆遘等に間々欠筆がある。天禄各璽印あり、天目続六・呉志著録。

この本は、後掲の北平図書館原蔵本・静嘉堂文庫（陸志著録）・中央図書館（四部）・北京図書館（三部、一は潘録著録）・香港大学（三部、一は繆記、一は劉影著録）・上海図書館（残本二部）蔵本や瞿目瞿影・楊録・潘記（二部）・王記・涵録（有欠）著録本等と同版である。本版について、天目続・陸志・潘録・中央図書館宋本図録等の如く、巻中間々欠画を見、且つ字様端整なるを以て、特に天暦戊辰歳寒堂の刊記の葉を欠失せる本にあっては、之を宋乾道三年鄱陽郡斎州学刊淳熙十三年・嘉定五年遞修本としている。潘録は別集巻四の第十葉以下及び巻末の跋文・銜名が他と字様を異にし、仿松雪体にして円潤元風を帯びているので、「是本別集自巻四第十葉後即以元版補配前此各巻亦間有之」と言っているが、此は潘氏蔵本のみならず、この本及び他の諸本も同じであるから、後人の補配ではない。中央図書館の図録及び目録は、乾道刊宋遞修の板木にさらに天暦年間范氏歳寒堂に於て補刻が加えられたとしている。此に対し、瞿目は、「殆文正後人即依原本繙雕故写刻皆古雅与宋本款式無異」と、天暦重刊の刊記の通り、天暦刊とする。天暦重刻の際、一部は宋の板木を使用したとすれば、乾道以来百六十餘年を経、嘉定重補後にしても百十餘年後であるから、原刻宋修の所は印面が頗る邊邊の筈である。しかるに宋版らしき方整の字様の印面は部分的修補や漫漶があるにせよ、やゝ元風を帯びた葉（多く刻工名なし）に比してさ程差がない。その字様は宋前期杭州地区特有の方整な欧体で、形は整っているが、生硬の気味を免れないのは、覆刻である証左であろう。また刻工名から考えても、その陳子仁は元泰定元年西湖書院刊文献通考に、周成は宋嘉泰四年新安郡斎刊皇朝文鑑の元修に、張允は南宋初杭州刊梁書の元修の部分にその名が見える。しかし宋刊

本の刻工中にはその名を見出し得ない。この本には欠く尺牘巻末の文英の識語には「先文正公尺牘旧刊于郡庠歳久漫漶今重命工鋟梓刊置家塾之歳寒堂期与子孫世伝之」と。范氏褒賢世家塾歳寒堂では、この後范文正公政府奏議（元統二年刊）・遺文・年譜等や范忠宣公文集を元統・後至元年間に続刻し、此等は「二范全集」と総称されている。傅氏双鑑楼旧蔵（傅記著録）の北宋本范文正公文集二十巻（巻一配抄）九冊が今北京図書館に架蔵される。しかし乾道三年刊淳熙・嘉定遞修本は筆者の確め得た限りでは、諸目録に然か著録されても、実は天暦重刊本で、その宋刊本の現所在は知らない。莫跋・羅録著録本も宋刊とするが、恐らくはこの天暦刊か。

又　二〇巻別集四巻　一二冊

懋勤殿原蔵。後補濃藍色地金切箔散し表紙（三〇・五×一四・三糎）。襯装。前掲本よりやゝ後刷で、同様に軾叙後の天暦の木記の葉が切りとられ、別紙で補われている。

*元豊類藁　五〇巻続附一巻　宋曾鞏撰　元大徳八年序刊
（南豊・丁思敬）　一〇冊

昭仁殿原蔵。後補金切箔散し紺色表紙（三二×二〇・七糎）。襯装。首に大徳八年夏五広平程文海書の「大徳重刊元豊類藁序」、「南豊先生文集目録」あり、後に「続附南豊先生行状碑誌哀挽」一巻を附し、巻末に大徳甲辰良月東平丁思敬拝手書于巻尾の「元豊類藁後序」（末一葉は補写）がある。本文巻首「元豊類藁巻第一」、次行低一格「古詩」と題す。左右双辺（二三・八×一六・六糎）有界十行、行廿字、校注小字双行。版心白口双黒魚尾、「類藁幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、何元、何、盱江呉安叔、安叔、叔、盱江呉明甫、明甫、甫、呉明、明、呉宏道、呉宏、宏道、宏、呉、張仁可、仁可、仁、人可、元、李、熊、瑞等の刻工名がある。同一巻は殆ど同一人の刻工の手になり、巻四十三の第五葉版心に「元五月廿丶刊」と刻され、この前後の葉の刻工は殆ど元である。巻末丁思跋一葉の外に、巻廿七の末一葉補写。「濮陽李廷相雙檜堂書画私印」「玉峰孫氏／珍蔵」（葫蘆形）「天泉」等の印記あり。明の李廷相（字は夢弼、成化十七年生嘉靖廿三年卒）等旧蔵。故宮書影・呉志著録。

直斎書録解題に「元豊類藁五十巻続四十巻年譜一巻」を録して曰く、

王震為之序年譜朱熹所輯也案韓持国為鞏神道碑称類藁五十巻続四十巻外集十巻本伝同之及朱公為譜時類藁之外但有別集六巻以為散逸者五十巻而別集所存其什一也開禧乙丑建昌守趙汝礪丞陳東得於其族孫濰者校而刊之因碑伝之旧定著為四十巻然所謂外集者又不知何当則四十巻亦未必合其旧也

と。南渡後続稾外集は散逸し、今は開禧刊本も伝らず、五十巻本の宋版は遺存しない。たゞ王記は十二行行十九乃至廿一字の巻六のみの零本を宋刻本として著録している。本版は巻末の丁思敬の後序によれば、大徳六年南豊に守たりし時、前邑令黄斗斎が嘗て繡刻せる本を得、その板が兵燹によって滅んだので、

重刻すと。本版が明以降の翻刊の祖本となっている。この本は匡郭寛広字様端整撫印清爽にして元槧の上品と称される。伝存極めて尠く、ただ季滄葦・楊氏海源閣等旧蔵本（序目・後序欠、楊録に誤って宋版と著録、北京図書館現蔵か、中版録307著録）が知られる。四部叢刊の底本となった蔣氏密韻楼蔵本は、元刊元印本とされているが、本版とは別版で、恐らく明初刊本であろう。天目続十一著録の元刊本は四部叢刊本と同版らしい。南豊集は他に金刊「南豊曾子固先生集」三四巻（北京図書館蔵、中版録255著録、天目続六著録宋刊本は或はこの金平水刊本か）、宋刊「曾南豊先生文粋」一〇巻（潘氏宝礼堂旧蔵北京図書館現蔵、天目続六・潘録・中版録90著録）があり、本版未収の詩文も含み、相互に訛脱を訂補することができる。

淮海集　四〇巻後集六巻淮海居士長短句三巻　宋秦観撰

〔宋乾道九年〕刊（〔高郵軍学〕）〔宋紹熙三年・元・明初間〕遞修　一二冊

延暉閣原蔵。後補藍色絹表紙（二四・五×一七・三糎）。首に簡単なる全書総巻目があり、次に「淮海集目録」（次行低八格「秦観　少游」と題署）がある。本文巻首「淮海集巻第一」、次行低八格「秦観　少游」と題す。後集は前に「淮海後集目録」（次行低八格「秦観　少游」と題署）があり、本文巻首「淮海後集巻第一詩」、次行低八格「秦観　小游」と題す。巻末に自序の「淮海間居文集序」及び「舒王答蘇内翰薦秦公書」「曾子開答淮海居士書」「蘇内翰答淮海居士書」「後山居士外師道撰淮海居士字序」の文五篇を附する。長短句は目録を欠き、本文巻首「淮海居士長短句上」、次行低七格「秦観　少游」と題する。左右双辺（二〇×一四糎）有界十行、行廿一字。版心白口単黒魚尾、「秦巻幾（或は秦後集幾、長短句幾等）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、潘正、正、潘、潘璋、璋、李憲、李、憲、趙通、趙、肖、曲釿、周佾、劉志、志、劉明、明、劉文、劉仁、仁、劉元中、劉宗の刻工名がある。玄眩炫弦絃擎鷩警殷匡筐竟鏡貞徵樹桓構覯搆慎の字に間々欠画が見られ、敦の字には往々後から挖改して末画を欠いた痕があり、拡等の字は欠筆をしていない。巻中欠葉が多く、巻一（第五・六葉）二（五・六）三（三・四）四（三・四）九（二―五）十二（五・六）十三（三・八）十四（一―四、九・十）十六（一・二・四・五）十七（五・六）十九（一・二）廿（六・七）廿一（一―四）廿二（六―九）廿三（三―六）廿四（二・七・八）廿七（一・七）廿八（三・五・六）卅一（一・二・五）卅二（七）卅三（三・四、七―九）卅四（四・五）卅五（七）卅八（一一・一二）卅九（五・六）後集四（五―九）五（七）六（九・一〇・一六・一七）長短句上（三・四・七・八）中（一―五）下（二―六）が欠葉であるが、巻四第三葉を除いて他は全て原式によって秀麗な字体で鈔補されている。原刻の印面は漫漶甚しく、部分的或は全葉の補刻が入り、その降るものは元末明初間の修にかゝり、恐らく明初の印であろう。巻末に康熙甲戌春三月旧史氏後学厳繅孫の手書題跋一葉が附綴され、その

題識に曰く、「右淮海先生集四十巻後集六巻吾錫秦氏世守本也淮海集雕本先後四家儀真黄中丞刻於山東高郵張牧刻於鄂州胡民表刻於高郵最後李君之藻萃薈諸家編次成帙至今流伝坊間而巻帙互異篇次多不詮整此本為先生自定自叙云十巻本伝云四十巻今分為四十六巻蓋北宋槧本即雪洲黄氏所称監本惜歳久漫漶者也先生二十四世孫対巌宮諭出以示余爰識数語於巻尾」と。巌縄孫は清無錫の人、字は蓀友、詩古文を以て名をあげ、また書絵に巧み。巌氏跋に長短句三巻に触れてないが、この三巻は他の四十六巻に比し料紙を異にしているから、或は後の配補か。故宮書影・呉志著録。長短句三巻のみは民国十九年故宮博物院刊影印本あり。

本版と同版の今知られるものに、内閣文庫・北京図書館（汲古閣旧蔵天目続七著録本か）・涵芬楼（存巻二一―二九、涵録著録）蔵本、劉影・王記著録本（存巻一二―二五、黄丕烈等跋あり）がある。潘記著録の長短句三巻〈宋刻僅存上巻及中巻之二葉四葉餘皆臥庵鈔補」（黄丕烈跋〉も同版であろう。内閣文庫本は無印清雅の早印本で、この本の全書総目はないが、この本の後集末に附された自序等の淮海間居文集序が巻首に冠され、巻末にこの本に失われた、乾道癸巳正月望日左朝奉大夫試給事中兼侍講三山林機景度叙の「淮海居士文集後序」、次に高郵軍学計四百四十九板并副葉標背等共用紙五百張に始る版数紙数紙価工墨価官収工料価表、次に「軍学諭韓濤林逕楫校勘／左修職郎高郵軍録事参軍兼推官兼教授趙伯膚／右承事郎権発遣高郵軍主管学事兼管内勧農営田屯田事王定国」の列銜がある。林機後序中に述べて曰く、「高郵荐更兵火索囊善本訛舛失真里人王公定国之牧是邦剸裁豊暇開学校以先士類謂捨匠石園之而掄材於遠天下之大弊以公之文易於矜式捜訪遺逸咀華渉源一字不苟校集成編総七百二十篇釐為四十九巻板置郡庠」と。即ち王定国が乾道年間高郵軍学（江蘇省）に於て開板せしことが判明する。内閣文庫本にないが、天目続七著録本には、この林機後序の後に紹熙壬子謝雲跋ありと記し、その引用によれば、「以蜀本校増字六十有五去字二十有四易誤字三百有奇雲為高郵軍学教授所重校也後大書謝君以理学名家而留意字学商榷此書遂為善本尚恨其惜版不悉改竄然知書者亦可以類推陽羨邵輯書於郡斎」と。以て紹熙三年謝雲が蜀本によって対校して一部修補を加えたことがわかる。内閣本にはこの跋がないのは、紹熙の修以前の印であるからであろう。この本を内閣本に比するに原刻の葉に於ても、内閣本が「御名」に作るのを埋木を以て「構」（末画を欠く）に改め敦字の末画に剜改の痕のあるのは恐らく光宗の世に入った紹熙の修と思われる。本版が後序の乾道九年前後に刊刻されたことはその刻工名によっても傍証し得る。南宋前期刊越刊八行本尚書正義・周礼疏に李憲・劉仁、同越刊礼記正義に李憲・劉仁・趙通、南宋前期刊周官講義に李憲・趙通・劉文、淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解に劉明、慶元刊楽書に劉文・劉仁、光宗頃刊広韻に李憲、南宋初杭州刊史記・漢書に李憲、同梁書に潘正・劉志・劉仁、同南斎書に劉仁、孝宗頃刊論衡に李憲、

慶元元年刊本草衍義に劉明・劉仁、南宋前期刊麗沢論説集録・同東萊呂太史文集に周份、開禧刊周益文忠公集に劉宗、南宋前期贛州刊文選に劉志・劉宗・劉文、紹興間明州刊文選の補刻に劉文の名が見える。淮海集の宋槧には、他に瞿氏旧蔵北京図書館現蔵の宋中期眉山刊九行十五字の残本（瞿目・瞿影・王記・中版録244 245著録、存巻一―一八、二七―三四）がある。同じく四十巻で巻第を等しくするらしいが、涵録によれば、本版と対比するに、「稍一対勘。微見差異」と。

批点分類誠斎先生文膾　前・後集各一二巻　宋楊万里撰
李誠父編　〔明前期・建〕刊　四冊

頤和軒原蔵。後補金切箔散し淡黄色表紙（一七・八×一一・八糎）。首に開慶己未（元年）清明節厳陵蛟峰方逢辰君錫序の序（写刻）、「批点誠斎先生文膾前集総目」（末一丁欠）、「批点分類誠斎先生文膾前集目録」（後集総目及び目録は後集の首にあり）がある。本文巻首「批点分類誠斎先生文膾巻之一　前集（盛田陰刻）」（跨行）と題す。左右双辺（一四・六×九・八糎）有界十二行、行廿字。圏点墨線附刻。版心小黒口双黒魚尾、「文前（文後）幾　（丁付）」。巻一第四―六葉及び巻十第五・六葉欠。

首の逢辰序中に曰く「建安李誠父取先生片言隻字之有助於挙子者門分条析為前後集前集為綱者四十三後集為綱者三十二名曰文膾蓋鼎嘗一臠皆足以炙人口而膏筆端也」と。全集中の策論を分類して科挙作文の用に供せる俗本。静嘉堂文庫（陸志著録）中央図書館に同版本があり、同館別蔵六冊本（明初刊）の覆刻である。北京図書館・上海図書館蔵本や瞿目著録元刊本は或は同版か。皆元刊とするが、本版は明前期刊である。

*南軒先生文集　存巻五―三二・首目　宋張栻撰　朱熹編
〔南宋淳熙・慶元間〕刊（〔厳州〕）〔宋〕修　四冊

昭仁殿原蔵。後補金切箔散し黄色表紙（二六・四×一八・七糎）。首に淳熙甲辰十有二月辛酉新安朱熹序を冠し、次に「南軒先生文集総目上（下）」（上巻第二行「広漢張　栻敬夫」と題署、目下巻末の裏葉欠）あり。本文巻首、「南軒先生文集巻第幾」と題す。左右双辺（二〇・五×一六糎）有界十行、行十七字。版心白口双黒魚尾、「南軒集詩（或は書等の小題）巻幾（丁付）」、下象鼻に、江漢、漢、江浩、浩、江、方中、中、方茂、茂、方忠、忠、方淳、淳、方、呉津、呉、徐大中、大中、中、鄭春、春、禾等の刻工名あり。宋諱の欠筆は厳謹ではないが、貞桓敦拡に欠画があり、敦拡は末画を欠かざる所もあって一定しない。少しく部分的な修補が加っている。本書は元来四十四巻であるが、この本は巻廿九至卅二の四巻の首尾大題及び版心の巻次数の箇所を切りとって襯紙を以て巻一―巻四に竄改し、且つ総目の首葉は目録題を残して、以下を切り取って、巻廿九―卅二の四巻のそれを補入して、巻一―四の目次の如く作為し、以て全廿八巻の完本の如く偽装している。巻二（実は巻卅）の第十一葉、巻三（実は巻卅一）第三葉、巻廿七第十三葉補写。「朱文／石史」「朱曾人」（陰刻）「曲阿孫氏七峰／山房図籍私篆」「曲阿／孫仲子」「青霞館」等の蔵印あり。「朱文石史」は

明の朱大韶の蔵印、字は象元、松江華亭の人、嘉靖二十六年の進士、尤も宋版を愛す。傅続記・故宮書影・故宮選萃・呉志著録。

刻工の江漢・江浩・方忠・方淳・方茂は淳熙中厳州刊通鑑紀事本末に、且つ江漢は南宋初刊宋修本草衍義の補刻、方茂は大中と共に南宋刊欧公本末（静嘉堂蔵）にも、大中は越刊八行本尚書正義の第一次補刻にも、鄭春は越刊八行本尚書正義及び周礼疏の第一次補刻・宋刊古史・北宋刊光宗頃修爾雅（静嘉堂蔵）の補刻・南宋前期贛州刊文選・紹興刊世説新語等に、方中は古史・紹興刊陳書・紹興刊世説新語・南宋刊欧公本末・南宋初杭州刊梁書等に同名の刻工を見出し得る。刻工・欠筆・版式より察するに、淳熙十一年朱熹の編纂後、さほど時を経ぬ淳熙・紹熙・慶元間頃の刊刻にかゝり、淳熙中厳州郡庠刊通鑑紀事本末と刻工の共通するものが多く、本版亦厳州の刊か。本書には朱熹校定前既に別本流伝の刻本（陳志著録の三十巻本か）があったと云うが、今その宋刊本は伝わらず、天目続七にこの本と同版らしい宋刊十二冊の著録を見る。しかし今散逸し、宋槧本はこの本以外他に所在を聞かない。この本は傅記・呉志の指摘する如く、明以後の本と比較するに、出入異同があり、その奪文訛字を訂し得る所が頗る多い。（追記6）

梅亭先生四六標準　四〇巻首目一巻　宋李劉撰　羅逢吉編　〔南宋〕刊　二四冊

国立中央博物院原蔵。後補浅葱色地金切箔散し絹表紙（三九・二×二九・三糎）。襯装。首に羅逢吉の序、「梅亭先生四六標準門目」、「梅亭先生四六標準巻之一」と題す。四周双辺（一九・五×一二・二糎）有界十行、行十九字。版心線黒口双黒魚尾、「標幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、曹徳俊、曹、俊、李方、李、方、羽公、道人、道、人、子文、珪、于、芳、実、達、行、巳、彬等の刻工名あり。避諱は極めて厳謹ならず、僅に玄溝燉に間々欠筆を見るにすぎない。「避暑／山荘」「文淵／閣印」「東宮／書府」の印あり、清内府の旧物である。呉志著録。

同版本に内閣文庫蔵本（四部叢刊に影印所収）があり、北京図書館蔵宋刻本も或は同版か。本版の巻八第五・六葉（単辺無界）や巻卅八第一・二葉（無界）の如きは字様他と異るものがあるが、印面から見て、修補に非ず、版下書に由来する差異と看做すべきであろう。呉哲夫氏はこの本と内閣文庫本を影印せる四部叢刊本とを比較の結果、その同じからざる各葉を指摘して、内閣文庫本を以て、この本の後修本と為した。しかしながら、呉氏の指摘せる葉の版心は内庫本では破損しているのが四部叢刊の影印では判明できず、また巻六第四葉漸を淅に作るのは、内閣本がその箇所が欠損しているのを妄に補写影印した誤ちである。また両本が全く版面を異にすると指摘された巻八の第十六葉以下は、内閣文庫本はその第十丁以下を欠脱しているのを、四部叢刊は明版を以て配補影印したもので、それ等の差異は呉氏が「疑為影印修版時誤改、影印本不尽全真」と疑問を

挾まれた通りである。内閣文庫本はこの本とほゞ印刷の時期を同じうしていて、この本と同様特に後の補刻の加った本ではない。四部叢刊は中国の当時の影印としては、比較的よい方であるが、往々妄に補筆を加えている場合があるから注意を要する。上の巻八の欠葉の補配の箇所は線装本の方は欄外にその旨の注記が印してあるが、台湾商務印書館刊の洋装本にはその注記が削除されている。かゝる事例がかなり多い。

佩韋斎文集　二〇巻　宋兪徳鄰撰　元皇慶元年序刊　四冊

昭仁殿原蔵。後補金切箔散し香色表紙（三〇×一九・四糎）。首に皇慶元年壬子四月既望建安熊禾序の「佩韋先生文集序」、「佩韋斎文集総目」、「佩韋斎文集目録」あり。本文巻首「佩韋斎文集巻第一」、次行低六格、「太玉山人兪徳鄰宗大父」と題す。四周双辺（二三・二×一五・七糎）有界十一行、行十九字。版心線黒口双黒魚尾、「佩韋集巻第幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、君玉、君興、施君興、仲山、徳俊、徳、俊、連子清、子清、子青、応祥、文徳、文の刻工名あり。故宮選萃著録。

前十六巻が詩七巻雑文九巻にして、末四巻は輯聞である。この本は撫刻清雅の初印にして元槧の上品と云うべく、本版は他に所在を聞かず、また本書は明以後の翻刻がなく、僅に鈔本の伝存を見るに過ぎない。天禄琳琅叢書中に影印さる。

松雪斎文集　一〇巻詩文外集一巻　元趙孟頫撰　元後至元五年刊（花谿沈氏）　八冊

昭仁殿原蔵。後補紺色表紙（二五・一×一八糎）。襯装。首に大徳戊戌仲春既望剡源戴表元叙の序、至元後己卯春三月朔長沙何貞立の序、次に「松雪斎文集目録」あり。目録尾題後に「至元後己卯花谿沈氏伯玉刊于家塾」の刊記一行を刻す。本文巻首「松雪斎文集巻第一」と題す。巻十尾題後一行を隔てて、

松雪翁詞翰妙天下版言隻字人輒／伝玩／公薨幾二十年矣而平生所為詩文／猶未鏤板今従／公子仲穆求仮全集与友／原誠鄭君再加校正凡得賦五古詩／一百八十四律詩一百五十絶句一／百四十雑著五序二十記十二碑誌／廿六制誥策題批答廿五贊十銘一／題跋五楽府二十摠五百三十四并／公行状謚文一巻目録一巻合為一／十二巻亟鋟諸梓置之家塾俾／識者得共観焉至元後己卯良月十／日花谿沈璜伯玉書　四明阮子陽刊（印）（印）（印）

の刊語がある。外集は首に目録をおき、目録尾題後二行をおいて、「花谿沈氏伯玉刊于家塾」の刊記一行あり。本文巻首「松雪斎詩文外集」と題す。外集の次に謚文（至治三年）及び行状（至治二年八月日承務郎饒州路同知浮梁州事楊載状）を附し、巻末に「花溪沈璜伯玉校正刊／（隔一行）（印）（印）四明阮子陽刊」の刊記がある。行状には破損の葉が多い。左右双辺（二〇・六×一四・三糎）有界十二行、行廿二字。版心線黒口双黒魚尾、「松雪文幾（松雪外集）（丁付）」。巻末に清の宋筠の手識二丁を附綴。天禄各璽印、満文入りの官印四、「張氏／宝蔵」「商邱宋犖

／収蔵善本」「濮陽李廷／相書屋記」「張爾奎」「鄒平西／張仲氏／挙之甫／鑒賞印」「真賞」「黄琳／私印」「緯蕭草堂／蔵書記」「濮陽李廷相雙／檜堂書画私印」「宋／鎬」「蘭揮」「文愷／之章」「子孫／其永／宝之」「志雅／斎」の蔵印あり。明の李廷相・張延登、清の宋犖・鎬父子等旧蔵。天目続十一著録。天目には巻末董其昌の手跋ありと記すが、今失われている。

本版は他に北京図書館蔵残本（存首五巻并外集、涵録著録）がある。本版を沈氏の刊記も殆どそのまゝ覆刻せる明前期の刊本があって、従来この覆刻本が沈氏元刊本と往々誤認されている。故宮博物院別蔵六冊本（昭仁殿原蔵、目録に八冊と誤記）・丁志盍影著録本・劉影著録本は沈氏刊と著録されているが、いずれもこの覆刻本で、潘記著録本も潘跋によれば覆刻本のようである。沈氏元刊本の匡郭は左右双辺線黒口であるが、この覆刻本は四周双辺白口であることが識別の目安となる。中央研究院蔵本（鄧目著録）・繆記・王記・莫跋著録本は元刊か覆刻か未見の為め未詳。四部叢刊本は毛氏汲古閣・毛華伯・汪閬源・涵芬楼旧蔵北京図書館現蔵沈氏元槧による影印であるが、巻六至十及び行状は明覆刻本を以て配補されている。この本と四部叢刊本の首五巻及び外集を比較するに、この本は巻二・五の巻末尾題後の原料紙が別紙で補われているが、こゝに「呉興沈氏華／溪義塾刊行」の双行単辺方形木記が刻されていたことが判明する。四部叢刊本には外集に七葉この本と異なる所がある。原本を見ていないので断言できぬが、此は初刻の脱落を後に発見してその箇所を改刻したものと思われるから、四部叢刊の底本の方が修補本であろう。覆刻本のその箇所はこの本と等しい。台湾学生書局刊本は四部叢刊本からの影印らしく、たゞ匡郭を単辺に改めている。

淵穎呉先生集　一二巻附録一巻　元呉萊撰　宋濂編

〔元末〕刊〔明〕印　八冊

昭仁殿原蔵。後補緑色絹表紙（二五・二×一五・七糎）。襯装。首に至正十有二年秋八月二十六日門人金華胡翰謹序の「淵穎呉先生文集序」、劉基の「淵穎呉先生集序」、胡助の序、次に「淵穎呉先生集目録」あり、目録後に編纂の由来経過を記せる、男前婺州路金華県儒学教諭士謂再拝謹識の跋あり、その末六行を隔て左端下に「金華後学宋璲謄写」の一行が刻さる。巻末に淵穎先生碑及び謚議の附録一巻を附す。本文巻首「淵穎呉先生集巻之一（隔四格）門人金華宗濂編」と題す。左右双辺（一七・五×一二糎）有界十三行、行廿三字。版心細黒口単黒魚尾、「淵穎集巻第幾（丁付）」。巻五第八葉補写。印面漫漶甚しい。天禄各璽印、「東呉／世家」「呉郡西崦朱／赤英書画印」「延陵李氏／汝周図籍」「錫山李／用之印」「勅封／文林／郎印」「子孫／保之」（陰刻）「鬻及借／人為不孝」「任／斎」（陰刻）「兼牧／堂書／画記」（陰刻）「謙牧／堂蔵／書記」（陰刻）の印記あり。明の朱良育（字は叔英、正徳の呉県の貢生）等旧蔵。天目続十一著録。

目録後の男士謂の跋後に「金華後学宋璲謄写」と見える璲は、字は仲温、宋濂の次子、篆隷真草書に巧みで、本版は璲の

版下書きによる刻と云われる。同版に北京図書館蔵本（二部）、王記著録本（二部）あり。四部叢刊（重印）に影印所収。明嘉靖元年当塗の祥鑾が本版を重刊している。

順斎先生閑居叢藁　存首一三巻　元蒲道源撰　男機編
元至正一〇年序刊〔明〕印　七冊

景陽宮原蔵。後補淡香色表紙（二六・三×一七・三糎）。裏打修補を加え襯装。原料紙縦二四・六糎。首に至正十年冬十月二十四日前史官金華黄溍序の「順斎蒲先生文集序」、次に「順斎先生閑居叢藁総目」がある。静嘉堂文庫本には、総目の次に「順斎先生閑居叢藁目録」があるが、この本は佚している。本文巻首「順斎先生閑居叢藁巻之一」、第二・三行低六格、「男蒲機　類編／門生　薛懿　校正」と題す。左右双辺（二〇・八×一三・五糎）有界九行、行十四字。版心白口双黒魚尾、「叢藁巻幾（丁付）」。印面漫漶の所多く、巻中少しく欠葉あり。「滄／葦」（大小二種）「季印／振宜」（大小二種）「御史／之章」「謙牧／堂蔵／書記」「兼牧／堂書／画記」の印あり。季滄葦蔵書目に「二十六巻十四本」と著録、当時完本の如し。

同版は他に静嘉堂文庫蔵二十六巻の完本（明印、陸志・陸跋著録）あり、また王記にも著録が見える。北京図書館蔵存巻一四―二六残本は同版か。この板木は明に入って南監に移されたらしく、「明南雍経籍考」に「順斎蒲先生集二十巻（存者四百三十一面欠者一百四十一面猶未終）」と録されている。

＊太平金鏡策　八巻附答策秘訣一巻　元趙天麟撰（答策）

元劉錦文編　〔元〕刊（建安・劉氏日新堂）　一冊

景陽宮原蔵。後補淡空色金切箔散し表紙（二二・三×一四・一糎）。首に撰者趙天麟の「太平金鏡策進表」、次に「太平金鏡策目録／（低六格）東平趙天麟経進」と題する目録あり。本文巻首「太平金鏡策巻之一」、附刻は巻首「答策秘訣」、次行低六格「建安劉錦文叔簡輯」と題する。双辺（一八・八×一一・七糎）有界十三行、行廿五字。答策秘訣は有界十一行、行廿二字。版心細黒口双黒魚尾「策第フ（或は幾）（丁付）」。

「太平金鏡策」は四庫存目に著録されるが、附刻の「答策秘訣」は諸家目に著録を見ない。治道以下歴象の十二条に分ち、巻末刊語に、

右一十二条不知作於何人相伝次為貢士曾堅／子白之所編也其間援引古人立論豈亦旧有是／説而曾氏特取而檃括之歟其於策学法程尚矣／本堂玆因刻伝佐谿祝氏策学提綱東平趙氏太／平金鏡策敬用輯於巻首願与有志功名者快覩／之□□□□孟秋建安日新堂謹誌／（空一行低四格）

涂士昭編輯策訣継此栞行

と。両書ともに坊賈射利の科挙受験の参考書である。孟秋の上即ち□とせる四字が切りとられ別紙で裏打ちされている。故宮善本書目は元至正九年刊と録するのは、「浙江採進遺書総録」に至正九年刊とあるから、切りとられた四字もと「至正九年」とあったと推定したのであろう。なお同目が本書を「類書」中に分類せるは失考である。

文選　六〇巻（欠巻二〇―二九）　唐五臣並李善注

〔宋紹興〕刊（明州）紹興二八年・〔宋〕遞修　五〇冊

昭仁殿原蔵。後補淡黄色地金切箔散し表紙（三一×二〇・七糎）、金鑲玉装、原料紙縦二九・五糎。首に、「文選目録」（第二・三行低九格「梁昭明太子撰／李善并五臣注」と署す）、「李善上文選注表」、「進集注文選表（隔八格）五臣」、次に「文選序」（次行低六格「梁昭明太子撰（下に双行注あり）」と署す）あって、首目一冊をなす。本文巻首、「文選巻第一」、次行低七格「梁昭明太子撰」、第三行低八格「五臣并李善注」と題し、毎巻大題後篇目を列して正文に接属する。巻六十尾題後低三格、「右文選板歳久漫滅殆甚紹興／二十八年冬十月直閣趙公来鎮是邦下車之初／以儒雅飾吏事首加修正字画／為之一新俾学者開巻免魯魚／三豕之訛且欲斯文於無窮／云右迪功郎明州司法参軍兼／監盧欽謹書」の刊語がある。左右双辺（二二×一四・五糎）有界十行、行廿二乃至廿五字、注小字双行、行卅字。版心白口単黒魚尾、「文選幾（丁付）」、下象鼻に刻工名あり。玄眩弦茲鉉朗敬驚警弘殷匡框鏡竟胤恒貞徵署樹譲桓完構に欠筆を見るが、慎等の孝宗以降の宋諱を避けない。補刻が多い故もあって、欠筆必しも厳謹ではなく、以上の字も間々欠かざるもあって不定である。原刻の葉よりは補刻の方が多く、しかも原刻もその多くは部分的な修補が入っている。補刻の刻工名には多く名の下、或は稀にその上に「重刊」或は「重刀」等の字が添えられているが、同一人でも或る箇所では重刊を附さず不定である。原刻の葉でも版心特に下象鼻周辺が修補された場合には殆ど補刻の刻工名に改刻されているが、逆に原刻の刻工名が残っていても、一部原刻が残り、大部分が補刻になっている場合もある。原刻の字様は渾厚端正であるが、補刻は纖弱とまではゆかぬが、比較すればその気味がある。刻工名は、王因、王乙、王一、王伸、王申、王雄、王受、王寔、葛珍、郭政、郭富、阮宗、呉珪、呉圭、呉詢、高彦、高起、黄覚、黄暉、黄大、江通、江政、洪茂、洪先、蔡至道、施章、徐全、徐彦、徐宗、蔣暉、宋道、張逢、張由、張清、張謹、陳然、陳迎、陳謹、董明、方成、毛諫、毛諒、兪忠、余尚、葉達、葉明、駱晟、駱昇、劉信、劉仲、琢、郭、呉、宋、晟、信、駱、尚、沅、蔡、洪、葛、達、陳、徐、道、高、彦、通、兪、受、仲、江、全、清、茂、王、謹、章、珪、圭、昌、政、葉、明、覚、迎、然、雄、董、詢、張、方、暉、昇（以上原刻）、王挙、王臻、王秦、王進、王椿、王時、王琇、金敦、許中、胡正、胡端、雇宥、呉定、呉宝、呉浩、呉正、呉政、洪乗、洪明、洪昌、洪新、蔡忠、蔡政、蔡正、施蘊、施端、施俊、師然、朱諒、朱芾、朱文貴、朱宥、朱因、周彦、徐亮、徐宥、徐逵、蔣椿、蔣春、宋林、宋琳、張学、陳文、陳才、陳元、陳忠、陳高、陳真、陳辛、辛、陳達、丁文、潘与権、潘権、方祥（祥か祥か判定し難い所がある）、方祐、方右、方師顔、毛章、毛昌、兪琢、楊昌、楊永、葉逵、李忠、李顕、李珪、李圭、李良、李涓、劉文、劉挙、忠、琢、受、申（以上補刻）。原刻の刻工の中で補刻にも従事している者もある。同一人で重刊の字の有無が一定しないのは一はその故であ

る。目録の上眉に古文苑中文選未収の文の題を標記し、また巻中間々評語の書入がある。首副葉に「慈湖／楊氏」の方形朱印の上に「石田耕叟」と墨署があり、皆一手と思われる。天禄各璽印、「宋本」(小楕円形)「在々処々／有神物／護持」(陰刻)「戊戌毛／晉」「毛姓／秘玩」(陰刻)「江左」「毛表／私印」「毛／奉／赤」「小山／懋斎」「古粤／世家」(陰刻)「文／述」(陰刻)「汲古／閣」「季印／振宜」「滄／葦」「翠竹／斎」「梅谿／精舎」「玉蘭／堂」(陰刻)「鎮研／斎」(陰刻)「辛夷／館印」「毛表／之印」(陰刻)「慈谿／楊氏」「季振宜／読書」「毛表／印信」(陰刻)「毛表／蔵書」「毛表／奉赤」(陰刻)「毛氏蔵書／子孫永保」「毛氏／奉赤」(陰刻)「汲古／閣」(陰刻)「子々孫々／永宝」「楊州季氏」「御史／振宜／之印」「奉／赤」「字／奉赤」(陰刻)「汲古閣／世宝」(陰刻)「毛／表」(陰刻)「臣／表」(陰刻)「奉／赤氏」(陰刻)「毛／表」(陰刻)「隠湖／毛表／図書」(陰刻)「季滄葦／図書記」(陰刻)「慶季／爵氏」「竹／塢」「林下／閑人」「飄天風以／放蕩撃溟／水以逍遙」(陰刻)「人生行／楽爾」(陰刻)「赤／子」(陰刻)「延陵」「帰／来」(陰刻)の印記あり。明の文徴明、毛氏汲古閣、清の季振宜等旧蔵。延令宋板書目・天目続七著録。

本版は五臣注を前にし、李善注を後におく六臣注本である。同版本に宮内庁書陵部（巻一・二配鈔、古文旧書考等著録）・東洋文庫・お茶の水図書館（存巻廿九、成簣堂文庫旧蔵）・足利学校遺蹟図書館（金沢文庫旧蔵、森志等著録）・北京図書館（残本二部、一は傅目著録、一は潘録著録）蔵本、張志（有欠）・王記（零本）著録本がある。成簣堂（巻廿九）・潘氏宝礼堂（存巻廿二―廿五）・傅氏双鑑楼（巻廿六）旧蔵本・王記著録本（巻廿・廿一、廿七・廿八）はその印記から見て、本帙の欠失巻に該当する僚巻である。天目には完帙の六函六十冊と著録されているが、その中十巻十冊が何時しか民間に流出したものである。巻末刊語は紹興二十八年明州に於て旧来の板を修補したと解されるので、張志は北宋刊版南宋重修とする。しかし現在は紹興二十八年の新刻と解するのが通説となっている。

本版の現存本中金沢文庫旧蔵足利学校現蔵本のみは巻末の紹興廿八年の跋がなく、且つ重刊の附された刻工名が一つも存しない。足利学校本は従来跋を剜去せる後修本の如く見られて来たが、他の諸本と比較するに、他の本の版心に重刊と附された葉は、足利本が原刻で、他本はその覆刻の補刻たることが判明する。又この本等の版心に重刊とない原刻の葉も足利本と対比するに、その多くは部分的な後修が加えられている。足利本は運刀字画並に端厳精妙にして、後修と遙かに異り、対照すれば、その原刻の早印本たるは一目にして明瞭である。従って紹興廿八年は本版の刊年ではなく、修補年である。しかしその刊年は張金吾等の云う如く北宋に溯り得るか。また本帙を始め紹興跋文を有する修本は紹興廿八年後の遞修が加えられている。本版の刊年及び修年をさらに明かにする為に、本版と共通の刻工名を有する諸本を左に列挙して、再検討を加えよう。本版の原刻の刻工名を先に記し、その末に」を附し、その次に修補の刻工名を記して両者を区分し、またその刻工が当該本の補刻のそ

れである場合は、肩に△を附することにする。

南宋前期越刊周易注疏（洪先」徐亮・毛昌）　同尚書正義（洪先」△王進・許中・洪乗・徐亮・徐宥・毛昌・△李忠）　同周礼疏（洪先」洪乗・徐亮・陳高・毛昌・△李忠）　紹熙三年越刊礼記正義（高彦」王椿・呉宝・施俊・周彦・蔣暉・宋琳・陳文・楊昌・李良・李忠・李涓）　越刊孟子注疏解経（楊昌）　書陵部蔵光宗頃刊単疏本尚書正義（王寔・王伸・葛珍・呉珪・洪茂・洪先・蔡至道・施章・方成」陳忠）　溷芬楼旧蔵北京図書館現蔵南宋前期刊存巻二龍龕手鑑（王因・張由・徐彦」）　南宋前期刊世説新語（葛珍・宋道・葉明・徐宗」）　紹興刊続高僧伝（王受」陳達）　傅氏旧蔵天理図書館蔵南宋前期刊白氏六帖事類集（洪先・洪茂・方成・毛諒・劉仲」胡正・洪新・施蘊・朱因・蔣暉・宋琳・方師顔・陳忠・陳高・劉挙）　静嘉堂文庫蔵紹熙頃刊春秋経伝集解（張由・毛諒・毛諫」陳文）　淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解（蔡正・陳文・陳才）　南宋初両浙東路茶塩司刊外台秘要方（江通・徐彦・董明・葉明」施蘊・陳文・李忠）　東福寺蔵淳熙刊宗門統要集（王寔・董明」蔡忠・施端・楊昌・△洪昌）　南宋前期刊周官講義（毛昌・許中・洪新・周彦・劉文）　静嘉堂蔵淳熙刊史記（高彦」王椿・洪新・朱文貴・朱宥・周彦・李良・劉文）　南宋初杭州刊漢書（洪先・洪茂・董明・毛諒・劉仲」王挙・洪新・徐逵）　同後漢書（劉仲」楊昌）　同南斉書（△李忠）　同梁書（△李忠・△楊昌）　咸平刊南宋初修呉書（呉圭」）　南宋初刊新唐書（△董明」）　紹興刊陳書（△王椿・△宋琳・△楊昌・△李良・△李忠・△劉文）　淳熙二年厳州刊通鑑紀事本末（金敦・呉宝・徐宥・宋琳・陳才・楊永・楊昌）　静嘉堂文庫蔵影宋鈔本酒経（金敦・呉正・呉洪・徐逵・宋琳・李忠）　光宗頃浙刊論衡（張謹」許中・洪新・周彦・毛昌・楊昌）　乾道二年泉南郡庠刊孔氏六帖（呉正・陳文・陳才）　南宋刊武経七書（周彦・朱宥）　故宮博物院蔵影鈔宋刊本類篇（張清」陳忠）　光宋頃刊欧公本末（徐宗」呉政・宋琳・李忠）　南宋前期贛州刊文選（△王進・△王時・陳才・陳達・△李忠・劉文）　紹興刊王文公文集（葉明・阮宗」徐亮）　嘉定頃浙刊晦庵先生文集（王進・陳辛）　紹興頃刊劉賓客集（葉明・徐宗・駱昇」）　南宋前期刊王黄州小畜外集（葉明」宋琳）　南宋初刊元氏長慶集（周彦・毛昌）　蜀広都裴氏刊六家文選（王伸・王一」）　紹興中宣州刊宛陵集（劉仲」）　淳熙中尤氏刊文選（劉仲」）　紹興頃刊廬山記（阮宗」）　南宋初刊王右丞文集（呉正）　書陵部蔵寧宗頃刊東坡集（呉政）　寧宗頃刊景文宋公文集（呉政）　嘉定十二年温陵郡斎刊資治通鑑綱目（蔡正）　梅沢記念館蔵白氏六帖事類集（周彦）　乾道三年江陰刊宣和奉使高麗図経（徐亮）　南宋刊愧郯録（李涓）　慶元刊楽書（劉文）　乾道九年高郵軍学刊淮海集（劉文）　理宗初刊古史（王進）

以上列記の刻工の年代を綜覧すれば、原刻の刻工は紹興年代が最も多く、降るのはほぼ紹熙年間に至るまで雕板に携わっている。従って逆算すれば刊年は紹興十年代から廿年頃と推定す

べきであろう。文選は需要が多いから、他の本に比し、板木の損傷が速いと見ねばならぬ。従って刻工から考え、また字様から見て、本版が北宋刊に非ざることは明かである。紹興廿八年に大補刻がなされ、その際原刻の刻工中再び従事した者もある。原刻の漫滅の箇所が紹興廿八年後も引き続き補刻が重ねられ、遞修の刻工中降る者はほゞ嘉定年間にその名が見えるが、その大部分は孝宗・光宗間で、原刻の刻工とある時期は就業世代を同じうしている者が多い。従って島田翰がその葺刻は慶元に至って止むと見たのは、当らずと雖も遠からずと言うべきである。たゞ南宋前期杭州地区の刻工たる陳文が南宋後期福州刊古霊先生文集・淳祐十年福州路刊国朝諸臣奏議・南宋後期刊荘子南華真経注疏、李忠が南宋末浙刊玉堂類稿にも見えるのは不審であるが、両名はありふれた名であるから、同名異人と考えるべきであろう。

文選　存巻三一・三二　唐李善并五臣注　〔南宋前期〕刊（〔贛州州軍〕）〔宋・元・明初〕遞修　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒絹表紙（三〇・五×二一・二糎）、裏打補修が加えらる。かなり後刷で、爛敗の葉が多く、巻卅一は第十一丁以下、巻卅二は第四十二丁までを存する零巻。内閣残影著録。

又　存巻一六（零巻）　一冊

清内閣大庫旧蔵。後補黒色表紙（三五×二三・五糎）、粘葉装。裏打補修が加えらる。巻十五の第十一至十六葉の六葉を存するのみ。前掲本よりは比較的刷りがよい。本版についての解説は後掲北平図書館原蔵本の条参照。

＊六家文選　六〇巻　唐五臣並李善注　〔南宋光宗寧宗間〕刊（〔蜀広都裴氏〕）〔宋・元明初間〕遞修　巻一八―二六、二九―五〇、五八―六〇配明袁氏嘉趣堂覆裴氏刊本　四〇冊

昭仁殿原蔵。後補浅葱色絹表紙（三一・三×二一糎）。襯装。首に李善上文選注表、国子監准勅節文、開元六年呂延祚進集注文選表、高力士口宣勅及び六家文選目録あり。本文巻首、「六家文選巻第一」、次行低六格第三・四行低七格「梁昭明太子撰／唐五臣注／崇賢館直学士李善注」と題す。左右双辺（二三・四×一七・五糎）有界十一行、行十八字、注小字双行、行廿六字。版心白口、魚尾なく上下各横単線、「文選幾（丁付）」。下象鼻間々刻工名あり、工名の上一横線或は黒魚尾を加えるもある。玄眩泫炫弦絃袨怯鉉舷咳朗敬驚警弘紘霐泓宏殷礙匡筐眶竟境鏡胤恒禎貞楨頼樹屬譲桓完構搆溝蘝幩慎の字の末画を欠くが、この欠筆は厳謹ではなく、必しも一定せず、光宗以下の惇敦等の字には欠筆を見ない。刻工名は、王一、王万、王召一、召、王公純、△王元度、△元度、元、王伸、王八、王定、定、△王庚、王桂、王、袁震、震、袁次一、秦元、祖祥、祥、祖、張亀、張、亀、田桂、任中、李二、万八、八、△朝了、柳、有、良、宋、彦、千、全、尹、△苟、△才（△修）。原刻より補刻の葉が多く、宋元より明初に至る遞修が重ねられ、原刻には殆ど部分的な補

刻が入り、元修にも明初と思われる部分的な修が加っている所もある。配補の明刊本にも以上の刻工名があるが、此は後から印判を以て捺印したようである。各巻末間々、「嶺南李天麟君端父手記」（序・表末）「嶺南李天麟西樵公子記」（巻二）「崇禎甲戌嶺南李氏天麟君端父記」（巻三）「李氏天麟記」（巻四・十九）「隴西李氏天麟記」（巻五）「甲戌之冬嶺南李氏天麟記」（巻七）「天麟君端父記」（巻九）「君端父記」（巻十）「天麟記（巻十三）「天麟手記」（巻十五・卅九）「思珍居士天麟記」（巻十七）「東宮西樵天麟手記」（巻廿一）「西樵手記」（巻廿五・卅七）「孟冬西樵手記」（巻廿九）「天麟君端父手記」（巻卅一）「乙亥仲春思珍居士記」（巻卅五）「君端記」（巻四十一）「西樵公子記」（巻四十六）の手識が存する。天麟は字は公振、明万暦の進士。巻中李氏の印記甚だ多く、また毎葉裏に「悦斎」の朱印が鈐され、補本また模仿捺印してある。別に「丙戌／進士」「淮南／蔣氏／宗誼」及び陳子・潘仲履諸家の印記あり。故宮書影・故宮選粋著録。

この残本は刊記を欠くが、広都裴氏刊宋槧本の精善な覆刻として著名な明嘉靖の袁氏嘉趣堂刊本と比較するに、この本正しく嘉趣堂本の底本たる裴氏刊本たることは明かである。刻工の王一・王伸は紹興明州刊文選、王定は越刊八行本尚書正義及び贛州刊文選の修や太平寰宇記・古史・宋嘉定十二年温陵郡斎刊資治通鑑綱目・寧宗理宗間浙刊晦菴先生文集、修の王桂は越刊八行本周礼疏及び礼記正義の修や淳祐十二年徽州刊儀礼要義・宋宝祐刊致堂読史管見に同名工を見るが、張亀・袁次一・王庚は慶元間蜀刊太平御覧、秦元・袁次一は蜀眉山刊蘇文定公文集の修の刻工名にその名が見える。またこの本はその字様にも蜀刊の特徴が出ている。本版は他に確実な現所在が知られていないが、天目巻三に一部、続七に三部の著録が見える。それによれば、昭明序（この本には欠）の後に「此集精加校正絶無舛誤見在広都県北門裴宅印賣」の木記、巻末に、「河東裴氏考訂諸大家善本命工鋟於宋開慶辛酉季夏至咸淳甲戌仲春工畢把総鐫手曹仁」の刻記ありと。但し巻末の刻記は天目巻三には記載がなく、続巻七に録され、後人の妄補と思われる。明代に袁氏刊本の覆刻乃至翻刻が出版され、往々それが袁氏の原刊本と誤認され、現在でも諸書目に袁氏刊本とされている多くは、後の重刊本である。また袁氏の識語刊記を削除して宋版の如く偽装されたものがかなり存する。天目巻十明版集部に袁氏刊本十部を録するが、一部を除く外は、全て袁褧の識語を欠き、それ〴〵識語刊記に何らかの改竄妄補の贋造が弄されていることは同目が既に指摘している通りである。前記の巻末の刻記について、「并於末一行増刊把総鋟手曹仁其字画既与前絶不相類版心墨綫亦参差不斉且考訂訂字誤作金旁則偽飾之蹟顕然畢露矣」と指摘している。また一本はこの巻末刻記が全く変り、「六十巻之末偽刊奉議郎充提挙茶塩司幹辦公事朱奎奉聖旨広都県鏤版起工於嘉定二年歳次己巳畢工於九年壬子臘月幷標督工把総恵清亦係割去原紙別刊半葉黏接於後且嘉定九年係丙子而壬子則其偽益顕然

矣」と言っている。天目続巻七著録の宋広都裴氏刊本三部は恐らくは袁氏刊本か或はその重刊本に妄補を施した類であったのではなかろうか。従って本版を開慶咸淳間刊とするのは妄補の刊記に誤まれたものである。欠筆刻工名から案ずるに、南宋光宗寧宗前期間の刊刻と看做すべきであろう。

＊文苑英華辨証　一〇巻　宋彭叔夏撰　〔南宋嘉定〕刊
〔元末明初間〕修　一冊

昭仁殿原蔵。後補紺絹表紙（二三・四×一五・七糎）。包背装。首に嘉泰四年冬十有二月己丑朔貢進士廬陵彭叔夏謹識の「文苑英華辨証叙」、次に「文苑英華辨証目録」あり。本文巻首「文苑英華辨証巻之幾」と題す。左右双辺（一八・八×一三糎）有界十行、行十七字、注小字双行、行廿五字内外不等。版心線黒口双黒魚尾、「卞幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数あり。巻一の首二葉及び巻四の第四葉欠。欠筆厳謹ではないが、玄筐恒貞湞徴樹壓讓桓慎惇敦廓等の字に欠画があり、郭の字は欠筆していない。天禄各璽印、「鑑／泉」の印あり。故宮書影・呉志著録。

天目続十九の明版集部に「一函一冊」を著録し、呉志この本に該当とするが、欠葉及び「鑑泉」の蔵印を録してないので、果してこの本を指すのか、或は明の会通館刊本なのか断定し難い。本版は、瞿目瞿影著録（現在北京図書館蔵）の宋刊元修「文苑英華纂要」八四巻と字様行款を同くしているから、それに附刻されたものと思われる。宋刊本を重刊せる明会通館刊纂要八四巻が辨証一〇巻を附している所から考えても、傍証できよう。この宋刊纂要は首に嘉定十六年高似孫の序を有するが、巻末に延祐甲寅趙文序が附されているので、張志には元刊と著録されている。此に対し瞿目は宋諱の字に欠筆があるから、趙序は元に入って加えられたとしている。筆者は同本を見ていないが、同本にはこの本と同様元代の補刻が加っているということであるから、趙序そのものの文面では新刻の如く受けとれるが、それは恐らく実際は修補であったのであろう。後考を俟つことゝする。この本は前記の如く、寧宗の郭は欠筆せぬが、廓に欠筆があるから、欠画の限りでは嘉定刊としても支障はない。纂要の嘉定十六年か或は継いで続刊されたものと思われる。巻中部分的な元代の補刻がかなり加えられ、巻二の第八至十二葉の全葉は元末明初間の修補である。纂要の宋版は北京図書館に瞿本とは別蔵の残本もあるが、辨証の宋槧の伝本は滂喜斎の宋刻初印纂要首六十巻・弁証存首八巻四函十五冊が知られていた。しかしその本、今何処に散落せるか。

〔唐〕文粋　存巻七―一一、一七下―二四、八九―九二
宋姚鉉編　〔明初〕刊〔明〕遞修　四冊

寿康宮原蔵。後補黒色金切箔散し表紙（二三・八×一七糎）。襯装。同版に内閣文庫・大倉集古館・故宮博物院蔵楊氏観海堂・中央図書館（二部、一部残本）・北京図書館（二部、一は滂録著録本にして他は瞿目・瞿影著録本か）・南京図書館（丁志・盆影著録）蔵本や王記著録本等がある。筆者が既に観海堂

本の解説に於て述べた如く、本版は宋紹興九年臨安府刊本（北京図書館蔵）と相似の重刊で、刻工の多くは元末明初の諸刊本にその名が見え、修補の刻工には成化刊本の刻工名が存する。従来の諸家目の多くは元槧となすが、全体としては明初刊と目すべきが妥当であろう。

国朝文類　七〇巻　元蘇天爵編　元後至元至正初刊（西湖書院）至明成化九年遞修　三〇冊

斎宮原蔵。後補艶出黄橙色表紙（二六・四×一七・五糎）。襯装。首に元統二年王理及び陳旅の国朝文類序、次に至元二年准中書省請刻移咨江南行省鋟梓咨文並に至正二年二月江浙等処儒学提挙司刊補改正書版下杭州路西湖書院劄子があり、次に国朝文類目録上中下をおき、その末に「儒士葉森点対」の一行がある。また巻末巻七〇の尾題後二行をおいて低一格を以て元統三年王守誠の後序がある。本文巻首「国朝文類巻第一」と題す。左右双辺（二一・五×一四・九糎）有界十行、行十九字。版心線黒口双黒魚尾、「国朝文類巻第幾　（丁付）」。間々上象鼻に大小字数、下象鼻には刻工名がある。明修は粗黒口にして、上象鼻に「成化九年」、下象鼻に「吏部重刊」と陰刻されている。しかし、この補刻年記のない葉にも成化に至る間部分的或は全葉の修補が加えられた所がある。刻工名は、陳大義、義、陳義、陳栄、栄、姚了山、了山、了、施沢之、沢之、王徳明、王仏、王林、右之、張用、張振、楊景仁、楊景先、羊子明、朱元、朱大亨、林茂実、林、袁子寧、袁、子成、煥之、于平、祐之、中、冲、之、高、汪、季、范、陳、鄭、人である。此等刻工の多くは元泰定元年西湖書院刊文献通考の雕刻に従事している。巻廿六の十丁が版心匡郭等を原刻に模した印刷罫紙に補写されている。

後至元末江浙等処儒学で上梓したが、脱漏があったので、至正二年西湖書院に命じて補刊完書となした。板木は明に入って、南監に移され、「明南雍経籍考」に「国朝文類七十巻」「存者一千六百面略模糊」と記されている。同版に静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・書陵部（森志・古文旧書考著録）・中央図書館（二部）・北京図書館（三部）・上海図書館（零本）・南京図書館（丁志著録）・涵芬楼（繆続記・涵録著録）・米国国会図書館蔵本、後掲の北平図書館原蔵零本、瞿目・楊録・藩記・王記著録本がある。四部叢刊に影印所収。本書の元版にはこの外に、至正頃劉氏翠巖精舎刊十三行廿四字の小字本がある。

＊皇元風雅　存首一四巻　元蔣易編　〔元後至元五年跋〕刊〔元末明初間〕修　四冊

昭仁殿原蔵。後補藍色絹表紙（二五×一五・七糎）。襯装。首に至元四年黄清老の「皇元風雅序」、至元□□〔三年〕正月初吉建陽蔣□□〔易書〕于思勉斎の「皇元風雅集引」あり。本文巻首、「皇元風雅巻之一　賛善大夫容城□□〔劉因夢〕吉」と題す。双辺（一八・一×一一・九糎）有界十行、行十八字。版心粗黒口双黒魚尾、「幾巻　（丁付）」。この本の序中の「皇元」の二字及び巻中の「皇元風雅巻之幾」等の首尾題の字は全て後

の入木にかゝり、また「版心」の幾巻も原刻を剜改せる後の埋木である。巻三第十一葉裏は首二行のみにて後空白にして第十七葉に続く。巻四第廿一・廿二葉は後修、巻六第八葉裏は初四行のみにて後空白、巻七第三葉裏末三行空、巻十第八葉首七行空、巻十一第十二・十四葉補写、第廿五葉は部分的の後修が加り、この本は完全なる元刊原刻の葉は少く、且つ間々印面漫漶にして、他は殆ど元末明初間の修補が入っている。また往々破損の箇所がある。天禄各璽印、「周印／亮節」の印あり。天目続十一・故宮選萃著録。

四庫未収。千項堂書目・焦氏経籍志に卅巻と著録。この本は瞿目・瞿影著録北京図書館現蔵の三十巻の完本（黄丕烈手跋あり）とはその瞿影所掲の書影を以て比較する限りでは同版である。蔣易編の本書は他に、北京図書館蔵元刊「国朝風雅」不分巻雑編三巻（黄丕烈手跋あり）、故宮博物院蔵阮元採進本「元風雅」卅巻（伝録元刊本、阮外集著録、選印宛委別蔵所収影印）がある。北京図書館蔵「国朝風雅」は、黄堯圃・汪閬源・羅振玉・涵芬楼旧蔵で、藝芸書舎宋元本書目・涵録に著録され、清光緒范氏双魚室刊「元人選元詩」所収影印の底本となった本と思われる。北京図書館蔵元槧二部は未見であるが、瞿目・瞿影・黄丕烈手跋（堯圃蔵書題識巻十収）や涵録等の記事を参照して、以上三本とこの本とを比較するに、この本は首目に於て、至元己卯七月三日雍虞集在芝秀亭書の虞集序及び総目を欠く。瞿本は目録後に「梅溪書院」の墨図記ありと云う。阮元採進宛委別蔵本は総目の末に低二格の蔣易の跋が附してあるが、梅溪書院の刊記はない。丕烈跋及び元人選元詩所収本から察するに、「国朝風雅」と題する不分巻本の現存本は完帙に非ずして、この三十巻で言えば、巻廿二以下の残本で、本版とは元来同版らしい。しかし本版はその「国朝」を「皇元」と剜改し、巻末の雑編上中下を含めて不分巻全体を改めて卅巻に分けた。その為にもとは「於巻中起処但以人姓名為大題官銜籍貫表字為小題不載書名巻数毎葉板心各載毎人名無巻数」（黄氏跋）であったのを、起処を毎巻首として、官銜籍貫表字の小題の上、即ち大題の姓名を控削して、そこに「皇元風雅巻之幾」と埋木を以て補刻し、版心の人名を巻数に剜改し、巻中の本文についてもかなりの補削の改刻を加えたらしく、大体に於いては増補である。此が蔣易自らの改編か後人のそれかは明かでない。宛委別蔵本はこの本と行格を同うし、ほゞ一致するが、ただ大題を「元風雅」と題し、この本の空行の所は、この本とやや行款に異同出入がある。「皇元」を「元」と改めたのは明に入った為と思われ、この本の空行の所の異同から考えて、宛委別蔵本の底本は、この本よりさらに後の修本と看做すべきであろう。潘記に「元刻残本皇元風雅六冊」が録さる。「是並非一家為一巻此本家自為編」「毎半葉十行行十八字板心題作者之字」と云うから、恐らく北京図書館蔵「国朝風雅」不分巻と同版と思われるが、その本「皇朝風雅」と題せるか否か。

国立故宮博物院蔵　楊氏観海堂善本解題（続）

附釈音周礼註疏　四二巻（欠首六巻）　漢鄭玄注　唐賈公彦疏　唐陸徳明釈文　〔元大徳〕刊至明正徳遞修　七冊

淡茶色表紙（二七・三×一六糎）。首目欠。本文巻首「附釈音周礼註疏巻第幾」、次行低四格「鄭氏註　賈公彦疏」と題す。左右双辺（一八・七×一二・七糎）有界十行、行十七字、注疏文小字双行、行廿三字。版心白口双黒魚尾、「礼亢幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名、左上欄外に耳格あって編目を記す。明修は比較的早い方は左右双辺小黒口であるが、後修は双辺或は単辺、また白口を混え、率ね刻工名がない。上象鼻に正徳六年・十二年の補刊年がある。所謂十行本注疏の一。所々補写があって、殆ど明修の葉で、原刻は漫漶甚しいので朱・藍筆を以て加筆し、所々藍筆の句読点が書入さる。「忙裡偷／間斎」等の印あり。

儀礼注疏　一七巻　漢鄭玄注　唐賈公彦疏　唐陸徳明釈文　明陳鳳梧編校　〔明正徳〕刊〔明〕修　六冊

淡香色表紙（二四・五×一五・五糎）。首に「儀礼注疏序」（次行低二格「唐朝散大夫行太学博士弘文館学士臣賈公彦等撰」と署す）あり。本文巻首「儀礼注疏巻第一」と題すが、大題下剜去された痕あり、次行を空けて第三行に「士冠礼第一」と題する。巻三以下は巻五を除いて大題下及び次行に「漢鄭玄注　唐賈公彦疏／後学廬陵陳鳳梧編校」と題するが、鳳梧の題署は後の補刻である。単辺（二〇・六×一三糎）有界十行、行廿字、注疏文小字双行。版心粗黒口双黒魚尾、「儀礼巻幾（丁付）」、下象鼻に所々陰刻の刻工名あり。かなり後印で、最初の方に少しく江戸期の墨筆の訓点が書入されている。「天師明経儒」「清原／幹印」「宣／幸印」「忙裡偷／間斎」の印あり。伏原家旧蔵。楊続譜一著録。楊続譜所載の巻一首の書影には大題下及び次行に亘って、上記の如くこの本を始め現存本には剜去されたらしい鄭玄注賈公彦疏陳鳳梧編校の題署がある。実際にそうであったのか疑念が持たれる。

陳鳳梧が儀礼（正徳十六年鳳梧序あり、観海堂に蔵本あり、前の拙稿参照）と共に山東に校刊せる本で、十行本注疏には儀礼が入っていないので、板を南監に贈ったことは有名である。しかし上記の如く、現存本は全て後印で、陳鳳梧の題署は塡め木であるので、長沢規矩也博士は、「故に予は年来、此本は陳氏の刊行ではなく、字様から按じて正徳以前刊本で、陳氏は其板を獲て、己の姓名を加へて印行したものであらうと云ふ説を持してゐるが、正徳以前の初印本が手に入らないので、考証不十分である。」（「十三経注疏影譜」）と述べている。

春秋経伝集解　三〇巻附音義　晉杜預集解　〔明嘉靖〕刊　覆相台岳氏本　一五冊

後補縹色表紙（二八・七×一七糎）。白綿紙本。首に「春秋序」あり。本文巻首「春秋経伝集解隱公第一」、次行低二格小

字双行の隠公名息姑云々の注、第三行低四格「杜氏註　尽十一年」と題す。双辺（一九×一三糎）有界八行、行十七字、注小字双行。句点四声点附刻。版心白口双白魚尾、「左伝巻幾（丁付）」、左上欄外耳格あり某公と記す。朱筆句点の書入あり。「森／氏」印。森志著録。

駢雅　七巻附音釈一巻　明朱謀㙔撰　虞九章・宋守一校

明万暦一五年序刊　一冊

茶表紙（二八・七×一七・七糎）、「明刊本駢雅最翠見」の書題簽は守敬筆。首に、仁和県学虞九章書の「刻駢雅小引」、万暦十五季強圉大淵献陽月望日豫章孫開撰の「駢雅序」、豫章朱謀㙔鬱儀甫言の「駢雅序」、次に「駢雅目録」あり。本文巻首「駢雅巻第一」、第二・三行低六格「豫章朱謀㙔鬱儀甫著／虎林虞九章更生甫宋守一化卿甫校」と題する。巻末の音釈は首に「駢雅音釈目録」、末に壬辰仲秋晦前一日関西許光祚跋の「駢雅後語」あり、本文首「駢雅音釈」と題する。左右双辺有界八行、行十八字。版心白口、「駢雅幾　（丁付）」。序及び巻一首葉の下象鼻に「金陵范文刊」或は「范文刊」とあるのは恐らく刻工名であって、刊者名ではない。巻初の方に少しく守敬の朱句点朱筆書入がある。楊譜三64著録。

大広益会玉篇　三〇巻　梁顧野王原撰　唐孫強増補　後人重編　明永楽一四年刊（与畊書堂）　二冊

後補紺色表紙（二四・七×一四・五糎）。裏打補修が加えらる。首に、「大広益玉篇一部并序」と題する大中祥符六年牒文、大広益玉篇序、進玉篇啓、次に「大広益会玉篇総目」（跨行）及び「玉篇広韻指南」がある。指南の後に双辺木記あり、その中に「朱氏」と陰刻せる鼎形牌子、中に「与畊／書堂」と刻せる象型牌子、「永楽丙申刊行」の長方形蓮牌木記が印さる。本文巻首「大広益会玉篇巻第一凡八部」と題す。双辺（二一・三×一二・八糎）有界十二行、注小字双行、行廿八字。版心小黒口双黒魚尾、「玉篇巻幾　（丁付）」。巻十一末欠丁。楊譜三著録。

経史通用古今直音　四巻　明邵真人編　喩道純校　張道中重校　明成化九年序刊　四冊

後補茶褐色渋引表紙（二三・二×一三・六糎）。首に成化八年歳在壬辰八月望日賜進士出身地官尚書郎晋陵白玢宗璞序の「経史通用直音序」、次に「経史通用直音目録」あり。目録後の裏丁殆ど破損し、僅に蓮台木記の跡が残るが、文字は剜去され空欄になっている。本文巻首「経史通用古今直音巻之一」、第二・三・四行低六格「通妙邵直人編集／清瀏喩道純校正／雲中張道中重校」、第五行「金部第一」（上に魚尾様の墨蓋を冠す）と題する。双辺（一九×一二糎）有界十行、注小字双行、行卅字、大字小字四字に相当。版心線黒口双黒魚尾、「経史通用直音幾某部幾巻　（丁付）」。巻四は首表葉を欠き、第四十三葉まで存して以下欠丁。「光林／寺蔵」「小島氏／図書記」「字／学古」等の印あり。小島宝素旧蔵。楊志四著録。

四庫未収。楊志に曰く、「首有成化八年白玢序称趙堂披閲道蔵経典以直音難字証於経末其徒喩道純補訂之然不以道蔵経典為

次第而以篇旁統之俗体古文収羅綦博其体例略如龍龕手鑑唯直音不用反切訓詁亦較略耳」と。

北史　存六一巻（帝紀巻三―五、列伝五―二一、二五―三六、七一―八八）　唐李延寿撰　〔元大徳〕刊（〔信州路儒学〕）至明嘉靖遞修　一六冊

後補淡香色表紙（二七・三×一七・七糎）。本文巻首「魏本紀第三（隔五格）　北史三」、尾題は「小題第幾　北史幾」と題する。左右双辺（二一・五×一五・五糎）有界十行、行廿二字。版心線黒口三黒魚尾、「北史帝紀幾（丁付）」。版心が漫滅しているので、線黒口が殆ど白口の如く見え、上象鼻に信州路儒学刊、大徳刊、大小字数の字が僅に見えるのもある。下象鼻に間間刻工名あり。明修は白口にして上象鼻に嘉靖十年刊、嘉靖十二年刊等の補刊年がある。元の原刻の葉は極めて僅かで、明前期の覆刻の補刻が最も多く、嘉靖の修が之に次ぐ。元大徳九路刊本の一。巻廿一の首葉巻四二の巻末葉欠。楊印二種が鈐さる。楊譜四19著録。

黄帝内経素問註証発微　九巻附補遺一巻　明馬蒔撰

〔元和末〕刊　古活字版　翻明万暦一四年宝命堂刊本　一二冊

香色表紙（二八・三×二〇・七糎）。見返に原本の覆刻と思われる封面（これのみ整板）がある。即ち中央に「刻馬玄台先生／内経素問註証発微」、この二行の左・中・右三行に小字で「闡五千年神聖之秘旨／万暦丙戌仲春宝命堂記／開億万載医学之群疑」と刻し、上欄に「門人石　通謹識」の本書の内容紹介十四行（行八字）が刻さる。首に万暦丙戌秋日華亭林下人馮行可書于不染斎の序、その後に校正庠友・校正門人の列名六行、次に万暦十四年冬十月吉日山陰古林王元敬書の序、次に「黄帝内経素問註証発微篇目」あり。本文巻首「黄帝内経素問註証発微巻之一」、次行「大明太医院正文　会稽庠生玄台子馬蒔仲化註証」、第三行低八格「兄挙人梅粱子馬蘊仲易素校」と題す。第三行の校者名は毎巻異る。四周双辺（二一・七×一六・一糎）有界十行、行廿二字、注小字双行。版心粗黒口双黒花魚尾、「素問巻幾（丁付）」。江戸期の書入と訓点が加えらる。「朱師／轍観」の印あり。

本書の古活字版には巻末に「慶長十三戊申年十二月日梅寿刊」（再版は重刊）の刊記を有する異植字の関係にある二種（初版は天理図書館・大東急記念文庫・神宮文庫、再版は宮内庁書陵部・国立国会図書館蔵）が知られていた。本版はそれとは別版で、従来知られざる新出本であるが、行格版式を同じうし、同種系の活字を使用し、封面は同版であるから刊記はないが、梅寿刊本の異植字版と云い得る。活字が頗る磨滅しているから、第三次の版である。

新刊広成先生玉函経解　二巻　唐杜光庭撰　宋黎民寿注

〔明初〕刊　一冊

後補香色表紙（二二・五×一四・二糎）。襯装。序目なし。本文巻首「新刊広成先生玉函経解」、第二・三行低三格小字「伝真

天師特進検校太傅太子賓客主管大学士戸部侍郎徽国公広成先生杜光庭撰／盱江水月　黎民寿註」（この二行漫滅甚しく識読できず、推定）と題す。巻下首は「新刊広成先生玉函経巻之下」と題し、首一葉は「栄衛同身与」及び「天同度之図」の図で、末に「一依元本鼎新刊行」の墨囲陰刻の一行がある。左右双辺（一七・九×一一糎）有界十二行、行廿三字、注文低一格単行大字。版心細黒口双黒魚尾、「玉圣上(下)（丁付)」。「養安蔵書」「小島氏／図書記」「越氏／恒明」(陰刻)の印。曲直瀬家・小島家旧蔵。森志七著録。

瞿氏旧蔵北京図書館現蔵元刊本（瞿目・瞿影に宋刊と著録）と瞿影所収の書影を以て比較するに、彼は十一行廿一字の差はあるが、字様は相似している。故宮博物院蔵阮元採進本の影鈔宋本（十一行廿一字、題に「新刊」の二字なし）の底本は瞿本と同じか。この本を故宮目録は元刊とするが、森志の「初明翻彫元板」の鑑定に従うべきである。

新刊補註銅人腧穴鍼灸図経　五巻　宋王惟一奉勅編　金闕名者注　朝鮮旧活字翻元崇化余氏勤有書堂刊本　帯図本　五冊

香色表紙（三〇×一八・九糎）。首に、天聖四年謹上の「新刊補註銅人腧穴鍼灸図経序」（第一―六行低二格「翰林学士兼侍読学士景璽宮判官起後朝／奉大夫尚書左司郎中知制誥判集賢院権／尚書都省柱国泗水県開国男食邑三百戸／賜紫金魚袋臣夏竦奉　／聖旨撰」の銜名題署あり）、次に「新刊補註銅人腧穴鍼灸図経目録」（第一・三・四行に低二格を以て本文巻首大題と同じ王惟一の銜名題署あり）をおく。この目録尾題後三行を隔て「崇化余志安刊于勤有書堂」の原刊記あり。本文巻首、「新刊補註銅人腧穴鍼灸図経巻一」、第二・三・四行低二格「翰林医官朝散大夫殿中省尚薬奉　御騎／都尉賜紫金魚袋臣王　惟一奉　／聖旨編脩」と題す。単辺（約二一×一五・一糎）有界十二行、行十九字、注小字双行。版心粗黒口双黒花魚尾、「銅人経幾（丁付)」。挿絵は文字共に双辺の整板で、また巻五の第二葉は「傍通十二経絡流注孔穴図」と題し末に「嘉靖三十二年癸丑孟秋改誤重刊／(隔行)前行恵民署教授張末石　監校」と題署がある。この一葉も亦他と字様を異にする整板で、嘉靖重刊本によって増補したのであろう。巻初に少しく朱筆校字朱筆附箋（附箋は守敬筆か）があり、巻末に「嘉亥臘月再帰于／不求甚解書室」の墨筆識語が存する。「懐僊／院印」「弘前医官渋／江氏蔵書記」「小島氏／図書記」「尚質／私印」「学／古印」「森氏開万／冊府之記」等の蔵印あり。曲直瀬・小島・渋江氏等旧蔵。森志七・楊譜七33 34著録。

故宮目録に日本旧活字とするは失考、朝鮮旧活字である。この本の祖となった森志著録元刊本は楊守敬が購得し、後貴池劉氏、張氏適園等を経て今中央図書館の蔵に帰している。

鍼灸資生経　存巻一零巻　宋王執中撰　〔室町〕写　伝鈔金沢文庫本　一冊

後補縹色表紙（二八・三×二〇糎）。裏打補修が加えらる。烏

糸欄単辺（二三×一五糎）有界十行、行廿字。首に嘉定庚辰孟夏朔奉議郎提挙淮南東路常平茶塩公事徐正明の「鍼灸資生経序」、次に「鍼灸資生経目録」上下がある。本文巻首「鍼灸資生経第一」と題す。腫第二までを存し、以下欠。挿絵は彩色。所々眉上に注の標記、音義・振仮名の書入、表表紙見返に仮名書の音義が記してある。巻末に「二校早／辛卯□廿五日」の識語がある。「小島氏／図書記」印。

巻頭序題下に「金沢文庫」と署してあるので、金沢文庫本による伝鈔たることが判明する。此によって、金沢文庫に嘗て本書の宋槧本が架蔵されていたことが推測されるが、金沢文庫蔵本は今伝わっていない。森志には「鍼灸資生経七巻旧鈔本　寄所寄楼蔵」を録し、「毎半版十行、行廿字、目録上下、不載序跋、按此本第二巻第三巻題名下影模金沢文庫印、蓋就文庫旧蔵而影鈔者、原本殆即宋槧原刊乎、文字端正尤可貴重」と記す。守敬は「今在飛青閣」と注記書入しているが、この本とは別のようである。

同　七巻　〔室町後期〕写　伝鈔明正統十二年広勤書堂刊本　四冊

茶褐色表紙（二六・五×二一糎）。首に目録あり、目録題の次行に「広勤書堂新刊」と題する。本文巻首「鍼灸資生経第一」、次行「大監王公編」と題し、巻八の尾題の前に「正統丁卯歳孟吉日／三峯広勤葉景達重刊」の二行がある。字面高さ廿三糎、毎半葉十二行、行廿四字、注小字双行。寄合書。所々朱点朱引朱勾点、墨筆訓点が附される。巻四・五は料紙・筆蹟を異にし、烏糸欄単辺（二二・六×一六・八糎）無界。「小島氏／図書」「江戸小／島氏八／世医師」「宝素堂／所蔵医／書之記」の印あり。小島宝素旧蔵。森志七著録。

同　存巻五　〔近世初〕写　一冊

濃栗皮色表紙（二七・六×二〇糎）。烏糸欄単辺（二一・七×一五・一糎）有界十行、行廿字、注小字双行。

類証増注傷寒百問歌　四巻　宋銭聞礼撰　〔明前期・建〕刊　四冊

後補紺色表紙（二四・四×一五・一糎）、襯装。首に至大己酉臘月円日武夷詹清子子敬の序及び目録あり。本文巻首「類証増注傷寒百問歌巻之一」、次行低三格「傷寒解惑論并序」と題す。巻二以下は第二行低九格「建寧府通守銭聞礼撰」と題する。四周双辺（一七・七×一二糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行。句点附刻。版心粗黒口双黒魚尾、「百問歌幾　（丁付）」。「読杜／艸堂」の印あり。寺田望南旧蔵。森志七に聿修堂蔵と著録。楊譜八32著録。

丁志著録元刊本（上海図書館蔵本は同版か）と盗影所収の書影によって比較するに、この本はその粗なる覆刻の関係にある。この本を故宮目は元刊とするが、その字様・雕刀より見るに、森志の「無刊行歳月、今審初明人従至大刊本重彫者」の審定に従うべきである。森志曰く、「是書載湯尹才解惑論、恐非銭氏之旧、据詹子敬序則至大刊行之際附刻是書歟」と。

新刊仁斎直指方論　二六巻　宋楊士瀛撰　詹宏中校
〔元〕刊（環溪書院）　巻一・二配影写本　六冊

後補縹色表紙（二九・四×一九・三糎）、裏打修補が加えられ、原料紙縦二四・五糎。首に、景定甲子〔五年〕良月朔三山楊士瀛登父序、「仁斎直指方論綱目」（跨行）、次に「新刊仁斎直指方論目録」（跨行）があり、目録題の次行に低五格「環溪書院刊行」の刊記が刻され、以上を以て一冊をなす。本文巻首「新刊仁斎直指方論巻之一」、第二・三行低八格、「三山名医仁斎楊士瀛登父編撰／建安儒医翠峯詹宏中洪道校定」と題す。巻二以下は第二・三行の撰校者の題署なく、首題或は尾題で「新刊」を「新編」或は「増修」に作る巻もある。尾題を巻一・三は「楊氏直指方論」と題する。左右双辺（一八・六×一二・八糎）有界十四行、行廿四字。版心細黒口双黒魚尾、「仁方幾フ　（丁付）」。配影鈔本たる巻二末に「右二巻依京都福井氏崇蘭館所蔵宋槧本補抄如其漫漶不鮮処則依朝鮮国刊本塡補与児恒善対読校訖癸卯閏月」なる渋江抽斎の識語がある。「武田文庫」「多紀氏／蔵書印」「江戸医学／蔵書之記」「読杜／艸堂」等の印あり。多紀氏医学館等旧蔵。森志八・楊続譜五著録。後掲の北平図書館原蔵存首五巻本は同版。

新刊仁斎傷寒類書活人総括　七巻　宋楊士瀛撰　詹宏中校
〔元〕刊（〔環溪書院〕）　二冊

後補縹色表紙（二九・五×一四・三糎）、裏打修補が加えられ、原料紙縦二四・三糎。首に、「新刊仁斎傷寒類書活人総括目録」あり。本文巻首、「新刊仁斎傷寒類書活人総括巻之一」、第二・三行低八格、「三山名医仁斎楊士瀛登父撰次／建安儒医翠峯詹宏中洪道校定」と題す。巻二以下は第二・三行の題署なし、巻一の尾題は「新刊」を「増修」に作り、巻二の尾題は「新刊」の二字がない。左右双辺（一八・六×一二・七糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「仁括幾（或は幾フ）（丁付）」。前半に少しく室町末江戸初間の朱筆の句点墨筆の書入あり。蔵書印記前掲本に同じ。森志八・楊続譜五著録。涵芬楼蔵本（涵録著録）は同版か。

新刊仁斎直指方論医脉真経　一巻　宋楊士瀛撰　〔詹宏中校〕〔元〕刊（〔環溪書院〕）　一冊

後補縹色表紙（二九・五×一四・一糎）、裏打補修が加えられ、原料紙縦二四・五糎。首に景定壬戌〔三年〕七月既望三山楊士瀛登父序及び「医脉真経目録」あり。巻首二葉を欠く。尾題「新刊仁斎直指方論医脉真経巻終」と題す。左右双辺（一八・八×一二・八糎）有界十四行、行廿四字。版心細黒口双黒魚尾、「仁永夬　（丁付）」。室町末江戸初間の墨筆書入少しくあり。印記前に同じ。森志八・楊続譜五著録。北京図書館蔵本（涵録著録本か）は同版か。

新刊仁斎直指小児方論　五巻　宋楊士瀛撰　詹宏中校
〔元〕刊（環溪書院）　巻三―五配影写本　二冊

後補縹色表紙（二九・五×一九・三糎）、裏打修補が加えられ、原料紙縦二四・四糎。首に景定庚申〔元年〕開朔三山郡址后曹

楊士瀛登父自序及び「新刊仁斎直指小児方論目録」がある。目録題の次行低五格「環溪書院刊行」の刊記あり。本文巻首「新刊仁斎直指小児方論巻之一」、第二・三行低七格、「三山名医仁斎楊士瀛登父撰次／建安儒医翠峯詹宏中洪道校定」と題す。左右双辺（一八・七×一二・六糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。版心粗黒口双黒魚尾、「仁小児幾　（丁付）」。所々朱筆の訓点書入がある。配鈔の巻五末欄外に「右巻三以下家本欠癸卯冬以京師崇蘭館所蔵宋槧本補抄原本漫滅不少及尾半葉欠今依朱崇正本及医方類聚塡補加朱匡以別之抽斎善」なる渋江抽斎の識語がある。蔵印前に同じ。森志八・楊続譜五著録。

以上四部行款字様版式を同じくし、前後して環溪書院から刊行されたものと思われる。森志は「此本紙刻精良、当是景定原刻」と云っているが、元刊麻沙本である。森志によれば、初め抽斎この本を獲、後に医学館に献じたと云う。この元刊本は伝本極めて稀れ、この四部を合刻せる明嘉靖廿九年新安朱崇正刊本が行れているが、それは朱氏の増改が加っている。

重刊孫真人備急千金要方　存一〇巻（存巻二・三、五上下、七・八、一六―一九、三〇）　唐孫思邈撰　宋林億等校　〔元・建〕刊　一〇冊

後補茶褐色刷毛目表紙（二五・七×一八・一糎）。裏打修補が加えられ、原料紙縦二二・九糎。本文巻首「重刊孫真人備急千金要方巻之幾」、この題下に小字を以て小題が題さる。左右双辺（一八・五×一一・八糎）有界十二行、行廿二字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「金方幾フ　（丁付）」。左上欄外に耳格あり、小題を記す。巻末に「経　進校定備急千方（下）要方後序」を附し、末に「治平三年正月二十五日／進呈訖至四月二十六日奉／聖旨鏤板施行」と署し、高保衡・孫奇・林億・銭象先の銜名がある。巻卅の首二葉を欠き、所々破損がある。間々室町末近世初間の墨筆の訓点が附される。「杉垣蓼／珍蔵記」の印あり。楊譜七15著録。

北宋治平三年官本は今伝わらないが、それに基づく金沢文庫旧蔵南宋初刊本は上杉家の蔵である。この本に欠くが、完本に存する目録後の墨図記中に「近得前宋西蜀経進官本不敢私秘重加校正一新鏞梓与世共之」と云っているから、本版は宋蜀刊本を承けた建坊刻本である。この本は早印にして撫印清爽。或は覆宋か。書陵部（森志著録）・静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・香港大学（劉影・香港大学馮平山図書館蔵善本書録著録）蔵本は同版、北京図書館蔵本（二部、一は伊沢蘭軒旧蔵）・瞿目・莫目莫跋著録本も同版か。

太平聖恵方　一〇〇巻　宋王懐隠等奉勅編　〔室町後期〕釈周音等写　伝鈔金沢文庫蔵宋刊本　五〇冊

丹表紙（二八×一九・四糎）。首に「大宋新修太平聖恵方一百巻排門目録」がある。但しこの目録は巻九十八の中途に止って以下を欠くが、下端に「巻百終」とある（これにつき楊守敬が眉上に「第九十九第一百両巻為針経／此本亦有之惟／目録失一葉無／知者於此葉末／補書巻百終／妄矣」と注記を書入）。次

に「御製太平聖恵方序」があり、後直に本文に接属する。本文巻首「太平聖恵方巻第一凡三十門」と題し、毎巻次に目次を列して、正文に接属する。烏糸欄左右双辺（二二・一×一六糎）有界十三行、行廿五字。柱は白口双黒魚尾、下象鼻に間々刻工名も移写さる。巻九九・一〇〇の合一冊は烏糸欄が単辺無界で、他の巻とは別手の筆で、且つ挿絵は空欄にして写されておらず、時代やゝ降る配鈔のようである。主な書写者は鎌倉円覚寺の周音で、巻一一、二四、三一―五四、五九―七四、八五―一〇〇は別手で数人の寄合書。周音の書写にかゝる巻はその首葉の柱の下象鼻に「相之瑞鹿円覚（或は相州円覚寺、相之円覚寺、相陽円覚寺、相之円覚、相之鹿山、鹿山等）第二位周音書写旃（或は書写焉、写焉、書之等）」「周音書」「円覚第二位周音書」「周音首座書旃」等の書写識語が細書されている。刻工名の写されているのは巻二一―二四、三一・三二、四四、四九・五〇、七〇、九五―九六で、その名は、王録、王保、王五、欧陽正、正、欽六、忻仲、胡弟、呉正、呉世栄、蔡六九、蔡小、謝成、章珪、章圭、徐立、立、上官、上官琦、三二、三五、三六、卅六、蔣全、銭三十、詹六二、双千、張佑、張文義、文義、張天、張全、張休、張七六、張六七、張六、張三十、張昌、趙世昌、世昌、趙、沈明、明、鄭太、東三、東三五、東三七、東七、東七五、東十、東宋、宋、東、范六、昊卞、付才、孟彦、熊文、葉元、葉名、葉九、葉卅五、葉、楊圭、圭李八弟、廖瑜、廖珎、劉十、劉十六、林厚、黎昇、昇、震、定。巻卅四の尾題下に「金沢文庫」と金沢文庫印を写してあるので、この本が金沢文庫蔵宋版からの伝鈔たることが判明する。所々に訓点や朱・藍筆の句点が附され、時に眉上に朱筆の校字書入がある。巻二尾題の後に本文とは別筆の「上総国市原郡海保村中道長津□□□（花押）」の署名がある。「啓迪院」（藍印）「杉垣叅／珍蔵記」の印あり。楊志十著録。巻首に左の楊守敬の手書題跋三丁（楊志収と小異あり）が附綴してある。

旧鈔太平聖恵方一百巻目録一巻宋王懐／隠等奉勅撰懐隠伝宋州睢陽人初為／道士住京城建隆観善医診太宗尹京／懐隠以湯剤祇事太平興国初詔帰俗命／為尚薬奉御太宗在藩邸暇日多留意／医術蔵名方千餘首皆嘗有験者至是／詔翰林医官院各具家伝経験方以献／及万餘首命懐隠与副使王祐鄭奇（読書後志作彦）／医官陳昭遇参対編類毎部以隋太医令巣／元方病源妄論冠其首而方薬次之成一百／巻太宗御製序賜名曰太平聖恵方仍／令鏤版頒行天下諸州各置医博士掌之／玉海称此書自太平興国三年（陳振孫云七年）詔撰／集至淳化三年始成按森立之訪古志称／尾張藩庫蔵宋本原刊存五十巻餘五／十巻以宋本補鈔毎半葉高六寸五分広／五寸十三行行廿五六字此本行款悉与之合／毎巻首中縫下書相州（或作陽或作之）円覚寺（或無寺字）第二／位周音（或有首座二字）書写蓋僧徒之筆無鈔／写年月相其紙質筆蹟当在数百年／以前書法亦簡勁峭直拠自称首座必非／俗僧惜当時在日本未曾訪之緇流也第／二巻末有上総国市原郡海保村中道長／津神護押則蔵書人之記也毎巻又有啓／迪院緑色記按日本有翠竹菴一溪叟道三／撰啓迪集医書八巻自

序称天正甲戌当／中国明万暦二年是書或経其所蔵与／訪古志又云宋本有福建路転運司今将／国子監太平聖恵方一部百巻廿六冊計／三千五百三十九板対証内有用薬分両及脱／漏差誤爽有万餘字各已脩改開板並無／訛舛於本司公庫印行紹興十七年四月次／有邵大寧宋藻陳日華黄訪范寅秩馬□／官衒六行此本無之按此書第九十九第一百両／巻為針経鈔手雖古稍嫌草率亦無啓／迪院印記其中本有図像皆空位未摹／当是周音鈔本欠末二巻後人又再為補／鈔也此書自書録解題著録後遂不著／于時唯愛日精廬蔵書志載有眼歯両／類三巻（此本眼歯両類在第三十二三十三三十四）其他無聞焉此本首／尾完具真希世秘笈計其所采方書当／増于外台秘要数倍唯毎方不著原書所／出不如当時御覧広記之謹慎然是書／経諸名医編類首尾十三年頒諸天／下以之課士知其非苟而已也／光緒甲申九月宜都楊守敬識于黄岡学／舎「楊守敬印」

本書は禹域に於ては久しく殆ど佚したる如くであったが、我が国には幸に金沢文庫旧蔵南宋初刊本二部が伝った。今一は蓬左文庫蔵、百巻中約半分は配抄、他は宮内庁書陵部・東京国立博物館に分蔵される残存五巻である。この二部は従来同版の如く思われていたが、行款を同うし、字様も頗る相似するが、実は別版であることを筆者は確めた。蓬左文庫蔵本が紹興十七年福建転運使公庫刊、他は紹興頃の浙刊本と思われる。蓬左文庫の配鈔の巻は浙刊本に基づく伝鈔である。この本は、移写された刻工名から考えると、大部分が書陵部等現蔵浙刊本系であるが、一部蓬左文庫蔵本系も含まれている。嘗て金沢文庫にあった頃、両版が混蔵されていたので、その差に気づかず区別なしに書写したものであろう。もっとも両版は内容上大差があるわけでなく、共に同じ北宋官本による翻刊と思われる。この本の書写者周音は字は鶴隠、「鎌倉市史」によれば、北条氏の一族で、円覚寺塔頭仏日庵に住し、同庵の再興者で、同市史「円覚寺文書」所収三八四番の周音が仏日庵領安房国長田保文書の借用を円覚寺に申し込んだ書状が天文廿二年附で、その後慶長十七年の示寂まで同庵にあった。

太平恵民和剤局方　一〇巻　宋陳師文等奉勅原編　許洪注　元大徳八年刊（余氏勤有堂）　一〇冊

香色表紙（二三・七×一五・七糎）、裏打補修が加えらる。序目欠。本文巻首「太平恵民和剤局方巻之一」、次行低三格門名を跨行を以て題する。門名の上花魚尾様墨蓋を冠す。巻二・四―八、一〇の大題は「増註」の二字を冠する。左右双辺（一九・七×一二・八糎）有界十三行、行廿四字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「和方幾（丁付）」、左上欄外耳格あり、門名を題する。巻十尾題の前に「大徳甲辰余宓安刊于勤有堂」の刊記あり。「野間氏／蔵書印」「森氏開万／冊府之記」の蔵印あり。楊譜八1著録。

本書は元豊中に勅編され、大観中陳師文等が勅により増損重修し、後南宋に至ってからも紹興・宝慶・淳祐中逓次増加が行われ、その間指南総論三巻図経本草一巻が添附された。宋元の医院之を薬法の祖本となしたので、元の朱震亨が之を排撃する

に至るまで盛行した。今宋版は書陵部蔵「増広校正和剤局方」が知られるのみであるが、元版乃至明初刊麻沙本は数種が伝わり、それぞれ注等に増損の出入がある。本版と同版には宮内庁書陵部蔵本（森志著録）がある。

太平恵民和剤局方　一〇巻　附太平恵民和剤局方指南総論三巻　宋陳師文等奉勅原編　許洪注　（指南総論）宋許洪編　〔元末明初間〕刊　五冊

後補空押行成文様艶出丹表紙（二四・三×一五・四糎）、裏打補修が加えらる。首に陳師文謹上の「太平恵民和剤局方序」があるが、補写。次に「太平恵民和剤局方総目」及び「太平恵民和剤局方目録」がある。本文巻首「太平恵民和剤局方巻一」（跨行）、次行門名を題す。門名の上花魚尾様墨蓋を冠する。四周双辺（一九・六×一三・二糎）有界十五行、行廿四字、注小字双行。版心粗黒口双黒魚尾、「和方幾　（丁付）」。巻四第六葉、巻五第一・三・四・十六葉は補写。指南総論は本文巻首「太平恵民和剤局方指南総論巻上」、次行低二格「勅授太医助教前差充四川総領所検察恵民局許洪編」と題し、巻中・下は第二行の銜名なく、下は首尾共に「太平恵民和剤局方用薬総論巻下」と題する。左右双辺（二〇・一×一二・九糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。版心粗黒口双黒魚尾、「旨上（―下）フ　（丁付）」。指南総論にのみ朱筆句点、前半に墨筆訓点が加えられている。「生起／館」等の印あり。森志八・楊志続・楊譜八2著録。

指南総論は字様行款を異にしているので、同版ではなく、補配本であろう。元刊とされているが、寧ろ明初刊と考えた方がよい。第一冊の前遊紙に九月廿三日附の森立之のメモ小片一紙を貼附、且つ巻首に次の守敬の手書題跋（楊続志収）の別紙五丁が附綴さる。

元刊和剤局方十巻毎半葉十五行廿四字／四周双辺目録分十四門凡七百八十八方拠目録／毎門有陰識増入紹興続添方宝慶新／増方扈祐新添方呉直閣増諸家名方／続添諸局経験秘方按玉海称大観中陳／師友校正和剤局方五巻二百九十七道二十一門此／本前有日本人補鈔師文上表与玉海合而与／此本不符陳振孫書録解題称和剤局方／其後時有増補殆謂此与然除紹興以後所／増之方実得二百九十六方師文之旧尚可尋／検唯所分十四門毎門下又有附目又得十門／共二十四門是則増添合并不可攷矣宋制最／重医学局方自北宋元豊中紹天下名医／以秘方下太医試験至大観紹興代有増／益故南北宋間皆奉此本為圭臬自／朱震亨局方発揮出其風始稍殺／余謂操古方以治今病固不能尽合師心／自用随意下薬又豈有準平和緩匾／陀曠代一見千金外台古方奚止千万／不有揀択何以示中材末有局方指／南総論上中下三巻標題称勅授太医助／教前差充四川総領所検察恵民局許／洪編而　四庫題要著録本不著許洪之名／按許洪雖無可攷拠其官銜亦必南宋人其／所論列皆有断制非深明医術者不能／提要称其従図経本草鈔録増入亦浅之／乎視洪矣光緒壬午二月楊守敬記「楊印守敬」

余又得大德甲辰余志安刊于勤有堂本体／式頗異文字全与此本同而又欠目録末亦無／許洪総論
又検曝書亭集有建安高氏日新堂／刊本与此本悉合
又得明崇禎丁丑朱葵刊本紹興以下続／添之方皆合并不復識別且多所増損／治婦人諸疾増添至一百五十九方不知所拠／何本然望而知為俗刻
又検学津討原刊本標題増広太平恵／民和剤局方後有図経本草薬性総論三／巻無指南之名其十四門徐産前後二法胎神／游方催生符及後附四香不可謂之方外止六百七十／四方拠称従鈔本入木未得古本訂正則亦未可拠依 按胎神諸符元本無之四香一門則元本所有
又案癸辛雑識称局方牛黄清心丸廿九味前／八味至蒲黄而止自乾山薬以下廿一味乃山芋丸／所誤入今此本牛黄清心薬味次第蒲黄／在第十三而乾山薬在第廿六（余志安本亦同）与周氏／所説不応而与張海鵬刊本次第亦復不同／（張刊次第与朱葵本同）知此書為後人所乱不少大観之／本既不得見則此較勝于朱張両刻有心世／道者亟宜重刊為業医者示之的為恵民／者広其術焉　壬　午九月廿二日燈下再記
余又得日本丹波元胤医籍考稿本有洪／太平恵民和剤局方注自序末題嘉定改元歳／在戊辰日南長至勅授太医助教前差充四／川総領所検察恵民局許洪謹書迺知許／洪有局方注其指南総論冠其注本之首後／人刻局方去其注而存其総論故附于書後序／文中又称洪襲父祖業三世矣楊許叔微有普済本事／方十二巻叔微維揚人紹興三年進士洪豈其／孫与存以俟攷　癸未五月守敬
再記「楊印守敬」

太平恵民和剤局方指南総論　三巻　宋許洪編　〔元末明初間〕刊　一冊

後補紺表紙（二六・三×一八・一糎）、裏打修補が加えらる。原料紙縦二四・六糎。前掲本と同版、この方が刷りがよい。前半に江戸初の墨筆訓点が加えられ、少しく書入がある。「小島氏／図書記」「博彦堂記」の印、巻末に「蘭軒子見贈」の朱筆識語がある。

厳氏済生方　一〇巻　宋厳用和撰　〔南宋末・建〕刊

巻二以下配影鈔本　五冊

香色表紙（二三・四×一五・五糎）、宋版の部分は裏打が施され、影写の所は薄葉斐紙を使用。首に宝祐癸丑（元年）の自序及び目録があるが、影鈔で、宋版の部分は巻一の本文首十七葉を存するのみで、他は全て影写を以て配されている。本文巻首「厳氏済生方巻之一」、次行低二格「〇中風論治」と題す。四周双辺（一八・五×一二・三糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心線黒口単黒魚尾、「方幾（丁付）」。室町末江戸初間の朱筆句点墨筆訓点の書入がある。「養安院蔵書」「愛陰書屋」「杉垣簃／蔵書記」の印あり。曲直瀬家等旧蔵。森志八・楊譜八8・呉志著録。

本書は明後の翻刊なく、禹域には伝本絶えたる如く、四庫全書本は永楽大典よりの輯出八巻本にして、この本とは異同が大

きい。幸い我が国には宋版やその伝鈔本が伝った。宮内庁書陵部にこの本と同版本（森志著録）を蔵するが、それ亦巻一・六・八・十は鈔補にかゝる。

新編医方大成　一〇巻　元孫允賢編　〔元〕刊（〔建安〕鄭氏宗文書堂）　巻三・四配鈔　九冊

茶褐色表紙（二五・五×一八・二糎）、裏打が加えられ、原料紙縦二三・二糎。首に辛酉至治初元文江王元備序があるが、配鈔で、特に首尾の半葉は薄葉紙の臨写を添え、小島宝素が、中縫に「据坊本大成論漫補半面」、又末に「拠坊本大成論漫補三行俟他日得元刊以訂正耳」と注記してある。次に「類編経験医方大成総目」（題は跨行、次行「文江孫允賢編纂」と題す）あり、この総目大題・編者題の次に単辺木記が刻され、「古今医方汗牛充棟雖良医有不能尽閲閲之有不／能尽用者文江孫氏允賢世為儒医一用一方有験／者必集而類編之以方名附各門円□散之下名曰医／方大成意使今之医者雖行万里不必挾他医書而／治病之要瞭然在目其於活人之心視杏林陰徳不／啻過矣不敢私秘敬鋟諸梓与天下明医之士共之」と。この総目の後に「鄭氏宗文書堂新刊」なる双辺木記の刊記がある。本文巻首「新編医方大成巻之一」と題す。左右双辺（一八・二×一二・六糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。版心細黒口三黒魚尾、「医方巻幾（或は幾己）（丁付）」。巻中少しく欠丁或は補写があり、巻末に「据明初重修本補写」と記してあって、補写がこの本とは別版たる明版によることが注記されている。所々室町期の朱筆句点墨筆訓点その他の書入がある。「啓迪院」（藍印）「杉垣窓／珍蔵記」「小島氏／図書記」「尚浜／之印」（刻陰）「字／学古」「江戸小／島氏八／世医師」（刻陰）の印。小島宝素等旧蔵。森志八、楊譜八28著録。

首の序末の臨写の葉に左の小島宝素の手識がある。

孫允賢文江人元仁宗延祐中選医方集成予先祖彦明公／復選宣明抜粋等方而附益之是謂医方大成熊均医学源流

案此本毎巻大字似後人改補則知旧本必是集字然末録宣明抜／粋諸方猶在于彦明重修之前必矣野樵溪白雲続蔵及福榕亭／崇蘭堂本皆題新編南北経験／医方大成而毎門末有宣明／瑞竹抜粋諸方者則熊彦／明所加也　又案序文及目録前木記中大字亦係後人補改

また巻三・四の薄葉紙影鈔本の巻末に次の手識あり、

弘化二年乙巳之秋借鈔平安典薬大允高階真人経宣家蔵明代改補元刊本／開巻題目大字係後人改刊巻末集字猶是旧観也余家所蔵本与此本行款不同則知元代刊不止一種而已行観基樵叟誌

この手識二則はほゞそのまゝ森志に「小島学古日」として引載されている。宝素が指摘する如く、この本の書題等の「大成」の「大」の字は全て埋木による後の補刻である。配鈔本の尾題のみは「新編医方集成」となっている。この本はかなり後印で、初刻が「集成」に作ってあったか、本版はこの本以外他に所伝が知られていないので、確認できぬ。「文安三年六月廿七日」の年記入り（巻五末）、「寛正三年壬午正月十八日調薬同廿

二日始服之」等の書入のメモ紙片が巻五・巻八の表紙見返に貼附され、又室町期の筆にかゝる「医方大成」の旧題簽が首の総目の裏丁に貼附してある。巻八の同処に、宝素が「是僅片帋旧挿此巻中装背時工人截失中間所可惜耳聊取貼于茲是所／与寛正箚記筆跡相同当是緇流所記者耶丁未十二月七日識質」と説明を加えている。

経史証類大観本草　三一巻　宋唐慎微撰　〔明前期〕刊

〔明〕修　覆元大徳六年宗文書院刊本　二〇冊

渋引茶褐色表紙（二六・八×一六・七糎）、裏打修補が加えらる。首に大観二年十月朔通仕郎行杭州仁和県尉管勾学事艾晟序の「経史証類大観本草序」及び「経史証類大観本草目録」（目録題の次行低十格「唐　慎微　纂」と題す）がある。序後の裏丁に「大徳壬寅孟春／宗文書院刊行」の漢文木記がある。巻卅末に嘉祐二年補注本草奏勅及び所引医書十六家撰人姓名義例を附し、巻卅一は第五十葉に止って、以下補写、末に嘉祐三年図経本草奏勅を附する。本文巻首「経史証類大観本草巻之一」と題す。巻二以下の首大題及び巻一以下の尾題は「大観」を「大全」に作る。但し巻廿二の尾題は「経史証類備急本草」、巻卅の尾題は「重慶補註図経神農本草」と題する。四周双辺（一九・四×一三・八糎）有界十二行、行廿字、注小字双行、行廿四・廿五字内外。版心粗黒口双黒魚尾、「本草幾巻（或は幾）（丁付）」、間々下象鼻に陰刻の大小字数あり。「小島氏／図書記」「宝素堂／所蔵医／書之記」「尚真／私印」等の印。森志七・楊志九・楊続志・楊続譜四著録。

この本を楊守敬は次の手跋に云う如く元大徳六年宗文書院刊となし、故宮目等之に効っているが、故宮博物院・中央図書館別蔵本（楊守敬別蔵、刊記が剜去されているので、守敬は宋刊と誤認）と比べるに、此は明かに後出の明前期刊で、刊記もそのまゝ覆刻してあるので、この本や中央図書館蔵本（存二一巻）の如く往々大徳原刊本と誤認され易い。印面漫漶の所あり、明の後修が入っている。森志の本書元大徳壬寅宗文書院本の条に、「又按、小島春沂近得明代重修本〔按、小島春沂尚真所得、即鐵大昕養新録所言者〕、行款字様一与此本同」と録された本は万暦丁丑翻刻本等に非ずしてこの本を指すものであろう。巻首に紅格印刷罫紙二葉に記された次の守敬の手書題記（楊続志収）が附綴さる。

経史証類大観本草三十一巻元大徳／壬寅宗文書院刊本書中避孝宗嫌名蓋原于宋刻為慎微原書按此／書有両本一名大観本草艾晟所序／刻于大観二年者即此本所源也一名政／和本草三十巻以三十一巻移于三十巻之前合為一巻／而删其所引十六家本草義例最謬（以下上欄ニアリ）又疑併三十一巻為三十巻係張存惠所為　政和／六年曹孝忠奉勅校刊者二本皆不附／入寇宗奭本草衍義至元初平陽／張存惠重刻政和本始増入衍義及／薬有異名者注于目録之下　首有木記称泰和甲／子下己酉南至晦明軒／記鐫竹汀程易疇攷為元定宗后称制之年距金亡已十有六年／其説至確提要以為金泰和刻本誤矣余別詳攷載入明／成化重刻政和本草之首　然此本亦不伝至明成化四年山／東巡撫原傑又重刻之于原書略無損／　嘉靖間亦刻本首有陳鳳梧序　迨至万歴丁丑宣城王大猷／始以成化政和之本改従宗文書院大観本／之篇題合二本為一書巻末有王大猷後序／自記甚明並去政和本諸序跋独留大観／艾晟序及

宗文書院木記按其名則大／徳考其書則泰和無知妄作莫此為甚又有／万曆／庚子巡按両淮塩課御史彭／端吾拠此本重刊並去艾序及木記提要所称大徳及銭竹／汀所録皆是此種提要見此本亦増入衍／義遂謂元代重刊又従金本録入而不知／大徳原本並無衍義又有朝鮮国翻刻本一依／宗文本不増一字較明人／為譚／飾焉此書集本草之大成最足依拠／且墨筐墨蓋白字黒字使神農本経隠／居別録蘇敬新脩皆可識別其例亦最／為謹厳下視李時珍之本草綱目龐雑／無序不可為典要矣顧大観政和両本繇／雑不清前人未見古本多不能分辨故／為詳疏如此後有刻此書者以宗文原本／還慎微之旧別以寇氏衍義附刻其後則／尽善矣余得宋宣和刻本衍義光緒乙酉楊守敬記「楊印守敬」

類編図経集註衍義本草　存巻一六―二〇、序例存巻三―五　宋唐慎微撰　寇宗奭衍義　〔元・建〕刊　二冊

淡香色表紙（二四・五×一五・一糎）。本文巻首「類編図経集註衍義本草巻之幾」、次行大字跨行墨蓋を冠して篇名を題す。序例は「類編図経集註衍義本草上巻幾」、次行低二格「序例」と題する。単辺（一八・五×一二・三糎）有界十行、行十九字。注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「本草幾（或は上幾）　（丁付）」。序例巻三は第十五―十九葉（尾）、巻五は首十九葉を存するのみ。「多紀氏／蔵書印」「江戸医学／蔵書之記」「読杜／艸堂」の印あり。森志七・楊譜七27著録。

四庫未収。唐慎微の証類を節略して、寇宗奭の本草衍義を附し、加えるに図を以てし、四十二巻序例五巻から成る。題名の冠称を異にするが、類本に宋建安余彦国励賢堂刊「新編類要図註本草」（静嘉堂文庫・中央研究院歴史語言研究所・北京図書館蔵）がある。この本は蔵印から見て、森志七の「元板不記刊行年日　聿修堂蔵」に該当すると思われるが、当時四十二巻序例五巻目録一巻の完帙であったのが、後に四散したのであろう。森志によれば、「元世医普明真済大師賜紫僧慧昌校正、按、此書即類要図註本草而妄改題目者」と。北京図書館蔵存巻十八至二十三（涵芬楼旧蔵本か）は涵録の解説から察すれば、この本と同版のようである。楊譜所収の本文巻首の書影によれば、首行「類編図経集註衍義本草上巻一」、第二・三行低二格「通直郎添差充収買薬材所辨験薬材寇宗奭編撰／勅授太医助教差充行在和剤辨験薬材官許洪校正」と題してある。

北平図書館原蔵宋金元版解題

史部

資治通鑑　存巻六、一五―一七、二二、三〇―三六、三九―四二、五一、六一―六三、七七―八〇、八五―八七、九六・九七、一〇一・一〇二、一〇六―一〇八、一一二―一一七、一三二―一三四、一四二―一四四、一四六―一四八、一六〇―一六二、一七四、一八四・一八五、一九七―一九九、二一二、二一九―二二一、二四三―二四五、二六七―二六九　宋司馬光撰　元胡

三省音注　〔元〕刊　三〇冊

後補濃藍色表紙（三三・五×二九・三糎）、襯装。本文巻首「資治通鑑巻第幾」、第二・三行低一格、「朝散大夫右諫議大夫権御史中丞充理検使上護軍賜紫金魚袋臣司馬光奉／勅編集」（或は第二・三・四行低一格「翰林学士兼侍読学士朝散大夫右諫議大夫知制誥判尚書都省兼提挙万／寿観公事上護軍河内郡開国侯食邑一千三百戸賜紫金魚袋臣司馬光奉／勅編集」の如く、銜官は或は巻により小異がある）、第四行或は第五行低七乃至八格「後学天台胡三省音註」と題す。双辺（二一・二×一四糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心小黒口双黒魚尾、「通監幾巻　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。次掲の三部を含めて、刻工名を示せば、安堅、惟志、云海、永明、王智夫、王仲仁、王仁甫、王仁父、王伯玉、伯玉、翁禔甫、郭信徳、葛秀甫、希孟、季作、冀子応、義昌、義高、媿教祖、魏祖敬、祖敬、祖、吉父、求明、丘文、丘文槃、文槃、許漢卿、虞良卿、虞漢臣、漢臣、虞文甫、文甫、虞以徳、以徳、虞君賜、虞文斌、文斌、君宝、君興、胡中昭、胡志卿、志卿、午平、呉昭甫、呉生老、生老、呉追甫、追甫、呉可九、可九、呉招甫、招甫、呉華甫、呉巳、克沼、黄子益、黄子一、黄子通、子通、黄善卿、善卿、黄達夫、達夫、黄善珍、善珍、黄叔安、叔安、江天其、江四如、江安民、江寿卿、江志高、江清甫、江青甫、江君美、君美、江実甫、江君裕、君裕、江君寔、江君吉、君吉、江仲安、江梅溪、江伯海、伯海、江叔度、江淑度、江実父、実父、江成甫、江仲察、仲察、江寿卿、寿卿、江吉甫、吉甫、江伯高、伯高、江公、興望、興宗、蔡貢甫、貢甫、蔡興子、興子、坐、士行、志行、志、子興、子勝、子青、子美、子一、子応、実堅、若美、朱士付、朱士行、寿文意、宗敬、周継周、継周、周弟、周寄用、周季方、叔彝、淳卿、升高、肖子光、松青、仁老、仁慈、真何?、正父、正卿、靖甫、青甫、世明、詹宗海、宗海、詹慶二、善楽、善示?、祖珍、達公、智文、仲美、仲績、仲良、仲賢、仲昭、中、張秀祥、張季、張君茂、張良卿、張希文、張伯興、伯興、張漢卿、張叔夷、叔夷、陳子和、子和、陳以敬、以敬、陳光甫、陳文甫、陳子華、陳君仲、陳七、陳外秀、外秀、外、丁師禹、丁伯玉、丁華甫、丁師吉、丁士与、鄭七才、七才、丁、天錫、刀父、刀父□、徳明、徳謙、伯英、范以貴、以貴、范成甫、必遇、必貴、馮永昌、付文徳、付友実、文忠、文福、文鎮、文四、文質、平山、屏山、明時中、時中、兪慈卩、慈卩、尤八、余子恭、余馬児、馬児、余仲容、余安斉、余敬仲、余君裕、君裕、葉靖甫、葉智和、智和、葉克明、克明、葉杞宗、杞宗、葉文意、葉清甫、清甫、葉迂?、姚祖敬、祖敬、姚君実、李伯太、李光奕、光奕、李光于、光于、李子明、子明、李永員、李真僧、真僧、劉子昭、劉仁甫、劉元善、劉伯起、劉季和、季和、劉子仁、劉克明、劉銓孫、劉伯如、劉聰国?、凌善慶、善慶、禾甫、行、信。巻一一一の尾題の裏丁に「補刊曹愚」というのが見える。印面美麗にして、現存本の多くに見られる明修はないが、各巻首尾等に欠丁が多い。

旧京291 292著録。

又　存巻三四―三六、六二・六三、七二、八二―八四、八八・八九、九七―九九、一〇三―一〇五、一二七、一四〇・一四一、一四五―一四七、一七二―一七四、一七八―一八〇、一八七―一八九、二〇三・二〇四、二四一―二四三、二五七―二五九、二七四―二七八、二八三―二八六、二九三・二九四　二二冊

後補紺色表紙（二九・五×一七・九糎）、裏打修補が加えられ、襯装。第二九四巻末に、司馬光進書表、元豊七年奬諭詔書、元祐元年奉旨下杭州鏤板校定校対諸人銜名、紹興二年両浙東路提挙茶塩司公使庫下紹興府餘姚県刊板校勘監視諸人銜名が附してある。巻中往々脱葉がある。刷りは前掲本に及ばないが、明修は加っていない。旧京293 294著録。

又　存巻九―一一、二五・二六、四一―四四、六一―六四、七八―八〇、八九・九〇、九七―一〇〇、一〇九・一一〇、一二一―一二九、一四五―一四八、一五四―一五六、一八一―一八四、一八九―一九一、二〇七・二〇八、二一七―二二〇、二二九―二三五、二五三―二五六、二六六―二七一、二七三―二七九、二八一・二八二、二八四　〔明初〕印　二五冊

後補淡桃色表紙（二七・三×一九糎）、補修が施され、包背装。間々欠丁あり、やゝ後刷りにかゝり、明初印か。しかし明修は入っていない。

又　存巻二一―二四、四一―四四、一一九―一二二、一五一―一五四、一五九―一六二、一八九―一九五、二五五―二五七、二五九・二六〇、二七一―二七四、通鑑釈文辨誤存首六巻　〔明〕印　一二冊

後補紺色表紙（二七・五×一七糎）、包背装。原題簽「資治通鑑幾」を護葉紙に貼附してある巻もある。辨誤は緑色古表紙（二七・五×一七・五糎）、包背装、元題簽（明か）あり。巻中補写が混る。明修はないが、刷りは明に降る。旧京296 297著録。

本版の現存本の殆どに見ないが、天目及び莫跋著録本には首に翰林学士王磐の序があると云う。天目によれば、その序に「朝廷於京師剏立興文署署置令丞幷校理四員厚給禄廩召集良工剡刻諸経子史版本流布天下以資治通鑑為起端之首可為識時事之緩急而審適用之先務云云」と。これによって従来本版は興文署の刊刻にかゝるとされている。しかし四庫提要は「黄溥簡籍遺聞称是書元末刊於臨海」と言っている。通行の興文署刊行説に異を唱えて臨海刊行説を執ったのは王国維である。その「元刊本資治通鑑音注跋」（「観堂集林」巻一七）に曰く、

案興文署之立未知何年然秘書監志云至元十年十一月十七日大保大司農奏過事内一件興文署掌雕印文書交屬秘書監呵是至元十年已有興文署且是年署中已有雕字匠花名四十名印匠一十六名則刻印通鑑自当在此前後而胡梅磵通鑑注成於至元二十三年遠在設興文署之後又王磐致仕在至元二十一年以前亦無從為胡注作序且王氏序中無一語及於梅磵則王氏所序興文署所刊自為

温公原書非胡注也又梅磵自序謂初撰通鑑広注九十七巻本用陸氏経典釈文例与本書別行丙子避地越之新昌失其書乱定反室復購得他本為之注始以考異及所注者散入通鑑各文之下云云案丙子即宋亡之歳梅磵丙子後所得之他本蓋即興文署刊本因注於此本之上後来刊注時遂并王序刊之実則与胡注無与也明黄溥簡籍遺聞謂是書刊於臨海洪武初取其板入国子監此語得之臨海為梅磵身後矣（袁桷師友淵源録云胡三省釈通鑑三十年兵難稿三失乙酉歳留袁氏塾手鈔定注己丑寇作以書蔵窖中得免定注今在家是清容作淵源録時其書尚未印行可為今本非興文署所刊之鉄証矣）

と。王氏の考証は洵に傾聴に価し、動かし難きかに見えるが、些少疑念が残る。王磐序が現存本の殆ど（多くは明修の為佚失せるか）にないのは如何なる理由であるか。現存宋元版中に興文署刊の無注通鑑に該当すると思われる版が見当らない。元史本紀世宗至元廿七年に「復立興文署掌経籍板及江南学田銭穀」の記事がある。一旦創設されたが、廃止同様であった興文署が復興されたというのであろう。廿七年以後の興文署が本書の鏤刻を行ったとすれば、本書成稿後となり、王磐の没年は至元卅年であるから、序を書き得ないではない。今暫く両説を掲げて後考を期することゝする。板木明代南監に移管され、南雍経籍考に「資治通鑑三省編（ママ）三百九十四巻釈文辨誤十二巻見印」と録されている。同版に静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・天理図書館（存巻卅三）・故宮博物院楊氏観海堂（二部、一は存巻五・五二）・中央図書館・中央研究院（鄧目著録）・北京図書館・上海図書館・南京図書館（丁志・盛影著録）蔵本、丁志・莫録・瞿目瞿影・楊録（存一五〇巻）・王記・莫目・莫跋著録本等がある。

増入名儒集議資治通鑑詳節　存巻八四―九一　不著詳節人〔宋・建〕刊　六冊

後補紺絹表紙（二二・一×一三・六糎）。裏打補修を加え、襯装。本文巻首「増入名儒集議資治通鑑詳節巻第幾」と題す。左右双辺（一四・三×九・一糎）有界十三行、行廿二字。上欄に評語を標記、行二字。版心線黒口双黒魚尾、「監久幾（丁付）」。稀に上象鼻に大小字数あり。右上欄外に耳格あり、帝名を刻す。匡貞等に欠筆を見るが、欠画は厳謹ではない。字様が細く小く美しい早印本であるが、所々に欠葉或は破損がある。旧京289290著録。四庫未収。科挙受験用の通鑑末書の一種。他に伝本を聞かない。

増修陸状元集百家註資治通鑑詳節　存巻一―一〇、三一―四〇、六一―七〇、八一―一〇〇、一一一―一二〇　宋司馬光撰　不著詳節人　陸唐老集注〔南宋末元初間・建〕刊〔元・明初〕修　六冊

後補縹色表紙（二八・九×一六・五糎）。包背装。首に乙卯秋九月望日太原元好問書の「陸氏通鑑詳節序」、「陸状元集百家註司馬温公資治通鑑」（次行低三格「神宗皇帝御製序」と題し、附注）、「奬諭詔書」、「温公進資治通鑑表」、元豊七年進表、「温公親節資治通鑑序」、「劉秘丞外紀序」、「温公外紀序」、紹興三

十年馮時行の「通鑑釈文序」があり、その末に「新／又／新」（鑪形）「桂／堂」（爵形）の木記が刻され、次に「陸状元通鑑君臣事実分紀綱目」、次に「増進陸状元集百家註資治通鑑詳節目録／（低八格）会稽陸　唐老　集註／（低八格）建安蔡　文子　校正」と題して目録をおき、次に「陸状元集百家註通鑑節総例」、「叙撰十七史人姓氏」、「叙註十七史人姓氏」がある。本文巻首「増修陸状元集百家註資治通鑑節巻之一」と題する。但し巻卅一以下は「陸状元集百家註資治通鑑詳節巻第幾」、或は「増修陸状元集百家註資治通鑑詳節」と題し、尾題には以上の外に「陸状元資治通鑑詳節巻之幾」と題するもあり、巻によりまちまちである。左右双辺（一八・六×一二・八糎）有界十四行、行廿三字、注小字双行、行廿七字。版心小黒口双黒魚尾、「鑑幾フ　（丁付）」。但し巻卅一―卅五は左右双辺（一九・四×一三糎）有界十三行、行廿二字、注小字双行、行廿七字。巻卅六以下は再び十四行、行廿三字、注小字双行、行廿八字となるが、巻卅一以下は共に上欄に評語（行三字）を首書し、版心細黒口双黒魚尾、「節（或は鑑節、或は卩等）幾　（丁付）」。左上欄外に耳格あり、帝名を記す。所々句点・墨線が附刻さる。間々欠筆が見られる。旧京329 330著録。

又　存巻一―三一、六七―八〇　三冊

縹色表紙（二三・五×一五糎）。包背装。前者に比し、首目の通鑑節総例が元好問序の次にあり、分紀綱目と十七史人姓氏との順序が逆になり、且つ目録の前に綴じられている。前者の欠巻たる巻十一以下巻卅までを検討するに、巻十二までは大題が「通鑑節」となって、行格版式前者の巻十までと一致し、巻十三以下が前者の巻卅一以下の大題・行格・版式と一致する。巻一の首四葉欠失。

又　存巻二三―三〇、四七―七一、七九―八六　五冊

後補厚手艶出香色表紙（二五×一五・五糎）。包背装。

以上三部は静嘉堂文庫蔵本（陸志・陸続跋著録）と共に同版である。巻十三以下とその前とが行格を異にし、印面はほゞ同程度であるが、巻により字様・雕刀の差がある。此を取合せ本と解するか修補と見るか、判断が困難である。四部とも一致するので今修として後考を俟つ。王記は十三行本・十四行本の両種元建刻本を著録し、この本と同版らしいが、十三行本について「首司馬光馮時行序元好問序末刊新又新三字鐘式木記桂堂二字鼎式木記姓氏後有□□□氏万巻堂八字木記」と、姓氏後にも刊記を有する小異がある。上海図書館蔵本も或は同版か。（追記7）

通鑑地理通釈　一四巻　宋王応麟撰　元後至元六年刊（慶元路儒学）至正一一年・〔明〕遞修　玉海附刻本

四冊

後補白色表紙（二七・五×一六糎）。首に「通鑑地理通釈目録」、上章執徐歳橘壮之月子玉子書通釈後の自跋あり。本文巻首「通鑑地理通釈巻第一」、次行低十一格、「浚儀王応麟伯厚甫」と題す。左右双辺（二二×一二・八糎）有界十行、行廿字。版

心白口双黒魚尾、「通釈巻幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名、往々左上欄外に耳格あり、小題が記さる。

少微家塾点校附音通鑑節要　存巻一四―三〇　宋江贄撰

〔元末明初間・建〕刊　一冊

藍色表紙（二五×一六糎）。包背装。本文巻首「少微家塾点校附音通鑑節要巻之幾」と題し、尾題或は「少微通鑑巻之幾」と題する巻もある。書眉を設け、四周双辺或は左右双辺（約二一・七×一三・五糎）有界十八行、行卅一字。書眉は行二字、綱目を標記。墨線が附刻さる。版心小黒口双黒魚尾、「史（或は少降）幾　（丁付）」。巻十四首四葉、巻卅第三葉以下が欠丁。旧京325著録本と同版。

同　存巻三三―四四　〔元・建〕刊〔明〕印　一冊

藍色表紙（二三×一五糎）。包背装。本文巻首「少微家塾点校附音通鑑節要巻之幾」と題する。書眉を設け、単辺（一六×一一・四糎、うち書眉幅二糎）有界十四行、行廿一字。書眉の標記行二字。墨線附刻。版心線黒口双黒魚尾、「幾己　（丁付）」下象鼻に大小字数あり。左欄外に耳格のある葉もあり、帝名を刻する。上海図書館蔵本（存巻五―九、一五―五〇）は同版か。

以上二部は中央目では同版の如く一具に著録してあるが、夫夫別版である。本書もと五十巻、四庫提要存目には明正徳九年経廠刊本が著録され、「疑正徳時又為重脩非復贄之旧本」と。ハーバード大学燕京研究所には本書の元刊本が蔵されるが、行格を未だ詳にしない。

資治通鑑綱目　五九巻（欠巻三二・四〇）　宋朱熹撰

〔宋嘉定一二年〕刊（〔温陵郡斎〕）〔宋末元明初〕遞修　巻一補鈔　五七冊

後補淡茶色表紙（三八・三×一八・三糎）。襯装。首目・巻一は補写。本文巻首「資治通鑑綱目第幾」と題し、題下に該巻起尽の干支王名年を小字双行に注す。左右双辺（二一・五×一三・八糎）有界八行、行十七字、注小字双行、甲子を上欄に標記、行二字、甲と子は墨囲陰刻に作る。版心白口双黒魚尾、「通鑑綱目巻幾（補刻は多く「綱目幾」）　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。補刻には間々線黒口（字数あり、刻工名なし）あり、字数刻工名なき時代の降れる補刻の版心もある。玄朗敬儆警驚殷匡筐恇胤恒帽禎楨偵徵譲樹戍勗桓峘構購慎敦鄟等の字に欠筆を見るが、慎敦鄟には欠かざる場合もあって不定である。宋末から明初に及ぶ補刻の葉が多い。刻工名は、李文、李洽、李合、合、李渙、李千、千、李養、曾立、立、王中、王友、友、王成、王定、何沢、金祖、高宣、宣、黄光、光、江文、蔡義、義、蔡正、周明、明、周全、全、蘇定、蘇、陳潤、陳新、呉中、呉圭、圭、徐中、張成、余才、葉永、永、葉茂、茂、丁万、万、鄧洽、潘太、太、楊栄、楊石昌、石昌、劉中、応?中、中、凉、元、才、亮、定、恭、佑（以上原刻）王元亨、何文、金大有、魏全、魏、共友、虞文、虞丙、丙、高顕、高顕祖、蔡仲、蔡甫、蔡申、申、章泥、朱文、陳先、葉

友、李元、李建、建、劉興、興、劉遂、亢、朱、仁、方、徐、魏、茅、孫、曹、章、春、謝、時、之、范、椿、建、京（以上宋修）、可川、可原、煥之、魏徳夫、倪平山、平山、許成、古賢、雇恭、雇、徐明、朱元、朱大存、周鼎、士元、成、青之、陳栄、陳彦昭、平江陳子成、子成、張君用、張用、張、張中佑?、中佑?、趙秀、趙徳明、趙、沈子、沈英、沈、鄭瑞、鄭、湯景、湯、屠明、屠、陶瑞、陶中、匂、任子敬、任、伯川、潘茂、潘宾、繆謙、繆太亨、太亨、熊仁、立挙之、林茂実、林茂叔、林、柳、施、夫（以上元修）である。巻一補写。巻二の第五十三葉、巻十一の第九葉、巻廿一の首葉、巻廿三の第四十九葉、巻四十六の第七葉、巻五十五の第卅九葉、巻五十九の末二葉欠。所々朱筆の句点墨筆の校合の書入が存する。第一冊にのみ「宋本」「毛」「晉」「菉竹堂」蔵書」の印あり。明の葉盛（正統十三年進士）・汲古閣旧蔵。旧京298―300著録。

同版本に中央図書館蔵本（一部、劉氏嘉業堂旧蔵、劉影著録。一部存巻卅二・四〇、張氏旧蔵）・北京図書館（潘氏宝礼堂旧蔵、補配両種宋刻本、潘録・王記著録）・涵芬楼（涵録著録）蔵本がある。涵録によれば、その所蔵残本には共に嘉定己卯十二年の年紀のある陳孔碩及び朱子門人李方子の両跋（碩跋全文潘録に引載）を有し、刊版の顚末を述べて、真西山が温陵に守たりし時、朱子の嗣子より稿を得て、之を校讎して郡斎に刊せしめ、嘉定己卯歳竣工したという。郡斎読書志附志にも「真徳秀刻於泉南陳孔碩李方子叙」と録されている。即ち朱子成書後の第一次刻である。刻工の何沢・金祖・楊栄・呉中は寧宗理宗間刊古史、金祖・周明・周全・呉中・徐中・陳新は越刊八行本注疏類の宋中期補刻、金祖・楊栄・呉中・陳新は贛州刊文選の補刻、張成・陳新・葉茂は嘉定九年池州刊晦庵先生朱文公語録、金祖・呉圭・陳新は寧宗理宗間刊晦庵先生文集、劉中・徐中が慶元三年刊嘉定五年修漢隷字源に、その名が見え、その他の原刻の刻工も、皆嘉定前後の杭州地区の刊書の刻工中に往往散見されるから、この本が嘉定刊たることは間違いない。

資治通鑑綱目書法　存巻三―六、一九―三四、五三―五九　元劉友益撰　〔元至治二年〕刊（〔積善堂〕）　八冊

後補紺色表紙（二二・三×一四・八糎）。襯装。前掲の故宮博物院蔵本と同版である。巻五十九の尾題の前に双辺木記の刊記があるが、「吉安至」の三字が僅に識読されるのみで、他は漫滅している。この本は残本で刊年を記した刊記の巻を欠くが、故宮博物院本によって、元至治二年積善堂刊たることが判明する。旧京301302著録。

又　存巻四九―五九　一冊

縹色表紙（二四・二×一四・八糎）。包背装。両本とも後刷というわけでないが、巻末刊記は此も前者と同様漫滅している。漫滅というよりは剜去したものであろう。

資治通鑑綱目集覧　存巻一―一四　元王幼学撰　〔元至正〕刊　四冊

後補縹色表紙（二五・八×一五・九糎）。襯装。首に〔延祐六年〕秋七月宣城貢奎の序、延祐丁巳嘉平既望鄱陽馬端臨の序、至正辛巳（元年）蒲節雙谿鮑邇の序、至治元年正月既望西岷王寔の序、丁卯進士羅允登の集覧序、次に泰定元年正月燈夕前一日古舒望江慈湖王幼学行卿端拜謹書の「資治通鑑綱目集覧序例」がある。本文巻首「資治通鑑綱目集覧巻第一」、次行低六格、「古舒慈湖王幼学行卿編」と題す。左右双辺（二一・二×一三・六糎）有界十行、行十六字、注小字双行、行廿四字。版心線黒口双黒魚尾、「集覧幾　（丁付）」、間々上象鼻に大小字数（或は下象鼻にも）、下象鼻に刻工名あり、左上欄外の耳格に帝名が記さる。刻工名は古番中宏仲刊、仲、中弘遠、中、士伯、五伯、万□、□山、周、付、洪、亏、沈、則、元、彭、儿、刂、彡等である。旧京306―309著録。

前掲の故宮博物院本に於て記した如く、明洪武二十一年梅溪書院の刊にかゝる本版の覆刻があって、それが往々元版と誤認されている。また瞿目瞿影及び旧京303―305著録（北平図書館原蔵）の「歳在上章敦牂孟夏魏氏仁実書堂新刊」の有刊記本を元刻とするが、敦牂即ち庚午を至順元年に繋ければ、序の至正元年と矛盾し、字様雕法から見て明かに元刻ではなく、早くとも洪武二十三年、寧ろ中央目の著録の如く景泰庚午元年刊とすべきであろう。従って本書の現存元槧本としてはこの残本がある にすぎない。

大事記通釈　存巻二・三　解題存巻九（零葉）　宋呂祖謙撰　〔宋嘉定五年〕刊（〔呉郡学舎〕）　一冊

後補紺色表紙（二八・八×一八・三糎）。一部裏打がなされ、襯装。本文巻首「大事記通釈巻第幾」、次行低十二格「東萊呂祖謙伯恭」と題す。左右双辺（約二一・二×一五糎）有界十行、行廿字、注小字双行。解題は「解題曰」の陰刻の標識を首に冠する。版心白口双黒魚尾、「大事記通釈（或は大士通）幾（解題巻九）　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に子政、陳、李、昌、王、趙の刻工名がある。この子政は故宮博物院蔵宋武夷詹光祖月崖書堂刊資治通鑑綱目及び淳祐十年福州路刊国朝諸臣奏議の刻工名にもその名が見られる。同一人か或は同名異人か。樹讓に欠筆がある。大事記十二巻通釈三巻解題十二巻中、通釈は巻三は欠丁はないが、巻二は第十三至十七葉を存し、解題は巻九の零簡三葉があるのみである。旧京310著録。

本版は他に確実な現所在が知られていないが、陸志に宋版の完本が著録されている。しかし静嘉堂文庫には今その本は来ていない。陸志によれば、淳熙七年自序及び嘉定五年後冬至前二日学掾東陽李大有書の序、その後に四人の校正者の銜名があり、大有序に曰く「嘉定壬申鋟木呉学」と。（追記8）

通鑑続編　二四巻　元陳桱撰　元至正二二年序刊（松江・顧逖思）　一二冊

艶出縹色表紙（三一・五×一九・五糎）。巻五の第二・三葉及び巻廿一の第十九・卅一・卅三・卅五・卅七・卅九葉欠丁。巻一九・廿及び巻廿三・廿四の両冊は紙・印刷時を他巻と異にし、

やゝ後刷で補配本か。旧京326―328著録。

又　六冊

後補雲絞文様黄絹表紙（三二×一八・五糎）。包背装。巻廿四は第四十七丁にとゞまり、以下欠葉。前掲故宮博物院蔵本等と同版。

通鑑前編　存巻四―六、一八　宋金履祥撰　元天暦元年序刊　四冊

後補紺色表紙（三〇・三×二〇糎）。襯装。一部裏打修補。本文巻首「通鑑前編巻之幾」、次行低十三格「金　履祥　編」と題す。左右双辺（二二・七×一四・八糎）有界十行、行廿二字、注小字双行。版心線黒口（魚尾なし）、「通鑑前編巻幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。巻十八の尾題の次に一行をあけて低八格、「門人御史台都事汝南郭炳校正／門人　金　華　許謙校正」の二行があり、次に葉を改めて跋文二葉を存するが、末を欠く。刻工名は、沈天錫、沈天易、沈君玉、王清谷、王続卿、呉茂翁、呉茂、葉君傑、君傑、葉蕭甫、葉琇、盛元吉、黄埜、汝文虎、滕吉甫、鄭必清、必清、応顕之、顕之、弓日章、弓日華、弓、芦堅、堅、芦用之、方景山、陳文貴、詹仲亨、仲亨、応士良、徐寿卿、寿卿、徐寿山、翁子和、余宝、緒君淑、龔日新、龔日華、李月泉、潘山琇。巻首に巻三の巻末一葉（但し表葉は末数字を残すのみ）のみが遺され、巻四首葉裏、第二葉表、巻五首十一葉、巻六首葉を欠き、その他往々破損の葉がある。巻十八首にのみ「晉府／書画／之印」「九折／篆水印」の蔵印があって、この巻のみが他巻と紙質を異にする。元来は別蔵であったのであろう。旧京311―313著録。本版は前編十八巻挙要三巻の完本の静嘉堂文庫本（陸志・陸跋著録）には首に天暦元年許謙の序がある。本版の刻工の王清谷・鄭必清は至順元年江浙行省刊四書集義精要、王続卿・詹仲亨・陳文貴・翁子和は元泰定元年西湖書院刊文献通考の刻工名中に見えている。本版は他に丁志・盎影著録の南京図書館蔵本がある。明代板木が南監に移され、明南雍経籍考に「通鑑前編十八巻挙要二巻存者九百八十面失者七面」と。

宋史全文続資治通鑑　存巻六―八、一三・一四、二三―三六附宋季朝事実二巻　元不著撰人　〔元・建〕刊　七冊

縹色表紙（二七・八×一七・六糎）、包背装。本文巻首「宋史全文続資治通鑑巻之幾」と題す。たゞ巻六は「続」の字を脱し、巻卅一至卅五は「増入名儒講義続宋資治通鑑長編巻之幾」、巻卅六は「宋史全文続資治通鑑長編巻之三十六」と題す。尾題は巻七は「宋史全文続宋資治通鑑」、巻廿九は「続通鑑長編」、巻卅―卅三・卅五は「増入名儒講義続資治通鑑長編」、巻卅四は「続資治通鑑長編」、巻卅六は「名儒講義続宋資治通鑑」と題する。此等首尾題の「宋」或は「宋史」或は「宋史全文」の字の多くは後の嵌刻らしい。巻卅の本文後と尾題の間に双辺の木記があるが、匡郭のみで刊記の字は剜去されている。宋季朝事実は本文巻首「増入名儒講義続資治通鑑宋季朝事実」と題す

る。双辺（二〇×一三糎）有界十六行、行廿六字、上欄に綱を首書、行二字。「甲子」は墨囲陰刻、「某釈曰」「講義曰」等の標識は墨囲陰刻、行文低一格やゝ小字。版心線黒口双黒魚尾、「宋監幾フ（或は幾）（丁付）」。左欄外に耳格あり、帝名・年号が記さる。旧京320―323著録。

本版を覆刻せる明前期刊本あり、陸志は之を明天順刊とし、静嘉堂文庫（陸志著録）・天理図書館（存宋季朝事実）・北京図書館（二部、一は瞿目著録、一は滂録著録）蔵本・北平図書館原蔵本（旧京324著録）等がそれである。劉影・繆続記（存巻三〇―三六）著録本は明かでないが、北京図書館（存首十九巻）・米国国会図書館蔵元刊本は或は本帙と同版か。

通鑑紀事本末　四二巻（欠巻一・二、二九、三一、三三、三五、三八）　宋袁樞撰　宋淳熙二年刊（厳州郡庠）・端平元年・淳祐六年・〔元初〕遞修　三五冊

後補香色表紙（三二×一九・四糎）。本文巻首「通鑑紀事本末巻第幾」と題す。左右双辺（一九・八×一五・二糎）有界十三行、行廿四字。版心白口双黒魚尾、「通鑑幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数（間々下象鼻に）、下象鼻に刻工名がある。玄弦朗眺警驚弘泓殷慰匡恒胤恒貞偵徴譲署樹豎戍勗桓絙慎敦等に欠筆が見られ、構字多く太上御名と注する。この本の刷りには参差があって、全帙同時の印にかゝるものでなく、刷時を異にする本の取り合せと思われる。原刻の葉にはかなり漫漶が見られ、版心に字数刻工名なき葉が最も新しい補刻で、元初に降ると見られる。刻工名は、方元、方正子、正子、方淳、方茂、方范、方忠、忠、方昇、昇、方、毛森、毛季大、季大、毛元亨、亨、毛杞、毛松、松、翁真、翁晋、晋、余元、余昌、呉厚、呉琮、呉中、江淮、江彬、江輝、於仁、於、仁、葉松、范実、朱明、明、王通父、蘆適、盧洪、芦洪、陳和、和、金昇、公林、公、楊暹、凍全、先、卞、全、厚、蔣、淳、楫、辛、何、申、同、思、陛、川、汙（以上原刻）、方申、方堅、堅、方子才、子才、方子文、方文虎、方文龍、虞文、文、翁寧、寧、翁珍、翁、占文、占、李徳正、江大有、江大亨、江、范石、石、劉士永、童泳、余斌、徐仁、栄、呉、番、范、友、朱、談、趙、応、汪、云（以上修）。此等の刻工の多くは南宋前期から中期にかけての杭州地区の刊行書にその名が見えている。首尾の紙背に「国子監崇／文閣官書（この下小字を以て三行に「借読書者必須愛／護損壊欠失典／掌者不許収受」と）」の大形長方形朱印が鈐されている冊がある。旧京331 332著録。

同版に静嘉堂文庫（存二九巻、陸志・陸続跋著録）・北京図書館（一は傅記著録。一は存巻二・一二・一三、繆続記・潘録著録）・上海図書館（二部、一は存巻二二）蔵本や傅目（存一巻）・莫跋（存五巻）・王記著録本がある。この本に欠けた首巻には、傅記・王記によれば、首に淳熙元年楊万里序、朱熹及び呂祖謙後序、また魏掞序があり、末に分録進士王俊等八人の銜名（四行）、舒文韶等四人の銜名（二行）があり、巻末に宣議郎権通判厳州軍州主管学事張柠（一行）、奉議郎権発遣厳州軍

州主管学事魏楫（一行）の銜名が存する。静嘉堂本は宋後修本で、前に淳祐丙午の章大醇の序あり、その後に待省進士州学直学兼釣台書院講書胡自得掌工承直郎差充厳州府学教授章士元董局の両行銜名が附されている。以て厳州郡庠の刊たることが判明する。なお玉海に刊行の由来が「淳熙三年十一月二十四日参政龔茂良言袁枢編通鑑紀事有裨治道或取以賜東宮増益見聞詔厳州摹印十部仍先以卿本上之」と述べられ、また章大醇序には「是書刊于淳熙乙未修于端平甲午重修于淳祐丙午」と、刊年及び重修年が記されてある。宝祐五年に至って趙与籌はこの厳州本が字小にして訛多しとして湖州に於て本書を新に鏤板した。この趙氏の非難に対し、陸心源は本版を「書法秀整体兼顔柳譌字極少遠勝大字本趙与籌以為字小多譌殊不足信」と、また湖州大字本の条で「厳州本為袁樞教授厳州時所刻写刊精良校讎細密遠勝此本徳淵因其字小而改為大字重刊之可也必欲誣之為訛豈公論乎」（陸続跋七）と反駁している。傅増湘も略校の結果、厳州本のテキストの優れたる諸条を挙げて「余竊意趙節斎所言厳陵旧刻字小且訛者所言未可尽拠也或者淳熙初元訖於宝祐已八十餘年中経端平脩版刓損漫漶因而沿誤勢所難免若如此帙之初印明湛寧有是耶」（傅記二）と言っている。湖州本は伝本が多いが、本版の所在は少い。

同　存巻二、四、六・七、一一、一三―一八、二〇、二四、二七、三一、三七、三九、四一　宋宝祐五年刊（趙与籌・湖州）〔元〕修　一八冊

濃藍色表紙（三七×一五・六糎）、包背装。刷りは比較的良いが、一部巻末漫漶の葉が存し、僅か修補の葉が混り、所々破損や欠丁がある。

又　存巻七、一六、一八・一九、四一　〔元〕修　五冊

縹色表紙（四二×一七・三糎）、粘葉装。前掲本よりも印面良好、巻四一末三丁（刻工「山」）は元修か。修補は他にないようである。

又　存巻一九、二四、二六、二八、三〇、三三、三九―四一　〔元・明〕遞修　九冊

往々欠丁があり、巻二四・二八は配鈔本。僅かに明初の修の葉があるが、成化・嘉靖の修は未だ加っていない。

通志　二〇〇巻（欠首目・巻六下、一一、一八、四五、九〇、九二、九七、一〇三、一七一）　宋鄭樵撰　〔元至大〕刊（福州路三山郡庠）元至治二年・元遞修　一五一冊

縹色厚手表紙（三七・五×二七・五糎）。粘葉装。極めて僅かであるが、線黒口にして字数刻工名なき葉が混り、また少しく部分的な修補が入っているのが見られる。しかし本版の伝存本が全てといってよい程明修本であるから、明修の入っていないと思われる本帙は極めて珍しく貴ぶべきである。刻工名は次の通りである。安定、永崇、応子通、子通、翁子留、翁留、子留、王合、王君粋（至大二年）、君粋、王英玉、英玉（至大二年）、王英（至大己酉）王智夫、王仁甫、仁甫、王十二、王二、王大

手、王素老、王、官椿、官子忠、子忠、介夫、何鳴皐、鳴皐、何奴、許三、覚官、覚□、危梓、危子、季夫、九一、欽甫、魏子敬、魏徳夫、魏平叔、平叔、虞乙、虞一、虞留、虞恵、虞君恵、虞君裕、君玉、君林、君直、元甫、元叟、阮付才、阮富、厳子敏、子敏、黄善楽、善楽、黄善、黄章、黄必大、黄徳、黄午、黄五、黄福、黄寿、黄旺、黄応五、黄順、江六、江六甫、江士堅、江生、江泰、江太、江意、汪住、江三、江崇、江伯寿、江栄、江成、江衍、江善、江弐、五乙、呉徳、呉匹乙、呉方午、方午、呉慈、呉欽、欽、呉友山、友山、呉君宝、呉宝、呉正、呉金、呉徳中、徳中、呉徳、高徳明、徳明、得明、胡生、胡生子、克仁、克荘、蔡君甫、蔡牧、蔡一観、一観、観、蔡公許、蔡勝、勝、崔一、崔一官、乙官、崔一観、一観、施公賜、施八、施午、施明甫、施徳甫、施得甫、得甫、施文意、文意、施、史経、士安（至大二年福建）、四才、子琇、子用、子敏、子美、子大、子尨、子同、子中、子需、子全、謝友直、謝英玉（至大己酉福建）、朱乙、朱一、朱銓孫、銓孫、朱金孫、祥卯?、章進宝、進宝、徐明、徐妳奴、妳奴、奴、徐徳閏、徐二介、二介、徐子真、子真、正乙、正甫、正、叔夷、辛六、清甫、青甫、全忠、詹復亨、詹仲輝、詹輝、祖明、曾崇甫、崇甫、忠甫、張奉、張叔彝、叔彝、張林、張陳、張陳甫、張明、張明甫、明甫、張弓、張、陳必遇、陳若虚、陳丁六、陳六、陳君仲、君仲、陳右甫、陳祐甫、祐甫、陳順甫、順甫、陳太、陳仲山、仲山、陳十才、十才、陳十、陳照、陳五乙、陳祥卿、祥卿、陳実夫、実父、陳和、和、陳士安、陳慮、丁容、丁鎮道、丁荘、丁君美、丁仁、童世禄、世禄、童蒙、徳昌、伯先、伯好?、伯玉、伯太、伯寿、范和甫、和甫、禾甫、范升高、范子需、范雪、范明、范壬九、壬九、潘矮、美欽、馮昌、付安定、付方、付員、付崇、付長、付四、傅四、伏亨、鮑陳、明九、兪丙十、兪留、熊巳、友直、游一、游二、游四、游閏、尤一、余復亨、復亨、余丙十、余丙丁、余寿、余陳、余子真、子真、余二介、葉辛一、葉辛乙、葉辛六、葉呈仲、呈仲、葉元起、元起、葉崇、葉崇甫、崇甫、葉臣仲、臣仲、姚鸞、姚欒、姚達、欒夫、賴元甫、賴元、李大、陸全、六全、劉四九、四九、劉元叟、劉子周、子周、劉記、劉九、劉召、劉季夫、劉伯達、劉正卿、劉照、劉照官、呂仲、呂文政、呂公慈、呂文振、呂文震、呂二、留心、梁太初、太初、連君礼、君礼、連子青、盧（炉）福、蘆陳福、芦福、盧（炉）岩、和孫、太、仁、潘、牧、劉、正、付、奉、呉、翁、江、照、一、乙、真、栄、寿、陳、玉、素等。

又　存巻五下　一冊

縹色厚手表紙。粘葉装。比較的早印。明修が入っていない。

*唐丞相陸宣公奏議纂註　一二巻（欠巻七・八、一一・一二）　元潘仁撰　元後至元六年序刊（湖南僉憲赫国宝）

四冊

栗皮色古表紙（三二・三×二〇・九糎）。包背装。首に、至元六年正月二十五日通奉大夫前中書参知政事知経筵事許有壬の

宋趙汝愚編　宋淳祐一〇年刊（福州路提挙史季温）元大德四年・至大元年・元統二年・〔明初〕遞修（福州路儒学）　五〇冊

後補鼠色表紙（三三・七×二一・五糎）。襯装。原料紙縦二六・三糎。淳祐十年史季温跋が趙希瀞序の次にある外は前掲の故宮博物院蔵本に同じ。たゞこの本の方が刷りがよく、明修が少い。巻五（第一一・一二、第一四葉以下）二六（第四・五）三〇（巻末）三八（第三・四）五八（第一八・一九）六一（第一七）六三（第一一・一二）七二（第一三）七四（第五・六）八一（第二）八七（第七・八）八八（第五・六）九〇（第七・八）一二二（第一一・一二）一二四（第九・一〇、一五・一六）一三三（第二一・二二）一三四（第一三―一六）一三五（第二一―二四）一三六（第一五・一六）一三八（第一六）に欠葉がある。旧京354―356著録。

又　存巻一―九〇、一〇九―一三六、一四四―一五〇

四八冊

後補黒絹表紙（三〇・五×一九・四糎）。襯装。原料紙縦二七・三糎。首目欠。所々朱筆句点圏点の書入あり。「王宮／晉印」「秉徳／堂印」の印記あり。前掲本よりはかなり後刷りで、版心の至大・大徳・元統の補刊年記や尾題後の補刻刊記の箇所を切りとって襯補擬装してある。巻六（第七葉以下）七（第三以下）一九（第一六以下）二二（首）三一（第三・四、一三・一四）三四（第一六以下）三八（第五・六）四一（第二一以下）

「陸宣公奏議纂註序」、至元六年四月朔高昌普顔実理子謙の「陸宣公奏議纂註序」、その次に校正天臨路儒学及び嶺北湖南道肅政廉訪司各十人の銜名があり、次に至順辛未（二年）夏孟蘄春後学潘仁謹識の自序及び至順四年六月文林郎江南諸道行御史台監察御史王理の序、次に「唐丞相陸宣公奏議纂註巻之一」と題す。左右双辺（二六・六×一八・二糎）有界七行、行十七字、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「奏議巻幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名、所々に字数も刻さる。刻工名は、李福之、李富之、李用和、用和、李和用、李用、李茂、李茂先、茂先、李貴先、貴先、李俊先、俊先、李章、李、長沙許德明、許德、尤六、欧用之、用之、陳君玉、君玉、陳卞?、陳、王朝佐、王、唐才、唐、德明、德、趙亭、趙亨、趙**寮**、呉国輔、呉国、呉、陽魁甫、劉用、劉、庚、貴、云、銭、明、元、俊等。写刻体の大字本にして早印。巻四まで朱筆の句点声点の書入が加っている。「文府」（陰刻）「清真／軒」（陰刻）の蔵印あり。旧京346―349著録。

許有壬序に「蘄春潘仁彦賓為陸宣公奏議纂註南台御史上其書且薦其才可職校湖広省調宝慶儒学正而移其書中書下館閣校勘館閣題之予参議中書適署其案蓋亦為縦臾者也既報可而未聞有刻之者湖南僉憲高昌赫公国宝尤愛其書請余序将刻之」と。本版は他に所在がない。四庫未収。

国朝諸臣奏議　存巻一―九、一九―三〇、三五―一五〇

四六（第三・四）四七（第二一）五一（一五・一六）六一（第一六以下）八七（第三・四）一二四（第一〇、一五・一六）一三〇（第三・四）一三二（第二一・二二）一四五（第七・八）一五〇（第二・三）の如く欠丁が多い。

又　存巻一―九、二三―二五、五八―七一、九七―一〇四、一二六―一三五　一六冊

後補藍鼠色表紙（三一・五×一九・八糎）。襯装。原料紙縦二六糎。首目欠。巻五（第一一・一二葉）二三（首―五表）一〇一（第五・六）一三三（第二一・二二）欠丁。前掲の五十冊本とほゞ同じ頃の刷印。

伊洛淵源録　存巻六―一四　宋朱熹撰　〔元〕刊　一冊

後補紺色表紙（三〇・四×一九・六糎）。裏打修補が加えらる。本文巻首「伊洛淵源録巻第幾」と題す。左右双辺（約二四×一五・三糎）有界十二行、行廿四字。版心線黒口単黒魚尾、「巻幾（丁付）」。写刻体の堂々たる大字早印本であるが、腐爛甚しく、完全なる葉は一葉もなく、各巻また脱葉多く、残葉の集掇である。

本書の元版とされるもの他に劉影著録十行本があるが、それとは別版で、他に同版のあることを聞かない。静嘉堂文庫蔵明刊本（陸志に元刊と著録）の至正癸未（三年）十月朔黄清老の序に蘇天爵の首唱により湖北道弐温憲仲の命で公帑を以て鄂宮で鋟板したと述べられ、また至正三年十月既望蘇天爵の序に、「天爵家蔵是書有年及来鄂省謀於憲府諸公刊置郡学与多士共伝焉」と云う。この本或は鄂州学刊本であろうか。

新刊名臣碑伝琬琰之集　存上集巻九―二七、下集二五巻

宋杜大珪編　〔宋〕刊　四冊

後補藍色表紙（二五・二×一四・七糎）、包背装。本文巻首「新刊名臣碑伝琬琰之集巻幾」と題す。下集は首に「新刊名臣碑伝琬琰之集目録下」（次行低十一格「眉州進士杜大珪編」と題す）あり。左右双辺（一八・七×一三糎）有界十五行、行廿五字。版心白口双黒魚尾、「琬琰（或は琬或は琰）幾　（丁付）」。宋室関係の字は上一格を空ける。

同版に静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・中央図書館（残本、莫録・劉影著録）・中央研究院（残本、鄧目著録）・北京図書館（二部）・上海図書館・ハーバード大学燕京研究所蔵本や瞿目瞿影・潘記（残本）・王記（傅氏等旧蔵著録）本がある。

〔宋史岳飛伝〕　一巻附岳忠武王廟名賢詩等一巻　元釈可観編　釈高会重編　〔元末〕刊　一冊

後補縹色表紙（三〇×一九・三糎）、包背装。巻首、「列伝巻第一百二十四（隔三格）宋史三百六十五」、第二・三行低二格脱脱等奉勅修の銜名、第四行低三格「岳飛子雲」と題す。附刻は首に「岳忠武王廟名賢詩（隔七格）住山僧可観録」と題し、後に「岳墳褒忠衍福寺復業記」（第二・三・四行低二格尹方回譔・陸厓篆額・趙孟頫書の銜名を題す）、「重建褒忠衍福寺記」、「重建岳鄂王祠寺疏」（鄭元祐撰）、「重建岳鄂王精忠廟記」（鄭元祐撰）を附し、巻末「岳鄂王廟名賢詩　歳在己卯菊月住山僧高会重

集」と題する。双辺（二〇・八×一五・五糎）有界十行、行廿二字。版心線黒口双黒魚尾、「伝百十四　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に往々金子中、金、陳仁甫、徐良の刻工名あり。附刻は双辺（二二・七×一五・五糎）有界十二行、行廿四字。版心小黒口双黒魚尾、「詩　（丁付）」。旧京357―360著録。

岳飛伝は元の字様、名賢詩以下の附刻は写刻体に近い寧ろ明初風の字様であるから、之を追刻と見なし、従来元刊或は元刊明修とされて来た。しかし伝は元至正杭州路刊宋史の覆刻であるから、字様が異るのは当然で、印面から見ると伝と附刻の名賢詩以下との間に年代の隔った後修と云うよりは共に同時の刊刻と考えるのが至当である。事実、伝の刻工（底本の杭州路刊の刻工とは全く別人）の陳仁甫は後掲の至正六年嘉興張氏家塾刊養蒙先生文集に見え、附刻の葉に出て来る刻工徐良は泰定元年刊後至元五年修文献通考にその名が見える。附刻の一見明風の字様は元後期の仏書には時に見られるが、元の典型的な建刊の字様とは全く違っている為めに間々明刊と誤認され易い。宋史の表進が至正五年、翌年杭州路に雕板の命を下していること、刻工の生存年代を参酌するならば、本版の刊年は、至正中期から明洪武前期の間に限定されよう。巻末尾題の「歳在己卯菊月住山僧高会重集」の己卯は恐らく至元五年己卯に繋けるべきで、次の建文元年己卯とすれば、刻工の上で難点が生ずる。従って至正中期から末の刊刻と看做すのが穏当であろう。

*古今紀要　存巻五―一〇、一五―一九　宋黄震撰　〔元後至元三年〕刊　六冊

後補濃藍色表紙（二八×一八糎）。金鑲玉装。原料紙縦二三・八糎。本文巻首「古今紀要巻幾　（隔三格）　慈溪黄震」と題す。撰者名が次行に低七格に題される巻もある。左右双辺（一九・五×一三・五糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「紀要幾巻（或は幾）（丁付）」、下象鼻に刻工名、左上欄外に間々耳格あり、帝名が記さる。巻五首六丁、巻十第十九丁以下、巻十五首八丁、巻十九第廿三丁以下が欠葉。刻工名は肖寄、士通、士達、張名遠、原劉、原良、景中、黄保、游名、汝敬、劉伯安、劉伏、劉東、劉待者、劉保、劉宝、劉宣、彦正、正、彦和、彦成、成、彦、江同、江子名、王保、堯全、范彦、范通、余長寿、徐田、陳厚、六彦、六付、六晏、六、妮右、周寿、虞亮、虞孟亨、虞子得、虞子記、子記、孟淳、付資、資、付名仲、番劉、伯美、丘老、葉寿、余長、子中、呉福、堯朱、朱堯、林安、連彦、周天。比等の刻工は、古史（覆宋）・唐文粋・西山先生真文忠公文章正宗等の元末明初間刊本の刻工と一致し、特に後掲の後至元三年黄氏刊「慈谿黄氏日鈔分類」とは行格・版式・刻工名が一致するから、その附刻として或は同時に上梓されたのであろう。同版本には故宮博物院楊氏観海堂蔵残本や中央図書館蔵明修本等がある。

通鑑総類　二〇巻　宋沈樞撰　元至正二三年刊（平江路儒学）　二四冊

後補紺色表紙（三〇・三×二〇糎）。包背装。首に嘉定元年仲

冬朔旦四明楼鑰の「通鑑総類序」、至正廿三年歳在癸卯秋七月既望前太史知制誥鄱陽周伯琦の「通鑑総類叙」、次に「通鑑総類目録」あり。本文巻首「通鑑総類巻第一」、次行低一格「治世門」と題す。左右双辺（二四・六×一六・八糎）有界十一行、行廿三字。版心線黒口単黒魚尾、「通鑑総類巻幾（門名）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、刻工名のある葉が多い。刻工名は、平江張俊、景仁、仁、芦顕、芦、戸、趙伯川、趙海、海、趙、好顕、好古、古、遂良、可、番、潘、夫、王、周、世、陳、彳、八、元、原、圭、馬、付、何、東、悳、什、昷、朱、亨、祥、中、仲、和、魏、傅、灌、天、忠。

又　二〇冊

後補紺或は縹色表紙（二九×二〇糎）。包背装。鑰序と伯琦叙との順序が前掲本と逆。所々朱句点朱引の書入あり。「晉府／書画／之印」「敬慮／堂図／書印」あり。旧京364 365著録。

又　一二冊

濃縹色表紙（三四・一×二〇・八糎）。包背装。序の首葉補写。

又　存巻二・三、五、九―一一　六冊

褐色古表紙（三一・三×二一・五糎）。包背装。所々朱筆の句点・声点の書入あり。

首の鑰序に「公之季子守潮陽欲鋟版以広其伝以承公之志俾鑰序之」と嘉定元年潮陽で開板されたことが知られるが、今この本は伝存していないようである。伯琦叙に「是書鋟梓于潮陽数千里之外世亦罕見今江浙中書省左丞海陵蔣公徳明分省于呉偶購得之徧閲深玩嘉其編次有益于治（中略）遂命郡庠重刻之以行于世」とあるので、本版の鏤板の事情が知られる。本版には恒桓の宋諱に間々欠筆が見られ、字様宋風を帯びるので、王記著録本・劉影著録本（存十五巻）の如く往々宋版と誤認されている。嘉定年間潮陽刊本の覆刻と思われる。他に小汀文庫旧蔵（巻五零巻）・中央図書館（存巻九明修本、静盦著録）・北京図書館・上海図書館蔵本や瞿目著録本がある。楊氏海源閣蔵本は楊録に「此本猶是嘉定初憲敏季子守潮陽鋟板之原帙鐫印精佳古香襲人眉宇且首尾完善無一闕損宋槧中尤極罕覯洵乙部之甲観矣」と記されているが、羅録著録の宋刊本と共に、果して宋嘉定刊本なるか否か、詳かでない。

＊歴代十八史略　一〇巻　元曾先之編　元至正二年刊（四明郡庠）　五冊

後補紺色表紙（二九×一七・五糎）。首に張士弘序、至正二年王元恭序、至正二年朱文序、次に「歴代十八史略綱目」（次行低七格「廬陵前進士曾先之編」と署す）がある。本文巻首「歴代十八史略巻第一」、次行低七格「前進士曾　先之　編」と題する。左右双辺（二〇・八×一一・八糎）有界八行、行十七字。版心白口双黒魚尾、「史略巻幾　（丁付）」。上象鼻に間々大小字数、下象鼻に、徐仲裕、仲裕、徐、陳善、君用、用、士良、士、良、継元、元、叔恭、袁雲卿、袁、茅、何、任、行、仁、旻、克、又、斉、章、屠、王、温、張、瑞、師、舟、太、弘、道、白の刻工名がある。徐仲裕・士良は玉海の刻工名中にも見え

る。早印であるが、巻九・十は紙質を異にし、やゝ刷りが降る。巻三の第五十九葉は細黒口で字数刻工名なく、字様他と異る、或は修か。旧京375―377著録。

士弘序に曰く、「至正辛巳夏五余備員浙東憲使明年春自公之暇閉戸読書適有客以十八史略見贈（中略）第恨錯簡頗多而蠅頭小字又不便高年之目於是重加考訂大字楷書命四明郡庠倩工鋟梓与天下後世年老者共之」と。本文の首が現通行本にない歴代国号歌、歴代世年歌、甲子紀年次、国都に始まっている。同版本の所在を他に聞かない。（追記9）

＊大一統志　存巻七三〇・七三一、七九〇―七九二（各巻零葉）　元宇蘭肸・岳鉉等奉勅編　〔元〕刊　二冊

取り合せ本。第一冊は後補縹色表紙（四〇×二七・五糎）。料紙は白、裏打補修を加う。第二冊は後補縹色表紙（三四・一×二二・二糎）。料紙は黄紙。共に粘葉装。巻首「〔大〕一統志巻第七百三十一」、第二・三行「奏進　集賢大学士資善大夫同知宣徽院事臣宇蘭肸／昭文館大学士中奉大夫秘書監臣岳鉉等上進」と題す。双辺（二四・五×一八糎）有界十行、行廿字。版心線黒口双黒魚尾、「大一統志巻幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、周中、蔣叔太、求之、陳右之、陳右男、阮仲凱、景彝、孫仁、沈貴、張仲明、楊万三、芦起潜、菊南の刻工名あり。この刻工中沈貴は越刊八行本礼記正義及び贛州刊文選の元補刻及び宣和博古図録に見えている。各巻ともに零簡にして存する葉は、僅に巻七三〇（第六―一二丁）、七三一（一―一二）〔以上一冊〕、七九〇（三―八）、七九一（二―五）、七九二（二―四）にすぎない。

本書はもと一千巻の巨書であるが、今伝存する巻は僅かにして、瞿氏その他に零鈔本の残巻が存するに過ぎず、官刻の原刊本は本帙の外に、旧京379著録の大連図書館蔵巻六三四の零葉、王記著録の巻三四〇が知られるにすぎない、この本初印にして、文字大なること銭の如くにして端正、楮墨清雅、元槧の最上品と云うべく、内容と共に、断璧と雖も洵に珍重すべきである。

金陵新志　存巻三上、一二（零葉）　元張鉉撰　元至正四年刊（集慶路）　三冊

後補紺色表紙（四二・三×二七・五糎）。粘葉装。巻首「金陵新志巻第幾（或は巻之幾）」と題す。左右双辺（二四×一七糎）有界九行、行十八字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「金陵新志巻幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、朱俊甫、呉君祥、辰、張、中、河、陳、明、朱、焦、仲、施、尹、仁、張、尤、成等の刻工名がある。巻三上の末（第一二七葉）の次に、巻八の第十五葉が綴じられ、巻十二は第六〇―六二、八〇―八三、八五、八八・八九葉を存するにすぎない。本帙には後代の補刻がない。

又　存巻一・二、四、六、一一、一三下―一五　〔明初〕修　六冊

後補紺色表紙（二八・八×二一・一糎）。巻一の首目は初めの

部分を欠き、「新旧志引用古今書目」（「新旧」の二字入木）及び「金陵新志総目」を存する。巻末（巻十五）の尾題の後に「右金陵新志首図考終論辯共壱拾伍」の一行あり。刻工名は、陳君佑、呉君祥、君祥、朱俊甫、朱俊、朱成、□徳明、河、仁、朱、正、尤、人、成、子、之、呉、新、仲、方、陳、焦、銭、施、后、張、中、也、鄭等。巻十四の第一葉及び第二葉表欠。極めて僅かであるが、明初の補刻が一部加っているが、現存本の多くに見られる明正徳の修補は入っていない。「朱氏／伯京」（陰刻）「東倉朱／伯京家蔵／図書」の印あり。旧京381—383著録。同版に静嘉堂文庫（陸志・陸続跋著録）・中央図書館（二部、明修）・北京図書館（二部、明修）・上海図書館（存七巻、明修）・南京図書館（丁志・盗影著録）蔵本や瞿目・劉影・王記・羅録著録本がある。板木が明代南監に移され、明南雍経籍考に「金陵新志十五巻存者一千一百六十四面裏九十二面」と。

＊龍虎山志　三巻続編一巻　元元明善奉勅編　周召続編

〔明前期〕刊　三冊

後補紺色表紙（三〇・三×二〇・四糎）、襯装。首に、翰林侍講学士中奉大夫知制誥同脩国史臣元明善謹序の「龍虎山志序」、延祐元年程鉅夫の「龍虎山志序」、次に「龍虎山志目録上（第二・三行に本文大題と同じ編者の銜官題署あり）があるが、途中より以下巻上の第二葉まで佚失している。巻上の首葉が失われ、巻中は首題なく、巻三巻首「龍虎山志巻下」、第二（低五格）・三行、「翰林侍講学士中奉大夫知制誥同脩国史臣元明善奉／勅編」、第四行低二格「碑刻」と題す。巻末に延祐元年四月日玄教嗣師総摂江淮荆襄等処道教崇文弘道玄徳真人臣呉全節上表の「進龍虎山志表」を附する。次に続編あり、首に「龍虎山志続編巻之一／勅授智教杉山周召編次」と題す。巻末の下半が破損している。四周双辺（二四・二×一七・五糎）有界十行、行廿四字。版心白口双黒魚尾、「志上（中・下、或は志続巻一、或は志続）（丁付）」。旧京386387著録。

四庫全書存目収入本は「三巻元元明善撰明張国祥続修」と録され、この本をさらに明の張国祥が続修重編し、旧形を失ったらしい。この本の続編は「巻之一」と題するから、一巻ではないようであるが、巻末が欠けているので明確でない。この本は北平図書館善本書目は元刻本、中央目は元刊明代修補続増本となすが、写刻体の字様で、補刻と考えるよりは恐らくは全巻が明前期の刊と見るべきであろう。

大唐西域記　存巻九　唐釈玄奘記　釈辯機編　〔南宋〕

刊　思溪版蔵経　一帖

香色表紙（二八・八×一一・三糎）、帖装。本文巻首「大唐西域記巻第九」（下端に函号「疑」）、次行低二格「大慈持寺沙門辯機撰三蔵法師玄奘奉詔訳」と題す。天地単辺（高さ二五・二糎）、毎半折六行、行十七字。柱「大唐西域記巻九（丁付）」、下端に刻工名があるが、見えないものが多く、徐庸、徐彦等。巻末音義を附す。四部叢刊所収影印の底本と同版。

＊通典　存巻七七—七九（零葉）　唐杜佑撰　〔元大徳〕

刊（撫州路臨汝書院等）　一冊

後補紺色表紙（三〇・六×一九・七糎）。裏打補修が加えらる、襯装。本文巻首「通典巻第七十八　礼三十八　軍礼三」の如く題し、毎巻次に篇目があって本文に接属する。左右双辺（二一・八×一六・六糎）有界十四行、行廿六字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「通典巻幾　幾冊（冊内の通し丁付）」、上象鼻に大小字数（間々下象鼻にも）、下象鼻に刻工名があるが、破損が多く、識読し得たのは、心、川、奇、月、忠、思。巻七七の尾題後一行を空けて、「撫州路臨汝書院刊／山長李仁伯校正刊」の二行が刻されている。本帙は巻七七（第一五―一九丁）巻七八（第二〇・二二丁）巻七九（第三一―三三丁）の合計十一葉を存するにすぎない。

旧京390著録の大連図書館蔵巻七九の零葉はこの本の僚巻であろう。同版には完本は静嘉堂文庫蔵本（有鈔補、陸続志・陸跋著録）のみであるが、零本は他に中央図書館蔵存一一巻や王記著録存巻七五がある。静嘉堂本によれば、第一百巻の末に丁未（大徳十一年）歳杪後湘中李仁伯中恕甫謹識の跋ありて、その中に、「板廃已久諸路欲刊弗克総管錦山楊公牧臨川兼董学事既新美庠序百廃煩興廼命諸学院協力刊成第旧本訛甚且多漫滅殊不可読湖堂所刊自二十六至百共七十五巻区区点勘再四云々」とあるから、大徳年間撫州路の諸学院が協力して開板したもので、臨汝書院の分担したのは巻廿六至巻一百であったことがわかる。本書には書陵部蔵北宋版あり、南宋初その覆刻（天理図書館・北京図書館等蔵）が行われ、その後宋より元に至るまで逓修が重ねられた。仁伯の序中に云う「板廃已久」「第旧本訛甚且多漫滅殊不可読」というのは、その板木を指すものと思われる。

＊増入諸儒議論杜氏通典詳節　四二巻　不著編人　〔元末明初間・建〕刊　一〇冊

後補茶色表紙（二七・五×一七・五糎）。金鑲玉装。元料紙縦二五糎。首に李翰通典原序、「杜氏通典篇第題旨」、「増入諸儒議論姓氏」、「増入諸儒議論杜氏通典詳節綱目」、「新纂杜氏通典詳節図譜」（諸図）あり。綱目の文末に四行をあけ、その尾題との間に、「至元丙戌／重新繡梓」の双行の刊記あり。本文巻首「増入諸儒議論杜氏通典詳節巻一」と題す。但し巻四以下及び尾題は「増入」を「新入」に作る。たゞ巻三・十九・二十の尾題は「増入」に作る。左右双辺（一八・三×一二・五糎）有界十四行、行廿三字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「典幾（丁付）」、大小字数が上象鼻、稀に下象鼻にある。旧京391―393著録。

又　八冊

後補縹色表紙（二五×一六・二糎）。裏打補修を加え、襯紙を挾み、包背装。巻卅二第十九葉補写。少しく破損の葉あり、特に巻四十一に多い。

上記の如く、本版は故宮博物院蔵残本と同版で、綱目の末に「至元丙戌重新繡梓」の刊記を有する。しかし大部分は概ね元

末麻沙本特有の字様であるが、中にかなり明初風の字様が加わり、特に巻十四十五の両巻は全く明の字様である。至元丙戌は前至元廿三年に当り、後至元には丙戌の干支に該当する年はない。本版は後至元とすればとも角として、前至元の刊刻にかゝるとは判定し難い。筆者は未だ前至元廿三年刊本と認定し得る版に遭遇しないが、此は或は前至元廿三年刊本の覆刻であろうか。暫く後考を俟ちたい。「新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節」と題する内閣文庫蔵明前期刊本は毎半葉十一行行廿三字の行格で、本版とは字様を全く異にするが、綱目末の同位置にある刊記のみは本版のそれと覆刻の同文である。瞿目・羅録著録本・鄧氏旧蔵中央研究院現蔵残本（鄧目に宋版と著録）は本版と同版らしく、鄧氏別蔵中央研究院現蔵本（鄧目に元版と著録）は内閣文庫蔵明版と同版のようである。「北平図書館善本書目」に宋紹熙五年択善堂刊存首十九巻八冊が著録されている。未見であるが、この本の刊記に「重新繡梓」とあるのは、その宋版に対する重刊の意であろう。また本版・明版共に恒桓等の字に往々欠筆が見られるのはその名残であろうか。

＊文献通考　存巻二二―六〇、六六―七六、九四、九六―九九、一〇三―一〇五、一一五―一一七、一二八―一三一、一三六―一四五、二七四―二七七、二九一・二九二・二九三下、二九五―二九八、三〇三―三一一

元馬端臨撰　元泰定元年刊（西湖書院）〔後至元五年余謙修〕　三〇冊

厚手縹色表紙（三一・五×二五糎）。粘葉装。現存本の殆どが明修本であるが、此は未だ明修が加わらず、撫印清雅である。「晉府／書画／之印」「敬徳／堂暴／書記」「子子孫孫／永宝」の印あり。刻工名に、子華、華、子堅、子仁、方才、方、才、王続卿、王森、王六、王子仁、秀卿、秀、胡君仲、君仲、文甫、文、宜甫、宜、仲亨、元吉、金華甫、用之、用、陳子仁、陳福、陳大用、大用、正之、張顕、張四、以方、任実、徐阿狗、徐寿、周福二、周明、茂之、付茂、傅茂、阮寧、阮、何宗、何庚、世通、世、祥観、応華、古之、楊三、唐三、翁、和、何、尸、升、寿、亨、東、陳、福、崇、合、台、斉、朱、寸、潘、琇、山、兆、与、中、汪、今、良、子、呉、阿、之、褚、義、者、元、舟、倪、馬、番、可、通、彬、匂、建、成、可、万、瑞、春、智、呆、弓、徐、四、宗、仁、芦、進、禹、壬、七、茅、友等がある。

＊故唐律疏議　存巻一三―一九　唐長孫無忌等奉勅編　元王元亮纂例　〔元〕刊（〔崇化・余志安勤有堂〕）　一冊

後補紺色表紙（三二×一九・四糎）、粘葉装。本文巻首「故唐律疏議巻第幾」と題す。四周双辺（一九・三×一二・五糎）有界十二行、行廿一乃至廿五字不等、注小字双行。疏議は「疏議曰」を墨囲陰刻として低一格。版心細黒口双黒魚尾、「唐律幾（丁付）」。巻十九は首十一丁を存し以下欠葉。

本書は三十巻。書陵部（存首六巻）・北京図書館（中版録327

328著録）蔵本、北平図書館旧蔵残本（旧京401―404著録）瞿目著録の元余志安勤有堂刊本と同版と思われる。同本は柳贇序の後に「至順壬申五月印」の一行、釈文序の後に「至正辛卯孟春重校」の一行及び「崇化余志安／刊于勤有堂」の双行木記がある。毎巻末に元来単行の王元亮撰釈文纂例が併附さる。また進表中の注釈及び本文中「注」の標識を附した注は、首の無名氏序によれば、此山貫治子の釈文と云う。この本は早印で美しい。

＊漢藝文志攷証　一〇巻　宋王応麟撰　元後至元六年（慶元路儒学）至正一一年・〔明初〕遞修　玉海附刻本　四冊

後補鼠色表紙（二九・七×一八・七糎）、裏打が施され、襯装。序なし。本文巻首「漢藝文志攷証巻一」、次行低十格「浚儀王応麟伯厚甫」と題す。左右双辺（二二・一×一二・八糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「攷（或は志攷）巻幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。少しく明初の補刻が加っている。

考古図　一〇巻　宋呂大臨撰　元羅更翁考訂　元大徳三年序刊（茶陵・陳翼子）〔明〕修　四冊

淡茶色表紙（二三・八×一五・七糎）。首に元祐七年二月汲郡呂大臨記の「考古図記」、大徳己亥冬至古迂陳才子謹記の序、大徳己亥陽復日茶陵陳翼子翼俌識の序（次に存する序は一丁欠）、次に「考古図所蔵姓氏」（跨行）があり、末に「序例終」と題す。本文巻首「考古図第一」（跨行）、次行低五格「黙斎羅更翁考訂」と題する。毎巻大題の次に目次あり。四周双辺（一七・七×一二・九糎）序目は有界八行、本文は多く図で、説明文は無界低一格八行、行十八字。版心小黒口三黒魚尾、「考古図巻幾（丁付）」。「王徳／之印」（陰刻）「履／吉」等の印あり。同版本に中央図書館・ハーバード大学燕京研究所蔵本がある。

至大重修宣和博古図録　存巻二五・三〇　宋王黼等撰〔元〕刊　二冊

後補黄色表紙（三九・七×二六・五糎）。裏打が加えてある。版心下象鼻が殆ど破損している。現存本の殆どが明後印本であるのに対し、此は元印で刷りが美しい。旧京471―474著録。

致堂読史管見　存巻三・四、九―一六、一八、二七　宋胡寅撰　宋宝祐二年刊（江南宛陵郡斎）　七冊

後補濃縹色表紙（三一・六×二〇・二糎）。襯装。各巻脱葉極めて多く、存する葉は、巻三（第七・八丁のみ）、四（一―九、二五―三〇）、九（一―八、二七―三一）、十（首尾を存するが中間脱葉）、十一（三六丁以下）、十二（首若干、一三―一五、二一―二四）、十三（一―一六、二四以下）、十四（一―一〇、一二―三一、三六―三九）、十五（二―一四、二七―三二、三四）、十六（一―二〇）、十八（三ウ―三一）、廿七（二―六、八―一七、一九―三四）。たゞ後の補刻が加っていないのは貴重である。旧京405著録。

又　存巻一―三、二五―二八　〔元〕修　七冊

後補黒色絹表紙（三〇・二×一九・二糎）。襯装。巻一は首目

を欠き、本文一丁を存するのみ。巻三の第十・十一の両丁は元末明初間の修補か。旧京406著録。

同　存巻三・四、一一・一二、一九・二〇　宋胡寅撰

〔元〕刊　覆宋宝祐刊本　五冊

後補黒絹表紙（二四・四×一九・四糎）。襯装。本文巻首「致堂読史管見巻第四」と題す。左右双辺（一九・五×一四糎）有界十二行、行廿三字。版心白口双黒魚尾、「管見（或は読史管見）幾（或は巻幾或は巻第幾）（丁付）」、版心が殆ど破損しているので、下象鼻にある刻工名中識読し得るのは、陳元発、陳元、士元、子正、呈大、一林、林、万、程、今、希、鮑、銭、定、趙、金、精、庸、包、焦、朱、三、駱、張、通、走、潘、松、清、審等である。所々破損し、巻三首葉、巻十二巻末葉、巻十九巻初の葉、巻廿巻末の部分（第十六葉まで存す）を欠く。

本版は前掲の宋宝祐刊本の覆刻で、瞿目・瞿影著録本（北京図書館現蔵）は宋版とするが、その書影によるに、この本と同版の覆宋版で、北京図書館蔵の他の元版（一は存巻二六―二九、一は存巻四―六）も本版と同版であろう。

子　部

説苑　存巻五―一二　漢劉向撰　〔明前期〕刊〔明〕修

二冊

後補紺色表紙（二九×一八・九糎）。襯装。巻五は首一葉半欠。

又　存巻八―一四　二冊

後補紺色表紙（二七×一九・一糎）。包背装。前掲本より後刷。欠丁が多い。

又　存巻六―一二、一七・一八　三冊

後補紺色表紙（二七×一七・九糎）。包背装。巻八は第二十葉まで、巻十二は第十三丁まで、巻十八は第廿葉まで、以下各欠丁、且つ所々下端破損。巻十七・十八に朱筆句点の書入あり。

以上三部同版。巻首「説苑巻第幾」、次行低二格、「鴻嘉四年三月己亥護左都水使者光禄大夫臣劉向上」、第三行低四格、篇名を題す。左右双辺（約一九・八×一四・七糎）有界九行、行十八字。版心は粗黒口或は小黒口、少しく白口を混え、双黒魚尾、「説苑幾（丁付）」、下象鼻に刻工名、稀に大小字数あり。刻工名は、李四、李二、李周、李義、李克、小王、劉潭、潭、王玘、郁、牛、通、孝、周、李、住、耿、陶、張、危、信、亘、馬、原、八、范、史、楊、常、范、趙、武、衣、高、崔。後の修補が入っている。

涵芬楼（涵録著録。欠巻十四、孫志祖・黄堯圃等跋、呉氏拝経楼旧蔵）・中央研究院（鄧目著録、汪士鐘旧蔵）蔵本は、その解題によるに、行格刻工名を同うする所から、同版と思われる。それによれば、巻廿巻末に、「郷貢進士直学胡達之跠役」「迪功郎差充鎮江府府学教授徐沂」「迪功郎特差充鎮江府府学教授李士抃命工重刊」の銜名三行及び「咸淳乙丑九月」の六字

ありという。従って黄堯圃や両目録共に宋咸淳元年鎮江府学刊本とする。この本を北平目は宋刻明印本、中央目は元刊明修本と著録する。しかしこの本の字様雕法は甚だ粗拙不整で、宋咸淳刊とは断定し難く、元末刊というよりは、咸淳鎮江府刊本に拠る明初の刊刻と審定すべきである。北京図書館善本書目には、「宋咸淳元年鎮江府学刻元明遞修本〔巻八至巻十三配清道光黄氏士礼居抄本〕　黄丕烈校並跋　顧広圻跋　十二冊」が著録されている。この顧抱沖本は堯圃が右の拝経楼旧蔵滄芬楼蔵本に跋して、「与向所見顧沖本相同而字之正誤彼此互異当是版有原与修之別印有初与後之殊也」と云った本である。堯圃によればこの本と同版らしい。しかし記憶のみによっては、行格版式が相似しても、同版か否か或は覆刻の関係にあるかは断定し難いから、北京図書館現蔵本がこの本と全く同版か、或は覆刻の関係にあって、この本の底本となった咸淳刊本なるか、後考を俟つ。しかし此と行格を異にするが、この本乃至は咸淳本の祖本と推定し得る筆者未見の宋版が別に存する。それは王記に宋浙刻本として存巻十六至十九、宋刻本として存巻十一至十九と著録された二本である。共に十一行廿字白口にして、宋諱は避けて慎字に至ると。前者の洪茂・洪新・徐亮・許明は全て紹興から宋前期の杭州地区の刻工である。黄堯圃等旧儲にして堯圃が北宋本となした楊氏海原閣蔵本（楊録著録）も十一行廿字であるから、恐らく王記著録本のいずれかと同版であって、北宋本ではあるまい。（追記10）

河*南程氏遺書　存巻一、二下、四、六、十一、附録一巻
　　宋朱熹編　〔南宋〕刊（黄州）〔宋・元〕遞修　二冊

後補紺色表紙（三四×二一・三糎）。裏打補修が加えらる。首に第二至四葉の目次の零葉のみを存する。本文巻首「河南程氏遺書第一　二先生語一」、次行低三格「端伯伝師説」と題す。左右双辺（二一・二×一四・五糎）有界十行、行十六字、注小字双行。語録の各条は毎首行頂格、次行より低一格。版心は殆ど破損しているので断定し難いが、恐らく白口双黒魚尾、「遺書幾（丁付）」、上象鼻に大小字数及び「黄州」の二字を刻し、下象鼻に丁付及び刻工名あり、中縫に間々「庚子重刊」とある。各葉殆どどこかが破損し、巻中欠葉が多く、各巻残葉である。原刻の葉は極めて僅少にしてしかも部分的修補が入り、殆どが宋代、新しきは元代に降る全葉乃至は部分的遞修が加えられている。宋諱を避けること厳謹ではないが、殷貞完等に欠筆を見るが、構慎は未筆を欠かない。識別し得る刻工は、王元、丘仁、蔡申（或は蔡中か）、申、珪、京、章、生、明、栄、汪等で、殆どが宋代の補刻のそれと思われる。旧京418（宋修）419（原刻宋修）著録。

本書の宋刊本は諸家目に見えるもの極めて稀れである。元至正二年臨川譚善心刊大字本（十行廿字）によれば、同本は宋淳祐六年趙師耕刊本（麻沙本）と宋淳祐六年李襲之刊本（春陵本）によったという。麻沙本の趙師耕後序に「二程先生文集憲使楊公已鋟版三山学宮遺書外書則庾司旧有之後俱燬於乙未之火師耕

承乏来此丞将故本易以大字与文集為一体刻之後圃明教堂云云」（天目六による）と云っているから、淳祐以前既に閩刻がありそれが乙未（端平二年か）に燬けたことが判明する。本版は版心に「黄州」とあるから、黄州の刊である。また版心に「庚子重刊」と印された葉のあるのは、当時の通例として庚子補刊の意味に解すべきである。朱子が本書の編をなしたのは乾道四年であり、且つ庚子重刊と刻された板は元修に降らぬから、その後の南宋の庚子は淳熙七年と嘉熙四年である。従って本版は淳祐刊の麻沙本或は春陵本でもない。北京図書館目には存巻二二下、存附録一巻の二部の宋刻本が録され、それは王記に宋淳祐刻本として著録された本と存巻の巻次が合っているから、同一本と思われる。もしそうとするならば、十行廿字と云い、刻工は蔡申以外は同一人がないから本版とは別である。本版の字様は敦樸重厚の大字で、南宋後期に降るものではなく、南宋前期から中期にかけての刊刻と思われる。刻工名を検すれば、王元は孝宗光宗間刊類篇（故宮博物院蔵影鈔本）・紹興中湖北茶塩司刊淳熙紹熙慶元修本漢書に、蔡申は宋嘉定十一年温陵郡斎刊資治通鑑綱目、蔡中とすれば上の漢書にその名が見える。本版は乾道四年本書成立後の第一次の刊刻本であろう。他に同版を聞かず、後考を俟つ。

＊童蒙訓　三巻　宋呂本中撰　宋紹定二年刊（寿州郡守李埴）　二冊

後補紺色表紙（三二×二一・九糎）。裏打補修が加えられ、元料紙二七・二×一九糎、粘葉装。序目なし。本文巻首、「童蒙訓巻上」、次行低十格「呂氏本中居仁」（巻中・下は「呂氏」のみ）と題する。左右双辺（二二×一五・九糎）有界十行、行廿字。版心白口双黒魚尾、「童蒙訓上（―下）　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名がある。たゞ下象鼻が破損し、刻工名の一部が墨筆で加筆されたものが多い。刻工名は、翟善?、善?、任艮?、艮?、蒲曰?、張丙?、田元、田乙?、田仁、仁、丈、成、明、巫?、書?（右旁？は補筆された字）。桓慎惇敦に欠筆が見られ、郭は末画を欠かない。欠筆を後で墨書を以て加筆する所、故意に剜去して欠筆に見せかけた所もある。巻末尾題の次丁一行を空けて、「紹定己丑郡守眉山李埴／得此本於詳刑使者東萊／呂公祖烈因鋟木于玉山／堂以恵後学」の刊記あり、その次葉に嘉定乙亥中秋日四明楼昉謹書の跋を附する。朱筆の句点圏点の書入がある。

楼昉の跋によれば、本書は前に長沙郡及び龍溪学で刻されたが、皆譌舛特に甚しく、婺州の守丘寿雋（字は真長、密の嫡子）が嘉定八年之を校刊した。その本を李埴郡守が得て刊刻したのがこの本である。埴は丹棱の人、燾の第四子、官は礼部尚書資政殿学士に至り、謚は文簡、悦斎集等の著がある。長沙郡・龍溪学の宋刊、また嘉定刊本も皆今伝わらず、楊氏海源閣本（楊録著録）はこの本と同版と思われるが、他に所在を聞かず、本版を仿刻せる明刊本が世に行われるにすぎない。

＊晦庵先生朱文公語録　存巻二七―三一、三七・三八　宋

朱熹撰　〔〔李道伝編〕〔宋嘉定九年〕刊（〔池州〕）
六冊

後補紺色表紙（二九・六×一八・五糎）。襯装。本文巻首、「晦庵先生朱文公語録巻第二十七」、次行低三格「黄義剛録二」と題す。左右双辺（約一八・九×一四糎）有界十行、行廿字。版心白口双黒魚尾、「黄（伝録者名）幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、王亨、王明、王辰、辰、王元寿、葉正、葉茂、葉、蔡浩、阮瓊、陳新、陳、新、呉椿、呉春、春、呉志、張成、劉大明、劉昭、楊雍、唐説(悦?)、候琦、田良、朱檜年、黄莒、董先、如圭、柴仲文、仲文の刻工名あり。巻中玄畜殷恒貞讓慎敦に欠筆を見、寧宗の郭以下は欠画をしていない。部分的な修補が僅かながら見られるが、宋代の修である。巻廿七は残念ながら破損が甚しい。「金菊子」「金」の蔵印あり。王記著録。

朱子語類の現通行本は宋末の黎靖徳類編一四〇巻本で、宋咸淳六年盱江郡斎刊本を祖とする。靖徳は先行の池録・饒録・饒後録・建録・蜀本・徽本の諸本を集成して、重複を删除し、疑わしきを刊削し、譌舛を校訂し、分つに廿六門に類編した。頗る清整なるを以て、爾来盛行し、先行の諸本皆殆ど伝わらざるに至った。この本の編は現行本の語類と異って語録で、即ち筆録者名を以て配列され、靖徳編本所載の諸本目次より察するに、所謂「池録」に属する。「池録」とは、嘉定乙亥（九年）李道伝が廖徳明等卅二人が筆録せる語録を輯して四十三巻とし、また張洽録一巻を続増して、池州に刻したので、この名があり、朱子語録中最初の刊である。しかも本版が嘉定九年池州刊本と見て支障ないことを裏書するのは、一はその欠画が光宗に止って、寧宗以下の宋諱に及ばぬこと、二はその刻工名である。本版の刻工名の他の宋刻諸本に現れたものを拾えば下の通りである。南宋孝宗頃の越刊八行本尚書正義の修に王明・劉昭、越刊八行本周礼疏の修に劉昭、紹熙三年越刊八行本礼記正義に劉昭・陳新・呉志、北宋刊孝宗頃修説文解字に陳新、南宋浙刊大広益玉篇（真福寺・書陵部蔵）・南宋浙刊広韻（静嘉堂・国会図書館蔵）に呉志・呉椿・劉昭、紹興刊陳書・南宋前期杭州刊南斉書・梁書の修に呉春・呉椿・呉志・劉昭、嘉定十二年温陵郡斎刊資治通鑑綱目に張成・葉茂、宝祐五年趙氏刊資治通鑑紀事本末に張成、寧宗理宗間浙刊古史に王明・呉志・呉春・劉昭、淳祐十年福州路提挙史季温刊国朝諸臣奏議に王辰、嘉定中浙刊歴代故事に呉志・劉昭、宋刊武経七書に劉昭、宋刊愧郯録に呉椿・劉昭、寧宗頃刊東萊呂太史集・麗沢論集録に呉春・呉志・劉昭、淳熙中尤氏刊紹熙修文選に王明、贛州刊文選・宝慶中広東漕司刊新刊校定集註杜詩に葉正、さらに寧宗頃刊東坡集（書陵部蔵）・理宗頃刊三蘇先生文粋・南宋浙刊妙法蓮華経（天理図書館蔵）等に呉志の名が見える。以上の如く、本版の刻工はいずれも皆南宋前期から中期にかけ、杭州を中心とするその周辺地区に於て活躍せる匠工である。池州は今の安徽省に属し、広い意味で杭州圏内に入る。従ってこの本が嘉定九

年池州刊たることは殆ど疑いがない。本版は他に所在を聞かず、現通行本に先行する諸本が殆ど伝を佚した現在、天壌間の孤本たるこの宋槧本は、四十三巻附一巻中、僅に七巻を存する零本にすぎぬが、吉光片羽と雖も、宝貴たゞならぬものがある。

＊類編標註文公先生経済文衡　存後集巻一〇―一七、続集巻一一―二二　宋朱熹撰　馬括編　〔元・建〕刊　二冊

後集は後補淡縹色表紙（二二・六×一四・七糎）、裏打補修を加え、粘葉装。続集は後補淡縹色表紙（二〇・一×一三・二糎）、包背装。本文巻首「類編標註文公先生経済文衡巻之幾　後集（或は「続集」、墨囲陰刻）」（跨行）と題す。四周双辺（一五・七×九・八糎）有界十三行、行廿三字。墨線圏点附刻。上眉に綱条を標記、行二字。版心狭く小黒口双黒魚尾、「文行后（或は賣）幾（丁付）」。後集巻十・十一の各々の首葉、巻十四の第八葉以下、巻十五の首葉、巻十七の第六葉及び第十葉左より以下、それぐ〳〵欠丁。続集は印面漫漶にして、明かに明印、後・続各々別蔵本の取り合せである。続集は後集と恐らく同版と思われるが、些少明初覆元刊本の疑点がないでもない。

本書は前集二五巻後集二五巻続集二二巻、編輯者氏名を題さず、千頃堂書目は馬季機の編となし、乾隆乙未南昌楊雲服重刻本の程恂序は称して宋滕珙の編とする。四庫全書提要に「初刻於正徳辛巳有楊一清序但称先儒所輯」と云う如く、従来明以降の刊本が挙げられたのみで、元乃至明初刊本の確実な所在は知られていない。（追記11）

朱子成書　存六種　宋朱熹撰　元黄端節編　元至正元年刊（日新書堂）〔明〕印　四冊

後補紺色表紙（二四×一五・一糎）、包背装。太極図・通書・西銘・正蒙・易学啓蒙・律呂新書の六種を存する。前掲の故宮博物院蔵本と同版。「晉府／書画／之印」「敬徳／堂暴／書印」の印あり。明晉王府旧蔵。旧京420―422著録。

同　存五種　明景泰元年刊（善敬書堂）　覆元至正元年日新書堂刊本　（家礼）元至正元年刊〔明〕印　三冊

後補紺色表紙（二四・一×一五・三糎）。襯装包背装。首目題式全て上掲の至正元年日新書堂刊本と同じく、凡目末の同じ場所に「景泰元年庚午／善敬書堂新刊」の双辺木記がある。双辺（一八・八×一一・八糎）有界十一行、行廿字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「太極図（或は西銘等）（丁付）」。太極図・通書・西銘・正蒙・家礼の五種を存する。そのうち「家礼」のみは元至正元年日新書堂刊明印本、但し巻末一葉半を欠く。

本版は元至正元年日新書堂刊本の覆刻である。諸家目著録本のうち、往々本版を以て元至正元年刊と誤って録されている例が極めて多い。

＊増広字訓　存巻三・四　旧題宋程端蒙撰　程若庸類纂〔元〕刊　二冊

後補紺色表紙（三〇×一九・八糎）。裏打修補が加えらる。本

文巻首「増広字訓巻之幾」、次行低八格、「新安程若庸類纂」、第三行を空け、第四行「小題第幾」と題する。左右双辺（二〇・七×一四・八糎）有界八行、行廿字、注小字双行。版心白口三黒魚尾、「字訓幾巻（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、木、正、汪、呈、而、祥、進、顕の刻工名あり。貞の字間々欠筆。巻三首三葉欠、且つ所々破損あり。朱筆句点の書入を有する。「願学斎」の印記あり。旧京486487著録。本版の所蔵は他に聞かない。

西山先生真文忠公読書記　存甲集巻五・六、一一・一二、一八、二〇、二二・二三、乙集下巻四　宋真徳秀撰

〔南宋開慶元年〕刊（福州学官）元大徳・延祐・元統・〔明初〕遞修　五冊

後補黒色表紙（三五×二三糎）、金鑲玉装、元料紙縦三二・三糎。本文巻首「西山先生真文忠公読書記甲集幾」と題す。左右双辺（約二一・七×一五糎）有界九行、行十六字、注小字双行、行廿四字。但し乙集は行十七字。版心白口双黒魚尾、「読書記甲幾（或は甲集幾、甲之幾、或は乙集幾）（丁付）」、間々上象鼻に大小字数、下象鼻に往々刻工名、延祐五年補刊の補刊年（完本には元統のも）がある。宋原刻の所は甚だ少く、それも殆ど部分的修が加えられ、明初の補刻も加っている。刻工名は明修の庚辰、元修の葉・陳、（以下延祐五年修）宸、魏、埜、志、官、林。補刻の葉が多いので欠筆は厳謹ではなく、弦桓の一部に欠画を見るにすぎない。甲集巻一八の第二三・二四葉及び第二六葉以下、巻二二の第一―三、五葉、巻二三首三葉、第三二葉以下、乙集下巻四首四葉は欠丁。旧京425―427著録。

本書はもと甲・乙・丙・丁から成るが、丙集は未だ成稿に至らなかったか伝っていない。乙集上は「大学衍義」四三巻で、往々別に単行さる。即ち甲集三七巻乙集下二二巻丁集二巻。この本の完本には首に開慶改元十月初吉門人番陽湯漢謹書と署する序、末に福建の監雕衙官三名の列位があるので、開慶元年湯漢等の捐金による福州官刊本たることが判明する。漢の序によれば、「西山先生読書記惟甲乙丁為成書甲丁二記近年三山学官已刊行乙記上則大学衍義是也其下巻未及繕写而先生没藁蔵于家学者罕見之漢来建安請於先生之嗣子仁夫右司伝鈔以来手自校定釐為二十二巻将欲刊之倉台適福之郡文学呉君応尹以書来曰願得本而併刻焉以備一家之言乃以授之而助其費之半」と。たゞ開慶元年湯漢が刊したのは乙集二二巻のみで、既刊の甲・丁集に併せたのか、甲・丁集も新に刻したのか明かでない。しかし現存宋槧は三集とも版式を同じうしているから、前者であって、既刊と云っても左程年代が距っているわけではなく、前後していたようである。この板木は明に入って南国子監に移管され、「明南雍経籍考」に「真西山読書記六十巻存者二千八百面」とある。同版に静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・尊経閣文庫・成簣堂旧蔵お茶の水図書館（存甲集）・中央図書館（四部、一は存甲集、一は存乙集下、一は存乙集巻三）・北京図書館（三部。一は存甲集、瞿目・瞿影著録。一は存乙集下巻八―一二）・上海図書

館（有欠）・南京図書館（存丁集一巻、丁志盍影著録）蔵本、莫録（存甲集）・劉影・繆続記・莫編莫跋著録本がある。

*真西山読書記乙集上大学衍義　存首九巻　宋真徳秀撰

〔宋〕刊〔元・明〕遞修　三冊

後補黒絹表紙（三〇・三×二一・七糎）。裏打補修が加えられ襯装。首に端平元年玖月拾五日の尚書省劄子（前半欠）、端平元年徳秀の「進大学衍義表」、「中書門下省時政記房申状」、次に自序の「真西山読書記乙上集　大学衍義序」、次に「西山読書記乙集上大学衍義目録」あり。本文巻首「真西山読書記乙集上大学衍義巻第一」、次行低四格、「帝王為治之序」（陰刻）と題す。尾題は「大学衍義巻第幾」、或は「真西山読書記乙集上大学衍義巻第幾」。左右双辺（二三・八×一六・五糎）有界十行行廿字、注小字双行、「臣按」は低一格単行大字。版心白口双黒魚尾、「大学衍義第幾巻（或は読書記乙上大学衍義幾巻、大学衍乂幾、衍乂幾）（丁付）」。下象鼻に稀に文・仁の刻工名がある。巻八の首葉裏及び巻八の第一八葉以下欠丁。明修の葉が多く、他の中央図書館本等には「大徳六年補刊」の修版年がある。補刻の葉が多いので欠筆はあまりなく、僅に恒に欠筆を見るにすぎない。朱筆句点の書入がある。旧京428―430著録。

本書は全四十三巻。同版に静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・お茶の水図書館（成簣堂文庫旧蔵）・中央図書館・南京図書館（丁志・盍影著録）蔵本がある。中央図書館目録は本版を前掲の読書記と共に宋開慶元年湯漢等福州刊本とするが、その根拠が明かでない。版式字様から見れば、寧ろ次掲本の方が開慶福州刊本に比較的近い。

同　存巻三一―三九、四一・四二　〔宋後期〕刊〔元・明初〕遞修　五冊

後補黒絹表紙（三一・三×二〇糎）、裏打補修を加え襯装。本文巻首「真西山読書記乙集上大学衍義巻第幾」（巻三一は「真西山」を「西山」に作る）、次行低四格章題を題す。尾題は「大学衍義巻之幾（或は巻第幾）」或は「真西山読書記乙集上大学衍義巻第幾」。左右双辺（二一・八×一四・六糎）有界九行、行十七字、注小字双行、「臣按」は低一格単行大字。版心白口双黒魚尾、「大学衍義乙上幾巻　（丁付）」、下象鼻に間々刻工名が存するらしいが、版心の上下が殆ど破損しているので不明。原刻の葉が少く、殆ど部分的修が加わり、元・明の補刻の葉が極めて多い。匡恒桓の字に欠筆が存する。所々破損し、巻三一の第五葉、巻三九第二五葉以下、巻四一の首及び第六葉以下が欠丁。旧京431432著録。他に同版本の所在を聞かない。

大学衍義　存巻一八―二六　宋真徳秀撰　〔元〕刊　三冊

後補紺色表紙（二一・五×一三・六糎）。裏打補修が加えられ襯装。本文巻首「大学衍義巻第幾」、次行低四格章題を題する。左右双辺（一七×一〇・七糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行、「臣按」は低二格単行大字。所々双辺を混え、巻廿二以下は双辺。版心白口双黒魚尾、「衍幾　（丁付）」、上象鼻に大小

字数、下象鼻に所々刻工名があるが、殆ど破損しているので、識読し得る刻工名は、張一、張二、張、周□、進、固。巻二三の首葉及び巻二六の第五葉以下欠丁、所々破損。巻廿三以下はやゝ後刷で、特に字様が巻廿二以上と些少異り、雕刀粗雑である。或は補配本か。「清楽軒」「姜氏／図書」の印記あり。旧京433434著録。

本版には前掲の故宮博物院蔵本の如き明初の覆刻があり、往往混同される。北京図書館蔵元刻本は瞿氏旧蔵で、瞿目に宋刊と録されているが、十一行廿一字、或は同版か。

慈溪黄氏日抄分類　存巻二九・三〇、七五―七七　宋黄震撰　〔宋末〕刊　〔元〕修　二冊

後補紺色表紙（二三・七×一六・三糎）。本文巻首、「慈溪黄氏日抄分類巻三十」（「三十」の二字後修）、次行低一格篇名を題す。左右双辺（二〇×一三・三糎）有界十行、行廿字、注小字双行。句読点・声点・傍線附刻、人名・引書及び経文字等圏を以て囲む（但し巻七五以下圏なし）。版心白口双黒魚尾、「篇名幾（巻七五以下は「日抄分類巻幾」）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり、左上欄外に耳格があって篇名を刻す。部分的な補刻が加えられ、刻工名は、呉老、任奎、昌文、金鼎、困、泳、晏、王、文、工、范、由、丁、明、亨、元、栄、成、茂、迪、中等。欠筆は厳謹ではなく、貞等に欠画を見る。巻二九の首三葉、第一四葉表、第一六―二四表、巻三〇の第十五葉以下、巻七五の首葉、巻七七の第三葉以下は欠丁。

同版に中央図書館（存首卅巻、適志著録）・北京図書館（存巻二七―二九、涵録著録）蔵本がある。中央図書館本は目録後に「紹定二年菊月積徳堂校正刊」の双行木記がある。しかし紹定は黄震が未だ少年時代であり、且つ本書の文中に咸淳の年記が見えるから、紹定二年に出版されることは絶対にあり得ぬことである。事実同本を検するに、この刊記を有する目録の末葉はその一葉を新に贋刻して附せる後人の妄補である。従って本版は宋末の刊と見ねばならぬ。本版の上記の刻工名とこの本に欠けた巻にある刻工名（中央図書館本及び涵録による）の中で、他の宋刊本にその名が見えるものを列挙すれば次の通りである。王信が越刊八行本尚書正義（補刻）・贛州刊文選の修、王祐が越刊八行本礼記正義（補刻）・越刊八行本論語・孟子注疏解経、王沢・王祐が南宋中期刊史記（静嘉堂文庫蔵・宝礼堂旧蔵）、王成が南宋前期刊龍龕手鑑（存巻二）・宋光宗頃刊大字本蘇文定公文集（北平原蔵、第一次修）・嘉定頃浙刊晦庵先生文集、任清が嘉定十三年臨安府尹家書籍鋪刊歴代名医蒙求、黄文が寧宗頃刊東坡集（書陵部蔵）、李応祥が開慶元年福州学官刊西山先生真文忠公読書記の元初修にその名が見える。王成・黄文が本版の刻に従事するには年齢上無理のように思えるが、ありふれた氏名であるから同名異人であろう。

同　存巻五、一五・一六、一八・一九、二一―二五、三九―四三上、六五―六九、八八、九〇・九一、九三―

九七　宋黄震撰〔元後至元三年序〕刊（〔慈溪黄氏〕）
一九冊

後補紺色表紙（二八・三×一七・九糎）。金鑲玉装。本文巻首「慈溪黄氏日抄分類巻幾」、次行低一格篇名を題す。左右双辺（一九・四×一三・三糎）有界十行、行廿字、注小字双行。句読点圏点声点墨線附刻。版心白口双黒魚尾、「篇名幾（或は日抄巻幾篇名、或は幾ヲ篇名）」、下象鼻に丁付及び刻工名あり。左上欄外に耳格あり篇名が記さる。刻工名は、官永茂、永茂、媿名、丘老、丘、堯朱、具福、虞子得、虞益、虞孟淳、虞亮、虞厚、虞、景舟、景中、原礼、原良、玄保、彦博、彦正、呉福、呉中、江童、江厖、黄是、黄保、黄子旻、子旻、黄子、黄喧、喧、黄、子中、子高、子名、士通、士達、志道、妮名、周寿、周童、周同、周、宗文、徐田、汝敬、辛豪、肖寄、詹現、詹塊、張名遠、陳彦和、陳厚、陳魯、伯美、范彦从、范通、潘晋、付資、孟尨、孟龍、孟淳、游子名、余長寿、余長、葉寿、羅六、六晏、六付、六彦、劉宣、宣、劉毘、劉本、劉侍者、劉侍、劉貫、貫、劉伏、劉伯安、劉保、林安、連彦、和尚、中、志、道、長、保、子。巻中欠丁甚だ多く、巻五（第五一葉以下）、一五（首五葉、第一八・一九、二一―四一、七一、八一以下）、一六（第四七以下）、一八（首二二葉）、一九（第三三以下）、二一（首八葉）、二二（首三葉）、二三（首二葉）、二四（第二一以下）、二五（首二四葉、第五九以下）、三六（首一葉）、四三上（第八以下）、八八（首十一葉、第二四）、九六（第二六葉裏以下）、九七（第二二、第二五葉以下）が欠丁となっている

旧京441 442著録。

この本は印面美しく、比較的早印に属する。前掲の宋末刊本に比するに、その粗雑なる覆刻の関係にある。桓恒等に欠筆のあるのはその故である。同版本に中央図書館蔵の三部がある。羅録著録本は或は同版か。同館の完本には首に元後至元三年沈逵の序あり、その中に「凡百巻名之曰日抄鋟梓行于世中値兵燹諸孫礼之懼祖訓之失墜購求捜緝補刻僅完」と云う。黄震撰「古今紀要」と共に出版されたものと思われる。本版は元末明初間刊の遼史・金史・古史・唐文粋・西山先生真文忠公文章正宗等と刻工名の大部分を共通にしている。刻工中、子中は至大福州路三山郡庠刊至治二年修通志に、子高は福唐郡庠刊両漢書の大徳修、汝敬・張名遠は元泰定西湖書院刊後至元修文献通考、また張名遠は元末刊楽書正誤の雕板に従事している。しかし本版の字様は元より明風に近いので、序に云う如く後至元三年黄氏刊としても必しも不可とは云い得ぬが、些少疑点が残る。瞿目・瞿影著録本（北京図書館現蔵）は瞿目には元刊と著録されているが、十二行廿二字、明かに本版とは別版の明前期の刊刻にかゝる。後至元刊と目すべき伝存本は他に該当本を見出し得ぬので、暫く本版を後至元刊と推定して後考を俟つ。

新編音点性理羣書句解　前後集各二三巻　宋熊節編　熊剛大注　〔元・建〕刊　八冊

後補紺色表紙（二六・七×一六糎）。金鑲玉装。「新編性理羣

書句解目録　前集（墨圃陰刻）」（跨行）、第二・三行低二格、「考亭門人通真郎知福州閩清県事賜緋魚袋臣熊節集編／覚軒門人掌御賜建安書院朱文公諸賢従祀祠熊剛大集解」と題する目録を首に冠する。本文巻首「新編音点性理羣書句解巻之一　前集（墨圃陰刻）」と題し、首に濂溪より晦庵に至る遺像及び道統重系図を掲ぐ。後集は巻一―十三近思録、巻十四―廿一近思続録、巻廿二・廿三が近思別録から成り、首に「近思録編集諸儒註解　後集（墨圃陰刻）」（跨行）と題する諸儒姓氏、次に目録あり、首「新刊音点性理羣書句解目録　後集（墨圃陰刻）」（跨行、尾題「新編性理羣書句解目録　後集（墨圃陰刻）」）と題し、以下「近思録一十四巻（跨行）／晦庵先生朱文公集編／東萊先生呂成公同編／考亭後学熊剛大集解」と題し、目録後跋語一則がある。本文巻首「新刊音点性理羣書句解巻之一　後集（墨圃陰刻）」と題する。四周双辺（間々左右双辺を混ゆ、一八・三×一一・八糎）有界十三行、行廿四字、注小字双行。版心粗黒口双黒魚尾、「書（或は書后）幾（或は幾フ）（丁付）」。前集の巻五の第八葉、巻七の第三葉、巻八の第十二葉以下、巻九の首一葉欠丁。旧京443444著録。

同版に静嘉堂文庫（存後集、陸志・陸跋著録）・お茶の水図書館（存後集、成簣堂文庫旧蔵）・中央図書館（二部、一は劉影著録）蔵本、繆続記・王記（存十八巻）・羅録（存前集、清銭曾等旧蔵）・莫跋（存後集）著録本あり。陸志・繆記・莫跋が宋刊となすは失考、元麻沙刊本である。この本は印面にかなり漫漶が見られる。

*新刊仁斎直指方論　存首五巻　宋楊士瀛撰　詹宏中校

〔元〕刊（〔環溪書院〕）　一冊

後補紺色表紙（二四・二×一五・三糎）。襯紙を添えて改装。首目は巻首の景定甲子楊士瀛自序及び仁斎直指方論綱目を欠き、目録の巻十三の途中の葉に始り、末まで存する。本文巻首「新刊仁斎直〔指方論巻〕之一」（〔〕破損、観海堂蔵影写本を以て補足、以下同じ）、第二・三行低九格「〔三〕山名医仁斎楊士瀛工登父編撰／建安儒医〔翠〕峯詹宏中洪道校定」と題す。巻二以下は撰者名を署さない。尾題には「新編仁斎直指方論巻之三」「新刊直指方巻之五」、或は「巻終」（巻二）或は「四巻終」の如く題するもある。左右双辺（一九×一二・九糎）有界十四行、行廿四字。版心細黒口単黒魚尾、「仁方（或は仁直方）幾フ　（丁付）」。往々漫漶の葉あり、後刷。箱蓋に「北京復盛斎王記」の焼印あり。同版の伝存は前掲の楊氏観海堂蔵本のみ。

外台秘要方　存巻一・二　唐王燾撰　〔南宋初〕刊（両浙東路茶塩司）　二冊

後補紺色表紙（二四・五×一七・一糎）。裏打補修が加えらる。首に、前将仕郎守殿中丞同校正医書臣孫兆謹上の「校正外台秘要方序」、次に「外台秘要方序」（次行低一格「唐銀青光禄大夫使持節鄴郡諸軍事兼守刺史上柱国清源県開国伯王　燾　撰」と題す）がある。本文巻首「外台秘要方巻第一（傷寒上一）門」、次行低一格半、「朝散大夫守光禄卿直秘閣判登聞検院上護軍臣林　億等上進」と題し、次に毎巻目録があって本文に接属する。巻一

尾題の前に「朝奉郎提挙薬局兼太医令医学博士臣裴宗元校正」、尾題後一行を空けて、「右従事郎充両浙東路提挙茶塩司幹辦公事趙子孟校勘」、巻二尾題の後一行をあけて、「右迪功郎充両浙東路提挙茶塩司幹辦公事張蹇校勘」の銜名が刻されている。左右双辺（一九・七×一三・七糎）有界十三行、行廿四字、注小字双行。版心は全葉破損がある。僅に識読し得る刻工名は、朱明、丁珪、阮于、章楷、呉邵、趙宗、鄭英、葉邦、楼謹、余全、時明、黄季常、徐改、董明である。眩驚に欠筆が見られる。撫刻精雅早印の美しい刷りであるが、残念ながら各葉破損が多い。旧京446―451著録。

本書四十巻、最初の刻は北宋熙寧二年官版であるが、今伝わらず、本版は高宗紹興年間両浙東路茶塩司の重刊である。同版に静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・書陵部（存十一巻、金沢文庫旧蔵、森志著録）・北京図書館（存卅六巻、中版録75 76著録）蔵本がある。森志には紀藩竹田純道が完本を蔵し、金沢文庫蔵本の僚巻十巻を京師荻野元凱が蔵し後福井崇蘭館に帰したことを記しているが、現在その存佚は未詳。森志はまた竹田本を幕府が影写せしめたことを、「嘉永己酉官下命郵致使於医学影抄凡二通、一納楓山、一蔵医学」と録している。この楓山に納められた影鈔本は内閣文庫に存するが、医学館の影鈔本は流出して楊守敬の購得する所となり、今故宮博物院観海堂（楊志著録）に蔵されている。

永類鈐方　存巻九―一三　元李仲南編　〔元末明初間〕

刊　一冊

後補縹色表紙（二七・八×一九・八糎）。裏打補修を加う。本文巻首「永類鈐方巻第九」（跨行）と題し、次行「和劑局集要方」の如く小題を署する。尾題は「和劑九巻至十巻終」（巻十）の如く小題を題す。単辺（二〇×一五糎）有界十八行、行卅一字内外不等。版心細黒口双黒魚尾、「巻幾　（丁付）」。四庫未収。全廿二巻中の零本であるが、本版は他にない。森志は楓山秘府蔵朝鮮国活字本廿二巻を著録し、「元碧山李仲南集成、青原孫允賢校定、首延祐丙辰滕賓序、至順二年自序、按、懐仙閣所蔵与此本同、崇蘭館蔵有明初竹坪書堂刊本」と。また「増訂四庫簡明目録標注」に「路氏有元至順刊本、係汲古閣所蔵、有印記」と。「汲古閣蔵本書目」に「宋板永類鈐方舊宋」と見える。

済生抜粋方　存首六巻　元杜思敬編　元至正元年序刊
（建安・白楡）　三冊

後補紺色表紙（二四×一五・三糎）。裏打補修が加えらる。首目は破損が多く、特に首葉は敗爛しているが、首に延祐二年十月初吉宝善老人銅鞮杜思敬の自序、次に至正辛巳脩禊日真定後学白楡の序及び「済生抜粋方総目」がある。本文巻首「鍼経節要（格隔三）済生抜粋方巻第一」の如く、小題を上に大題を下に署し、「薬方目録」を各巻首におく。尾題は小題を題署する。四周双辺（一九・三×一二・六糎）有界十二行、行廿四字。版心細黒口双黒魚尾、「針経（小題の略名）　（丁付）」。巻六第五丁補

写。

四庫未収。もと十九巻。鍼経より雑方に至る十九種の諸家の医書よりその最も切用なる所を節録した医書の選本、医家の叢書である。至正元年の白楡序によれば金陵より建安郡に転勤し来り、仁民の一端として本書を鋟梓して其の伝を広むと云う。宮内庁書陵部（二部、森志著録）・静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・北京図書館（残本二部、一は涵録著録）蔵本は同版らしいが、皆白楡序を欠く。

*新刊監本安驥薬方　存巻七　撰者未詳　〔元末明初間〕刊　一冊

後補濃藍色表紙（二四・六×一五・八糎）。裏打が施され、襯装。首若干葉を欠き、且つ版心にかけて破損している。巻末「新刊監本安驥薬方巻之七」と題す。双辺（二〇・三×一三・一糎）有界十四行、行廿三字。版心の所が全葉殆ど破損しているが、粗黒口双黒魚尾らしい。

馬医の書たる安驥集（四庫存目収本は永楽大典本）の零巻か。同版の所在を他に聞かない。

*重修政和経史証類備用本草　三〇巻（欠巻一・二、一〇、一三、二四―二六、二八―三〇）　宋唐慎微奉勅原編　冦宗奭注　〔蒙古定宗四年〕刊（〔平陽府・張存恵晦明軒〕）　二三冊

後補淡香色表紙（二四×一五・八糎）、襯装。首目欠。本文巻首「重修政和経史証類備用本草巻第幾己酉新増衍義」、次行低四格「成都唐慎微続証類」、第三・四行低一格「中衛大夫康州防禦使句当龍徳宮総轄修建明堂所医官薬提挙入内医編類聖済経提挙大医学臣曹孝忠奉／敕校勘」と題す。毎巻大題の次に篇目あり正文に接する。四周双辺（一七・五×一二・五糎）有界十一行、行廿或は廿一字、注小字双行、行廿六字内外。版心白口双黒魚尾、「本草幾（丁付）」、下象鼻に間々刻工名あるが、破損が多く、識読し得る刻工は、張琮?、張一、張二、何川、姜一、鄧恩、鄧一、鄧二、鄧、枯?三、三、呂一、呂、丁一、丁、吉一、楊二、楊三、李成、詹?口、口進、梁、趙、王等。所々補写がある。「毛晋／私印」「子／晋」「毛」「晋」「子」「晋」「延古堂孛氏珍蔵」（陰刻）「長州顧仁／効水東館攷／蔵図籍私印」等の印。明の顧仁效・毛氏汲古閣等旧蔵。

北京図書館蔵蒙古定宗四年平陽府張存恵晦明軒刊本（二部、一は銭謙益跋あり、中版録265 266著録、一は存九巻）と同版と思われる。完帙は三十巻。この本は首目を欠くが、北京図書館本には、首に泰和甲子下己酉晦明軒刻書螭首亀座牌記、目録後に平陽府張宅印の琴形牌記及び晦明軒と記せる鐘形牌記、後序の後に「泰和甲子下己酉歳小寒初日辛卯刊畢」の一行の刊記がある。泰和の年号から、往々金刊本とされるが、泰和甲子後の己酉即ち蒙古定宗卒後の明年（元定宗后称制の年、宋淳祐九年、一二四九年）に当り、金亡びて已に十有六載、故国の恩を忘れざる意を寓したものと思われることは、銭謙益跋・銭竹汀の考証する通りで、四庫提要が金大定乙酉とせるは泰和より上に逆

算せる失考である。「政和」の冠称のあるのは前掲の大観本をさらに政和六年曹孝忠が朝旨によって校勘したのでその名を有する。本版は麻革序によれば、張存恵が解人龐氏本により翻刊し、附するに冦氏衍義を以て増入したという。大観本が卅一巻、此が卅巻に作るのは、三十一巻を三十巻の前に移して合せて一巻となし、その所引十六家本草義例を删ったからである。楊守敬は卅巻に改変したのは張存恵の所為と推測している。政和本は本版より旧きは伝わらず、本版は極めて稀覯で、明成化四年山東巡撫原傑の重刊本が知られている。成化本には「大徳丙午歳仲冬望日平水許宅印」の本刊記があるから、本版から直接翻刻したものではない。その後嘉靖の陳鳳梧の重刊本等が刊行されている。明刊本から明刊たることを示す刊記や跋を削除した本が往々誤認されて金泰和晦明軒刊本と通行している。四部叢刊本は本版による影印と称するが、実は十二行の明刊本で旧京461―463著録本（北平図書館原蔵、明刊であろう）をさらに覆刻せる版である。

六経天文編　二巻　宋王応麟撰　元後至元六年刊（慶元路儒学）至正一一年修　玉海附刻本　二冊

後補濃藍色表紙（三三・八×二〇・八糎）、襯装。序目なし。本文巻首「六経天文編巻上」、次行低一格「浚儀王応麟伯厚甫」と題す。左右双辺（二一・五×一二・八糎）有界十行、行廿字。句点附刻。版心白口双黒魚尾、「天文編上（下、或は文上〈下〉）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。刷りはかなりよいが、巻上に破損多く、巻末二丁を欠く。

＊天原発微　存巻三・四　宋鮑雲龍撰　元方回校　〔元〕刊　一冊

後補紺色表紙（二三×一六・一糎）。包背装。巻三は首及び第廿九葉欠。本文巻首「天原発微巻之四」、第二・三行低九格、「魯斎鮑雲龍景翔編著／虚谷方回万里校正」と題す。左右双辺（一九・一×一一・五糎）有界七行、行廿二字、注低一格、小字双行、行廿一字。版心白口双黒魚尾、「発微巻幾　（丁付）」。上象鼻に間々大小字数、下象鼻に往々胡等の刻工名が存する。句点・圏点の朱筆書入あり。箱に「北京復盛斎王記」の焼印あり。

本書は明天順五年歙西鮑氏耕読書堂刊本以下の諸版は存するが、元版の現所蔵は聞かない。この本は序目等を欠くので、刊年を明かにしないが、明版所載の元貞二年方回序に広西道儒学副提挙鄭昭祖が本書を上梓した由来が記され、また天順五年鮑寧叙に「板燬于兵火猶競録以伝逮今幾二百年而益盛寧嘗得原刻本」と述べられている。この本或は元貞二年鄭昭祖刊本に当るか。

塋原総録　五巻　□由吾裕撰　〔元〕刊　一冊

後補紺表紙（二三・五×一五・三糎）。裏打補修あり。首に序題の次行に「中散大夫守国子祭酒兼尚書吏部侍郎上柱国会稽県開国男民邑三百戸賜紫金魚袋臣由吾公裕奉勅撰」と題署せる塋原総録の自序、次に司天監楊惟徳上表あり、末に七人の銜名を列記、次に図あり。巻一に大題なく、首行低四格「五山局図論

篇第一」と題するが、巻二以下は巻首に「塋原惣録巻之幾」と題す。双辺（一八・八×一二・六糎）有界十七行、行廿八字、注小字双行。版心線黒口黒魚尾、「塋原幾フ」、版心の下半全て破損し、未詳。早印の美しい刷りであるが、残念ながら毎葉下半が殆ど欠損している。巻五の巻末には欠葉があるようである。箱に「北京復盛斎王記」の焼印あり。

四庫未収。諸家目に殆ど見られず、「文淵閣書目」巻十五に「塋原総録一部一冊闕」と録されている。相宅の書。中央図書館に一本あり、この本と覆刻の関係にあるが、この本の方が先出と思われる。北京図書館に存首五巻の元刻本が蔵さる。

＊胡先生陰陽備用　存巻七―一三　元不著編人　〔元末明初間・建〕刊　一冊

後補紺表紙（二三・三×一九・八糎）。包背装。裏打修補を加う。本文巻首「胡先生陰陽備要巻之幾」、巻十一の尾題のみ「諸家陰陽備用十一巻終」と題する。左右双辺（一七・五×一二・六糎）有界十四行、行廿三字。版心白口（線黒口を混ゆ）双黒魚尾、「用（或は陰陽備用或は備用）幾（丁付）」。白口の上象鼻には大小字数あり。巻十の第六葉欠。巻七の巻首及び巻十三の全葉上半欠失。巻中挿絵あり。線黒口の葉は版心に大小字数なく、字様やゝ異り、明風を帯び、補刻の疑いがある。四庫未収。相宅の書。他に所在を聞かず。

＊黄帝周書秘奥　存首六巻　不著撰人　〔元〕刊　一冊

後補紺表紙（二三・五×一五・八糎）。裏打補修。巻一首欠葉。巻二以下巻首「黄帝周書坤伝巻之二」（跨行）の如く題す。左右双辺（一九・一×一二・五糎）有界十七行、行廿五字。版心線黒口双黒魚尾、「周幾フ（丁付）」。巻中挿絵多し。巻末護葉紙に「永楽二年十月二十八日劉都司進到／一部二本上下」の墨筆識語、箱に「北京復盛斎王記」の焼印あり。四庫未収。相宅書。他に所蔵が知られていない。

易林　一六巻　旧題漢焦延寿撰　□闕名注　〔元〕刊

配補景鈔元刊本　八冊

後補花文様黄綾表紙（二三・三×一三・九糎）。題簽に「焦氏易林」と墨書。毎冊目録外題あり。金鑲玉粘葉装。巻一・二・五・六・十一（首二二丁、第卅四、五七―六三、六八―七一丁）・十二（首卅五丁、第卅九―七四丁）・十五（首廿九丁、五〇―六五、六八―巻末）・十六は影元本を配補、この影鈔は汲古閣影元本によると云う。首に「焦氏易林序」（序題の次行低二格「東萊人費直字長翁」と題す）、聖唐会昌京寅歳周正五日叙の「漢焦小黄周易変卦筮叙」、次に「焦林直目」あり。本文巻首「易林巻第幾」と題す。双辺（一五・六×一〇・四糎）有界八行、行十五字。版心細黒口双黒魚尾、「巻幾（丁付）」。下象鼻に、羊茂、羊、陳隆、陳子景、雇粪、雇恭、恭、繆文俊、繆文華、盧彦高（或は芦彦高）、盧彦皐、陶示、示、干二、干、范徳閏、范子英、何何仏、何宗大、張泌、朱同狗、王享、貴泌、貴衮、貴劉、貴毎学、貴東、貴克名、趙与（或は継）祖、呂中、呂子英、敬等の刻工名がある。匡恒の字に稀に欠筆を見

る。字大にして楮墨清爽、影写また精善の上品である。

四部叢刊影印の底本にして、他に同版本の伝存がない。

呂氏春秋　二六巻　漢高誘注　〔元至正間〕刊（嘉興路儒学）　一二冊

後補紺色絹表紙（二八・七×一七・五糎）。襯装。首に遂昌鄭元祐の刊書序、「呂氏春秋総目」、その後に鏡湖遺老の校合跋、次に高誘の原序がある。本文巻首「呂氏春秋巻第一」、次行「孟春紀第一　本生　重己　貴公　去私」、第三行低四格「呂氏春秋訓解（隔五格）高氏」と題す。左右双辺（二二×一四・八糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「呂氏春秋巻幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に、楊青、青、謝茂、謝、茂、林茂、寸の刻工名がある。また首の元祐序の後に「呉興謝盛之刊」の刻工名が刻されている。巻十二の巻末及び巻廿の第三・四丁を欠き、所々破損の葉がある。やゝ後刷。「昆陵周氏九松／迂叟蔵書記」「周印／良金」の蔵印あり。旧京475―477著録。

元祐序によれば、嘉興路総管劉貞が先考節軒（諱は克誠、字は居敬）の手校本を以て嘉禾学官に刊せしめたと云う。この本にないが、繆記著録本には、元祐序の後に「嘉興路儒学教授陳泰至正六年刊」の一行、瞿氏蔵本には「嘉興路儒学教授陳泰校呉興謝盛之刊」の一行ありと云う。板木は明に入って南監に移され、南雍経籍考に「呂氏春秋二十六巻存者二百六十三面半損十六面失五面」と。現存本の多くは明修本であるが、この本に明修はない。他に静嘉堂文庫（陸志・陸跋著録）・大倉集古館・中央図書館・中央研究院（鄧目著録）・北京図書館・上海図書館蔵本、瞿目・繆記・劉影・莫編莫跋・傅目著録本がある。

*三教平心論　一巻　元劉謐撰　〔元泰定元年〕序刊（通城・呉鼎）

後補紺色表紙（二五・九×一七・三糎）。襯装。首に龍集甲子秋七月の序あり。本文巻首「三教平心論」、次行低八格「静斎居士劉謐撰」と題す。左右双辺（一九×一三糎）有界十一行、行十八字。版心細黒口双黒魚尾「里　（丁付）」。旧京549550著録。

四庫未収。序に通城の定堂居士呉鼎が来って工に命じ繡梓以て其の伝を広めんとする旨を記す。序の甲子或は洪武十七年か。暫く泰定に繋けて後考を俟つ。

容斎随筆　存首五巻、四筆首五巻　宋洪邁撰　〔宋〕刊〔宋〕・元大徳九年修　四冊

後補紺絹表紙（三一・八×二〇・九糎）、金鑲玉装、元料紙縦二七・七糎。首に、嘉定五年何異の「容斎随筆五集総序」、次に「容斎随筆目録」あり。本文巻首「容斎随筆巻第一二十九則」と題す。四筆は首に、慶元三年九月二十四日自序の「容斎四筆序」及び「容斎四筆目録」あり。本文巻首「容斎四筆巻第一十九則」と題す。左右双辺（約二一・八×一五・七糎）有界十行、行廿一字。版心白口双黒魚尾、「容斎随筆（或は容斎四筆）巻第幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。中縫或は下象鼻に「大徳乙巳重刊」「乙巳重刊」の補刊年の印され

た葉もある。原刻の葉は少く、且つ漫滅甚しく、その殆どに部分的修が加り、元修の葉にも間々漫漶の箇所がある。刻工名は、文超、文、黄寛、寛、胡彦、劉源、克明、圭、林、珍、諒（以上原刻）、黄敏、黄珍、鄧琳、鄧梓、梓、鄧叔林（大徳乙巳重刊）、劉滋、煥、文、昌、質、子、中、楫、宗、授、京（以上元修）。原刻には、匡朗勗樹讓を欠筆し、貞を正、桓を威、徵を証、殷を商、完を元、慎を謹に作って宋諱を避ける所があり、また宋朝に関する字に遇えば、上一格を空けてある。四集巻四の第四葉欠。旧京478―480著録。

北京図書館（存続筆十六巻、瞿目・瞿影著録）・涵芬楼（存一・続集、兵燹）蔵本とは同版のようである。この両本並に本帙を合せ、欠巻を明弘治会通館活字本を以て配補して影印したのが四部叢刊本である。この本を四部叢刊本と比べるに、元修に非ざる葉でも間々刻工名を異にし、覆刻の関係にある所があり、宋代既に補刻が加えられていたことがわかる。元修の部分も不完全ながらほゞ原刻の覆刻に近い。嘉定五年何異の五集総序や会通館活字本所載の諸序跋によれば、本書の第一集は婺州に刊され、後姪孫洪伋が贛州に守となり、嘉定五年五集凡七十四巻を贛州郡斎に於て刻して完書となした。追て伋は建寧に守となり、嘉定十六年また建に於て刊した。臨川周某の跋に云う、「容斎随筆初刊于婺女自続至五継刊于章貢然歳久字漫不可復辨紹定改元偶得建溪刊本詳加参校命工鋟梓始於是年之仲春訖於次年之季秋刊成全書庶幾流伝益広云」と。会通館刊本は紹定刊本による翻印である。この本が以上の何れの版に該当するか詳かでない。

*風俗通義　存巻八―一〇　漢応劭撰　〔元大徳一一年〕刊（〔無錫学官〕）　一冊

後補紺色表紙（三五・五×二二・七糎）、粘葉装。本文巻首「風俗通義山沢第十」の如く題す。四周双辺（二二・四×一五糎）有界九行、行十七字。版心線黒口双黒魚尾、「風俗通幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数あり。巻八首十五葉半を欠き、巻末の嘉定十三年丁黻跋を佚する。旧京481著録。

零本ながら早印、字大にして撫印清爽。北京図書館蔵本（明修）、瞿目瞿影（四部叢刊に影印所収）著録本と同版。繆記・羅録著録本も恐らく同版であろう。字様行款を等しくする白虎通と同じく元大徳十一年無錫学官に於ける刊刻である。この本を四部叢刊本と比較するに、巻八の尾、巻九の初の部分が大に異っている。瞿本は影印によるに、その箇所は配鈔らしく、本版によらず、別本によって補写したものらしい。潘氏滂喜斎蔵本は潘跋によれば十行十六字の小字本で、大徳本に大字・小字の二刻ありとし、潘景鄭曰く、「余按大徳本、大字本。自南陵徐氏覆刊、涵芬楼影印、幾家伝戸誦、化身千億矣。吾家滂喜斎所蔵元大徳錫山学官毛希聖刻本、知者絶少、其佳処且不讓大字本也。版刻流伝、亦有幸有不幸耶」と。潘氏はまたこの小字本に明の覆刻もありと称する。大徳年間に錫山学官に於て二種の刊刻がなされたことは普通考えられぬことで、該本を見ていな

いので、後考に譲る。（追記12）

自警編　五巻　宋趙善璙編　宋端平元年刊（九江郡斎）〔明〕修　四冊

後補暗灰色表紙（二八×一九・二糎）。首に嘉定甲申正月望漢国趙善璙序の自序及び「自警編目録」あり。本文巻首「自警編」、次行低一格類名を題す。巻末に端平改元三月旦善璙再書の刊書跋がある。左右双辺（二一・三×一六糎）有界十行、行廿字、注小字。句点・声点附刻。版心白口双黒魚尾、「自警編甲（―戊）（丁付）」。下象鼻に間々、子秀、子、梅保、保、苟道民、道民、苟民、苟、謝友、友、王必文、必文、志才、志、才、志中、胡文、胡、旱成、旱臣、臣、人中、人、周宗貴、宗貴、宗、周、周宗、文只、只、文恕、恕、文民、陳漢、陳莫、陳、韓玉、韋玉、友民、游友、呈二、興才、師、尨、呉、挙、如、郊、女、隆、史、李、易、徐、劉、塗、何、祖、朱、云等の刻工名がある。欠筆必しも謹厳ではないが、胤耿完慎惇敦に見られ、郭等は末筆を欠かない。部分的な明の補刻が僅かながら加っている。旧京482―485著録。

端平元年自跋に「鋟木于九江郡斎」と。同版本に静嘉堂文庫（陸志著録）・中央図書館（二部、一は欠戊集、一は配明影鈔）・香港大学（劉影・香港大学馮平山図書館善本書録著録）蔵本、瞿目・瞿影著録本があり、上海図書館蔵本・潘記（残本）・楊録・傅目・莫編莫跋著録本も同版か。故宮博物院蔵本の如き本版を刻工名も含めて覆刻せる明前期刊本がある。それを天目続五は宋版として著録している。四庫収入の明嘉靖万暦以下の諸刊本は巻数を変更してその真面目を失っている。

又　（欠丙集）　五冊

後補紺色表紙（三一・三×一九糎）。丙集を欠き、乙集は第九二葉以下なく、戊集は本文末葉を欠き、後跋は破損し且つその末葉を脱している。刷りの程度は前掲本とほゞ同じ。

＊冊府元亀　存八〇巻（存巻六―一〇、四一―四五、五六―六〇、二七一―二七五、三四一―三四五、三五六―三七五、三八六―三九〇、三九六―四〇〇、四一一―四一五、四五六―四六〇、四七一―四七五、四九一―四九五、五八六―五九〇）宋王欽若等奉勅編〔南宋〕刊〔南宋〕修　一六冊

後補茶色厚手表紙（二八・九×一九・八糎）、粘葉装。本文巻首、「冊府元亀巻第幾」、次行低二格「（部名）幾」、第三行低四格「（門名）第幾」と題す。但し巻五七・五八は「新刊監本冊府元亀」と題する。左右双辺（一八・九×一二・五糎）有界十四行、行廿四字。注小字双行。版心白口単黒魚尾、「冊府幾（或は「府幾」「元幾」、或は時に陰刻を以て「府幾」「元亀幾」「冊幾」等）（丁付）」。玄県敬謹鬻弘殷竟義議貞慎鎮琪欺等に欠筆を見る。巻六―一〇は各葉下半破損し、巻二七一の首葉は欠。「晉府／図書」「晉府／書画／之印」「敬徳／堂図／書印」「子〻孫〻／永宝用」、首尾の紙背に「国子監崇／文閣官書（この下小字三行「借読者必須愛／護損壊闕失典／掌者不許収受」）」の印

あり。旧京488—490著録。

*又　存巻六一一—六一五　五冊

後補艶出紫色表紙（二九×一九・八糎）、襯装。巻六一一の首葉表欠。「浚儀趙氏／秘笈之印」等の印記。

*又　存巻四八四・四八五（零葉）　一冊

後補紫色表紙（三一×二一糎）、裏打が施され、元料紙縦二九糎、粘葉装。巻四八四は第九—一四葉の五葉、巻四八五は首六葉を存するのみ。

以上は一千巻中の残本で、同版本は他に静嘉堂文庫（存四六六巻、陸志・儀顧堂集著録）・北京図書館（存二〇巻、傅目・傅記・王記著録本を含むか。存五巻、瞿目・瞿影・中版録224著録）蔵本がある。陸志・瞿目が欠筆から北宋刊とせるは失考で、後掲の慶元三年蜀眉山咸陽書隠斎刊「新刊国朝二百家名賢文粋」と字様・版式を同じうしている所から、同時頃の眉山書坊の刊と推定され、蜀小字本と称されている。字様には巻により端正なるとやゝ粗雑なるとが混り、錯列不等である。特に書名に「新刊監本」の冠称を有する巻五七・五八の如きは字様頗る他巻と異り、同様の冠称を題する別種宋版（十三行廿四字、瞿氏旧蔵北京図書館現蔵、存八巻、瞿目・瞿影著録）のそれと相似している。版面にやゝ漫漶の所あり、全葉或は部分的な後修が加っている。

*〔前漢六帖〕　存巻一零簡　〔宋陳大麟〕撰　〔南宋〕刊

一冊

後補紺色表紙（三〇・七×二一・二糎）。粘葉装。薄手用紙。左右双辺（二二・七×一五・五糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「前漢六帖第一　（丁付）」。下象鼻に、蕭邦、邦、蕭昌、黄仲、鄧信、信、龔昊、昊、蔡和、蔡昌、振、祐の刻工名あり。玄驚匡禎貞の字に欠画が見られる。巻一の第三十一から第四十九葉までを存するのみ。

四庫未収。宋史藝文志に、「陳天麟前漢六帖十二巻」として、史鈔類と類事類の両類に復出された本に該当するものと思われる。刻工の蔡昌・蕭昌・鄧信は南宋前期贛州刊文選、蔡和は光宗頃刊昌黎先生集、黄仲は南宋刊夷堅志・宝慶中広東漕司刊新刊校定集註杜詩に同名の刻工がある。従って南宋中期寧宗頃の刊と思われる。王記著録の宋江西刻本存巻一はこの本に該当するらしいが、江西刻となす根拠は明かでない。本版は宋槧本はおろか鈔本すら他に所在を聞かない。この本は字様端雅撫刻清爽、料紙は薄様にして瑩潔、全十二巻中僅に十九葉を存する文字通りの零璣断璧ながら、珍重に価する。

新編古今事文類聚　前集六〇巻後集五〇巻続集二八巻別集三二巻新集三六巻（欠巻一二—一四）外集一五巻

宋祝穆編　（新・外）元富大用編　元泰定三年刊（盧陵・武溪書院）〔明初〕修　四八冊

後補茶色表紙（二三×一四・六糎）、襯装。首に、淳祐丙午〔六年〕臘月望日晚進祝穆伯和父謹識の自序、「新編古今事文類聚総目　前集（墨囲陰刻）」（跨行）、次に「新編古今事文類聚目録

前集（墨囲陰刻）」（跨行、次行低五格、「建安祝穆和父編」と題す）がある。毎集首に各の総目と目録が存する。新集及び外集の目録後の裏葉に「泰定丙寅廬陵／武溪書院新刊」の双辺木記がある。本文巻首、「新編古今事文類聚巻之一（隔五格）前集（墨囲陰刻）」、次行低九格、「建安祝　穆　和父編」、第三行低一格「部名」（上に墨蓋を冠す）、第四行低四格「目名」（跨行）を題す。左右双辺（一七・九×一一・四糎）有界十三行、行廿四字、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「文前（―外）幾（丁付）」、所々下象鼻或は中縫或は稀に上象鼻に大小字数がある。後集の総目首葉、巻四三の首二葉、続集の巻二第十七葉、巻一八第一七葉以下、巻一九首葉、巻二八第一五葉以下、別集の総目首葉、新集の巻一一第三六葉以下、巻二二第三三葉裏以下欠。「敬恵／堂図／書印」「晋府／書画／之印」「都省／書画／之印」「礼部詳験／書画関防」等の印あり。旧京496497著録。

同版本に内閣文庫・静嘉堂文庫（二部、一は存後集・別集）・東大東洋文化研究所（存外集）・米沢市立図書館・大東急記念文庫（二部、一は欠外集、一は存外集）・中央図書館（二部、一は欠前集、一は存外集）・北京図書館（瞿目・瞿影著録）蔵本・繆記著録本がある。本書は冊数が多いので、以上の現存本には往々本版の明前期の覆刻や別版が配補されている場合が多い。本帙も後集は全般に印面の漫漶が甚しく、巻一首四葉、巻二首二葉、巻一一第五―一二、一五葉、巻一二の末葉、巻一三第五・六葉、巻二九首十三葉、巻三〇第一―六・一一―一四、一七・一八葉、巻三二首一九葉、巻四〇全巻、巻四一首二葉、巻四三第一七―一九葉、巻四四の殆ど全葉、巻四五―五〇全巻が、明前期の本版の覆刻で補われている。しかし此を補刻と見るか或は配補と見るか判断し難いものがある。且つその巻四七の尾題の次に双辺木記の刊記を剜去せる痕があり、漫滅の一部が「建安雲荘書／（上欠損）□刊于」と残っている。本版と行格を同うする森志著録本には「巻首木格内記雲荘書堂四字、紙刻精良、元槧之佳者」と記されている。補配と目すべきであろうか。また別集も漫漶甚しく、明の補刻が加っている。十四行無刊記の元刻本が北京図書館（涵録著録）・上海図書館（存前集首十三巻）・米国国立図書館・南京図書館（欠外集、丁志・盆影著録）に蔵される。元版と云うが、盆影で見る限りでは、明初刻のようである。

又　存前集巻一―五、二七・二八、三四―四〇、後集巻一―三、一三―二八、三五―五〇、続集巻一三―二八、別集巻三―一三、二五―三二、新集巻三一―三六、外集巻一―四、八―一〇　三七冊

後補濃鼠色表紙（三一・二×一八・七糎）、襯装。前集の首目巻一及び巻二七首葉、巻三五第二七葉以下、巻三六首三葉、後集の首目、巻三末葉、巻三九末葉、巻四〇首三葉、巻四二末葉、巻四三首二葉、巻四五末葉、巻四六首三葉、続集の巻一七末葉、巻一八首葉、巻二三末葉、巻二四首半葉、巻二八末葉、別集の巻八首二葉、巻一三末葉、巻一四首葉、巻二八末葉、巻三二末

葉、新集の巻三六末葉、外集の首目の初の部分が欠。この本は刷印よろしく、後修が入っていない。旧京498—499著録。

山堂先生羣書考索　前集六六巻後集六五巻続集五六巻
別集二五巻　宋章如愚編　元延祐七年刊（円沙書院）
三二冊

後補茶色表紙（二一・二×一三糎）。首に「山堂先生羣書考索綱目　前集（墨囲陰刻）」、次に「山堂先生羣書考索目録　前集（墨囲陰刻）」（跨行）（次行低五格「山堂宮講章如愚俊卿編」と題す）あり。毎集首に此と款式を同じうする目録がある。前集目録後の裏葉に「延祐庚申円／沙書院新刊」の双辺木記が刻さる。本文巻首「山堂先生羣書考索巻之一　前集（墨囲陰刻）」（跨行）、次行低十格「山堂宮講章　如愚　俊卿　編」と題す、毎集巻首の題式これに同じ。四周双辺（一五・七×一〇・三糎）有界十五行、行廿四字、注小字。版心細黒口双黒魚尾、「考索（或は考）前（或は后・売・別）幾　（丁付）」。前集巻二四の第九・十葉は明刊を以て配補。かなり後刷の葉を混え、一部破損し裏打補修が加えらる。「敬徳／堂図／書印」等の印記あり。旧京500—502著録。

同版本に静嘉堂文庫（陸志・陸続跋著録）・内閣文庫・中央図書館（有欠）・北京図書館（瞿目著録）・上海図書館（二部）・米国国会図書館蔵本、莫目・葉記著録本がある。上海図書館善本書目に如愚編「新刊山堂先生章講宮考索　存丁集十巻己集十巻宋刊巾箱本　十三行廿字」が見える。本版と分巻を異にし、その本或は本書の旧形を存するか、未見の為め、詳にするを得ない。

玉海　二〇〇巻（欠巻二六—三五、四一・四二、五三・五四、六一—六三、一〇一・一〇二、一〇五・一〇六、一一〇、一二〇—一二九、一四〇—一四四、一五三・一五四、一六五—一六七、一八一—一八三）附辞学指南四巻　別附存通鑑地理通釈存巻一二—一四、通鑑答問存巻一、六経天文篇二巻、小学紺珠存巻五・六、姓氏急就篇二巻　宋王応麟撰　元後至元六年刊（慶元路儒学）至正一一年修　七六冊

縹色表紙（三七×二四糎）、粘葉装。首に李桓序、至元四年胡助序、至正十一年何殷図埜堂序、至正十一年王介序、至元六年薛元徳後序、至元六年王厚孫跋、至元三年浙東道宣慰使可都元帥府牒、次に目録あり、その後に慶元路儒学刊造玉海書籍提調等官銜名あり。撫印清朗にして、明修の未だ入らざる元印本。

又　存巻一八—二三、二六—二九、四〇・四一、四七、六五、七四・七五、七八・七九、九五・九六、一〇〇—一〇二、一一〇、一二三、一三六—一三八、一五五・一五六、一六五・一六六、一七一、一九一—一九三上、一九六—二〇四　二七冊

茶褐色古表紙（二七・九×二三・九糎）、裏打補修が加えられ、包背装。巻二六・二七、一七一は補写。巻一二三巻末その他破損の葉や欠葉がある。明修はなく、かなり刷りは良い。

又　存巻一〇・一一、一四・一五、五九・六〇、六八・

六九、八一・八二、九五―九八、一〇一、一〇七―一〇九、一一三・一一四、一一七―一一九、一三四―一三九、一五五―一五九、一七三―一七五、一七八　一九冊

後補濃藍色表紙（三六・三×二二・七糎）。巻一〇一の第一八葉裏・一九葉、巻一三四の第三五、三七葉、巻一三五の首三葉、巻一七八の第四葉以下が欠丁。明修なく、刷りもかなり美しい。

＊南北通用事箋字解九十五門対属指蒙　存巻五―八　元不著撰人　〔元〕刊　一冊

後補紺表紙（二四・六×一五・四糎）。裏打補修。包背装。巻首「南北通用事箋字解九十五門対属指蒙巻之五」（跨行）と題す。双辺（一九×一二・八糎）有界十九行、行廿六字。版心線黒口双黒魚尾「指蒙幾　（丁付）」。巻五に錯簡あるか。破損の葉が多い。

四庫未収。韻によって排列し、その中を天文・地理・人事等の標目の下に二字の熟語を列挙す。他に伝本を聞かない。

＊事文類聚羣書通要　存己集一〇巻　元不著撰人　〔元・建〕刊　巾箱本　一冊

後補縹色表紙（二〇・五×一二・七糎）。首に「事文類聚羣書一覧己集目録」あり。本文巻首「事文類聚羣書通要巻之一己集（墨囲）」（跨行）と題す。左右双辺（一六・二×一〇糎）有界十三行、行廿四字、注小字双行。版心小黒口双黒魚尾、「書己幾　（丁付）」。

四庫未収。事文類聚云々の建刊類書の一つ。己集は儒業門（巻一―四）栄達門（巻五―七）仕進門（巻八―一〇）を収む。他に所在を聞かない。前掲の故宮博物院蔵阮元採進本の「群書通要」十集七三巻本は、内容・款行はこの本と同じである。同本は既述の如く、至元四年梅軒蔡氏刊の刊記を有する至正重刊本による伝鈔であって、本版が至元版、至正刊、或はそのいずれとも異る版なのか明かでない。この本の己集巻十の巻末の方は「朝多公議」「鬼門関」「列海十里」「人生相逢」「此路荊棘」の五項を有するが、採進本は「鬼門関」「列海十里」「人生相逢」の三項がなく、他は悉く一致する。

＊新編事文類聚啓箚青銭　存巻六―一〇　不著撰人　〔元・建〕刊　一冊

後補紺色表紙（二四・九×一五糎）。裏打補修が加えらる。包背装。巻六の首葉の部分を闕き、全般に版心より下端にかけ破損の葉が多い。本文巻首「新編事文類聚啓箚青銭巻之幾」（跨行）と題す。双辺（二一・二×一三・二糎）有界十六行、或は注文の有界廿一行、注文小字双行、行廿一乃至卅二字不等。大字小の約四字に相当。版心線黒口双黒魚尾、「啓幾　（丁付）」。

四庫存目収の永楽大典本「啓箚青銭十八巻」等と類似の当時流行した「啓箚某某」の書名を称する書簡活套の類書の一つ。北平図書館原蔵本に本版を翻刻せる明景泰六年刊存首五巻本があり、その目録によれば全十巻である。内閣文庫に明初刊本が

あるが、元版は他に所蔵が知られていない。

＊新編排韻増広事類氏族大全　存巻二―七　元不著撰人

〔元〕刊（〔玉融書堂〕）〔明〕印　二冊

縹色厚手表紙（二四・五×一五糎）。粘葉装。本文巻首「新編排韻増広事類氏族大全巻之幾」（跨行）と題す。双辺或は左右双辺（二〇・三×一二・五糎）有界廿行、注文行廿七字、標目の大字小字四字分に相当。版心線黒口双黒魚尾、「氏族幾　（丁付）」。かなり後印であるが、「玉融書堂」の刊者名の入った封面を有する故宮博物院楊氏観海堂蔵本や書陵部蔵本と同版。

＊同　存己・庚集　〔元・建〕刊　一冊

後補紺色覆表紙（二三・一×一五・五糎）、元表紙らしい栗皮色古表紙が附してある。裏打修補が加えられ、包背装。本文巻首「新編排韻増広事類氏族大全」、この下に墨囲陰刻を以て己集（庚集）と題す。単辺（一九・一×一二・一糎）有界十六行、行廿八字。版心殆ど破損しているが、線黒口双黒魚尾か。「己（庚）　（丁付）」。下象鼻に間々大小字数があるらしい。「晉府／書画／之印」の印あり。

本書は巻を分つに数を以てせず、十干を以て十集に分ける。本書の十集本には上掲の故宮博物院蔵十七行廿八字本があり、相互に字様は相以している。本版は他に所在がない。

＊同　存甲・乙集　〔明初・建〕刊　二冊

後補紺色表紙（二六・四×一六・三糎）。裏打修補が加えらる。首目の首若干葉がなく、乙集は第卅八丁に止って、以下を欠く。首に「氏族大全綱目」がある。本文巻首「新編排韻増広事類氏族大全（隔九格）　甲集（墨囲陰刻）」と題す。単辺（一八×一二・二糎）有界十六行、行廿八字。版心細黒口双黒魚尾「甲　（丁付）」。

前掲本と行格版式を同うし、字様も相似し、従来同版の元槧とされているが、字様彫刀が明風で、恐らく両者同版ではなく、此は前者の覆刻であろう。中央図書館蔵本とも行格を同うするが、覆刻の関係にある別版である。

〔華厳経〕　存巻七五　〔元〕刊　西夏文　二帖

黄綾表紙（三一・七×一二糎）、裏打あり、帖装。天地辺欄双辺。高さ廿四糎。毎半折六行、行十七字。

〔金光明最勝王経〕　存巻七・九　〔元〕刊　西夏文　二帖

巻九表紙欠。毎半折二五・二×一〇・四糎、帖装。首に扉絵あり。天地辺欄双辺、高さ十九・二糎。毎半折六行、行十六字。巻九の柱に「金光巻九　（丁付）」と刻さる。

妙法蓮華経玄義　存巻九　隋釈智顗撰　〔宋〕刊　蔵経本　一帖

後補黄綾表紙（二九・六×一一糎）、帖装。巻首「妙法蓮華経玄義巻第九（隔五格）　智者大師説」と題す。天地辺欄単辺、高さ廿四糎、毎半折六行、行廿字。柱「妙玄九　幾」、下端に沈昌祖、昌祖、陳、傅上、日新の刻工名あり。

翻訳名義集　存巻四　宋釈法雲撰　〔日本南北朝〕刊

覆宋紹興刊本　一冊

淡藍色表紙（二八・五×一七糎）、書題簽「翻訳名義」、包背装。巻首「翻訳名義集四」、次行低三格「姑蘇景徳寺普潤大師（隔四格）法雲　編」と題す。次に篇目あり、正文に接属する。左右双辺（一八・八×一一・三糎）有界五行、行廿字、注小字双行、大字小字の約四字に相当。版心白口単黒魚尾「梵語四　（丁付）」。巻末に「越虞澄照院超諸閣下比丘懐則置（印）（印）（印）」の識語あり。

従来宋紹興間集貨刊本と著録されて来たが、実は同版（四部叢刊に影印）を南北朝時代に覆刻せる五山版である。巻七には元から帰化せる陳孟栄・兪良甫等の刻工名がある。

＊釈氏稽古略　四巻　元釈覚岸撰　元至正刊　八冊

後補艶出淡水色表紙（二八・八×一八・四糎）、金鑲玉装、元料紙縦二五・八糎。首に李桓の「釈氏稽古略序」（首葉表補写）、稽古図（一葉補写）、釈迦文仏宗派授受図（首半葉補写）がある。本文巻首「釈氏稽古略」、次行低九格、「烏程職里宝相比丘釈覚岸宝洲編集再治」と題す。巻四尾題後に弁門劉庸和南の賛を附し、巻二巻末は補写であるが、尾題後一行をあけて、「雲間范景真子正写／四明張学文行可偕／姪景彝景範／甥袁子寧徳遠刊」の四行がある。四周双辺（二二・七×一五・三糎）有界九行、行廿八字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「稽古幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数あり。上記の首目の外に巻一の第五葉表、巻二・三の各末葉、巻四の第五九葉補写。「明善堂／覧書／画印記」「安楽堂／蔵書記」等の印あり。怡府旧蔵。

この本は首の大徳乙巳王濬序・至正庚寅念常序、巻末の劉堯甫・至正乙未崔思誠の両跋を欠く。李桓序に「呉興有大比丘曰宝州岸公博学通古今嘗攷釈氏事実上下数千載年経而国緯著書一編曰稽古手鑑既又以為未備復因其旧輯而広之為稽古略至正十四年秋九月太原劉堯輔為之持其書請於余為序以冠其編首」と。至正年間の刊である。同版に内閣文庫・北京図書館（二部）蔵本・瞿目瞿影著録本がある。

＊〔安吉州思溪法宝資福禅寺大蔵経目録〕　二巻　〔南宋〕刊　思溪版蔵経　二帖

後補淡香色表紙（二八×一一糎）、裏打がなされ、帖装。巻首七折補写。尾題「大蔵経律論等目録上巻終」と題し、下巻は首三半折を欠き、後半は補写、天地単辺欄、その幅二四糎。毎半折六行。柱「千字文函号（墨囲陰刻）　上（下）幾」。首の扉（今見返）に「元禄九年丙子二月重脩云々山城州天安寺法金剛院置」の識語がある。「星悟海／外収得／秘笈」の印あり。巻末左の光緒九年楊守敬の手書題記（楊志一五所収とほゞ同文）が附さる。

宋安吉州資福寺大蔵経全部欠六百餘巻間／有鈔補一拠宋摺本旧蔵日本山城国天安寺／余在日本有書估為言欲求售之状適黎星使／方購仏書即囑余与議之価三千元以七百元作定／金立約期三月付書及逾期而書不至星使不／能待以千元購定日本翻明本久之書至星使以過期不受欲／索還定金書估不肯退書難以口

舌争星使／又不欲以購書事起公牘囑余受之而先支薪俸以／償余以此書宋刻中土久無伝本明刊南北蔵本兵燹／後亦十不存一況明本魯魚豕亥不可枚挙得此以訂訛／鉏謬不可謂非鴻宝迺忍痛受之欠巻非無別本鈔／補以費繁而止且此書之可貴以宋刻故也書至六七千巻時／至六七百年安能保其毫無残闕此在真知篤好者固不必／狥俗人之見以不全為恨　光緒癸未二月宜都楊守敬記「楊守敬印」

本大蔵経は紹興二年湖州の王永従一族の発願により思溪の円覚禅院に於て開板された五千九百十六巻の蔵経で、思溪版、或は湖州本、或は浙版とも呼ばれる。守敬が購得して禹城に逆輸入されたこの山城天安寺旧蔵一切経は現在北京図書館に四千六百四十七冊が蔵されている。

集　部

*范文正公集　存巻一―七、巻一二―一五　宋范仲淹撰　元天暦元年刊（范氏褒賢世家塾歳寒堂）〔明初〕修　四冊

後補紺色表紙（三四・六×二〇・六糎）。襯装。各巻欠丁が多く、巻一―七は各巻零葉で、巻十二は十六葉、巻十三は首廿五葉（第三葉欠）、巻十四は首六葉、巻十五は首十葉（第七葉欠）を存するのみ。首の蘇軾叙の裏葉に「天暦戊辰改元／褒賢世家重刻／于家塾歳寒堂」の篆文木記がある。旧京605606著録か。北平図書館には目録によれば、文集（欠巻五、八―一一）別集（欠巻一・二）附録二巻の別蔵本（旧京603604著録か）があった筈である。

*趙清献公文集　存巻七―一六　宋趙抃撰　〔南宋〕刊〔元・明〕遞修　四冊

後補紺色表紙（三〇×一七・九糎）。襯紙を入れ、包背装。本文巻首「趙清献公文集巻第幾」と題す。巻十五は補遺、巻十六は附録となり、巻十六の本文後二行をおいて尾題の前に、「後学天台張楙校正」（跨行）なる木記が存する。左右双辺（二二・五×一四・四糎）有界九行、行十七字。版心白口双黒魚尾、「趙清献公文集巻幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。明修の版心は大黒口或は粗黒口、稀に白口にして「文集巻幾　（丁付）」、刻工名は陰刻となっている。宋原刻の葉は極めて少く、しかも全葉原刻は殆どなく、部分的修補が加わり、多くは明修の葉である。刻工名は、肖、周、尭、鄭、龍、丘（以上宋か元修か判断し難い）、山、汪、江徐、天二（以上明修）。勗旭構敦に欠筆を見るが、慎郭は末画を欠かない。旧京608609著録。

本書の宋景定元年陳仁玉刊元明遞修本十六巻が二部北京図書館に蔵される。また瞿目に元刊本十六巻が著録され、録して曰く、「有景定元年陳仁玉序是本乃至治初重刊者有至治首元蒙九晉人僧家奴鈞元卿跋凡詩七巻文七巻補遺一巻附録一巻」と。至治版或は景定刊の修かもしれず、またこの本と同版か否か知るを得ない。しかしこの本は版式より見て恐くは宋景定元年陳仁

玉刊か。後考を俟つ。仁玉序によれば、仁玉が抃の故里たる太末郡守たりし時、章貢所刊の集本を訪得し、散軼を捜し、以て之を補足して刊したという。

＊東坡先生奏議　存巻九・一〇　宋蘇軾撰　〔宋光宗寧宗間〕刊（〔黄州〕）嘉熙四年・宝祐三年・〔宋末元初間〕遞修　一冊

後補紺色表紙（三一・五×一九・八糎）。襯紙を添え、包背装本文巻首「東坡先生奏議巻第幾」と題す。左右双辺（二一・三×一四・八糎）有界十行、行十六字。版心白口双黒魚尾、「東坡奏議幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。完の字末筆を欠く。原刻の葉は少く、且つ版心の下象鼻が殆ど破損し、多くは中縫に「庚子重刊」或は「乙卯刊」と刻された補刻で、その刻工名は、（原刻）欽、（庚子重刊）彦文、何、生、呉、賢、伸、明、辛、胡、（乙卯重刊）楷、宗、劉、仁、信、熊、（庚子か乙卯か不明）清、李。字数刻工名なき補刻の葉があり、字様乙卯刊に似て、最も新しく、原刻は漫漶甚しく、原刻第一次修には部分的な後修が加っているものもある。巻九の首四丁を欠き、巻十は第廿三丁までを存し、以下欠。同版に中央図書館蔵存巻十四・十五の零本がある。

＊東坡先生和陶淵明詩　四巻　宋蘇軾撰　〔宋光宗寧宗間〕刊（〔黄州〕）嘉熙四年・宝祐三年・〔宋末元初間〕遞修　一冊

後補紺色表紙（三一・三×一九・八糎）。粘葉装。首に「東坡先生和陶淵明詩目録」あり。本文巻首「東坡先生和陶淵明詩巻第一」、次行低三格、「飲酒詩二十首并引」と題する。左右双辺（二一×一四・六糎）有界十行、行十六字、僅か存す注文は小字双行。版心白口双黒魚尾、「和陶（或は東坡和陶巻）幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名がある。巻二の第八葉欠。玄樹桓完覯遘慎に欠画が見られる。原刻の葉は少く、前掲本と同様中縫に「庚子重刊」「乙卯刊」の補刻年紀を有する葉が多く、刻工名なき葉が少しあって、最も年代が降る。原刻は漫漶甚しく、部分的修が加わることが多い。刻工名は、（原刻）敖、申、（庚子重刊）伸、用、華、羊、明、生、経、文、胡、何、辛、中、（乙卯刊）吉父、呉輔、呉、王沂、沂、宗、夸、熊、劉、青、仁、（子か卯か不明）清。

以上二部は刊年刊地刊者を同じくすることは明かである。同じ版式を有する東坡集に繆氏・潘氏宝礼堂旧蔵北京図書館現蔵東坡先生後集存巻十・十一（繆続記・潘録著録）、劉影（後集残本）・繆続記（存後集巻四・五・六）著録本、北京図書館蔵東坡先生外制集三巻（王記著録）がある。従って両書共に東坡集に附刻されたものと思われる。本版の原刻の字様は南宋初より前期にかけた杭州地区刊本の渾厚端厳な書風で、庚子重刊はそれに近く、乙卯補刊の字様は南宋中期後の纎細にして稜角を帯びる風に変っている。この本は慎の字は末筆を或は欠き或は欠かないが、東坡集・外制集は敦字に至っているというから、光宗・寧宗間の出版で、庚子は嘉熙四年、乙卯は宝祐三年に繫

けるべきで、刻工名なき修補は宋末元初間と思われる。潘録によれば、後集巻十の第廿八廿九葉の魚尾上に「黄州」の二字ありというから、黄州地方の刊刻と推定される。直斎書録解題に「東坡集四十巻後集二十巻内制集十巻外制集三巻奏議十五巻和陶集四巻応詔集十巻」、「杭蜀本同但杭無応詔集」と録されている。本版はその杭本に該当するものであろう。

*蘇文定公文集　存巻四―六、一〇―一五、二〇、二六・二七、三七・三八、四一、四四、後集巻七―一三、一七―二一、第三集巻六―一〇、応詔集一二巻　宋蘇轍撰　〔宋光宗〕刊（〔蜀眉山〕）〔宋〕遞修　一六冊

後補紺色表紙（二九×二二・二糎）。襯装。首に「蘇文定公文集目録」があるが、巻卅の初までに止って以下を欠き、また中間に脱葉がある。巻廿は首葉を欠く零葉が残るのみで、巻廿六は首葉を脱し、後集巻七は首一葉半を存するのみで、他を全て欠き、応詔集巻十二は首尾の外に欠葉が多く、その外の巻にも往々脱葉が存する。本文巻首「蘇文定公文集」（「蘇文定公後集」「蘇文定公第三集」「蘇文定公応詔集」）巻第幾」と題す。左右双辺（二二×一七糎）有界九行、行十五字の大字本。版心白口単黒魚尾、「文定集（或は文定）幾（或は巻幾）　（丁付）」。下象鼻に刻工名があるが、破損或は漫滅の箇所が多い。玄弦弘殷匡貞徽讓桓完構慎の字の末画を欠き、惇敦郭等の光宗以下の宋諱には欠筆を見ない。修補の葉が多く、補刻には原刻に近い字様と、字様が宋末元初間に降る概略二種に分れる。識読し得た刻工名は、趙福、趙七、単道一、単、祖老、王五、王道、王徳、王、徳、順七、順、田継、田、万四、宗彦、張保、張宣、張初、張、袁次一、卯師、馬□、柳、龍、回、石、范、元（以上原刻）、馮杞、范祁、張郭、張迎、張彭二、張、任和、任元、壬元、任、王祖五、王祖、王成、王小一、王慶、王朝、王朝四、王重、重、李閏、李正、李、劉申、田阿祖、馬昇、秦元、程柳、柳、用保、保、侯福、朱□、朱、鼎、恵、仝、迎、石、袁、冗、四、茂、単、圭、彭（以上第一次修）、王正、正、王閏、王小二、王成四、侯正、侯王、劉念四、順、張茂、元、馬、韓、成、文、留、恵（以上第二次修）。「凝清」「兪氏竹素園印」の蔵印、箱蓋に「北京復盛斎王記」の焼印あり。旧京642―644（書影全て修補の葉）著録。

本版の刻工の多くは慶元間蜀刊本太平御覧の雕刻に従事し、王朝は蜀刊新刊唐昌黎先生論語筆解の刻工名中にも見られる。従って本版の刊地が蜀の眉山であることは殆ど疑いなく、版式を同じくし且つ刻工名が共通する蘇文忠公文集・蘇文忠公奏議と共に、文集五〇巻後集廿四巻三集十巻応詔集十二巻として上梓されたものである。欠筆が慎字に止っているから、光宗紹熙頃の刊であろう。原刻の葉は少く、存するも漫漶甚しく、殆ど部分的修補が加えられ、第一次の補刻は字様原刻に近く、此にも部分的修補が入っているものがあり、第二次の補刻は字様纎細になり、宋末に降る。同版に中央図書館蔵存巻廿五・廿六の零本・傅目著録本（存後集巻四―七）があり、鄧存目著録本

（存巻一―三、十六―十八）と王記著録本（存巻一―三、十六―十八、四十四）とは同じ本らしく、また蔵書印がこの本と同じであるから、共に元来僚巻である。現在北京図書館蔵か。

*晦菴先生文集　存目録上、巻一四、一八、二一―二七、二九―三八、四一、四三・四四、四九、五一―六〇、六四、六九、八一―八五、九三―九六　宋朱熹撰

〔南宋寧宗理宗間・浙〕刊〔宋〕・元後至元二年江浙等処儒学提挙余謙修　五六冊

一部後補濃茶褐色表紙、一部後補紺色表紙（三三・五×二一糎）。包背装。首に「晦菴先生文集目録巻上」あり。巻五七の第五一葉を脱し、但しその第五十葉は二葉あって重複。

*又　存巻一―六、一二、一四―一六、一八、二二―二九、三一―三九、四一―四三、四六・四七、五〇、五二、五五―六〇、六七、六九・七〇、七二―七五、七八、八〇・八一、八四―八九、九二―九五上、九六、九九・一〇〇　六四冊

後補淡水色綾絹表紙（三四・五×二一・五糎）。粘葉装。朱筆の句点声点の書入あり。旧京649―651著録。

本文巻首「晦菴先生文集巻第幾」、次行低一格小題を題す。巻末巻一百の尾題の前に「至元又二年十二月江浙等処儒学提挙余謙重修」の一行あり。巻末に考異を附せる巻も存する。左右双辺（約二三・七×一七・二糎）有界十行、行十九字。版心白口単黒魚尾、「晦菴文集幾　（丁付）」。下象鼻に、王成、王政、王恭、王良佐、王寿、王進、王璡、王汝霖、王汝林、王定、王渙、王明、王、翁定、応拱、何澄、何、夏義、夏乂、官寧、官、魏才、金祖、金、龔浩、龔文、共文、阮和、厳志、呉桂、呉圭、呉申、呉南、呉祐、呉春、呉明、呉志、呉茂、呉賜、呉聖祐、呉聖右、高異、高才、黄劭、黄春、項文、蔡寅、寅完、蔡春、蔡子、周成、朱祖、徐成、徐琪、章忠、章中、秦昌、秦寅、鄒付、石昌、占大全、詹大全、詹世栄、銭宗、銭拱、銭、宋琚、宋通、曹興祖、曹鼎、孫椿、孫日新、沈思恭、沈申、陳明、陳可、陳正、陳晃、陳偉、陳定、陳寿、陳彬、陳元、陳太初、陳山、陳生、陳新、新、陳辛、辛、陳良、陳伸、陳潤、陳、張允、張栄、張富、張昇、丁福、丁才、丁之才、丁明、丁宣、鄭恭、董澄、任青、任呂青（目カ）、馬椿、馬春、范元、范文、傅芳、傅方、傅上、龐知柔、問□、毛祖、俞壬、游明、游明仲、熊全、熊良正、余得、余□敗、余皎、余政、余敏、余千、余秀、楊潤、葉用、葉栢、葉云、葉雲、葉正、葉定、葉田、葉申、李琪、李允、李成、李倍、李恭、李才、李和、陸選、劉定、劉海、劉公海、劉崇、劉永、劉昭、呂信、凌宗、梁吉、建、才、永の刻工名がある。玄朗殷恒禎貞偵徵頊桓完慎惇敦拡廓に欠筆が見られる。巻七四の第七葉の版心に「重刊」とあり。全葉の補刻は比較的少いが、部分的な修補が頗る多く、補刻は宋代の第一次修と元後至元二年江浙等処儒学提挙余謙修のそれである。元修は巻四四の十五葉が全部元修である外は全葉の修は僅かで、殆ど部分的な補刻である。

同版に天理図書館（存巻七一・七四）・北京図書館（二部、一は瞿目瞿影著録、一は涵録著録本か）・上海図書館（存巻五八、八二―八四）蔵本や王記著録本（存巻七五―八〇）がある。瞿目に本版について述べて曰く「攷成化本黄氏仲昭跋云晦菴朱先生文集閩浙旧皆有刻本成化戊子偶得閩本因取浙本校之其間詳略微有不同如劾唐仲友数章閩本不載其所劾事状今詳此本備載無遺当是浙本矣又攷嘉靖本巻六十七仁説小注云浙本誤収南軒先生作而以先生作為仁説序此本正如是其為浙本益明矣黄氏又云浙本洪武初取置南廱不知輯於何人」と。本版は瞿氏の言う如く、内容から見ても所謂浙本で、また下記の如く本版の刻工が杭州地区の人であることからも立証し得る。瞿目は本版の刊刻を欠筆から「寧宗後所刻也」となし、涵録は巻首に淳祐五年王遂序がある所から、「蓋王遂撰序之年即是書開雕之歳也」と定めた。しかしこの本及び瞿本共に目録二巻の外に序跋なく、涵芬楼本の王遂序は実は閩本の続集序が混入誤綴されたもののようである。本版はその字様から察するに淳祐よりは前の開雕と思われる。その刻工名が本版と多く共通する諸本を列挙すれば（一々の刻工名は煩を避けて略す）、南宋前期刊越刊八行本注疏類（多くその第一次修）、紹熙頃刊春秋経伝集解（静嘉堂文庫蔵）、南宋刊大広益会玉篇（書陵部・真福寺蔵）、寧宗頃浙刊広韻（静嘉堂文庫等蔵）、理宗頃浙刊増修互註礼部韻略（北平図書館原蔵）、南宋刊史記（主に宋後修、静嘉堂文庫蔵）、瞿州刊三国志魏書（涵芬楼蔵）、南宋紹興間杭州刊南斉書・梁書・陳書の修、寧宗理宗間浙刊古史、嘉定刊歴代故事（静嘉堂文庫蔵）、嘉定刊晦庵先生朱文公語録（北平図書館原蔵）、光宗頃刊武経七書（静嘉堂文庫蔵）、紹興頃刊世説新語等があげられる。さらに本版の刻工名の見える諸本を拾えば下の如く多数に上る。王成は龍龕手鑑（涵芬楼蔵存巻二）・光宗頃刊宋遞修蘇文定公文集（第一次修）、王成は南宋末刊慈溪黄氏日抄分類、王定・金祖・呉圭は嘉定十二年温陵郡斎刊資治通鑑綱目、王定は光宗寧宗間蜀広都裴氏刊六家文選、王進・呉圭・張元・陳元・陳辛は紹興間明州刊文選（修補）、金祖・高異・陳寿・毛祖・葉正・凌宗は贛州刊文選、王明は淳熙中尤氏刊紹熙修文選、王恭・王渙・呉祐は南宋初刊爾雅疏（静嘉堂文庫蔵、修）、官寧は淳祐十二年徽州刊儀礼要義、呉申・呉茂・高才は慶元刊楽書、呉申・呉明・呉茂・劉永は淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解、石昌・董澄は愧郯録、陳明は南宋前期刊周官講義（北平図書館原蔵）、陳元は寧宗理宗間建刊四朝名臣言行録・淳祐十年福州路刊国朝諸臣奏議、陳山は乾道二年泉南郡斎刊孔氏六帖、陳生は紹興刊続高僧伝（尊経閣蔵）、陳明は南宋初刊本草衍義（修）、陳偉は開禧刊石林奏議、陳寿は咸淳刊咸淳臨安志、張栄は宝祐五年趙氏湖州刊資治通鑑紀事本末、鄭恭は寧宗理宗間詩集伝、范文は宝祐二年江南宛陵郡斎刊致堂読史管見、余敏は嘉定十三年臨安府尹家書籍舗刊歴代名医蒙求、葉正は宝慶中広東漕司刊新刊校定集註杜集、呉志は寧宗頃刊東坡集（書陵部蔵）・理宗頃刊三蘇先生文粋・南宋浙刊妙法蓮華経（天理図書館蔵）にそ

れぞれその名が見える。

以上の諸本は殆どが浙刊で、上は紹興末、下は咸淳に降る。しかし刻工は紹興頃の南宋初の刊本に於ては殆どその補刻にその名が見え、大体が南宋前期から中期の間に活躍している。本書の成立したのは朱熹没年（慶元六年）後と思われ、本版の刻工の中には前掲の嘉定九年池州刊と推定される「晦庵先生朱文公語録」と共通するものもあり、宋諱が寧宗を避けている点を併せ考えるならば、寧宗末理宗前期間即ち嘉定嘉熙間の開雕にかゝるとすべきであろうか。

＊東萊呂太史別集　一六巻附録三巻拾遺一巻　宋呂祖謙撰
〔宋嘉泰四年跋〕刊〔宋末元初間〕修　一〇冊

後補黄色或は縹色表紙（二四・九×一八・二糎）。襯装。首に「東萊呂太史別集目録」及び「東萊呂太史文集附録目録」（附拾遺、末一葉補写）がある。本文巻首、「東萊呂太史別集巻第一（格隔三）家範一」、次行低四格「宗法」と題する。左右双辺（二一×一五・三糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「（小題）幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名がある。下象鼻が全て欠損しているので、刻工名は見ることができない。玄弘殷匡貞徴譲桓完慎惇敦廓等の字に欠筆がある。附録巻二の首十三葉を欠き、毎巻補写が多い。全葉の修補は少いが、部分的な補刻が加っている葉があり、宋末元初間の修であろう。現存本の多くは明修本であるが、明修は未だ加っていない。「金問之印」「思勉斎」「薬龕珍玩／宋元秘本」「徳寿／眼福」の蔵印あり。旧京656著録。

本版は祖謙の没後その弟の祖儉及び従子喬年がその遺集を文集十五巻別集十六巻外集五巻附録三巻拾遺一巻に分って輯刊したもので、喬年の刊書跋には嘉泰四年と題する。同版には静嘉堂文庫（一は欠文集巻九、明修。一は存外集四巻。陸志著録）・中央図書館（欠拾遺、明修）・中央研究院（附麗沢論説集録、明修、鄧目著録）・北京図書館（二部共に附麗沢論説集録、明修）蔵本や瞿目・劉影・潘録（存別集）・繆続記・王記（附麗沢論説集録、明修、天禄琳琅旧蔵）著録本がある。王記は宋浙刻本と録する。刻工名から考えて、首肯し得る。

＊南塘先生四六　一巻　宋趙汝談撰〔南宋〕刊　二冊

後補紺色表紙（二三・八×一五・七糎）。襯装。本文巻首「南塘先生四六」、次行低七格「古汴　趙　汝談」と題し、尾題なし。双辺（一九・一×一二・四糎）有界十行、行十九字。版心線黒口双黒魚尾、「南塘（或は「南」「南啓」「南塘一」）（丁付）」。「海虞毛／表奏叔／図書記」「汲古閣／図書記」「毛表／之印」（陰刻）「東呉毛／表図書」「乾／学」「徐／健菴」（陰刻）「滄葦」の蔵印あり。汲古閣・徐健学・季滄葦旧蔵。旧京700著録。

＊格斎先生三松集　一巻　宋王子俊撰〔南宋〕刊　三冊

後補紺色表紙（二三・三×一五・七糎）。襯装。本文巻首「格斎先生三松集」、巻末「格斎先生四六」と題す。左右双辺（双辺も混ゆ、一九・六×一二・四糎）有界十行、行十九字。版心線黒口双黒魚尾、「（丁付）」。丁付は三冊通し番号。「虞山毛／

表奏叔／家図書」（刻陰）「虞山毛／氏汲古／閣収蔵」「奏／叔」「奏／叔」（刻陰）「汲古閣／図書記」の蔵印あり。旧京699著録。

＊梅亭先生四六　一巻　宋李劉撰　〔南宋〕刊　一冊

後補紺色表紙（二三・八×一五・七糎）。襯装。本文巻首「梅亭先生四六」、次行低一格「賀表（隔五格）　臨川李劉公甫」と題す。双辺（一八・九×一二・二糎）有界十行、行十九字。版心線黒口双黒魚尾、「梅亭　（丁付）」。「叔鄭／後裔」の蔵印あり。旧京699著録。

以上三部版式行格を同うし、四六文の模範文例集として建安の書坊によって彙刻されたものと思われる。楮墨清潔の初印にして、字様にやゝ肉太と細目の二種が混っている。本宋版は他に所在なきか。

＊艮巌餘藁　存首四巻　宋梅応発撰　〔宋末元初間〕刊〔元〕修　一冊

後補紺表紙（二五×一七・三糎）。裏打補修あり。毎葉破損多し。首目の首葉欠。首に撰者未詳の序の次に呉黻撰の序（以上写刻）あり。本文巻首「艮巌餘藁巻第■」（以下巻次数全て墨釘、大題全て後修の埋木か）と題す。左右双辺（一八・七×一二・六糎、単辺らしきも混ゆ）有界十一行、行廿字。版心が破損しているので、詳にするを得ないが、白口にして上象鼻に「牋表」の如く篇題を刻記。巻中欠画を見ない。巻末「杜園蔵」の印、箱蓋に「北京復盛斎王記」の焼印あり。

巻一牋表、巻二奏劄・記、巻三ネ、巻四策問を収む。四庫未収。他に所在を知らない。

＊養蒙先生文集　存首五巻　元張伯淳撰　元至正六年序刊（嘉興張氏家塾）〔明〕修　一冊

後補縹色表紙（二六・七×一五・五糎）。首に目録あり、その後に至正六年正月望日中議大夫河東宣慰副使致仕男采拝手謹識の刊語、次に鄧文原序、至順三年虞集序並に謚文あり。本文巻首「養蒙先生文集巻第一」と題す。双辺（二〇・一×一二・九糎）有界九行、行十七字。版心白口双黒魚尾、「巻幾　（丁付）」。上象鼻に字数、序目の首葉に「子賢」、序目第三丁と本文首葉の下象鼻に「武林陳仁甫刊」の刻工名が刻さる。全十巻中巻六以下を欠く。原刻の字様は甚だ端整であるが、首目の第二葉裏即ち男采の跋文、巻二の第七葉（第八葉欠丁）並に第十葉表（版心の丁付が「十之十七」と刻され、裏丁は漫滅甚し）は明中期の補刻である。本書の伝存は甚だ尠く、刊板は久しく佚して伝鈔を以て行われ、本版の現所在は他に聞かない。男采の跋に曰く、「既歿無成藁命男炯訪求遺逸借得若干篇釐為十巻刊之右塾使無忘前人之徽烈其蔵諸人散于四方者未能兼収並録則中心之深唖也」と。

＊中庵先生劉文簡公文集　二五巻首目二巻　元劉敏中撰　魏誼編　元元統二年序刊（江洲儒司）　二四冊

後補厚手艶出白色表紙（二八・五×二〇糎）。裏打がなされ、襯装。首に元統二年春儒林郎江淛等処儒学提挙番呉善の「中闇先生劉文簡公文集序」、元統二年甲戌春安陽韓性書の「中庵先

生劉文簡公文集序」、次に「中庵先生劉文簡公文集目録」上下がある。本文首「中庵先生劉文簡公文集巻第一」、次行低六格「正議大夫前戸部尚書魏　誼　編類」と題し、巻十二を除き毎巻尾題の前か後或は下に「後学銭唐葉森校正」（或は「後学葉森校正」等）の一行がある。巻末に「監察御史奏撰劉文簡公神道碑牒文」を附する。左右双辺（二二・一×一五糎）有界十一行、行廿一字。版心線黒口単黒魚尾、「中庵文集（小題）巻第（或は巻之）幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数あり。「明善堂／覧書／画印記」「安楽堂／蔵書記」「怡府／世宝」「楊氏／蔵書」（陰刻）「泰」「華」「楊氏海／原閣蔵」（陰刻）「海源閣」「楊紹／監定」（陰刻）「東郡楊／氏海原／閣蔵」「楊氏海原／閣鑑蔵印」「楊保彝／蔵本」等の印、箱に「北京復盛斎王記」の焼印あり。怡府・韓泰華・楊氏海源閣等旧蔵。楊録未著録。巻初に楊紹和の手書題識三丁が附綴さる。即ち四庫全書の中庵集の提要を引載し、末に「四庫本従永楽大典重編此則元時之原刻完整無欠亦珍笈矣同／治庚午秋八月以朱提二十四星購于京師廠市彦合記（印）（印）」と。

四庫提要に云う如く、中菴集は元史に廿五巻と載するが、文淵閣書目は単に五冊と録し、内閣書目既に著録がない。已に佚したらしく、僅に菉竹堂書目に著録を見るが、巻数の記入がなく、四庫全書本は永楽大典より裒輯せるものである。この本は中庵集の全容旧形を示す唯一の伝本にして、本版他に所存なく、字様端麗精印にして楮墨古雅、元槧中の上なるものと云うべきである。巻一―三（碑記）、四―十一（碑銘墓志）、十二・十三（序）、十四（銘賛頌）、十五（表牋冊奏議）、十六（経疑策問雑著）、十七―廿三（賦詩）、廿四・廿五（楽府）に分つ。首の韓性序に刊刻の由来を述べて曰く「財摠管魏公ゝ子婿也涖官於杭将刊梓以行於代」と。

＊文選　存巻一―六、八―一一、一六　唐李善注〔北宋〕刊〔南宋〕遞修　四冊

後補紺色表紙（三四×二三糎）。金鑲玉装。原料紙縦二八糎。巻五を除き、他の巻は全て残葉を遺すのみで、巻一は第二六丁に始り、巻二は首約三葉を欠き、巻三は第一〇丁（?）より第二八丁、巻四は第四―二六丁を存し、巻六は後半、巻八は前半を欠き、巻九は首、巻十・十一・十六は零葉を存するにすぎない。旧京677―682著録。王記著録本は本帙に該当か。

＊又　存巻一・三（零葉）　二冊

後補縹色表紙（一は三二・七×二二・三糎、第二冊は三四・二×二三糎）。金鑲玉装。原料紙縦二七・八糎。巻一は両都賦の「別隧分人不得顧云々」に始り、「五穀重穎秦麻鋪棻（史記曰韓閼奏之好）」に至る二葉、巻三は首より、第九丁（末「謬門曲榭邪阻城洫」）に至り、中間を欠いて、第廿九丁（「……論語曰　旦云乎」に始り、「常畏人力之」に終る）に至る計十葉を存する。

本文巻首「文選巻第幾」、次行低二格「梁昭明太子撰」、第三行低三格小字を以て「文林郎守太子右内率府録事参軍事崇賢館直学士臣李善注上」と題す。毎巻大題後目録をおき、正文に接

続する。左右双辺（約二四・四×一八・六糎）有界十行、行十八字内外、注小字双行、行廿五字内外。版心線黒口、魚尾なく、単横線を以て区劃、「李善注文選第幾　（丁付）」。破損が多く、特に版心は爛敗している。玄眩眩炫弦袨舷敬驚警弘泓殷鏡恒等の末画を欠くが、禎貞等の仁宗以下の宋諱には欠筆を見ない。旧京・王記は真宗の劉后父の諱たる通の字を欠筆すると記すが、筆者の見たこの本の範囲では通を欠筆していない。文字大にして朴厚簡勁、字様李北海体に類似す。原刻の所は多く漫漶、且つ部分的修補が加り、南宋遞修の葉が多く、補刻の字様は原刻に比し、やゝ纖弱たるを免れない。本版の欠画が真宗に止っているので、仁宗以降天聖明道間の刊と云われているが、北宋後期に降るか。後考を俟つ。（追記13）

＊文選　存三五巻（巻三―八、一三・一四、一七・一八、二一―二四、二七・二八、三一―三八、四五―四八、五三―五六、六〇）　梁蕭統編　唐李善注　元刊（池州路同知張伯顔）　一五冊

後補紺色表紙（三七・五×二三・七糎）。粘葉装。本文巻首、「文選巻第幾」、次行低二格「梁昭明太子選」、第三・四行低三格、「唐文林郎守太子右内率府録事参軍事崇賢館直学士臣李善注上／奉政大夫同知州路総管府事張伯顔助率重刊」と題す。左右双辺（二〇・九×一三・四糎）有界十行、行十九乃至廿一字、注小字双行、行廿一字。白口双黒魚尾、「文幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に、呉定山、定山、呉、山、文劉、徳父、徳、父、孟湯、孟、湯、夫、青、陳、楊、黄、康、興、王、程、董、朱、滕、月、仅、谷、今、宜、祥、俊、付、走等の刻工名がある。桓構媾等の字に往々欠筆が見られる。巻四十一の首丁、巻五十四の巻末、巻六十の首九丁・第十四丁・第十九丁以下が欠けている。

張伯顔が宋淳熙尤延之貴池刊本に拠って重刊せる本である。尤氏刊本と本版との差は陸続跋十三参照。伯顔は延祐七年慶元路同知から池州路同知に就任、泰定五年福寧州尹に転じているから、本版の雕板は至治泰定間であろう。明代に尤氏宋本がなかったせいか、本版は金台汪諒の覆刻本を始め、唐藩晉藩等数種の翻刻本が刊行されて盛行し、通行李善注本の基礎となった。しかしこの元槧の遺存は尠く、北平図書館別原蔵残本（旧京683684著録）・上海図書館蔵本・楊氏海源閣旧蔵本（楊録著録）が存するにすぎない。

＊文選　存首目、巻五―八、一四・一五、一八―二〇、二二、二四、二六・二七、三〇・三一、三九―四二、四四、五一―五三、五五、六〇　唐李善並五臣注　〔南宋前期〕刊（贛州州軍）〔宋・元〕遞修　二一冊

後補の縹色紙或は黒絹の表紙（三六・五×二四糎）、襯装。首目（一冊をなす）は目録のみを存するが、前半を欠き、存するものも脱簡破損が多い。巻一はたゞ半丁を存する。全般に各巻欠丁が多く、特に巻卅九以下はそれが甚しく、各巻殆ど零葉を存するにすぎない。旧京685―688著録。

又　存首目、巻二、一二、一七―一九、二三、二六―二九、三一―三三、三五、三八―四二、四六、五〇、五三―五六、五八―六〇　〔宋・元・明〕遞修　三〇冊

後補黒色表紙（二九×二〇・八糎）、襯装。首に「李善上文選注表」、「呂延祚進五臣集注文選表」、「上遣将軍高力士宣口勅」、「文選序」（次行低三格、「梁昭明太子撰」〈下に小字双行注〉と題署）、次に「文選目録」あり。但し目録の前半巻十九までは補写。各巻欠丁が頗る多い。元・明の修補の葉が多く、原刻の印面は漫滅が甚しく殆ど読み難い。「子源」（陰刻）「羅氏蔵／書之印」（陰刻）「間中／風月」（陰刻）の印記あり。

又　存巻一四、二三・二四、三三・三四、四五、五七―六〇　〔宋・元・明〕遞修　一〇冊

後補黒絹表紙（二九・五×二二・四糎）、裏打或は襯紙が添えらる。各巻欠葉があり、また間々補写を混える。印面漫漶甚しく、明修が僅か加っているが、前掲本よりは刷りが早い。

左右双辺（二二・五×一七・七糎）有界九行、行十四乃至十五字、注小字双行廿字。版心白口双黒魚尾、「文選巻第幾（丁付）」。下象鼻に刻工名あり。補刻には上象鼻に大小字数を有するものがあり、明修の一部は版心が細黒口となっている。補刻の刻工名の中に僅かながら重刊等の字が附加されているのは、多くは元修である。毎巻尾題後に、「州学司書蕭鵬校対／郷貢進士劉才邵校勘／左従政郎充贛州州学教授張之綱覆校」（巻八）の如く、校刊者たる贛州州学の校対・校勘・覆校者の銜名三行（時に四行）が刻され、その氏名は巻によって異る。以上三部とも版心の下象鼻が多く破損しているが、判読し得る刻工名は次の如し。（原刻）王彦、応世昌、翁俊、管至、管致遠、管、丘才、姜文、龔友、龔襲、阮明、胡亮、胡允、呉立、呉弼、呉中、呉忠、黄元、黄正、黄彦、蔡達、蔡如声、蔡昌、蔡栄、蔡才、蔡昇、蔡寧、上官正、上官玲、上官奇、上官、蕭中、蕭祥、蕭廷綱、蕭崗、曾添、譚彦才、陳通、陳補、陳充、陳信、陳景昌、陳叟、陳才、陳達、沈挙、鄧安、鄧信、鄧全、鄧聰、鄧感、鄧正、方政、方琢、方琦、方惠、方珍、方二、方仲、方志、熊海、余太、余中、余従、余可、余文、余挙、余彦、余圭、葉松、葉華、葉正、藍允、藍俊、李習、李早、李新、李端、李亮、劉達、劉川、劉廷章、劉宗、劉臻、劉成、劉瑃、劉全、劉智、劉訓、（宋修）王禧、王進、王璡、王明、王恭、王定、均佐、胡券、呉文昌、高寅、蔡郊、成之、孫何、孫春、孫、張允、張昇、陳寿、寿、陳新、陳政、政、沈昌、鄭春、丁松年、董陶、陶、必達、楊栄、李閏、李徳□、李宝、李允、劉昭、占、金、徐、董、春、（元修）周祚、史伯恭、史、大明、張斌、陳允升、沈貴、貴、文信、文玉、文、平山、虞、杞、声、沈、系、寧、肖、姚、允、（明修）王紳、王嵗、易韋経、呉睡、呉栄二、呉五、江厚、高山甫、黄还郎、黄中、蔡淳、裁辰郎、施美玉、朱賓、蔣英、蔣纓、秦淳録、仲華、監生張罕言補録、監生陳俊、鄧志昂、徳瑛、濮鉞、藍生留成、林大倫。避諱は、玄弦絃懸誂泫炫眩舷朗敬警弘殷匡竟鏡恒貞楨懲

樹議頊桓垣完構遘等の末画を欠き、慎は欠筆の有無が一定しない。

本版は李善注を先にして五臣注を後に附する六臣注本である。島田翰は本版の李善注のテキストを「極近於古」と推奨して曰く、「是書注文首載李善、次坿五臣、其異同則弘多、而挿入注文、其前後上下与他刻全不相同、又五臣所引、与善注複者删之、其義浅者亦删之、然不甚多、其為引五臣注坿善注下之頭刻也可知矣、而其所載善注、亦比今本極詳、李匡乂資暇録云、李氏文選有初注成者、有覆注、有三注四注者、当時旋被伝写、其絶筆之本、釈音訓義注解甚多、由是而言、玆書豈出於李氏絶筆之本歟、」（「古文旧書考」巻二）と。同版本には前掲のこの本と同じく清内閣大庫旧蔵の故宮博物院蔵零本の外に、宮内庁書陵部（右文故事・森志・古文旧書考等著録）・静嘉堂文庫（陸志・儀顧堂集著録）・中央図書館（有欠、劉影著録）・北京図書館（存巻二四、潘録・王記著録）蔵本がある。近藤正斎が「右文故事」巻二（「御本日記附注」巻中）に、本版を「版式古朴宋槧ノ如トイヘトモ是ヲ審定スルニ及テハ明初ノ覆刻トミユ版心マタ重刊ノ字アリイヨイヨソノ覆刻ナルヲ知ル」と、即ち明刊覆宋本となした。しかしその失考なるは島田翰が既に指摘する通りである。而して翰は「是書大版大書、字大如銭、楮墨精絶、而版様則極雅古、予則以為其版成於汴時、修版至南渡後也、夫可鑒刻之前後者、非紙墨刀法異同等歟、以其紙墨則宋矣、以其運刀則宋矣」と、即ち北宋刊南宋修本と審定した。しかしその刊刻が北宋に溯り得ぬことは、その字様から明かで、且つ下に記す如く、その刻工からも実証し得る、本版が贛州州学の校刊にかゝることは毎巻末の銜官から推定し得る。現在の通説は紹興刊とされているが、本版の刻工の他の宋版諸本に見えるものを捃採して左に列記し、以て本版の刊年及び修年をさらに検討限定してみよう。以下の刻工名には、この本には見えないが、書陵部・静嘉堂蔵本に存するものも加え、先に本版の原刻、次に本版の宋補刻の刻工名をあげ、原刻の刻工名の末に」を置いて両者を区別し、また当該本では修の刻工である場合は、名の肩に△を附することにする。但し全て補刻の時は、末に注記して△を加えない。

孝宗頃越刊八行本尚書正義（王政、金祖、呉中、大中」王進、王恭、王定、王明、王信、金嵩、呉祐、高文、蔡邠、周明、徐珙、徐杞、蔣栄、章東、曹鼎、宋通、張明、張堅、張富、陳浩、陳良、沈昌、鄭春、童遇、馬松、毛祖、楊潤、李忠、李仲、劉昭、以上全て第一次補刻に見ゆ）　同周礼疏（王政、呉中、李亮」王恭、呉祐、高異、蔡邠、徐杞、章東、陳浩、鄭春、童遇、李忠、李仲、劉昭、以上全て第一次補刻）

紹熙三年越刊礼記正義（陳顕」王恭、王禧△、求裕△、呉文昌、高異、高文△、周彦、徐珙△、蔣栄△、章東△、孫春△、陳政、陳新、沈珍△、馬松△、毛祖△、楊潤△、李忠△、李閏△、劉昭△）紹興明州刊文選（陳才△、陳達△、劉文△」王時△、王進△、李忠△）　北平図書館原蔵理宗初頃刊増修互註礼部韻略（王政、金祖」王恭、何沢、金栄、

金嵩、高寅、高異、高文、徐瑛、孫春、孫振、張明、陳浩、陳良、陳寿、丁松年、董澄、馬松、毛祖、楊閏、李仲）　理宗初頃刊古史（金祖、呉中」王進、王恭、王定、何沢、求祐、金栄、金嵩、雇永、呉祐、蔡邠、蔣栄、章忠、曹鼎、孫春、陳彬、陳浩、陳良、陳寿、丁松年、鄭春、童遇、董澄、馬松、方中、毛祖、楊閏、楊栄、李仲、劉昭）　嘉定頃刊晦庵先生文集（王政、金祖、葉正、葉芸」王進、王恭、王定、呉祐、高異、章忠、曹鼎、張富、張允、陳彬、陳良、陳寿、陳新、董澄、任青、龐知柔、毛祖、楊潤、李允、劉昭）　同晦庵先生朱文公語録（葉正」陳新、劉昭）　紹興刊寧宗理宗間修陳書（王政、金祖」王信、厳忠、高諒、蔡邠、徐瑛、孫春、陳浩、陳寿、丁松年、方中、李忠、劉志、劉文、劉昭、以上全て修の刻工）　同梁書（王信、王恭、王璡、蔡邠、周明、徐瑛、蔣栄、章東、宋通、孫春、張明、張堅、張允、陳彬、方中、楊閏、楊栄、李忠、李仲、劉志、以上全て修の刻工）　同南斉書（王進、何沢、金栄、金嵩、呉椿、高寅、高異、蔡邠、章忠、宋通、孫春、丁松年、童遇、董澄、陳良、陳彬、陳寿、沈珍、楊閏、李允、李忠、李仲、劉昭、以上全て修の刻工）　宝礼堂旧蔵南宋前期刊宋修史記（金祖、呉中」曹鼎、孫春、趙明、陳政、陳彬、陳寿、丁松年、凌宗、以上全て修の刻工）　静嘉堂文庫蔵淳熙刊史記（丘文」張明、劉文）　乾道二年泉南郡刊孔氏六帖（呉忠、陳才、劉全」）　乾道九年高郵軍学刊淮海集（劉宗、劉文、劉志」）　嘉定十二年温陵郡斎刊資治通鑑綱目（金祖、呉中」王定、何沢、周明、楊栄）　淳熙二年厳州刊通鑑紀事本末（呉中、陳才、陳通、葉松」王信、張明）　寧宗頃刊前漢六帖（蔡昌、蕭昌、鄧信」）　紹熙二年湖北茶塩司刊漢書（陳通、余光△」）　寧宗頃刊東坡集（丘才、丘文、呉中」）　静嘉堂文庫蔵夷堅志（丘才、丘文、蔡才、余光」高文）　南宋前期刊世説新語（金祖、呉中」厳忠、曹鼎、孫春、張明、陳良、陳浩、陳彬、陳寿、鄭春、童遇、方中、凌宗、劉昭）　南宋前期刊爾雅疏（劉廷」呉祐、陳浩、鄭春）　梅沢記念館蔵南宋初刊白氏六帖事類集（胡允、蔡達、蕭祥、余中」）　慶元元年刊本草衍義（鄧安、余光」）南宋中期刊武経七書（王恭△、金嵩、金栄、厳忠、高異、章宇、孫春、凌宗、劉昭）　静嘉堂蔵紹熙頃刊春秋経伝集解（王恭、王△璡、呉椿、高異、陳寿）南宋刊愧郯録（呉椿、高文、沈昌、董澄、繆恭、劉昭）　嘉定刊歴代故事（呉椿、高異、劉昭）　南宋初刊外台秘要方（陳浩、李忠）　崇蘭館旧蔵天理図書館現蔵南宋前期刊白氏六帖事類集（陳通」）　傅氏旧蔵天理図書館現蔵白氏六帖事類集（王時）　淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解（陳才」陳浩）　紹熙頃刊爾雅（厳智）　寧宗頃刊周易玩辞（黄正」）　寧宗頃刊周官講義（劉文」周彦）　慶元刊楽書（劉文」）　理宗初頃刊南軒先生文集（鄭春、方中）　南宋初刊劉賓客文集（張△明）　光宗頃刊蘇文定公文集（李△閏）　寧宗理宗間刊詩集伝（劉霽）　紹興間江陰郡刊乾道淳熙宋末遞修春秋経伝集解（劉智」）　寧宗頃蜀広都裴氏刊六家文選（王定）南宋末刊慈溪黄氏日鈔分類（王信）　寧宗頃刊太平寰宇記

（王定）　南宋初刊漢書（章宇）　同後漢書（童遇、凌宗）南宋初刊新唐書（章宇）　光宗頃刊欧公本末（王信、方中、李忠）　淳熙中尤氏刊文選（王明）　天理図書館蔵南宋刊妙法蓮華経（王彦）　影宋鈔本酒経（李忠）　書陵部等蔵南宋中期刊大広益会玉篇（呉椿、高異、陳寿、劉昭）　同広韻（呉椿、高異、劉昭）　寧宗頃刊景文宗公文集（呉中）　尊経閣文庫蔵紹興刊続高僧伝（陳達）　紹興刊王文公文集（陳通）　南宋初刊小字本王右丞文集（余彦）　南宋臨安刊金壺記（馬松）　宝祐五年刊資治通鑑紀事本末（均佐、金栄、徐珙、沈杞、劉霽）　咸淳臨安志（陳政、陳寿）

以上から見ると、原刻の刻工の年代は上は紹興、下は嘉定から理宗初に亘り、孝宗・光宗・寧宗初間が原刻の刻工の平均的な生存世代である。従って本版の刊年を通説の如く紹興年間とすれば、原刻の刻工の最も若い者でも嘉定年間に生存して雕板に従事することは恐らく不可能となる。孝宗の慎の避諱の有無が不定であることを併せ考えるならば、刊年は恐らく光宗の紹熙年間か或はその前後と見るべきであろう。その補刻の刻工の多くは寧宗・理宗間の人で、修補は寧宗後期から南宋後期に至るまで幾次かに亘って重ねられたと思われ、字様にも参差が見られる。本版の刻工、特に修補のそれが最も多く共通しているのは越刊八行本注疏類で、元修の刻工も亦共通している。本版の板木は元に入って西湖書院に移されたらしく、またこの本の明修の刻工に監生の肩書のある所から、明代南監に移管されたようである。元西湖書院重整書目に「文選六臣注」、明南雍経籍考に「文選六十巻　計好板六百四十八面外模糊難認字号壞板一千餘面」とあるのは、本版を指すものであろう。

増補六臣註文選　存巻三―九、一三―一八、二三・二四、二七―三二、三六―六〇　五臣並李善注　元陳仁子校補　〔元大徳〕刊（茶陵・陳仁子）　覆宋建刊本　巻六〇配補宋尤延之刊本　四五冊

後補黒絹表紙（三〇×一八・三糎）、裏打の上金鑲玉に改装。原料紙縦二七糎。本文巻首「増補六臣註文選巻幾」（或は「巻之幾」）、次行低四格、「梁昭明太子撰　唐六臣集註」、第三行低五格「茶陵前進士古迂陳仁子校補」と題す。尾題は「増補六臣註文選巻之幾」、或は「六臣註文選巻第幾」（或は「巻之幾」）、或は「六臣音註文選巻第幾」等と題する。左右双辺（二〇・一×一三・六糎）有界十行、行十八字、注小字双行、行廿三字。版心線黒口双黒魚尾、「文選（或は「文」或は「選」）幾　（丁付）」。上又は下象鼻に往々大小字数あり。版心にかけ破損が多い。巻七の第一及び第二葉表、巻十三首葉表、巻廿四末一葉半、巻廿九首葉、巻卅六首葉表、巻卅九首葉表欠、巻廿八・廿九は特に破損が多い。巻六〇の一冊は宋尤延之刊本（巻末欠丁）を以て補配。稀に朱筆の句点圏点の書入が加えらる。「清楽軒」「姜氏／図書」「深／誌」等の蔵印あり。旧京689690著録。

本版は四部叢刊所収影印の宋建刊本（滴録著録、北京図書館現蔵か。慶応義塾図書館その零本を蔵す）の精巧な覆刻なの

で、宛然宋建刊本の感を抱かしめる。かの本には欠画を見るが、この版には殆どなく、稀に桓・構等の字を欠筆しているが、一種の惰性と見るべきである。未だ精査に及ばないが、陳仁子の校補は巻中には見られぬようである。筆者は本版の完本を未だ見ていないが、明の翻刊本によれば、巻首に「大徳己亥茶陵古迂陳仁子題」として「諸儒議論凡十三条」を附して、末に「茶陵東山陳氏古迂書院刊行」の木記がある。仁子の校補とはこの「諸儒議論」を指すものであろう。鄧邦述はその蔵になる本版を「群碧楼善本書目」巻一に解題して、その本には諸儒議論なく、目録後に「淳祐七年丁未春月上元日刊」なる木記のあることを紹介し、従って大徳の刊記を有する元刊本は淳祐刊本の繙本であると主張した。しかし陳仁子は宋咸淳十年漕試第一であるから、淳祐七年に出版するには若かすぎる。鄧氏群碧楼蔵本は今中央研究院歴史語言研究所の架蔵で、今同本を検するに、宋槧に非ざることは一見明瞭にして、実は明刊の翻刻本である。大徳の年記のある首の「諸儒議論凡十三条」の葉を除去し、淳祐の刊記の印されている目録の最後の葉のみを新に贋刻して、宋槧たることを偽装せる書賈の妄造である。本版は伝本尠く、他に北京図書館原蔵本（旧京691著録別蔵、王記著録本に該当か）が知られるにすぎない。莫編莫跋著録本（葉徳輝旧蔵、郋園読書志著録）は下象鼻に刻工名ありと記されているから、元刊に非ずして、恐らくは明の翻刊本ならんか。

迂斎先生標註崇古文訣　存首目　宋楼昉編　〔元・建〕

刊　一冊

後補金切箔散し水色表紙（二〇・八×一二・一糎）。襯装。巾箱本。首に宝慶丁亥端月既望延平姚珤敬跋の序及び「迂斎先生標註崇古文訣目録」がある。左右双辺（一五×九・五糎）有界十一行。版心細黒口双黒魚尾、「目　（丁付）」。「斯／甫」の蔵印あり。旧京702—704著録。北平図書館善本目録・旧京によれば、全卅五巻あった筈であるが、今首目のみを存するにすぎない。

本書の宋刊廿巻本は静嘉堂文庫（陸志著録）・北京図書館（残本、潘録著録）にあり、増補が加えられたこの卅五巻元槧本は他に中央図書館（残本）・北京図書館蔵本がある。

＊註唐詩鼓吹　存巻五—七　金元好問編　元郝天挺注

〔元至大元年〕刊（〔浙省儒司〕）　一冊

後補艶出濃栗皮色表紙（三二・八×二〇・二糎）。包背装。本文巻首「註唐詩鼓吹巻第幾」、次行低七格「資善大夫中書左丞郝天挺註」と題す。左右双辺（二二・三×一五・二糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心白口単黒魚尾、「唐詩巻幾　（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に、侯囦、邵宗彦、明、沈、何、俠、賈、徐、蔡、信、兪、泳、朱、王の刻工名あり。旧京715716著録。

この本は首を欠くが、完本の至大元年の武乙昌序によれば「至大戊申淛省属儒司以是編鋟之梓僕実董其事」と。同版に静嘉堂文庫（陸志・陸続跋著録）・中央図書館（二部、一は適志著

録）蔵本、瞿目瞿影・丁志盗影・鄧存目・莫編莫跋・潘跋著録本がある。本書の元刻にはこの外に上海図書館蔵日新堂刊、内閣文庫蔵元末明初間冲和堂刊の坊刻本がある。

皇朝文鑑　存巻三二　宋呂祖謙編　宋嘉泰四年刊（新安郡斎）嘉定・端平・〔宋末・元・明〕遞修　一冊

後補紺色表紙（三六・五×二二・七糎）。粘葉装。巻首「皇朝文鑑巻第三十三」と題し、次に目次を列して本文に接する。左右双辺（二〇×一四・四糎）有界十行、行十九字。版心白口単黒魚尾、「文鑑三十二　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、方至、張明、沈仁挙、沈思忠、沈思徳、季彦、金滋、呉仲明（元修なるべし）の刻工名がある。貞禎遘慎に欠画があり、文中「英宗廟諱」「太上御諱」「哲宗廟諱」「徽宗廟諱」の避諱が見られる。

本書一五〇巻中の僅か一巻、しかも中間第七・八葉を欠き、首より第十八葉までの零簡である。同版には静嘉堂文庫（明修、陸志・陸続跋著録）・中央図書館（二部、残本明修）・北京図書館（瞿目瞿影著録、四部叢刊の底本）蔵本がある。完本の嘉泰四年新安郡守沈有開序、嘉定十五年新安郡守趙彦逋跋、端平元年劉炳跋によって、嘉泰四年新安郡斎で開版され、嘉定十五年・端平元年訂正修補が重ねられたことが判明する。「元西湖書院重整書目」に録されているから、板木が西湖書院に移ったらしい。明代になって南監に板木が保管され、南雍経籍考には「文鑑一百五十巻　大字板欠者半字亦模糊難以校次」と録されている。

*新刊国朝二百家名賢文粋　存巻一九　宋不著編人　〔宋慶元三年〕刊（〔蜀眉山・咸陽書隠斎〕）　一冊

後補藍色絹表紙（二六・二×一七・七糎）。襯装。巻首「新刊　国朝二百家名賢文粋巻第十九」、次行低二格「論著」、第三行「経論十元講義」、第四行低五格「毛詩講義（隔五格）芸室先生」と題す。左右双辺（一八・六×一二・一糎）有界十四行、行廿四字。版心白口単黒魚尾、「文十九　（丁付）」。撫刻清瑩なる早印本。

同版に北京図書館蔵本（一は楊氏海源閣旧蔵存一九七巻、楊録著録。一は存十九巻潘氏・周氏旧蔵、潘録著録）・北京大学蔵零本・上海図書館蔵本（存九巻及残葉）・旧京714著録本（存巻二十二零葉、旧内閣書見蔵大連図書館）がある。中国版刻図録に曰く、「拠慶元二年眉山王称序、慶元三年咸陽書隠斎跋文、知此書為慶元間眉山咸陽書斎刻本。書隠斎乃眉山書坊主人斎名、咸陽是其原籍。刻工王朝又刻太平寰宇記、太平御覧等書、其人乃南宋中葉眉山地区名匠。原書三百巻、現存二十餘巻、今分蔵北京図書館、北京大学図書館。別有楊氏海源閣旧蔵一帙、存一百九十七巻、巻第均経後人剜改、今蔵北京図書館、此書僅見直斎書録解題著録、宋以後未見翻版」と。

国朝文類　存巻四七・四八　元蘇天爵編　元後至元至至正初間刊（西湖書院）　一冊

後補紺色表紙（二九・六×一八・六糎）。裏打修補が加えられ、上端が少し破損している葉が多い。この巻には刻工名がない。

本版の伝存本はいずれも明修本であるが、此は零本ながら修補が加っていないのは貴重である。「晉府／書画／之印」「敬慮／堂書／画印」「子々孫々／永宝用」の印あり。

*河南程氏文集　存首八巻　宋程顥・程頤撰　不著編人

〔南宋〕刊　六冊

後補紺色表紙（三一・五×二一・五糎）。金鑲玉装、原料紙縦二七・七糎。序目は前半を欠き「河南程氏文集目録」の第十四葉より存する。目録の次に朱熹撰「伊川先生年譜」あり。本文巻首「河南程氏文集巻第一」、次行低五格「明道先生文一表疏」と題す。巻五以下は小題を大題下に「河南程氏文集巻第六伊川先生文二表疏」の如く題する。左右双辺（一九・八×一四・九糎）有界八行、行十四字、注文小字双行。版心白口双黒魚尾、「明道文（或は明道先生文或は明道、伊川の巻も同じ）幾（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名、下象鼻は殆ど爛敗し、識読し得たのは、林良、林祐、林祐、林祐、林升、江栄、栄、江淳、范仲夫、范才、才、朱槿、朱、鄧生、生、大、正、蒙、黄、畊、文等である。宋諱を避けること必しも謹厳ではないが、慎（欠かざるもあり）敦に欠筆を見る。宋朝に関する字は提行或は上一格を空けている。巻六第四十九葉欠。「汲古堂」「蘇氏／書印」（陰刻）あり。旧京696—698著録。

文字大にして、字様欧顔を兼ねて敦朴、楮墨清潔の早印本で、他に所在を聞かない。郡斎読書志巻四下に「程伊川集二十巻」が録され、またその巻五下（附志）に「明道先生文集四巻遺文九篇」を録し、「此集并伊川集刻于長沙者南軒先生識其後曰右遺文九篇新安朱熹得之玉山汪応辰者敬授教授何蘊俾嗣刻之」と記している。この長沙刊本の明翻刊本が四庫全書本の十三巻附録二巻で、もと胡安国家より出て、劉珙張栻が校刊した。しかし一に安国を以て主となして、頗る改削が多いので、朱子は深く之を不可となした。また直斎書録解題は「明道集四巻遺文一巻」「伊川集九巻（按文献通攷作二十巻）」「河南程氏文集十二巻　二程共為一集建寧所刻本」と録する。元に入って譚善心が朱熹所改の旧に復して編した至治三年刊本がある。この本は首目に欠葉があり、且つ完本でないので、刊年編者を明かにしないが、ほゞ譚善心編至治刊本に合っている。本版或は趙志の云う朱熹が何蘊をして刻せしめた本か、或は陳氏解題に云う建寧所刻本か、そのいずれかに該当するものであろうか。

*二妙集　八巻　金段克己・段成己撰　元泰定四年跋刊

（河東・段輔）〔明〕印　二冊

後補藍色表紙（二八×一六糎）。包背装。首に呉澂撰「二妙集序」及び「二妙集目録」、巻末の本文の後、尾題の前に泰定四年丁卯春別嗣輔拝手謹誌の刊刻跋がある。本文巻首「二妙集巻之一」（以下或は巻第幾）、次行低二格「五言古詩」、第三行低七格「遯菴先生」と題す。双辺（二〇・三×一三・三糎）有界九行、行十六字。版心粗黒口双黒魚尾、「二妙集巻之幾（丁付）」。明代の公牘紙に刷られている。

段輔の跋に、顕祖遯菴君従祖菊軒君の微言の或は泯んことを

懼れて「謹用録梓蔵之家塾俾後之子孫毋忘先業云」と。同版本は中央図書館蔵本が知られ、莫編莫跋著録本或は同版か。本書には明成化辛丑中州賈定の跋を有する版（涵録著録）があり、その伝鈔本が往々諸家目に見える。その跋によれば補刊らしく、本版の修補のようである。

増修箋註妙選羣英草堂詩餘　前集二巻　宋何士信選編

闕名者注　〔清〕影写元至正三年廬陵泰宇書堂刊本

一冊

縹色表紙（二七×一六糎）。金鑲玉装。原料紙縦一六・四糎。首に「類選羣英詩餘総目」があり、その末、目録尾題の前に、「至正癸未新刊／廬陵泰宇書堂」の双辺木記がある。本文巻首「増修箋註妙選羣英草堂詩餘巻上（隔三格）前集（墨囲）」と題す。烏糸欄左右双辺（一九・九×一二糎）有界十二行、行廿三字、注小字双行、行廿九字。版心細黒口双黒魚尾、「余前上（下）（丁付）」。下象鼻に所々大小字数が記さる。巻上の第廿三―廿七丁及び巻下の第廿―廿三丁が白紙になっている。底本となった元刊本の伝存は知られていない。

同　前集二巻後集二巻　元至正一一年刊（雙璧・陳氏）

四冊

後補紺色絹表紙（二四・九×一五・七糎）。金鑲玉装。原料紙縦二三・一糎。首に「類選羣英詩餘総目」があり、その末、総目尾題の前に、「至正辛卯孟夏／雙璧陳氏刊行」の双辺木記がある。次に前集・後集夫々に本文の前に目録があり、「妙選箋註羣英詩餘目録（隔三格）前（後）集（墨囲陰刻）／（低五格）建安古梅何士信君実　編選」と題する。本文巻首「増修箋註妙選羣英草堂詩餘巻上（隔三格）前集（墨囲陰刻）」と題す。左右双辺（一九・七×一二・七糎）有界十三行、行廿三字、注小字双行、行廿九字。版心細黒口双黒魚尾、「餘前（後）上（下）（丁付）」。「聴雨楼」「神品」「季振宜／蔵書」「茂苑沈／禹文氏」「沈明／卿印」（陰刻）「韓氏／蔵書」（陰刻）「玉雨／堂印」「存斎」等の蔵印あり。王記著録。

本版は前掲影鈔本と比較するに、前者の至正三年廬陵泰宇書堂刊本の十二行を一行増して十三行となした覆刻本である。四庫未収。歴代の詞を選編す。元刊本の所在は他に聞かぬが、明刊は洪武遵正書堂刊本（景刊宋金元明本詞四十種に影印）・安肅荆聚校刊本（四部叢刊に影印）・成化十六年劉氏日新書堂刊本（中央図書館蔵）等がある。明刊には何士信編選の題署がないので、従来編者未詳とされて来ている。

追　記

(1)　王国維「両浙古刊本考」下に、清内府仿刊宋淳祐本によって本版を録し、「有国初翻刊本案泳沢書院在上虞拠万歴上虞県志元楊彝書院記乃至正十八年方国珍所立而書跋云淳祐丙午殊不可解案淳祐時燕山書板不能遠至浙東当是至正丙午估人改刻二字以充宋刊耳」と。中央研究院に大学或問下及び論語巻五―一〇の残本が蔵される。論語は王記著録本に該当すると

思われるが、兪寅李の刻工名はない。王記の誤記か。中央図書館本と同じく公牘紙に刷られている。共に僚巻であったのであろう。

(2) 北宋監本が李鶚本によることは、玉海の「景徳二年九月国子監言尚書孝経論語爾雅四経訛舛請以李鶚本別雕命杠鎬孫奭校勘」「景徳二年九月辛亥命侍講学士邢昺与両制詳定尚書論語孝経爾雅文字先是国子監言羣経摹印歳深字体訛欠請重刻板因命崇文検詳杜鎬諸王侍講孫奭詳校至是畢又詔昺与両制詳定而刊正之」の引載によって判明する。

(3) 明代板木が南監に伝ったらしく、明南雍経籍考に「博古図三十巻 存者一千一百七十面 脱者十四面」と。

(4) 本版は内閣文庫蔵西園精舎刊本と比較するに、刊記も同文（たゞ刊者名のみが変わる）の覆刻の関係にある。共に元至正頃の建刊本であって、どちらが先出かは、現物の対比ができぬので、やゝ困難であるが、恐らく本版が後出であろう。内閣文庫本には毎集前に西園精舎の封面が存し、前集の封面には、上欄に「西園精舎新刊」と横書し、中央に「増新類聚／事林広記」と題する。内閣文庫本は前・後・続集各一三巻別集一一巻であるから、本帙は続集の尾五巻及び別集の尾三巻を欠失していることが判明する。刊語の「是編増新補旧視它本」という「它本」は宮内庁書陵部等蔵の元後至元六年鄭氏積徳堂刊「纂図増新羣書類要事林広記」（甲集より癸集に至る十集、毎集二巻）等を指すものと思われる。我が元禄十二年刊の和刻本は「新編羣書類要事林広記」（目録・首・尾題の冠称一定せず）と題する十集本で、元泰定二年刊本の翻刻であるが、この泰定の原刊本は発見されていない。現存本は全て陳元靚の原撰本でなく、後人の増補改編が加っている。

(5) 錦谿張監税宅が同じ淳熙元年に「塩鉄論」を出版していることは、莫録に丁氏持静斎蔵宋本を録して、「第十巻末葉有淳熙改元錦谿張監税宅善本二行楷書木記」と記している。

(6) 本版が厳州の刊と思われることは上記の如く、刻工名からも推定されるが、「景定厳州続志」巻四の「書籍」の「郡有経史詩文方書凡八十種今志其目」の条に「南軒先生文集」と録されているから、ほゞ疑いない。王国維は「元西湖書院重整書目」著録の本書について、「此疑即宋厳州刊板後入西湖書院明初板亡」（「両浙古刊本考」上）と。

(7) 本版は静嘉堂文庫蔵宋慶元中蔡氏家塾刊「陸状元集百家註資治通鑑詳節」（十三行廿二字、陸志・陸続跋著録）のほゞ翻刊で、間々刪削加補があるにすぎない。釈文序後の木記は同本の覆刻で、行格を異にする巻もあるが、字様は粗なる覆刻に近く倣似している。巻による字様の差は蔡氏刊本の巻による字様の差に基づき、それが著大化されている。本版は寧ろ元刊と見るべきか。

(8) 通釈三巻のみの板木が明代南監に移され、明南雍経籍考に「大事記通釈三巻 存者十八面 壊者四面」と。

(9) 板木は明代南監に伝わり、明南雍経籍考に、「歴代十八史

略十巻（存者四百四十六面嵌四十一面欠六十一面尾末終盧陵前進士魯先之編至正間浙東憲使汜陽張士和重加校刊）」と。しかし修補印行はされなかったようである。

(10) 上に中央研究院蔵本を本版と同版と記したが、後に精査するに、共に行格を同うするが、別版で、刻工名を異にし、本版より前出の元刊元明遞修本（巻末に咸淳乙丑の鎮江府学の銜名あり）にして、小黒口の明修の葉が多く、原刻の葉は少く且つ漫滅甚しく、元末の修も入っている。本版はそのまた重刊である。中央研究院本を宋版とするが、原刻の刻工が元人であるから、宋刊ではない。従って咸淳元年鎮江府刊本そのものはまだ発見されていないようである。

(11) 天目六に「類編標註文公先生経済文衡（一函六冊）」二部が次の如く録されている。

宋馬括輯前集二十五巻後集二十五巻続集二十二巻共七十二巻前宋黄昇序括自序　馬括宋史無伝宋人諸書目亦不載是書其序作於淳祐辛亥按辛亥為宋理宗淳祐十一年書中蓋取朱子所著論著類而編之加以標註黄昇序称括字曰季機而未詳其爵里昇宋史亦無伝著有中興詞選字曰叔暘号曰玉林又号花菴胡德方為之序称其早棄科挙吟咏自適秋房楼公以泉石清士目之馬括当時纂輯此書似未刻梓是本前集総目後有時泰定甲子春刊於梅溪書院木記按泰定甲子為元泰定帝御極之元年版式係仿宋巾箱本而未能如宋槧之工也

この本或は元泰定元年梅溪書院刊本か。

(12) 明代板木が「白虎通」と共に南監に伝わり、明南雍経籍考に「風俗通十巻（存者四十九面爛失六十六面有餘）」と。

(13) 麟台故事に「（大中祥符）四年八月選三館秘閣直官校理校勘文苑英華李善文選摹印頒行」とあるので、李善注が真宗の大中祥符四年監本として開板されたことが判明する。但し本版がそれに該当するか否かは、この零本を以てしては判定し難い。「北平図書館館刊」五巻五号に劉文興氏が発表せる同氏蔵残葉存十四紙又半紙（「西都東都第二賦文略具、又両半紙則離騒文所存止此」）はこの本と同版で、また北京図書館蔵北宋刊南宋遞修本（周氏捐、存巻一七―一九、三〇・三一、三六―三八、四六・四七、四九―五八、六〇）も恐らく同版か。